

冬木の第5次聖杯戦争  
に月の聖杯戦争のマス  
ター達が参戦します！

白野&凜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

月の聖杯戦争は一人の勝者により終わりを告げた！

勝者の願いは叶えられ予選から参加した998人のマスター達は地上に帰される。

その後彼をしるマスター達は地上にて彼を探すが見つからずにいた。

ある日一人の青年にメールが来る。

??「お久しぶりです。私のこと覚えてますか？いまから私が先輩の情報を教えてあげますので先輩にかかわりのある皆さんを集めてください！でわでわ後程？」

くそしてく

月の聖杯戦争に参加したマスター達は2030年より前2004年に……。

# 目次

第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	第0話その2	第0話その1
222	203	175	150	127	106	81	61	43	27	13	1

第23話	第22話	第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話
498	472	448	425	401	375	356	333	308	290	272	257	240

第 2 8 話	第 2 7 話	第 2 6 話	第 2 5 話	番 外 編	第 2 4 話
672	639	609	567	547	519

# 第0話その1

2030年月の聖杯戦争は終結した！

聖杯戦争に勝ち残った青年は願いを叶え消えてしまった！

その後彼を知るマスター達は地上にて彼を探し始める！

凜「結局ここもハズレね！」

ラニ「そうですね。」

凜「まったく。あいつ何処で眠っているのかしら。これだけ探しても見付からないなんて！」

ラニ「ですが凜あの人からのメールはこの地上の何処かで眠っていると書いてあります。それに私達は必ず見つけ出すと誓いました。」

凜「そうね。絶対にさがしだして眠っているあいつを叩き起こして私達のことを記録として残っているなら思い出させるんだから！」

その後彼女達はアトラス院に戻り新たな情報を見つけ出すためパソコンをチエックする。

するとひとつのメールアドレスが入っていることに気付く。

ラニ「凜、メールがきています。送り主は……っ！ユリウス？」

凜「はあ？なんでユリウスからメールがくるのよ！あんたユリウスにアドレス教えたの？」

ラニ「いえ、ですがハーウェイの力があれば私のアドレスを調べることは容易いことかと。」

凜「そうね。で？なんて書いてるのかしら？」

ラニ「メールを開けてみますね。」

ユリウス「久しぶりだなラニⅧ。遠坂凜のアドレスはブロックが掛かっていたが前のアドレスは簡単に調べることが出来た。いま読んでいるメールに俺の携帯番号が入っている。すぐに連絡してほしい！待っている！」

凜「……なにこれ？」

ラニ「さあ？どうやらユリウスは急いで連絡よこせとのことでしょうか？あつ？ユリ



ラニ「凜。ユリウスはなんと？」

凜「あいつの居場所の情報を手に入れたみたい。今すぐレオの家まで来いって。どうする？」

ラニ「その情報が確かなら私達は行くべきですね。．．．しかし、本当にその情報は信用するべきでしょうか？」

凜「そうね。だけど情報をくれた人物が気になるわ。私達がよく知る人物だとユリウスは言ったわ。それにレオは私のブラックリストを取り消したらいいわ。ラニ調べてくれるかしら？」

ラニ「分かりました。．．．っ！凜、確かにあなたのブラックリストが無くなっています。どうやらレオは私達にどうしても来てもらいたいみたいですわ。」

凜「そう。．．．。ラニあなたは行くでしょ？なら私も行くわ。いまは少しでもあいつの情報が欲しいし。」

ラニ「そうですね。では準備ができしだいレオの居場所に向かいますよ。」

3日後



ユリウス「久しぶりだな。遠坂凜とラニⅡⅧとにかく入れ、レオ達が待っている。」  
凜・ラニ「…………レオ達？」

レオ「お久しぶりですね。凜さんそれにラニⅡⅧ。こうして会うのは久しぶりでしよ  
うか？」

凜「本当にね。…………でっ！私達がここに来たからにはちゃんと説明してくれるの  
でしようね？」

レオ「勿論です。ですがその前にあなた達に会わせたい人達があります。どうぞ入って  
下さい。」

ガチャツ！

シンジ「なんで僕がこんな所に！」

ジナコ「あつ？凜さんとラニさんじゃないっすか！久しぶりッス！」

桜「お久しぶりです。二人ともお元気そうでなによりです。」

凜「えっ？シンジにジナコそれに桜？何で桜が居るのよ！あんた月のNPCよね？なのになんで？えっ？えっ？えっ？えっ？」

桜「お気持ちは分かります。いまからなぜ私が居るのか説明します。とりあえず皆さんお座り下さい。」

凜「わかつたわ。とりあえず最初から説明してちょうだい！あいつの事と桜がなぜ地上にいるのかを。」

レオ「分かりました。では……と言いたいです。僕と桜が説明するよりも彼女が説明した方がいいでしょうね。桜彼女に連絡をしてください。」

桜「分かりました。」

そして桜はパソコンをとりだす。パソコンを皆が見えるように大きなモニターに繋げる。写し出された画面には桜のマークがその桜のマークに見覚えかある凜達そして……突然大音量の音楽が流れ画面に一人の人物が写し出される。

??「突然の出張なんてなんのその。皆がまっていた絶対最強後輩美少女がお送りする……せくのっ！BBチャンネル……！はい皆さん拍手です！」

凜・ラニ・シンジ・ジナコ「……はい？」

BB「あれあれ……？ドウシマシタ？皆さんが大好きなBBチャンネルですよ！なにボケっつとしてるんですか？ちゃんと拍手してくれないとBBちゃん悲しい

です。ぐすん！」

凜「なんで？」

B B 「はい？」

凜「な・ん・であんたがでてくるのよ〜〜！」

B B 「勿論私が先輩の情報をレオさんに教えたので。最初は凜さんにと思いましたが。凜さんに連絡するとなにかと五月蠅そうなので初めにレオさんにしたB B ちゃんなのでした。」

うが〜〜つ〜と凜が頭を掻き出す。ラニとシンジとジナコはまだ状況が理解しておらず、フリーズ状態である。

桜「凜さん落ち着いて下さい。とりあえず紅茶でも飲んでリラックスです。じゃないと話が進みません。」

凜「ふう〜！ふう〜！そうね。ありがとう桜少し落ち着いたわ。とりあえずB B 久しぶりね。あんたが生きているなんて夢にも思わなかったわ。」

B B 「それでは早速先輩について説明しますね。その前にいまフリーズ中の三人を叩き起こして下さい。」

凜「相変わらず人の話を聞かないのね！まあいいわ。ほらラニ！シンジ！ジナコ！起きなさい。」

ユリウス「レオ、あの娘は呼ばなくていいのか？一応月の聖杯戦争に参加したマスターだろ。」

レオ「大丈夫ですよ兄さん。BBの説明が終わり次第連れて来ます。それにいまは眠っているので起こすのは可愛そうでしょう？」

ユリウス「そうだな。」

その後フリーズ中の三人が目を覚ましBBの説明が始まる。

BB「いいですか？いまから先輩について説明しますね。あつ？白桜の事は白桜に聞いてください。私は先輩以外は興味ありませんので。そうですね。とりあえず何処から話ばいいのやら？あつ？一から説明しろと成金さんはいいましたね？それでは早速。先輩はいまあなた達の住む地上にはいません。勿論冷凍保存されてもいません。先輩は月の聖杯戦争に勝利し願いを叶えこの世界からいなくなりました。だからといってムーンセル・オートマトンに消されたわけでもありません。」

凜「ひよつとして成金で私ことかしら！まあいいわ。で？彼はいま何処にいるわけ？」

BB「転生つて言えば皆さん分かりますか？どうやら先輩はこの時代より前の198

7年に生まれたそうですね。ムーンセル・オートマトン情報ですので間違いないかと。生まれたての先輩……きつとすごく可愛いに違いありません！」

と体をくねくねさせ一人彼を想像しながら悶えるBB。

レオ「BB その情報が確かならもしかして僕達を1987年に行けと？それは不可能では？」

凜「そうですね。レオの言うとうり。タイムトラベルは不可能よ。それに1987年に行けたとしてもあいつはまだ生まれたての赤ちゃん私達の事は覚えていないでしょうね。」

BB「？何も1987年に行けと言っていないよ？私はあなた達には先輩が生まれた1987年から17年後の2004年に行つて欲しいのですが？」

凜「アノねえ。さつきタイムトラベルは不可能と言ったところですけど。ちゃんと人の話聞いているのかしら？」

BB「ふっふっふ！大丈夫です。ちゃんとはうってあります。実はタイムトラベルは可能なのです。私BB ちゃんとムーンセルが保証します。と言うわけでいままから私が指定する場所に行つて下さい。とりあえず6人必要ですので皆さんで6人誰が行くか決めちゃつて下さい！指定場所はいまから地図を送りますので指定場所に着き次第連絡下さいね。それではまた後で。」

くそしてく

レオ「それでは早速誰が行くか決めちゃってしまいましたよ。とりあえず僕は行けないのでそうですね。凜さんとラニⅡⅧそれにユリウス兄さん後は桜ですので残り2人はシンジさんとくく。」

凜「ちよつとなに勝手に決めてるの！それにレオなんであんたは行けないのかしら？」

レオ「僕はこのに残り皆さんのバックアップをします。後ジナコには僕の手助けをしてもらいます。彼女はパソコン関係はここにいる誰よりも得意ですから。それとも凜さんが残り皆さんの手助けをしますか？」

凜「ぐつ！わかつたわ私は行くわ。彼に会いたいのも確かだし。でっ？他の皆はどうするのかしら？」

ラニ「勿論私は行きます。B Bの事はあまり信用できませんが。」  
ユリウス「俺はレオが指定するならかまわない。」

桜「私は行きます。先輩に会いたいですから。」

シンジ「僕は断る。あいつのことなど興味ないからね。行きたければお好きどうぞ。」  
凜「そうね。シンジ、あんたがいても足手まといしかならないから必要ないわ。レオ  
とりあえず後2人誰か心当たりはあるのかしら？」

レオ「そうですね？1人は大丈夫ですよ！しかし後1人ですか？うくん？」

シンジ「……………ちよつと？えつ？いや？マジ？まつて？行く！僕行く一応あ  
いつには借りがあるし。だから……………ちよつと無視しないで？ねえ？お願いします。  
連れて行って。」

凜「あら？シンジ行きたいの？でも貴方まだ8才よね？大丈夫かしら？」

シンジ「当たり前だ！とりあえずBBからもらった地図の場所に今から行くんだろ。  
僕がどれだけ役に立つかめにも見せてやる！」

凜「ハイハイ。連れて行ってあげるから出発の準備でもしてなさい。」

ラニ「さすが凜ですね。シンジの扱いが上手です。」

凜「なにいつてるの？シンジはまだ8才よ本当は連れていきたくないわ。子供を危険  
かもしれない場所には。」

ラニ「ふふ。貴方らしいです。しかし後1人はレオが連れて来るのですね？いつたい  
誰なのでしょううか？」

凜「さあ？まつ。レオのことだから優秀な人物でも連れて来るんじゃないかしら？」

そして凜達はBBの指定した場所に移動する。2004年の日本冬木にタイムトラベルをする。彼……いや岸波白野に再会するために！



## 第0話その2

B B からの情報により凧達は岸波白野が眠っていた場所に移動する。

凧「ねえレオ？」

レオ「なんでしようか凧。」

凧「確かめたい事があるの。」

レオ「はい？」

??「くうくうくう。」

凧「……ひよつとしてあの子も2004年に連れて行くつもり？」

レオ「はい。ひよつとして心配ですか？」

凧「当然でしょ！あの子まだシンジと同じぐらいの年齢よね？それなのに!!」

レオ「そうですね。最初は僕も反対しました。ですがこの子がどうしても白野さんに会いたいと泣きながら暴れるので……。ですが安心してください。彼女はマスターとしては一流です。僕が保証します。」

??「うふふ。お兄ちゃんくうくう。」

凧「……はあ。まあいいわ。この子のことは後回しにして、それより桜！」

桜「はい？なんでしようか凜さん。」

凜「BB には岸波君の情報は聞いたからいいけど、貴方はどうやって地上に降りたのかしら？説明してちょうだい！」

桜「そうですね。まだ時間がありますし、いまからその事について説明しますね。まず私が地上に来れたのは先輩のおかげなんです。」

ラニ「？白野さんの？」

桜「はい。あつ？説明する前に皆さんに確認したいことがあるのですが。宜しいでしょうか？」

凜「何かしら？」

桜「皆さん先輩のサーヴァントを覚えていますか？」

凜「当然でしょ。あいつのサーヴァントはセイバーじゃない！」

ラニ「??凜、白野さんのサーヴァントは確かアーチャーのはずです。」

ユリウス「いや。あいつのサーヴァントはキャスターのはずだが？」

レオ「僕の記憶が確かならギルガメッシュですよ？」

凜「えっ？あれ？そういうえばアーチャー？キャスター？ギルガメッシュ？ん？」

桜「実は皆さんが参加した聖杯戦争は先輩の勝利が確定する事をムーンセルが予測しました。そのときムーンセルはどのサーヴァントであれば先輩が優勝するか計算して

いたのです。そして選ばれたサーヴァントはセイバー・アーチャー・キャスター・後皆さんは記憶ありませんがバーサーカーです。ですがBBにより月の裏に落とされた先輩はバーサーカーと別れギルガメッシュさんと契約しました。その後バーサーカーはなぜかいなくなりそのまま聖杯戦争のサーヴァントはギルガメッシュさんとなり優勝しました。」

凜「なるほどね。だけど桜。それが貴方と何の関係があるの？」

桜「皆さんは先輩が聖杯に叶えた願いは解りますか？」

ラニ「確か聖杯戦争事態をなかつたことにしてその後二度と聖杯戦争が起こらないようにと。」

桜「そうです。先輩はその願いを叶えました。それはどのサーヴァントといっても同じでした。ですがその願いはムーンセルにとつて一つの願い事とらえてしまい残り3つの願いが残ってしまいました。つまりムーンセルは先輩が優勝できるサーヴァントを予測し4人のサーヴァントを選択その後無事先輩は聖杯戦争に勝ち残り優勝し一つだけ願いを叶えなくなりました。」

凜「へえ。つまり後3つ聖杯に願いが残ってるのね？」

桜「いえ。残りは後一つだけです。」

凜「??」

桜「2つは私が使っちゃいました。その内の一つは私が地上にこれたのと関係ありません。」

凜「ラニ……………えっ？」

桜「聖杯戦争終決後私はどうしても先輩に会いたいと願いました。あの人の笑顔をもう一度見たいと。私はNPCで上級AI、ムーンセルになんとかアクセスし先輩の居どころを探しました。ですが見つからず……………。ただ……………」

凜「ただ？」

桜「先輩の居どころは見つからずじまいでしたが。先輩がてに入れた聖杯の情報が見つかり後3つ願いが叶うことがわかりました。それで私がその願いにアクセスし肉体をてに入れて地上に来ることができたのです。」

凜「それってずるでもしたのかしら？」

桜「はい。色々大変でした。なんせ相手は頭脳の塊ですので。先輩に出来るだけ似せるように姿形や声をてに入れましたから、ですがその必要はなく私でもなぜか願いを叶えることができたのです。憶測ですがきつと私と先輩との繋がりが強かったのが原因かと。」

凜「……………」

ラニ「そう言えば月の裏での最後桜はムーンセルを通じて白野さんの精神に入り一時

とはいえ彼の一部に繋がったと聞きました。多分それが原因かと。」

桜「きつとそうです。なににせよこうして地上に来れたのは先輩のおかげなんです。」

凜「そうゆうことね。それで？2つ使ったと言ったけど後一つは何かしら？」

桜「はい。実はこちらの世界に来たのはいいのですが、どうやって先輩を見つけるか悩んでしまい、月のムーンセルにアクセスできたので私がいる場所から一番近い皆さんの居場所を検索しました。そのとき一番近い人がこの子だったんです。」

??「くうく。くうく。」

凜「ありすね。」

桜「はい。居場所は私の居場所から2・30分位でしたのでありすちゃんを探しました。見つけたのはいいのですが、ありすちゃんは誰もいない場所でカプセルの中で植物状態だったんです。」

凜「それでありすを目覚めさせるのに聖杯を使ったと？」

桜「そうですね。その後ありすちゃんと私は次に近いレオさんを見つけて今に至る訳です。」

ラニ「ですが、確かありすは魔術回路のせいでどこかの軍に人体実験されていたと聞きました。身体は大丈夫なのですか？」

桜「はい。聖杯の力のおかげで健康そのものです。」

ユリウス「逆に元氣すぎて色々大変だったがな。」

レオ「そうですね。あつ！そろそろBB が指定した場所に着きますね。いったいどんな所でしようか？」

くそしてく

凜「まさかこんな山奥に小さな廃墟があるなんてね。」

桜「そうですね。BB がくれた地図によるとこの廃墟の地下4階みたいです。」

凜「そう。それじゃさっさと行きますか。あつ？コラツありますその辺をうろうろしない！こっちに來なさい！」

あります「はい。」

凜「まったく。ほら手をだしなさい一緒に行くわよ。」

あります「くくく♪」

ラニ・桜「……………」

凜「な、何よ？」

ラニ「いえ。まるで姉妹みたいだなとそう思つてまして。」

桜「凜さんは面倒見がいいのですから。聖杯戦争中もよく先輩の事を気にかけてましたし。」

ラニ「確かに。凜は白野さん対してツンデレちゃんでした。」

凜「そつ、そんなわけないでしょ！ほらさつきといくわよ！」

ありす「凜お姉ちゃんツンデレってな〜に？」

ジナコ「それはつすね・・・。」

凜「うわっ！急に話に入らないで！びっくりするわ！」

ジナコ「いや〜。さつきから呼んでたんすけどなかなか返事がなくて。」

凜「そうなの？でっ。何かしら？」

ジナコ「ここにいる皆さん以外廃墟の中に行きましたよ。僕はレオさんに頼まれて凜さん達を呼びに来ました。」

凜「それを早く言いなさいよ！ほら、みんな行くわよ！」

ラニ「確かにそうですね。では行きましょう。」

〜廃墟の地下4階〜

レオ「兄さん、どうやらこの部屋で間違いないみたいですね。冷凍保存機のプレート

に白野さんの名前がありますし。」

ユリウス「ああ。とりあえず今からBBと連絡が取れる段取りをする。」

レオ「お願いします。」

シンジ「……………冷凍保存機以外は何も無いんだ。こんな場所でBBはどうやって僕達を2004年に送るんだろ？」

ガチャツ。

凜「あつ。ここで間違いないみたいね。BBはまだかしら？」

レオ「今兄さんがBBとアクセスできる段取りをしていますよ。」

〈数分後〉

ユリウス「レオ、終わったぞ。何時でもBBに連絡できる。」

レオ「わかりました。早速ですがBBに連絡をお願いします。」

ユリウス「わかった。」

ユリウスがアクセスボタンを押す、桜のマークが現れマークをクリックする。しばらくして大量の音楽が流れて……………こない？代わりに現れたのは。

??「あら？やつと着いたね。全くどれだけ待たされるかと思っていたところよ。」

凜「メルトリリスっ！なんであんたが？BBはどうしたのよ！」



メルト「何故って？BBが生きているのよ。私達がいってもおかしくないわ。」  
ラニ「私達？つまりパッションリップもそこにいると？」

メルト「もちろん、でもあの子あんた達には興味無いみたいね白野と連絡が取れれば教えてと言つて居なくなつたわ。」

凜「そつ。とりあえずBBと話したいのだけどBBは何処かしら？」

メルト「BBなら今・・・。」

BB「いますよ？いや、皆さんが来るのが遅かつたので先輩の写真を整理してました。大変でしたよ、先輩と写る皆さんを焼却処分するのは。ですがこれも先輩が写る写真のためだと想うと頑張れちゃうBBちゃんなのでした！」

凜「全く。まあいいわ。ところで一つ聞きたいことがあるのだけど、いいかしら？」

BB「なんででしょうか？」

凜「私達が2004年に行く理由よ？」

BB「皆さんに第5次聖杯戦争に参加してもらつたためですが？」

凜・ラニ・シンジ

「・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

BB「ですから皆さんに第5次聖戦争に参加してもらつたためです。ちゃんと聞いてました？」

凜「ちよつと！なんで私達が聖杯戦争に参加しなくちゃいけないのよ！それに第5次？冬木って所は何度も聖杯戦争を行ってたわけ？」

B B「何度もって。月の聖杯戦争はもつと行われていましたよ。それに時代が違えど聖杯戦争は各国で行われていました。今回貴方達が行く2004年の聖杯戦争は7人のマスターとそれに伴うサーヴァント達による何でもありのバトルロワイヤルです。」

凜「それに参加しろと？だけど何故？」

B B「もちろん聖杯をてに入れるためです。2004年冬木の聖杯戦争のマスター達は決まっています。ですので貴方達はイレギュラーです。皆さんにはそれぞれサーヴァントを呼び出し計14人のマスターによる聖杯戦争を……」

凜「私達に殺し合いのバトルロワイヤルをやらせて言うの？冗談じゃないわ！」

B B「その必要はありません。凜さん達はみな協力しあつて聖杯戦争に参加してもらい2004年のマスター達のサーヴァントを倒してもらいます。その後生き残った2004年のマスターさん達は煮くなり焼くなり好きにしてください。」

凜「なにさらつと恐ろしい事を言ってるのよ。それで？何故聖杯が必要なのかしら？」

B B「皆さんをもとの時代に戻すためです。向こうの世界にもムーンセルが存在することがわかりました。こちらのムーンセル情報ですので間違いないかと思えます。そ

ここで向こうの時代のムーンセルと聖杯を繋げて皆さんは此方の世界に帰ってきてもらいます。」

凧「……………。そう。向こうからこつちに戻る方法はわかったわ。だけど今から2004年冬木にはどうやって……………」

BB「さすが凧さんです答えがわかったみたいですね。」

凧「確か月の聖杯戦争で優勝した白野君は聖杯いよる願いが4つあったのよね？その内の1つは彼が使いあと2つは桜が使った。後1つ残っているわその1つで今から私達はタイムトラベルをし2004年の冬木に行くってことかしら？」

BB「ピンポーン！大正解です。白桜が聖杯を使います！」

桜「はい。私がムーンセルにアクセスし聖杯に2004年へと私を含め皆さんを送ります。」

BB「と言うわけで早速ですが2004年に行く皆さん冷凍保存機の回りに行きそれぞれ手を繋いで下さい。」

ラニ「わかりました。凧？どうかしましたか？」

凧「本当にそれで2004年に行けるのかしら？」

BB「大丈夫です。そのために貴方達はそこにいるのですから。先輩が転生したこと

は話しましたよね？ 転生するにあたり先輩は魂と精神と肉体が必要なんです。魂と精神は月のムーンセルに有りましたから、後は肉体だけでした。肉体は今皆さんがいる場所に冷凍保存状態でいました。その肉体がそこに無いと言うわけですので転生するさい肉体も消えてしまったと言う訳です。そこでタイムトラベルをするにあたりその場所が一番適性してるかと。」

凜「過去に飛ばされた肉体に便乗し私達も過去にタイムトラベルすると？」

B B「そうですね。後は白桜次第ですね。わかっているわね桜？ 必ず2004年の冬木にそして聖杯戦争が始まる前にタイムトラベルすること。貴方がムーンセルにアクセス次第方もアシストを行うわ。」

桜「ええ。それでは皆さんお互いの手を繋いで下さい。」

凜「了解。」

ラニ「わかりました。」

ユリウス「ああ。」

シンジ「わかったよ。」

ありす「はーい！」

それぞれの手を繋いでいるのを確認する桜そして……。

桜「ムーンセルにアクセス完了、これより2004年日本の冬木市にタイムトラベル

を行うため聖杯に願いを送ります。」

B B 「桜よりムーンセルにアクセス完了を確認、現在の6人の健康状態良好、タイムトラベルまで5秒前・3・2・1。」

そして

B B 「さて。皆さんはちゃんと2004年冬木にタイムトラベルできたのでしょうか？」

メルト 「B B、桜から連絡が来たみたいよ。どうやら無事2004年の冬木市に行けたみたい。」

B B 「そう、それは何よりです。後は先輩と無事合流出来れば問題ありませんね。」

メルト 「そうね、だけど白野は聖杯戦争が終わればこっちの世界にくるのかしら？」

B B 「そんなことはどうでもいい事です。なにせ2004年のムーンセルと此方のムーンセルは繋がりました。ですので先輩に会い次第何時でも先輩とお話ができちゃいます。ウフフツ。早く先輩に会いたいです。」

ついに凧達はタイムトラベルより2004年の冬木にたどり着く。果たしてその後聖杯戦争に勝ち残り無事聖杯をてにいれることが出来るのか？そして岸波白野のフラグ構築っぷりはあいからわずなのか？

〽第0話〽

完

## 第1話

夢を見た。

生前の頃の夢。

月の聖杯戦争。

自分のそのあり方が美しいと話してくれたサーヴァント。

自分を勝利に導くためてを貸してくれた彼女達。

自分を愛し最後まで悪役になった上級A I。

自分を中心にサクラメイキュウを突破しその手助けをしてくれた仲間達。

だからこそ自分は頑張れた。最後まで諦めずにいた。

聖杯戦争が終わりせめてもの感謝を込めて聖杯に願いを込めた。

「大切な仲間達が無事地上へと帰れますように。もう二度と月の聖杯戦争が行われませんように。」

そして自分・・・岸波白野は消えてしまう。

白野「………んっ。」

朝目覚める、懐かしい夢を見た。この時代産まれ今まで観たことがない夢。夢のなかとはいえ大切な仲間達の顔が鮮明に思い出される。

白野「何故今頃こんな夢を観たんだろ？」

考え込むが直ぐに現実に戻される。

白野「んっ？……げっ！もう8時過ぎじゃないか！学校に遅れてしまう。」

急いで支度し家を飛び出す。

白野「あっ！忘れてた。」

家に戻り和室にある仏壇の前に座る。

白野「父さん、母さん、行ってきます。」

仏壇には岸波白野の笑顔で微笑む両親の写真がある。

両親はすでにいない。彼が幼き頃交通事故に会い亡くなってしまった。それでも彼は今幸せでいた。最後まで母親に抱きしめられ微笑みながら「愛してる。」と語ってくれた。父親は自分の手を握り励ましてくれた。



だからこそ今を精一杯生きて幸せでいること。それが両親に送る精一杯の親孝行だと感じているから………。

白野「ギリギリだったな。」

穂群原学園に着き息を整える。

一成「おはよう岸波。珍しいなお前がギリギリ登校とは。」

白野「おはよう一成。寝過ごしてしまつて。」

一成「そうか？まあいいだろ早く教室に行くがよい。もうすぐチャイムがなるぞ。」

白野「ああ。それじゃ。」

ガラガラッ！

士郎「オッス！白野ギリギリだな。」

白野「おはよう士郎。」

士郎「珍しいな。ギリギリなんて、あつ？ひよつとしてまた激辛麻婆豆腐の新しいレシピでも考えていたのか？」

白野「あはは。違う違う。ただ寝過ぎただけだよ。」

士郎「ふくん。まあいいか、それより氷室から伝言を預かったぞ。昼休み屋上に来いってや。」

白野「昼休み屋上ね、部活のことかな？」

士郎「大変だな新聞部も、俺としては弓道部に入って欲しいんだが、やっぱ掛け持ちは厳しいか？」

白野「そうだな、バイトもあるし新聞部も人数が少ないからな。」

士郎「そつか。悪かった、だけど俺はともかく美綴はお前の事諦めていないみたいぞ。美綴に会ったら気を付けといた方がいいな。」

白野「あははは。」

キーンコーンコーンコーン

士郎「チャイムか、それじゃまたな。」

白野「ああ。」

く 昼休みく

蒔寺「よく来たわが新聞部のエースよ、と言うわけで白野君君は明日この学園に来る

転校生の取材を行ってもらおう。」

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

氷室「すまない。いきなり本題に入ってしまったって、おい蒔寺あまり白野を困らせるな。」

三枝「ごめんね岸波君とりあえずお昼まででしょ？食事しながら説明するね。」  
くそしてく

白野「えーと、つまり明日転校生がくるので自分が取材しろと？」

氷室「そうだな、実は明日転校生は3人来るみたいでな、1年に2人、2年に1人らしい、さらに蒔寺情報によると2年は白野のクラスに入るみたいだ。」

蒔寺「1年は私達が取材するわ。だから白野は2年の転校生の取材を、ねっ？」

白野「わかったよ。だけど何故転校生に取材を？今まで新聞部でそんなことはしなかったはずだけど？」

蒔寺「フツフツ。実はなんとその転校生達は帰国子女さらに超絶美少女らしわ！藤村先生が「うわー、すごい綺麗な子達ね、んっ？でもこの2人どこかで見たような？」ってプロフィールを眺めていたのよ。」

三枝「楓ちゃんまた覗き見してたの？」

蒔寺「新聞部としての情報収集よ。だから明日白野は帰国子女の取材を行うこと。も

ちろん私達も1年の帰国子女の取材をするわ。」

白野「了解つと。それじゃそろそろチャイムがなるから教室に戻るよ。」

氷室「うむ。それじゃ明日はよろしく頼む、これでも私は君に期待しているからな。」

蒔寺「あいからわずねえ。いい加減白野に好きですって告白しちやいな……ガシッ！」

蒔寺「んっ！」

氷室「な・ん・か・い・っ・た・か？蒔寺よ？」

蒔寺「ン・ツ！ン・ツ！ン・ツ！ン・ツ！ブハッ！い・いえっ！何も言っておりません！」

氷室「そうか？ならいい。」

三枝「あはははは。」

白野「……………？」

く放課後く

美綴「よっ！岸波今帰りか？」

白野「美綴、ああ、部活も今日は休みだしなっ！」

美綴「へえ。だったら今から弓道部に来なよ。どうせ暇なんだろう？」

白野「詳しいや、弓道部に俺が行っても迷惑なだけだし。それに俺は弓道部には入らないって何度もお前に言っただろ？」

美綴「いいだろ？見学ぐらいなっ？」

白野「パスツ！今から家に帰り明日のことで色々やらなくちやいけないことがあるんでな。……しかし何で美綴は俺を弓道部に誘うんだ？」

美綴「そりやく、その、あつ、あれだお前衛宮と一度弓道での勝負しただろ？その時私も観てたけど、あの衛宮相手に引き分けなんて凄いいことなんだよ！だから衛宮と岸波2人がいれば全国大会優勝間違いないと思った訳、うん、そう、それだ！」

白野「……美綴、そう思ってくれる気持ちはありがたいがさすがに新聞部との掛け持ちは疲れる、それにバイトもあるしな。」

美綴「そつ、そつか。あはは。まあ今日は諦めるわ、でも、もし弓道部に入りたくなくなったら何時でも歓迎するからな。じゃあな！」

白野「ああ、じゃあな。」

くその後く

白野「ただいまあーって誰もいないんだけど、だけど毎日やってないと家のなかでは落ち着かないしな。」

家に着いた白野は仏壇の前に座り両親に手を合わせる。

白野「よしっ。風呂に入ってご飯にしますか。」

いつも通りの日常、いつも通りの友人達、その幸せを感じながら就寝する。だが！岸波白野の運命は明日大きく代わり始める。

明日転校してくる3人の人達によって。

蒔寺「おはよう白野、丁度よかった。こっちに来て！」

白野「おはよう、何？いきなり。」

水室「今職員室に例の転校生が居るらしい、どんな子か確認しよう」と蒔寺が言い出してな。」

蒔寺「そう言うこと、ほら！行くわよ！」

白野「わかった、わかったから手を引つ張らないで！」

ガラツ！

蒔寺「えーと、どこかしら？あつ！いたいた。へえ、後ろ姿しか分からないけど結構可愛らしそうね。でも3人の内2人何処かで見えた記憶が……」

白野「どれどれ……。んっ？あれ？なんか？確かに、でも俺は3人とも何処かで見えたような？」

藤村「コラッツ！もうすぐ授業が始まるわよ！早く教室に行きなさい！」

蒔寺「やばっ！ほら？行くわよ！」

白野「ハイハイ、」

士郎「おはよう白野、なんだ？なんか元気がないみたいだけど？何かあったのか？」

白野「おはよう、ちよつと考え事をな。」

士郎「そうか？悩み事なら相談するぞ？」

白野「大丈夫。俺の思い過ごしかもしれないからな。」

慎二「おはよう2人とも、あいからわずお前達は辛気くさいなあ。」

士郎「おはよう慎二。珍しいな朝から俺達に話しかけるなんて。」

慎二「あいからわず一言多いな衛宮。せっかくい情報話を話してやろうと思ったのに。」

白野「ひよつとしてこのクラスに帰国子女が転校してくることかな？」

慎二「ちつ！さすが新聞部だな、もう知っているのか。」

士郎「へえ。でつ？慎二どんな子なんだ？男子か？女子か？」

慎二「女らしいよ。情報によると結構可愛いらしい、だけど所詮情報だからな。あんまり期待しない方がいいんじゃない。」

士郎「ふくん、．．んつ？白野？大丈夫か？さつきからずつて下を向いてるけど。」

慎二「なに？岸波体調が悪いのか？風邪ならさつきと家に帰りなよ。皆の迷惑になるだろ。」

白野「大丈夫だよ、風邪じゃないから。」

キーンコーンコーンコーン

ガラガラツ。

藤村「ハイハイ、皆席について！ホームルームを始めるわよ。」

慎二「あいからわず来るのが早いな先生は。」



藤村「それじゃホームルームを始まるわよ、といたいけど先に今日からの学校で一緒に学ぶ転校生を紹介します。」

ザワザワくザワザワ。

藤村「ハイハイ静かに、えーと、うん、それじゃ入って来なさい。(ドキドキ)」  
ガラガラッ!

??「失礼します。」

全員

「.....」

凜「初めまして、私の名前は遠坂凜といいます。一応帰国子女ですが日本の読み書きは大丈夫です。どうぞよろしくお願いします。」

藤村「(ウンウン、やっぱ皆ビツクリするよね!隣のクラスの遠坂さんとそっくりだし、おまけに名前も一緒だなんて。)」

凜「先生?先生?」

藤村「?あつ、ごめんなさい、何かしら?」

凜「私の席は?何処に座ればいいのでしょうか?」

藤村「あつ、そうね、あそこ。岸波君の隣が空いてるから、そこをお願い。」

凧「分かりました。」

藤村「そうそう岸波君、彼女まだ教科書がないの、悪いんだけど一緒に見せてあげてちょうだい、よろしくね。」

白野「えっ？あつはい、分かりました。」

凧「初めまして、岸波君。よろしくね。」

白野「……………よろしくです。」

白野「(いやいや、そんなことは、でも本当に自分がよく知る遠坂凧と似て……………あつ！髪の色と目の色が違うし、やつぱそっくりさんかな？たしか世界にはそっくりな人間が3人要ると氷室が言っていたし、ウンウン、やつぱそっくりさんでしょ)……………んっ。」

突然遠坂凧さんが自分の席に一枚の紙切れを置く。

白野「(何かな?)」

凧「お久し振りね白野君。私の事は勿論覚えてるわよね？もし覚えてないなら後で一発殴って思い出させてあげるわ！とりあえず今日の昼休み私を屋上に案内しなさい、

勿論断らないわよね？もし断れば……。

「凜」

白野「(何この脅迫文怖いよ！……でも、彼女は自分がよく知る遠坂凜で間違いない、とりあえずお昼になれば全部分かることか?)」

藤村「ハイ、ホームルーム終了！ちゃんと皆授業受けるのよ。岸波君彼女の事よろしくね。」

白野「はい。(早退しようかな?)」

「昼休み」

凜「とりあえずは久しぶりね、白野、私の事を覚えていてくれてよかったわ。忘れてたからおもいつきりぶん殴っていた所よ。覚えていてよかったわね？白野君？」

白野「はい。所で凜さん質問があるのですが？」

凜「何かしら？」

白野「とりあえず2つほど、1つはどうやってこの世界にこれたのでしょうか？後1つはなぜ自分はこうして凜さんの目の前で正座しているのでしょうか？」

凜「1つめは後で詳しく説明してあげるわ、2つめはなんとなくかしら？」

白野「なんとなくって？いやいやおかしいよね？俺何も悪いことしてないし……」

凜「はあツ？何いつてるの？私達がどれだけあんたを捜したと思ってるの？さんざん捜してやっと見つけたと思っただけなら転生して2004年で平和に暮らしてるし。迷惑にも程があるわよ!!」

白野「それはただの逆恨みじゃ・・・」

凜「何か言ったかしら？白野君？（ニコツ!）」

白野「何でもありません。」

ガチャツ!

ラニ・桜「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白野・凜「あっ!」

ラニ「ハア。せっかくの感動の再会なのに何してるんですか？2人とも。」

桜「先輩・・・・・・・・」

白野「あはは。ってラニそれに桜？やっぱり今朝見た後ろ姿は君たちだったんだ!」

ラニ「お久し振りです白野さんこうしてお会いできて嬉しい限りです。」

しばらくすると白野の後ろから桜が抱きしめる。

白野「さ・桜?」

桜「やつと。やつと逢うことができました！お久し振りです先輩すごく、すごく逢いたかった！」

白野「桜。」

凜「全く、とりあえず感動な再会は終了！今から私達がどうやつてここに来たのかあなたに説明してあげる。それと、白野君！今日放課後空けておきなさい。私達意外にも会わせたい奴がいるから！後ラニ、人払いの結界は済んでるのかしら？」

ラニ「はい。ここにくる前に済ませました。」

凜「さすがラニね。それじゃ桜説明よろしくね。」

白野「えっ？凜が説明するんじゃ……。」

凜「私が説明するより桜が説明したほうが解りやすいでしょ。それに私まだご飯食べてないし。」

ラニ「それじゃ一緒に食べましょう凜。」

凜「そうね、桜は説明しながら食べなさい。岸波君はそのまま聞いていなさい。」

白野「えっ？俺もご飯が食べ……。」

凜「何か言ったかしら？」

白野「いえ、何も言っておりません。」

桜「あはは。」

その後白野は桜からどうやってここに来たのか説明を受ける。

くそして放課後く

懐かしく大切な仲間と凧達が住む家に向かう。そして彼・岸波白野は考えていた。何故彼女達がこの世界に来たのかを、これから先何が待ち受けているのかを。

白野「(とりあえず凧達の家に行けば全ての答えがある。今の所嫌な予感しかないけど。)」

凧「さっ、着いたわよ。とりあえずようこそ私達の住む家に、他の奴らもあんたに逢いたがっているわよ。」

く第1話く

完

## 第2話

凜「ただいまあー。」

ドタドタ。

ありす「お帰りなさい凜お姉ちゃん！」

シンジ「おいつ！ありす、それは僕のお菓子だぞ！返せ！」

ありす「べええ。」

凜「全く、ほら白野入って来なさい。」

ありす「白野？」

白野「お、お邪魔します。」

ありす「……………あ~~~~ツ！お兄ちゃん!!」

白野「えっ？あ、ありす？それにシンジ？」

ありす「わ〜い、お兄ちゃんだ！」

白野「グハツ！」

ありすは白野に勢いよく抱きつく、なんとか持ちこたえる白野そして。

ありす「逢いたかったんだよ。お兄ちゃん。」

白野「久しぶりだねあります。元氣そうでなによりだ。それに、シンジ？」

シンジ「な、何だよ？」

白野「あつ！そうか。たしか地上ではシンジは8才だったんだっけ。」

シンジ「わ、悪かったな8才で。それよりも、思ったより元氣そうじゃないか？心配して損したよ。」

白野「……………」

シンジ「何？」

白野「いや、まさかシンジから心配されるとは、変なもんでも食べたか？」

シンジ「~~~~~ッ！」

凜「ハイハイ、いつまでも玄関で騒がない、さつさとなかに入りましょ。」

白野「あ、うん。」

ラニ「そういえば、シンジ、ユリウスはどうしました？」

シンジ「晩御飯の支度をしてるよ。今日は色々あつて出前を頼んだ。」

白野「ユリウス？えっ？ユリウスもいるのか？それじゃレオも？」

ユリウス「いや、レオはいない。この時代にいるのはここにいる6人だけだ。」

白野「ユリウス！ははっ。驚いた。本当にユリウスなんだな？」

ユリウス「ふっ。久しぶりだな岸波白野。」



白野「そうだな。」

凜「それじゃ皆揃つたし食事にしますか、白野君家に連絡しときなさい。今日は遅くなるつて。」

白野「いや、その必要はないよ、俺今独り暮らしだから。」

桜「えっ？そんなんですか？ご両親は何処に……。」

白野「親は自分が小さい頃亡くなつたんだ。だから今平屋の一軒家で独りで住んでるよ。」

桜「あつ。すつ、すみません、変なこと聞いて。」

白野「大丈夫、気にしないで。」

桜「はっ、はい。」

くそしてく

凜「さて、食事も済んだし白野君。今から何故私達がここに来たのか説明してあげる、ついてらっしゃい？」

白野「えっ？ここでじゃないの？」

ラニ「はい。この家は地下室があります。そこに私達以外にも貴方に会いたがつてる

方との連絡を取る施設がありますので。」

桜「そこ以外にも連絡方法があるのですが、皆さんと一緒にですとその場所以外は今の所ありませんので。」

白野「ふうん、しっかしあれだな、こんな大きな家に住んでるなんて、この辺はけっこうな一等地のはず、どうやっててにいたんだ？」

ユリウス「このカードで一回払いで購入した。ちなみにこのカードがあればに入らない物はほぼないだろう。」

凜「ほんと、便利なカードよね。私が預かってあげるって言ってるのにユリウスったら「だめだ！」の一言なんだから。」

ユリウス「当然だ。お前に渡すと何しでかすがわからん。それにレオからけして凜に渡さないようにと言われているからな。」

白野「あははは。」

凜「何笑っているのよ。」

白野「あつ、いや、別に。」

ラニ「部屋につきました。白野さんどうぞ中へ。」

ガチャツ。

白野「な、なんじゃこりゃ！」

ユリウス「懐かしいだろ。月の裏にいたときに使っていた生徒会室を再現した。」  
凜「以外よね。まさかユリウスがここまで凝り性だったとは。」

ユリウス「やるからには最後までこだわらないとな。」

桜「先輩どうぞお座り下さい。今お茶を用意しますから。」

白野「ありがとう。それで？今から誰に連絡するんだい？まつ、だいたいの予想はつくけど。」

凜「ラニお願い。」

ラニ「わかりました。」

ラニがパソコンを操作するしばらくして。

レオ「もしもし、あつ。ちゃんと繋がってる見たいですね。なにせこちらは2030年ですから。まさかこうもうまくいくとは、さすがムーンスルです。それでは。今晩は白野さんこうしてモニター越しですが、お会いできて何よりです。ちなみにこちらの世界では僕以外にジナコとガトーにそれにダン・ブラックモア氏がいますよ。」

白野「レオ……。」

レオ「ん？どうしました？せっかくの再会なのに……。反応が今一ですね？」

白野「いや、また会えて嬉しいよ。レオ。ただ今朝から色々ありすぎてな、うん、久しぶりだね。ところで他の3人は何処に？」

レオ「ジナコは、別の部屋で引きこもっていますよ、ガトーとダン・ブラックモア氏は僕達が拠点として居る廃墟付近で見回りをしています。」

凜「ガトーとブラックモアがいるの！いつの間に、何故？」

レオ「あの2人はジナコが見つけてくれました。白野さんのことを話と直ぐ指定した場所に来てくれましたよ。そうですね。何故かと言うと、実は白野さんが聖杯戦争で優勝したことが全世界に知れ回ってまして今僕達が居る白野さんが眠っていた場所が危険な状態になる可能性があるんです。そこであの2人には僕が頼み周辺の見回りを頼みまして……。」

ユリウス「なるほどな。確かに岸波が眠っていた場所は危険になる可能性があるな。」

白野「えっ。何で？」

ユリウス「岸波、お前が聖杯に叶えた願いは月の聖杯戦争をなかつたことと二度と聖杯戦争が起らないこと。確かそうだったな？」

白野「えっ、あつ、うん。」

ラニ「月の聖杯戦争は二度と起らないでしょうね。ですが私達が参加した聖杯戦争はなかつたことにはできなかった。いくらムーンセルとはいえ、起こつたことは取り消すことはできない、ですから白野さんの聖杯による願いはなかつたことではなく私達予選からのマスター達白野さんを除く998人は地上に還されることで聖杯戦争をな

かったことにした、ですから……。」

レオ「優勝しムーンセルの所有権である白野さんを喉からてにいたい輩がいるでしょうね。元マスターである人達の中にも……。」

凜「なるほどね、もともとあんたはレオ達が拠点としている廃墟で眠っていたわ、その場所が他の奴らにとってはてにいたい場所なのね、そしてあんたを捕らえムーンセルの情報を聞き出し自分達の所有権にしようと。」

レオ「はい。今の所は大丈夫みたいですが、見つかるのは時間の問題かと、ですからガトーとダン・ブラックモア氏にお願いしました。白野さんが眠っていたこの場所を守るための力を貸してほしいと。」

白野「そっか。すまない、俺のせいと……。」

レオ「いやいや大丈夫ですよ。それにこの場所は皆さんを元の時代につれて帰るのに必要な所ですので。」

それより兄さん、皆さんに渡す遺物品はてにいたでしょうか？」

ユリウス「岸波と桜以外はてにいた、サーヴァント召喚時に渡すつもりだ。」

白野「えっ？サーヴァント召喚？どうして？」

レオ「詳しいことはBBに聞いてください。それでは白野さんまた何かありましたら連絡下さい。あつ、ガトーとダン・ブラックモア氏はまた改めましてこちらか連絡させ

ます。お二方はいま忙しいので。では……。

白野「えっ！ちよっ、レオ？」

凜「説明するのが面倒だから後はBBに押し付けたみたいね。ラニ、BBに連絡してちよっうだい。」

ラニ「わかりました。」

白野「へっ？BBって？」

ラニがパソコンを操作しムーンスセルに繋なぐ。

しばらくして……。

BB「パンパカパーン！ついに、ついに、愛しの先輩に再会！BBちゃんテンションMAX！そして先輩の、先輩による、先輩のための、BBチャンネルはじまりま〜す

！はい、先輩拍手です！」

白野「えっ？あつはい。」パチパチ……。

B B 「ウンウン、さすが先輩、皆さんと違いちゃんと拍手してくれる、と言うわけで今から先輩と二人つきりでお話しますので先輩以外の皆さん出ていって下さい。」

全員

「……………」

B B

「……………」

凜「さつ。B B さつさと白野にこれからのこと説明してちょうだい。」

B B 「あれ？今のスルーですか？せっかく先輩と久しぶりに逢えたのですから、皆さんここは気を使って二人つきりにさせてあげようと思いませんか？」

凜「思わないわよ！とつとと説明しろ！」

B B 「仕方ありません、先輩、二人つきりでお話するのはまたの機会で、それでは先輩お久しぶりです。貴方の愛しのB B ちゃんですよ！先輩も私に逢えて嬉しいですよ  
ね？」

白野「うん。そうだね。また再会できて嬉しいよB B。でも、どうしてB Bが？」

B B 「嬉しいだなんて、B B ちゃんさらにテンションあげあげです！それでは先輩今

から何故私が存在するのかお話しします、実は本来ムーンセルに消されてしまはずだったんですが、何故か消されませんでした！これも先輩を愛する力が強かったためかと。」

凜「そんな話があるかー！」

B B「と言われましても、ぶっちゃけ私にもわからないんです、気がついたらムーンセルにいたんでどう説明したらいいのか、ですからこの話は終了です！」

白野「そうだな、今はこうして皆に会えたんだし、俺は全く気にしない、B Bに会えた、桜達にも会えた、これ以上に嬉しいことはないよ。」

桜・B B「先輩……………」

凜「まあ、貴方がそれでいいなら構わないわ、後はこれからのことね。岸波君」

白野「これからのこと？」

桜「はい。先輩を含め私達7人はこれより冬木の聖杯戦争に参加するんです、聖杯をてにいれるために。」

白野「っ！聖杯戦争！」

B B「そうです、聖杯は皆さんにとって必要なんです。今からその事について説明しますね。実は……………」



白野 「元の時代に戻るか、だけど・・・俺は。」

凜 「別にあんたは2030年に行く必要はないわ。今の時代に転生し生まれ変わったんだから。だから余り深く考える必要はないわよ。」

桜 「そうですね、先輩には先輩の人生がありますから、逆に私達が先輩を聖杯戦争に巻き混んでしまい申し訳ないです。」

白野 「そんなことないさ。月の聖杯戦争の表と裏の時俺は皆に助けてもらった、だか

ら今度は俺が皆の手助けが出来ると思うと嬉しいんだ！」

凜「白野……」

ラニ「?どうしました凜?顔が真っ赤ですよ。」

凜「つ!う、うるさい!そうゆうあんたもでしょうが!とりあえず白野が聖杯戦争に参加することが決まったわ!さっそく今晚サーヴァントを召喚しましょう。」

B B「そうですね、ムーンセル情報ですと、どうやら冬木のマスターさん達は今日で出揃ったみたいです。召喚するなら早く始めるべきですね、ですが……」

ユリウス「?どうかしたのか?」

B B「はい。先輩に令呪がまだ備わってません。他の皆さんは令呪は有るのですが。

おかしいですね?」

ユリウス「岸波は転生者だ、その事と関係があるんだろう。」

B B「そうですね。その内先輩にも令呪は出てくるはずですよ。ムーンセルは先輩が冬木の聖杯戦争に参加資格があると判断してるみたいですから。ですので今晚は先輩以外の方が召喚してください。ちなみに六人まとめてはお薦めしません。」

凜「えっ?何ですよ!」

B B「いいですか。そこは地上です、月の聖杯戦争とは違いアバターではなく本来の姿での召喚です。サーヴァントはともかく貴方達は召喚する際かなりの魔力が召喚時

に必要とされます。魔力がない状態でもし冬木のサーヴァントもしくはマスターと遭遇すればサーヴァントは大丈夫ですが貴方達がもし狙われたりすれば即あの世行きです。ですので今日の所は2・3人での召喚がよろしいかと。」

ラニ「確かにそうですね、では私は早めに召喚したいので今日召喚します。後は、」  
ユリウス「俺がやろう。本当はシンジかありすがいいんだが。」

ありす「くく。くく。」

シンジ「眠い・・・。」

白野「そうだな、すまない桜、二人をベッドに運ぶのを手伝ってくれ。」

桜「はい。わかりました。シンジさんは私がありすちゃん先輩、お願いします。」

白野「ああ。」

凜「それじゃ今日はラニとユリウス後は私が召喚するわ。白野君二人を寝室に運んだら中庭にいらっしやい。」

白野「了解、それじゃ桜行こう。」

くとある教会く

?? 「それでは今この時を持って聖杯戦争を開始する。喜べ少年、君の願いはすぐに訪れる。」

士郎 「……………っ！」

?? 「話はずんだ？それじゃ衛宮君行きましょ。」

士郎 「ああ。」

?? 「……………。」

コンコンつ、ガチャ。

?? 「失礼します。お久しぶりですお父様。」

?? 「可憐か、確かに久しぶりだな、元氣そうで何よりだ。」

可憐 「お父様こそ、それで、何故このような時に私を呼んだのでしょうか？」

?? 「実は……。」

?? 「綺礼様……。私が説明いたしましょう。」

綺礼・可憐「!?」

?? 「初めまして。私はサーヴァント。クラスはルーラー真名は……。マルタと申します。」

綺礼 「ルーラーだと!？」

可憐 「お父様ルーラーとは一体?」

綺礼 「過去聖杯戦争において一度だけ存在したと記録がある。しかし何故冬木の聖杯戦争に……?」

マルタ 「此度の聖杯戦争で私、ルーラーが必要だと聖杯が判断したのでしよう。そうですね……。例えばサーヴァント戦により冬木市が消えてしまう可能性がある。もしくはよからぬマスターが聖杯に世界を破滅させる願いを望んでいる。そんなところでしょうか。」

可憐 「なるほど、所でルーラーさん、貴方のマスターはどこに?」

マルタ 「マルタで構いませんよ。それと私にはマスターは存在しません。ですので今日はお二方をお願いがあつてこうして姿を見せたのです。」

可憐 「お願いですか?」

マルタ「はい。お二方どちらでも構いません私のマスターになって欲しいのです。」  
綺礼「ならちようどいい。可憐、君がマスターになりなさい。」

可憐「私が？ですかお父様・・・。」

綺礼「本当なら私と共に監視・監督者と思っていたのだが、ルーラーのマスターだと監視しやすくなるだろう。ルーラーよ、可憐がマスターで構わないだろうか？」

マルタ「ええ、可憐様よろしければ私のマスターになっていただけませんか？」

可憐「・・・・・・・・・・。わかりました、私でよければ。」

すると突然可憐の右腕に熱が入る。

可憐「っ!？」

マルタ「私の令呪の半分を貴方に渡しました。可憐様、いや、我がマスターよ、どうか貴方に神のご加護を・・・。」

綺礼「・・・・・・・・・・。」

??「ほう。これは珍しいまさかこの我がルーラーを目にするとは。」

可憐「!!？」

マルタ「サーヴァントの気配を感じていましたが、まさか貴方が出てくるとは。」

??「なるほど、さすがはルーラー、我が出てきても顔色一つ変えんとはな。」

綺礼「何故出てきた?・・・・・・・・・・よ。」

?? 「何、たまたま通りかかっただけのこと、安心せよ綺礼、此度の聖杯戦争今所我には興味はない。」

綺礼 「今の所？」

?? 「ではなルーラーよ、此度の聖杯戦争我は高みの見物としよう。せいぜいこの我を楽しませろよ？」

マルタ 「……………」。

くそしてく

?? 「まさか此度の聖杯戦争であの雑種が参戦するとはな。またこの我を楽しませてくれるのか？なあ、元マスターよ、いや、岸波白野よ……………」。

┌

完 〔第2話〕



## 第3話

朝目覚める。

昨日の夜無事凛・ラニ・ユリウスはサーヴァントとを召喚しその後自分は家に帰宅、凛のサーヴァントは自分を最後まで名残惜しそうに見ていた。

白野「聖杯戦争か・・・。」

まさかまた自分が参加するとは思わなかったな・・・。

く先日の夜く

シンジとありすを寝室に運び桜と一緒に中庭に移動する。

白野「・・・？。凛何してるの？」

凛「見てわからない。召喚するための準備よ。月とは違い地上じゃ色々下準備が必要なの。・・・。よし！出来た。」

白野「へえー。そう言えば誰から召喚するんだ？」

凛「私達3人まとめてよ。BBはそれも可能って言っていたわ、後は、ユリウス。」

ユリウス「ああ。遠坂、ラニⅡⅧこれを。」

ユリウスは凜とラニにある物を渡す。

白野「何これ？」

凜「召喚時に必要な遺物品よ」

白野「今凜が書いた魔方陣だけじゃダメなのか？」

凜「魔方陣だけでも召喚可能よ。だけどねそれじゃ意味がないの。」

白野「??」

桜「魔方陣だけでも召喚はできません。ですが、それで召喚するとどんなサーヴァントが出てくるかわかりません。ですから過去に英雄達が残した遺物品があると自分にあつたサーヴァントが召喚できるんです。もつとも英雄が召喚にに応じてくれたら話ですが……。」

凜「だけど遺物品がないよりかはいいと思うの。遺物品なしの召喚で変なのか出てきたら嫌だし。」

白野「へえー。」

凜「さっ。白野君離れて、ラニ・ユリウス準備はいいわね？」

ラニ「はい。」

ユリウス「いつでもかまわん。」

凜「それじゃ……。」

凜・ラニ・ユリウス

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

祖には我が大師シュバインオーグ。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「—————Anfang (セット)」

「—————告げる」

「—————告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の劍に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。」

ラニ「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手操る者——。」

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ————！」



凜「……………??」

白野「どうした？凜、何かあったのか？」

凜「いいない。サーヴァントがどこにもいない！何で？私ちゃんと呪文唱えたよね？間違っていないわよね？ちゃんとランサーが使っていたゲイ・ボルクの一部を触媒にしたはずなのに！ユリウス！この遺物品本物よね？」

ユリウス「ああ、確かに本物のはずだが……………まさか。」

凜「な、何よ？」

白野「ひよつとしてですけど別に別のマスターに召喚されている？もともとランサーは月の聖杯戦争では凜がマスターだった、召喚に応じないことはないはずだし。」

凜「その可能性はあるわね。えっ？だとしたら私どんなサーヴァントを呼んだわけ？でも、此処にいないし、あくくもくく！どうなってるのよ！」

ドコーンッ!!

白野「何だ？今の爆発音？」

ラニ「家の中からです。」

桜「リビングの方から聞こえました！」

白野「とにかくリビングへ、家の中には二階とはいえシンジとありすがいるんだ！」

凜「そつ、そうね！」

くりびんぐく

??「いったい？なんなの！こんな召喚のされ方ってありなの？全くいったいどんなマスターなのかしら？一言文句いってやるんだから!!」

ガチャッ！

凜「全くどうなっている……の……よ。」

??「ン？」

凜「……………」

??「……………」

凜・??「あ……………!!」

??「あ、貴方凜？えっ？でも髪の色が……、だけど私の中に流れる魔力は確かに凜のだし。えっ？えっ？てっ事はあんたが私の……？」

凜「なんであんたが？ま、まさか？」

突然凜はスマートフォンであることを調べる。

凜「やつぱり。」

ラニ「凜？」

凜「ランサー、いやエリザが召喚された理由がわかったわかったわ。」

ラニ「あれ？ひよっとしてこれは？」

凜「ええ、そう。スマフォに写っている画像は月の裏でエリザを閉じ込めた時に使ったブラックボックスよ。多分これが媒介になりエリザが召喚されたのね。」

ユリウス「なるほどな。しかし……。ずいぶん派手な召喚のされ方だな、もう一つの媒介と混ざり合わさったのが原因かもしれないな。」

凜「ぐっ！し、仕方ないじゃない。スマフォの中にこんなの入っていたの忘れてたんだから。後でリビングは綺麗にしとくわ。それよりも……。」

エリザ「えっ？何よ？」

凜「はあ、まあいいわ。立ちなさいエリザ、いやランサー。此処が何処だか聖杯に教えてもらってるでしょう？後あんたが思っている通り私が……。」

エリザ「ストップ！ちよっと待って、……。なるほどね、だいたい事はわかったわ、何故あんた達が2004年にいるのかはわからないけど……。よし！それじゃあ。」

凜「??」

エリザ「コホン、では問いましょう。貴方が私のマネージャーかしら？」

凜「……?」



エリザ「……………ちよつと、さつさと応えなさいよ！」

凧「え、ええ。ランサー、私が、貴方のマスターよ。ま、仕方ないか。変なサーヴァントよりかはましだしね。」

エリザ「ましてどうゆう意味よ！それと、マスターじゃなくマネージャー！いい、マネージャーよ！」

凧「ハイハイ。」

ガチャ。

桜「……………リビングが……………ってランサーさん？どうして？」

エリザ「えつ。ええ！桜よね？何で？どうして？」

凧「わかったから、後でちゃんと説明するから、リビングを片付けるわよ。ごめんなさい桜、貴方にも後で説明するわ。片付けるの手伝ってくれないかしら？」

桜「あつ、はい。ずいぶん派手な召喚だったんですね。片付けるの時間が掛かりそうです。」

ラニ「ここぞと言うときにおおポカをする。さすがは凧です。ツンデレ属性にどじつ子属性も追加しましょう。」

凧「誰がどじつ子よ！全く。所で桜、シンジとありすはどうだった？」

桜「ありすちゃんは熟睡してました。シンジさんは先輩が様子を見に行きましたから

もう少ししたら此方に来るか。」

エリザ「凜とラニにユリウス、おまけに桜まで、後シンジにありすね？全く、驚くことばかりだわ。だけど、もうこれ以上驚くことはないわよね。それじゃ凜、私疲れたから休むわ。」

凜「何言ってるの？あんたも一緒に片付けるのよ！」

白野「なんじゃこりや！リビングがめちやくちやじゃないか！」

エリザ「嫌よ！凜、貴方が召喚したせいでこうなったのよ、何で私までってあら？子ブタ貴方もいたのね。久しぶり、それじゃお休みなさい。」

そしてエリザは霊体化し居なくなる、しばらくして……。

エリザは姿を見せ。

白野「あつ、もとに戻った。」

エ

リ

ザ

白野「ん？」

エリザ 「えっ? えっ? えっ?

えー——————  
!!な、何で? 貴方子ブタなの? えっ? 嘘? 本物? 本物よね! 本人よね? やだっ! 私今ホコリまみれじゃない! 鏡? 鏡? あっ。あつたわ。」

エリザは突然鏡の前に行き身だしなみを整えるそして・・・。

エリザ 「コホン。子ブタ・・・じゃなく、ひ、久しぶりね白野。まさかまた貴方に逢えるなんて夢にも思わなかったわ。本当、うん、久しぶり、だから、えくと、その、あの。」

白野 「何だろう? 何か嫌な予感がする。と、とりあえず。」ああ、久しぶりランサー。それじゃ凜今日はもう遅いし家に帰るね、また明日。」

エリザ 「えっ? ちよつと? 白野? じゃないダーリン待つて!」

凜 「逃げたわね。」

ラニ 「逃げましたね。」

桜 「逃げてしまいましたね。」

ユリウス 「逃げたな。」

白野「はあく。何だろ昨日は色々ありすぎて疲れが余り取れなかったな。」  
ピンポーン

白野「ん？誰だろ、朝早くから。」

ピピピピピンポーン！

白野「……………。ハイハイ今出ますよ。」

ガチャ

あります「あつ、おはよーお兄ちゃん！」

白野「あります。うんおはようって皆どうしたの？朝早くから。」

桜「おはようございます。先輩。」

ラニ「おはようございます。」

シンジ「おつす。」

凜「おはよう白野君、はあく、……！ちよつとエリじゃないランサー出てきてはダメよ！霊体化してなさい！あんた色々目立つんだから！」

白野「何か、大分疲れてない凜？」

凜「誰のせいで疲れたと思ってるのかしら！」

白野「??」

凜「じ、自覚がないのね。あ・ん・た・のせいでしようが！昨日あんたがさっさと家に帰るから私がランサーを宥めたのよ！朝は朝であんたが居ないってありすがぐずりだすし！これでも何故私が疲れているのかわからないかしら、白野君？」

白野「すいません。ごめんなさい。」

凜「よろしい。とりあえずさっさと着替えてきなさい。一緒に学校へ行くわよ。」

白野「あつ、うん、ちよつと待ってて。」

くそしてく

凜「しっかしあれね、あんたあの大きな家に一人で住んでるのね。」

白野「ああ、あの家は両親が残してくれた大切な家だしね。」

凜「ふーん。」

白野「そういえばシンジとありすの制服って穂群原学園のだよね。」

ラニ「そうですね。二人はまだ子供ですから、さすがに平日の昼間から子供が外でうろちよろしてたら色々とありますし。」

白野「なるほどね。」

因みにシンジは後ろから付いてきている。ありすは自分と一緒に手を繋ぎ登校中である。

桜「私達が毎日送り迎えしてるんです。この時代は色々と物騒と聞きましたから。」

凜「シンジはともかくありすは危なっかしいからね、この時代に来たばかりの頃迷子になって探すのが大変だったんだから。」

白野「ちよっ！……。いいかいありす、一人で勝手にうろちよろしないこと。もし何処かに行きたいなら俺達の誰かと行動すること。わかったかい。」

ありす「うーん、わかった！」

凜「まるで兄妹ね、でも、そうか、あんた達月の聖杯戦争時は似た者同士だったけ。」

白野「ありすは女の子だぞ、もし何かあったらどうするんだ。」

凜「大丈夫よ、一応ありすにはスマフォをGPS付で持たせてるから。それ

に………。」

白野「それに……?」

凜「もしものためにありますにはリターンクリスタルを持たせているの。」

白野「リターンクリスタル!?!」

桜「凜さんはありますちゃんに対して凄く過保護なんですよ、先輩に会うまでの間いつもありすちゃんと一緒にでしたから。」

白野「へえ、まるで凜とありますは姉妹みたいだな。」

凜「ふんっ。そうね、もしありますに変なことする輩がいたら二度と表に出られないようにして殺るわ。」

白野「(怖っ!)」

あります「?!」

蒔寺「何か、凄い光景をみてしまったわ。」

三枝「あの小さな女の子凄く可愛いね。まるでお人形さんみたい。」

氷室「・・・・・・・・・・。」

蒔寺「それとあの男の子、間桐にそっくりね。でも、まさか白野がああ転校生達と知り合いだったなんて驚きね。」

氷室「・・・・・・・・・・。」

三枝「どうしたの？ 鐘ちゃん？」

蒔寺「愛しの人々がハーレム常態ですから、そりあイラストもする・・・・・・・・グハツ！」

氷室「・・・・・・・・・・。」

三枝「あわわわ。」

美綴「岸波の奴・・・・・・・・。何かイラストする。」

三枝「うわっ？ びっくりした。綾子ちゃん？ 何時からいたの？」





ありす「あ、」

凜「何やつてるのありす、所でその方達は？白野君の知り合いかしら？」

白野「同じ新聞部の氷室さんと蒔寺さんと三枝さん、後隣のクラス的美綴さんだよ。」

凜「そう、初めまして。私、遠坂凜よ。よろしくね。」

桜「私は間桐桜といます。よろしくお願いたします。」

ラニ「ラニⅡⅧといます。」

三枝「あ、私三枝由紀香です、よろしくお願いたします。」

美綴「美綴綾子、よろしくな！」

氷室「氷室鐘だ。それと、其処で倒れているのは蒔寺楓だ。」

白野「何か挨拶が社交辞令みたいだな、それにさつきから寒気がするが気のせいかな？」

その後シンジとありすを紹介し二人を学校まで送り白野と凜達7人は自分達の学校へ向かう。氷室達はシンジの名前に驚いていた。何せ白野のクラスの間桐慎二と同じ顔も似ているからだ。三枝はありますが学校に着くまでずっと頭を撫でていた、時々「かわいいよ。」とか「癒される。」とか言いながら。

ザワザワ。

男子生徒「あ、あれ岸波だよな、なんだよあのハーレム常態。」

男子生徒「しかもあの3人昨日転校してきた娘達だぞ。」

男子生徒「あんな綺麗所と一緒に登校なんてくそリア充が！」

白野を知る男子生徒達

「爆ぜろ！そしてもげてしまえ!!」

女子生徒「あれ岸波君よね。」

女子生徒「何かすごい光景。」

女子生徒「はあく、やつぱ岸波君モテるんだね、諦めようかな。」

白野に好意がある女子生徒達

「私も一緒に岸波君（先輩）と登校したいな。」

白野「（な、なんかさつきからすごい視線を感じる、それに校庭に入ってから凜とラニが凄いピリピリしてるような?）」

桜（先輩、先輩。）

白野（桜?どうしたの?）」

桜（学校内にどうやら私達以外にマスターとサーヴァントがいるみたいです。）

白野（えっ？）

桜（さすがに昼間から戦うことはないと思いますが、それでも一応警戒だけはしていただいた方がいいと思います。）

白野（・・・・・・・・・・。ああ、わかった。）

〈第3話〉

完

## 第4話

「昼休み屋上」

凜「ラニと桜遅いわね。」

白野「そうですね、はあく。」

凜「何?どうしたのため息なんかついて。」

白野「いや、別に。」

凜「??」

ガチャ

桜「すいません、遅れました。」

凜「遅い。全く昼休みが終わるわよ!」

ラニ「クラスメイトの人達に色々質問されてまして……。」

桜「主に女子からですが。」

白野「へえ、どんな質問なの?」

ラニ・桜

「……………」

凜「バカ。」

白野「えっ? えっ?」

凜「まあいいわ、人払いの結界は貼ってあるからランサーあんたも出てきていいわよ。」

エリザ「うーん。霊体化つてなくんかいまいちね。あつ白野。もうっ! 昨日は急に帰るんだから、まっ、私と再開できて嬉しい気持ちはわからなくもないけど、全く照れ屋さんなんだから!」

白野「……………」

凜「ハイハイ、とりあえずこれからのこの話をしましょうか。」

白野「そ、そうだな。」

エリザ「あれ? えっ? ちよつと?」

ラニ「朝方桜から白野さんは聞いていると思いますけどどうやらこの学園内には私達以外にマスターがいます。それも1人ではなく複数いますね。」

白野「えっ? 1人だけじゃないの?」

桜「はい。私が調べた所3・4人いるんじゃないかと。」

凜「ランサーあんたサーヴァントの気配とか感じないかしら?」

エリザ「私も含めれば、そうね……………。3人のサーヴァントがいるわ、1人は私

達の存在に感ずいているみたいね。まっ、こんな時間帯から襲つては来ないでしょうけど。」

白野「学校にマスターがそんなに！俺達も含めれば6・7人いるのか。何？この学校呪われてるの？」

凜「そんなわけないでしょ。偶々よ、しつかし一体どんなマスターなのかしら？生徒か先生かもしくは……。」

エリザ「ストツプ凜、誰かここに来るわ。」

凜「えっ！」

ガチャ

士郎「んっ？あれ？白野？それにえーと遠坂さんだっけ？」

白野「士郎。後隣のクラスのこと。」

リン「こんにちは、岸波君。ごめんなさい、おじやまだったかしら？」

白野「えっ？嫌々そんなことないよ。あつ、そうだ士郎凜のことは知ってるからいいけど後こちらの2人は間桐桜とラニⅡⅧって言うんだ良かったら仲良くしてあげてくれ。」

桜「間桐桜っていいです。よろしくお願いします。衛宮さん。」

ラニ「ラニⅡⅧです。」

士郎「・・・・・・・・・・・・・・・・」

桜「?えつと何か?」

士郎「えつ、あつごめん自分の知り合いにすごく似てたから、いや似てるとゆうより本当そのまんまみたいだな、あつでも髪の毛の長さが違うかって何言つてんだ俺は。」

白野「士郎落ち着け、とりあえず深呼吸しろ、なつ。」

士郎「あ、ああ。すうーはあー、すうーはあー。わ、悪い白野取り乱りして、すまない間桐さん。」

桜「いえ、大丈夫ですか?」

士郎「ああ、大丈夫だよ。皆もごめんな食事中におじやまして。」

凜「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白野「凜?どうかしたのか?」

凜「いえ、なんでもないわ。それじゃ行きましょ白野君。衛宮君にえーと遠坂さんだっけ?それじゃ失礼するわ。」

リン「・・・・・・・・・・・・・・・・」

士郎「えつ?あ、ああ。」



白野「どうしたんだ凜？急に急いで。」

凜「白野、どうやら彼女マスターみたい、それに衛宮君だっけ？彼もマスターの1人だわ。衛宮君はサーヴァントを連れてないみたいだけど、彼女の方はサーヴァントがいたわ。エリザが教えてくれたの、エリザは衛宮君達が来る前に霊体化してたけど向こう側のサーヴァントは一瞬だけ姿を見せず消えたみたい。」

ラニ「それで？どんなサーヴァントだったんですか？」

凜「私達がよ〜〜知ってるサーヴァントよ。これも運命なのかしらね。」

白野「??」

凜「全く。まさか私の人払いの結界を破るなんてそれなりのマスターって所かしら

「！

士郎「どうしたんだ遠坂？ずっと黙り込んで。確かにさくらと間桐さんそっくりだつたけど、あつそつか、遠坂と同じクラスの遠坂さんも似ているな髪の色と目の色は違うけど。しつかしあれだな！まさか同じ名前に顔が似ている人が2人もこの学校にいるなんて驚きだな。」

リン「違うわ、確かにその事には驚いたけどそれだけじゃないの。」  
士郎「?それだけじゃない?」

リン「士郎よく聞きなさい。どうやらあの人達魔術師よ、それだけじゃないの、遠坂さんとラニⅡⅧさんだっけ?あの2人マスターよ後さくらにそっくりな娘、彼女令呪があるみたい、アーチャーが教えてくれたわ。」

士郎「!!」

リン「岸波君は令呪はなかったみたいだけどそれでも聖杯戦争になにかしら関わってると見て間違いないわ。」

士郎「……でもおかしいだろ!確か聖杯戦争は7人のマスターにそれに従うサーヴァントのはず、なのに!」

リン「そうね。すでに7人のマスターは揃っているはず、士郎、今晚教会に行くわよ。綺礼がこの事について知ってるはず。」

士郎「ああ。」

く放課後く

白野「それじゃバイトが終わり次第凜達の家に行くから。」

桜「わかりました。それではまた後で。」

ラニ「今日はシンジとありますが召喚するのですね？」

凜「ええ、白野君、できるだけ早く来てちょうだい、じゃないとまたありますがぐずりだすから。」

白野「ああ、わかった。」

P M 9時く

白野「こんばんはー。」

桜「いらつしやい先輩、どうぞ中に。」

白野「ああ、おじゃまします。？あれ？」

桜「どうしました？」

白野「いや、いつもならありますが抱きついて来るのに、来ないから。」

ラニ「全く、貴方はシスコンですね。ありすはいま凛と買い物に出掛けています。白

野さんのせいで。」

白野「シスコンって、てかつ、なんで俺のせいなの！」

桜「ありすちゃん先輩も迎えに来てくれないってずっと拗ねていましたから、何とか

凛さんが慰めてついさつき御菓子を買いに出掛けました。」

白野「わ、悪い。後で凛にお礼を言わないとな。」

ユリウス「来たか岸波。とりあえず中庭に行くか、シンジが待機しているからな。」

白野「そうだね、シンジはどんなサーヴァントを召喚するんだろ？」

ユリウス「ライダーだ、勿論俺達が良く知るな。」

白野「成る程な。」

シンジ「ん？なんだよ岸波お前もいるのか？」

白野「よっシンジ。」

シンジ「!!こら頭を撫でるな!おい!やめろ!」

白野「ああすまん、ついありますと同じ年齢だからうっかり。」

シンジ「っ!くそっ!いまに見ている絶対見返してやるからな!」

白野「ハイハイ。」

プルルルルル、プルルルルル。

白野「ん?スマホか?凜か、もしもし?」

凜「あつ白野君ごめんなさいありませんがなくなつたの!」

白野「えっ!ありませんが?」

ラニ・シンジ・ユリウス・桜

「!?!」

凜「私が会計をしている間に……。今スーパー付近を探してるけど何処にもなくてGPSで調べても反応がないの!」

白野「スマホの電源が入っていないのか?もしくは電池切れ!」

凜「本当にごめんなさい、私のせいで……。あの子きつと一人で寂しがってるに  
違うないわ、早く見つけないと!」

白野「凜!……。とにかく落ち着け、とりあえずスーパー付近を探してくれ、  
俺達も直ぐにスーパーに行くから。」

凜「!!そ、そうね、冷静にならないと。わかったわ探してみる、白野君達も直ぐに来て!」

白野「皆、スーパーに行くぞ!」

桜「そうですね、行きましょう!」

ユリウス「待て!桜、お前はシンジとここにいろ。」

桜「えっ?でも……。」

ユリウス「俺達3人で行く、もしありすが1人で帰ってきたら直ぐに連絡しろ。それにもう夜だマスターかサーヴァントが襲ってくる可能性がある。わかったな。」

桜「は、はい!先輩ありすちゃんのことよろしくお願いします!」

白野「ああ!」

凜「白野君!」

白野「すまない遅くなって、ありすはいたか?」

凜「駄目、何処にもいないわ。」

ユリウス「ありすとはぐれてどれぐらい経つ。」

凜「多分2・30分ぐらいだと思うわ。」

白野「スマホの反応は・・・。」

凜「駄目ね、全く反応しない。ありすにはリターンクリスタルを持たせているからそれを使ってくればいいのだけど。」

ラニ「とにかくありすを探しましょう、二手に別れたほうがいいですね、凜、貴方は白野さんと、ユリウス私と一緒にありすを・・・。」

ユリウス「そうだな、岸波、ありすを見つけ次第直ぐに連絡しろ。俺達も見つけ次第直ぐに連絡する。」

白野「わかった！凜行こう！」

凜「ええ！お願いありす無事でいてよ。」



くとある場所

ありす「……。凧お姉ちゃんどこなの？」

ありすは一人で迷子になっていた。ありすはまだ目覚めて日が浅いそのため色々なことが新鮮に見えてしまうのだその癖好奇心旺盛でもあり少しいたずらっ子でもある。凧と面白い物に出掛けて凧が会計時にありすは凧を驚かせようとスーパー付近で隠れていた。しかしいつまで待っても凧は来なくどうせならとありすは一人で家に帰ろうと思ってしまった。それが裏目にでてしまう。それから数十分ありすは本来家に着いているはずだがどうやらありすは来た道の反対側を歩いてしまい迷子になってしまったのである。

ありす「うーん、此処はどこなのかしら？」

気がつけばありすは人気のない場合にいた。  
見たことのない場所に1人徐々に心細くなる。  
ありす「お兄ちゃん……。」

パキッ!

ありす「!？」

??「こんばんわ、かわいいマスターさん。」

ありす「誰？」

??「そうね、お互いに名前は必要かしら。貴方のお名前は何かしら?教えてくださいさるかしら?」

ありす「私?私の名前はありす。貴方のお名前は?」

??「ありす、かわいい名前ね。私はイリヤ、イリヤスファイル・フォン・アインツベルン、イリヤって呼んでねありす。」







バーサーカーはその場からジャバウオックの頭突きで吹き飛ばされてしまう。

イリヤ「なっ！バーサーカー？ありす、貴方サーヴァントを、しかも私と同じバーサーカーを召喚したの？」

??「違うわイリヤ。ジャバウオックは私達のお友達、サーヴァントじゃないのよ。」

イリヤ「!?!、誰？何処にいるの？」

??「何を言っているのかしら。私は貴方のすぐ側にいるわ。」

イリヤ「えっ？うそ？いったい？いつの間に？」

??「こんばんわイリヤ。私の名前はアリス。ありすのサーヴァントよ。ついでだから教えてあげる、クラスはキャスターなの、よろしくね。」

イリヤ「えっ？キャスター？だけど貴方達そっくりね？どうゆう事なの？」

アリス「似ていて当然。だって私はありませんが望んだ大切なお友達、そしてありすは私にとって大事な大事なお友達。だから・・・。」

イリヤ「だから・・・。何？」

アリス「あわれで可愛いトミーサム、いろいろここまでご苦労さま、でも、ぼうげんはおしまいよ。」

、 だつてもうじき夢の中。夜のとばりは落ちきった。アナタの首も、ポトンと落ちる



バーサーカー！早く始末しなさい！」

そう、あれからジャバウオックとバーサーカーは何十合と打ち合っているそのためイリヤは少し焦り始める。

イリヤ「(大丈夫、バーサーカーはまだ一度も殺されていない。だけど…。!?) バーサーカー下がりにさい！」

イリヤの言葉にバーサーカーはイリヤの後ろに下がる。

アリス「あら？もういいのかしら？まだどちらかの首が飛んでないけど？」

イリヤ「ええそうね。今回は下がらせてもらうわ。でもアリス、次に会うときは今度  
は本気で相手にしてあげる。貴方は私が殺してあげる。それじゃあさよなら。……。  
そうだ、アリス、いやキャスター。ありすに伝えて「また会いましょう」って。」

アリス「ええ。伝えておくわ。」

アリスが話終わるとイリヤは消えてしまう。イリヤがいなくなるとアリスは安心して、  
気を失ってるありすに走りよる。

アリス「(助かったわね、もしこれ以上戦っていたらありすの魔力が尽きていたわ。)」

白野「ありすー！どこだー！」

アリス「(?!この声は、お兄ちゃん！)」



く数分前く

白野「何処にいるんだあります。おーいありますー！」

凜「ありますー！返事してー！」

エリザ「!?凜！近くにサーヴァントの気配を感じる！それに……!?大変！あります！サーヴァントの近くにいるわ！」

白野「!?な、ランサー！何処に、何処にありますがいるんだ！」

エリザ「ちよつと落ち着いて白野、付いてきなさい。」

白野「ああつ！凜。」

凜「ええ！エリザ早く案内しなさい。」

エリザ「こつちよ！」

そしてく

白野「ありますー！どこだー！」

アリス「お兄ちゃん、こつちよ。」

白野「えっ？あります？じゃないなもしかして……。」

アリス「こんばんわ。お兄ちゃん、私はキヤスターありすのサーヴァントよ。ありすは無事よ。気を失つてるだけ。」

白野「ありす！よ、良かった無事で……。ありがとなキヤスター、いや、アリス。」  
アリス「……………」

凜「白野！ありすは無事……。つて、もしかして貴方キヤスター？」

アリス「久しぶりね凜、？貴方凜よね？」

凜「キヤスター、貴方が知ってる私はアバターだった時の私よ。本来の私の姿はこうなの。」

アリス「ふくん、まあいいわ。お兄ちゃん、私疲れちゃったからお休みするね。あつ、ありす足首を怪我しちやっただみだから手当てしてあげて、それじゃお休みなさい。」

白野「えっ？ちよつ、アリス？もう少し話たかつたんだけど。…………ま、いつか。あつそうだ凜、ユリウス達に連絡しないと。」

凜「あなたがアリスと話してる間に連絡したわ。ユリウス達は先に帰るつて、私達がいるから大丈夫だろつて。」

白野「そつか、それじゃ俺達も帰るか。」

凜「そうね、全くありすつたら、サーヴァントが召喚されたから良かったけど。帰つたら説教ね。」

白野「ありすが無事だったんだ、だから凜、穩便にね。」

凜「ハイハイ。あんたありすが甘すぎるわね、シスコンも大概にしないとありすが嫌われるわよ？」

白野「ぐっ！それは嫌だな。だけど甘いのは凜達も同じだろ？」

凜「……………。そうね。それじゃあ帰りますか。」

エリザ「う〜ん疲れた、早く帰ってお風呂に入りたいわ。」

白野はありすをおんぶし凜達の家に帰宅する。

そして〜

ガチャ

白野「ただいま。ん？なんか騒がしな？」

??「アサシン、あんたいい飲みっぷりだね！」

李「お主こそ、ん？どうしたバーサーカー？お主も飲まんか。」

呂布「■■■■■■■■■■——！」

??「あっはっはっはっはっは！さすがバーサーカー、一瓶一瞬じゃないかい。」

李「さすがだ！ライダーよ、儂らも負けておれんもう！」

ライダー「おうさ！今晚は3人で呑み明そうじゃないか！」

李「カツカツカツカツカツカツカツ！」

呂布「■■■■■■■■■■——！」

ライダー「あっはっはっはっはっはっはっはっはっ！」

白野「何？このカオス状態？」

〈第4話〉

完

## 第5話

凜「ちよつと、白野絶対離さないですよ！」

白野「ハイハイ。」

ラニ「意外と簡単ですね。」

桜「せ、先輩もう少しゆつくりお願いします。」

ありす「わく、ツルツル。」

アリス「ありす服が濡れるわよ。ほら立ちなさい。」

ありす「くくくく♪」

シンジ「なんで、なんでライダーまで一緒に滑ってるんだ！」

ライダー「いいじゃないかシンジ、あんた滑れないだろ？お姉さんが優しく教えてやるよ。」

シンジ「あ、頭を撫でるな！」

エリザ「やるわね凜、滑れないことをいいことに白野と手を繋ぐなんて……。」

白野「どうしてこうなった？」

「前日の夜」

白野「桜のサーヴァントですか？」

凛「そう、桜は元々上級A I、月の聖杯戦争では健康管理がメインだったでしょ。どんなサーヴァントを呼ぶべきかわからないのよ。」

ユリウス「残りのクラスはセイバーとアーチャーか。英雄に関する遺物品が桜には無いらな。もし桜が希望するサーヴァントがいれば俺が遺物品を探しただが……」

凛「桜は希望するサーヴァントはいないでしょ、もしいるとしたら白野、あんたを守ってくれるサーヴァントでしょうね。」

ラニ「いつそのこと遺物品なしの召喚ではどうでしょうか？」

凛「……。それもありません。もしかしたら私達が知ってるサーヴァントが召喚されるかもしれないし、試してみる価値はあるかも。」

白野「……。」

凛「どうしたの？」

白野「いや、もし桜が召喚してBBが出てきたらどうなるんだらなって。」

凛「恐いこと言わないで！まずあり得ないでしょうけど、もしそうなるとBBはあん

たを守るためなら冬木がどうなるうがお構いなしよ！」

白野「えっ？」

ラニ「下手をすれば冬木が無くなる可能性がありますね。」

白野「えっ？」

ユリウス「岸波、冗談でもそう言うことは言わない方がいいだろう。」

白野「す、すいません。」

凜「全く！白野、あんた今から桜に聞いてきなさい！召喚するに辺り遺物品が必要か  
要らないのか！私達が聞いても桜は「わかりません。」の一言だけあんたなら素直に答  
えるでしょ！」

白野「えっ？何故？」

凜「いいからさっさといく！」

白野「は、はい！」

コンコン、

桜「はい。」

白野「桜、俺だけ。」



桜「せ、先輩？ちよつと待つてください。」  
ガチャ、

桜「どうしたんですか？あ、どうぞ中に。」

白野「ああ、失礼します。」

桜「えーと、あ、いまお茶を用意しますから座ってください。」

白野「はい、・・・・・・・・・・。」

桜「どうぞ、先輩はコーヒーが好きですよね。」

白野「へえ、よく知ってるね、教えてたっけ？」

桜「いえ、私は元々健康管理者です、先輩は勿論皆さんの健康状態を観ています。その為皆さんの好き嫌いとかを調べてしまうんです。癖みたいなものです。」

白野「そっか、ありがとう桜、桜が居れば皆の健康は大丈夫だな。」

桜「先輩、あ、ありがとうございます。凄く嬉しいです。」

白野「あはは、そ、そう。」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

白野「(な、なんだ、この気まずい雰囲気は、な、なんか話さないと。)さ、桜、実は、えっと、その。」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・。サーヴァントのことですよね。」

白野「へ、あ、うん、そうなんだ、実は凛に頼まれて桜はどんなサーヴァントを召喚したいのか聞いてこいつて、必要ならユリウスが遺物品を探しだしてくるって。」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・。わからないんです、どうすればいいのか。聖杯戦争に参加する意志があります。皆さんを無事2030年に送り返さないといけないですから。ですが、私は元はAIです。過去月の聖杯戦争時には沢山のサーヴァントを見てきました。が・・・・・・・・。。。」

白野「……」。

桜「先輩、私どのようなサーヴァントを召喚するべきでしょうか？」

白野「それは俺にも判らないな、最終的には桜自身が決めることだから。」

桜「そうですね。……」。

白野「や、やばい、桜が落ち込んでしまった。俺何か変なこと言ったか？ど、どうすれば……!!そ、そうだ！」桜！

桜「は、はい、なんででしょうか先輩？」

白野「気分展開に出掛けよう！明日は休みだし、いつまでもこのままじゃダメだ！部屋の中で考えるより外に出たほうがなにか見つかるかもしれない。な？」

桜「先輩とお出掛けですか？」

白野「あ、ああ、もし嫌なら凜達も誘って……」。

桜「嫌じゃないです！凄く嬉しいです。」

白野「えっ？そ、そう。」

桜「はい。ですか先輩明日は何処に出掛けましょうか？私この時代に来てまだ冬木市のことはよくわかりませんから。」

白野「それは大丈夫、俺に任せて。桜がいきたい場所があれば案内できるさ。」

桜「本当ですか？それなら私……！公園とかピクニックが出来るところがいいです。」

白野「ピクニック？」

桜「明日私先輩のためにお弁当を作ります。ですから……」

白野「ああ！わかった。それじゃあ明日は一緒にピクニックに行こう、そうと決まれば早速色々調べて絶好のピクニック場所を探さないとな。」

桜「はい！」

凜（白野の奴桜とピクニックですって!?!私は桜にただサーヴァントの事を聞けと言っただけなのに、どうしてそうなるのよ!）

ラニ（イライラしますね、なんですか？あの甘い雰囲気は。）

エリザ（くうく！桜恨ましい私も白野と出掛けたい！）

ラニ（二人ですからやっぱりこれはデートでしょうか？）

凜（なっ！私もまだデートなんてしたことないのに！）

エリザ（あっ？やば、凜、白野が出てくるわ。）

凜（えっ？待避、待避よ、早く！）

白野「それじゃあ桜、明日迎えに行くよ。」

桜「はい。明日楽しみにしてますね。」

白野「うん、それじゃ。」

桜「はい。」

「次の日」

桜「凄くいい所ですね先輩！」

白野「昨日パソコンで調べたんだ。でも隣町にこんな場所が在ったなんて知らなかったよ。」

桜「そうなんですか？」

白野「どうせならと思って有名所を探してみたんだ。折角桜と一緒にいくんだから。」

桜「先輩、ありがとうございます。嬉しいです。」

白野「……………。そ、それじゃあ少しその辺を歩こうか？」

桜「そうですね？」

凜（何話してるのかしら？）

ラニ（さあ？ですが、桜が羨ましいですね、私も白野さんと二人で出掛けたいです。）  
凜（ラニって結構思ったこと口にするわね、少し羨ましいわ。）

エリ（桜ったら白野とイチャイチャと・・・・・・・・。）

その後白野と桜は歩きながら会話をする。白野の幼い頃の思い出や優しかった両親の話、友人や学校の話、桜は白野の話を楽しそうに聞く・・・・・・・・。

白野「何か俺ばつか話てるな・・・・・・・・。ごめん桜つままないだろ？」

桜「いえ、先輩の色々な話が聞けて嬉しいですよ。それに私はこうして一緒に先輩とお出掛け出来て幸せですから。」

白野「えっ？そ、そう。」

ドン！

白野「ん？何か背中にぶつかつたな？」

桜「……………あつ。」

ありす「お兄ちゃん！見つけた！」

白野「あ、ありす！どうして此処に？……………ん？てつゆうかユリウス？シンジ？」

ユリウス「すまない岸波、本当は邪魔したくなかつたんだが……………。ありすがお前達を見つけてしまつて。」

ありす「お兄ちゃんスケートしたい！一緒に行こ！桜も！」

白野「えっ？えっ？」

ユリウス「すまない岸波、ありすがどうやら昨日テレビで観たらしく行きたいと言ひ出してな、お前と一緒に行きたいらしく……………。すまない。」

ライダー「しっかしあれだね、ありすは白野を探しだすのが名人だね。急に走り出したと思つたらあんたがいるんだからさ、ありすは白野を見つけるライダーでも付いていゝるのかねえ。」

白野「えっ？えっ？」

アリス「さ、お兄ちゃん行こ！桜もボーつとしてないで行くわよ。それ……………そこで隠れてる3人、貴方達も行きましょ。」

白野「えっ？えっ？」



凜「なっ！アリスいつ気づいたの！てっ、あっ、は、白野、いや、これは、その、あ、あはは。」

ラニ「……………。こんにちは白野さん。」

エリザ「ラニ、あんたなんでそんな冷静なの？」

白野「えっ？えっ？」

ユリウス「……………。すまない。」

白野「まあ、いいんだけど。」

凜「ちよっ！白野もう少しゆっくり滑って！転ける！」

桜「あっ！だんだんコツが掴めてきました！」

あります「びしよびしよになっちゃった。」

アリス「……………。桜く！ありますかびしよびしよ。」

桜「えっ？あ、ありますちゃん！先輩！」

白野「な！あります！」

凜「ちよっ！白野スピード、スピード落として！あぶ、危ない！だあー？」

エリザ「へ？凜？ちよっ、ぶつかる！ギャー！」

白野「あります？こんなに濡れて、着替えとかあるのかなあ？」

あります「~~~~~♪」

ライダー「着替えならユリウスが用意してるさね、こうなることは予め予想してたからね。」

白野「そうなの？桜お願いできる？」

桜「わかりました。ありますちゃん着替えましょうね。」

あります「……………。うん！」

白野「全く、風邪でも引いたらどうするんだ、早く着替えておいで。」

あります「はい！」

白野「……………。はあ、そういえば何か忘れてるような？」

凜「は……の君、確かに貴方は忘れてるわよね？」

白野「……………り、凜さん？いや凜様？別に忘れてた訳じゃないんです。ただ。」

凜「ただ？」

白野「ですから、えっと、その、何て言えばいいのか、いや、あの……………す、凜「す？」

白野「すいませんでした！ぶつちやけ忘れてました！ありすが心配で心配で回りが見えてませんでした！」

凜「……………。(ニコツ。)」

白野「えっ？」

凜「ふつつつ飛べ！」

白野「ゴハアツ！」

夕暮れ

桜「大丈夫ですか先輩？」

白野「あはは、大丈夫大丈夫！ありすは軽いから。ありす「くうく、くうく。」

桜「それもありますけど、怪我とかしてませんか？」

白野「えっ？……ああ、凜に殴られたときのこと？大丈夫だよ。あの時は俺が悪いわけだし、あはは。」

凜「……………」

ラニ「……………」

ユリウス「……………」

シンジ「……………」

白野「？凜？どうかしたのか？」

凜「……………そうね、白野君、先に桜とありすを連れて帰りなさい。どうやらサーヴァントにつけられてるみたい。」

白野「!?!」

ユリウス「マスターも近くにいるな。人払いの結界が貼ってある。」

瞬時凜達のサーヴァントが戦闘体制にはいる、しばらくして。

??「初めまして皆様、私はマルタと申します。クラスはルーラーです。隣にいるのは我マスター可憐様です。サーヴァントの皆様武器を納めてください。私達はあなた方と戦う意志はありません。」

白野「ルーラー?聞いたことないクラスだ。」

ユリウス「ルーラーだと!何故ルーラーがいる!」

サーヴァント達

「……………。」

マルタ「失礼ですが貴方のお名前を教えてくださいませんか?」

白野「へっ?俺?」

マルタ「はい。」

白野「えくと、岸波白野だけど。」

マルタ「岸波白野様……………。わかりません、何故貴方がいるのか、貴方以外の皆様

はマスターです。一人はまだサーヴァントを召喚していません。貴方はマスター処か令呪がありません。」

白野「令呪が無いと言われても、聖杯戦争の参加資格はあるから、その内出てくるはずだけど？」

マルタ「その内ですか？すでに聖杯戦争は始まっています。なのにまだ令呪が！サーヴァントすら！それに貴方達は仲間意識が強くお互いに信頼し合っている！白野様を中心に！まるで貴方は第5次聖杯戦争において重要な、必要な人物みたいな……」

白野「何者って言われても、平凡な人間だと思っただけ。」

凜「平凡って、あんたが平凡なわけないでしょ。」

ラン「フラグ一級建築士ですね。」

白野「えっ？」

ラン「なんでもありません。」

マルタ「……………」

可憐「マルタ、話がズレてますよ。」

マルタ「えっ？……、あ、失礼、（変ね？初めて白野様にお会いしたのにどうしてむきになったのかしら？）」

可憐「初めまして、私は言峰可憐といいます。よろしくお願いします。」

白野「言峰可憐さん。」

可憐「はい。実は貴方達に訪ねたいことがあります。こうして現れたのです。」

白野「訪ねたいこと？」

可憐「本来冬木で行われる聖杯戦争は7人のマスターによるもの、ですがそこに貴方達が現れた、イレギュラーみたいな存在です。聖杯戦争に参加できた理由が知りたい、そして聖杯を手に入れたらなにを望むのかを。」

凛「いいでしょ、教えてあげる。」

白野「!?、いいのか凛。」

凛「かまわないわ。話した所でどうこうなる訳じゃないしね。」

可憐「ありがとうございます。」

マルタ「聖杯による2030年からのタイムトラベルに月の聖杯戦争……」  
さらに白野様は転生者。」

白野「えっ？何かこの人信じちゃってるような？」

マルタ「聖杯戦争で勝利した白野様の願いが叶い地上に戻った皆様、その後転生した白野様に会いたくて皆様はこの時代に来た、更に二元の時代に戻るために聖杯が必要だと、ムーンセル・オートマトンはなんでもアリなのね。」

ユリウス「一人でぶつぶつと何をいってるんだ？」

マルタ「どうやらこの方達は冬木をどうこうするとかではなくましてや世界を手に入れたい訳じゃない、しかしわざわざ2030年から白野様に会いたくて来たのに何故元の時代に戻りたいのかしら？……」



凜「えくと？可憐さん？」

可憐「はい。」

凜「あのサーヴァント、大丈夫なの？一人ぶつぶつ言ってるんだけど。」

可憐「大丈夫ですよ。マルタは考え込むとあなるんです。取り敢えず話は聞かせてもらいました、私達はこれで失礼します。それでは。」

可憐が話終えると二人はいなくなる。

凜「えっ？ちよつと！勝手に現れて勝手に消えるなんて何なのあいつら！」

白野「まあまあ、皆何事も無かったんだし。」

ラニ「そうですね、それに私はお腹が空きました、早く帰り食事にしましょう。」

桜「そうですね、私の作ったお弁当があるので皆さんで食べませんか？」

白野「色々あったから結局桜の弁当食べて無かったんだっけ。ごめん桜。」

桜「いいんですよ先輩、私沢山作りましたし、皆さんで食べましょう。」

白野「そうだな、それに聖杯戦争中でも次もあるから、また一緒に出かける時弁当作ってくれな桜。」

桜「はい！」

凜・ラニ・エリ

「……………」

シンジ「(!?、あの3人から殺気を感じる!」  
ありす「くうく、くうく。」

く第5話く  
完

## 第6話

白野「さてと。」

白野は自宅に帰りパソコンを起動する。画面には桜のマークがありクリックをする。そして……………。

メルト「久しぶりね白野、貴方のメルトリリスよ。」

リップ「お、お久しぶりです先輩、パ、パッションリップです。」

白野「……………えっ？」

メルト「あら？折角会えたのにその顔は何かしら？まあいいわ、こうして再会できたんですもの、許してあげる。」

白野「あ、どうも。じゃなくて何で二人が？」

メルト「さあ？BBが生きてるから私達も生きてるんじゃないかしら？」

白野「え〜？……………まあいいか、（深く考えても意味無いし。）うん。久しぶりだね二人とも、所でBBは？」

メルト「BB？知らないわね。別にどうでもいいんじゃない？それよりこうして再会できたんだし色々と話しましょう。」

リップ「メ、メルトばツかりずるい、先輩私とお話ししましょう。」

白野「話つて言われても何から話せばいいのか、うくん？」

メルト「無理に話す必要はないわよ。私は貴方を見られるだけで幸せだから。」

白野「えっ？」

リップ「あ、だったら私とお話ししましょう先輩、私いま色々勉強してるんです。」

白野「勉強？」

リップ「はい！私、せ、先輩の為に料理とかお洗濯とか……。」

BB「何をしてるの？メルト、リップ、……!?せ、先輩!?どうゆうことですか！メルト！貴方、先輩がアクセスしてるのなぜ言わないの！」

メルト「？なぜBBに言わないといけないのかしら？あんたさっきまで白野の写真集作りしてたじゃない。だから私達が代わりに白野と話しているのよ。わかったらあんたは白野の写真集でも作ってなさい。」

BB「くっ！先輩の写真集作りに夢中になりすぎたわ！いいから貴方達は向こうに行きなさい！」

メルト「しようがないわね、まあ白野の顔も見れたし今回はよしとしますか。それじゃあね白野、また私に会いたくなったら連絡してちょうだい。」

リップ「折角先輩とお話ししてたのに、お母様ばかりずるいです。先輩、今度は二人つ

きりでお話ししてください。」

白野「えっ？あ、うん。メルト、リップ、また連絡するよ。おやすみ。」

メルト「ええ、それじゃあね私の白野。」

リップ「お、おやすみなさいです。先輩。」

B B 「全くあの子達は、ほんと鬱陶しいです。私と先輩の邪魔をして……。先輩も先輩です！あんなのより私とお話ししてください！」

白野「でもメルトはなんかB Bは俺の写真集がどうか……。」

B B 「所で先輩、今日はどうしました？あつ！私に会いたくてアクセスしたのですね、もう、先輩ったら私は何時でも会いにきてくれてもOKです。」

白野「俺の写真集って何なの？」

B B 「あつ、先輩は私の写真集は要りますか？良ければ給料の3ヶ月分ですってまるで

プロポーズみたいです！キヤツ！」

白野「……………。それじゃあおやすみBB。」

BB「ちよつ？ストップ、ストップです！可愛い後輩のちよつとしたお茶目じゃないですか。」

白野「で？写真集って何？」

BB「……………。先輩、乙女の秘密は余り知らない方がいいですよ。それで？今日はどのようなご用件でしょうか？」

白野「はあく、まあいいか。写真集の件はまた次で聞くとして。」

BB「チツ。」

白野「いま舌打ちしなかった？」

BB「はい？気のせいじゃないですか？」

白野「そう？まあいいけど。あつ、そうそうBB、ルーラーってサーヴァント知ってるかな？実は今日夕暮れ時に会ってさ、ユリウスは知ってるみたいだったけど、俺はよく分からなくて。」

BB「……………。ルーラーですか。まさかルーラーが出てくるとは、今回の聖杯戦争はかなり危険かも知れませぬ。」

白野「はい？ルーラーってそんな危険なサーヴァントなの？」

B B 「そうですね、あつ、別にルーラー自体は危険じゃないですよ。ただ、聖杯戦争にルーラーが現れたのなら冬木市に何かしら起こるかも知れませんか。」

白野 「えっ？ちよつと、マジ？」

B B 「私知ってるのは過去に1度聖杯戦争に現れたとか。まあ結末は知りませんがその時のルーラーはたしかジャンヌ・ダルクさんだったとか？今回の聖杯戦争もひよつとしてジャンヌさんですか？」

白野 「ジャンヌ・ダルク？いや、確か本人はマルタつて名乗つてたはずだけど？」

B B 「マルタさんですか。聖女マルタですね。」

白野 「知ってるの？」

B B 「月の聖杯戦争に参加してた記録があります。確かその時はライダーのクラスだったはず？ルーラーとしての素質もあるのでしょうか。なにせよ先輩、ルーラーマルタさんには気を付けた方が宜しいかと。」

白野 「敵対する気はないってルーラーは言っていたけど。」

B B 「本来ルーラーは中立の立場的存在です。ですがもし敵対してしまうとかなり厄介ですよ。なにせルーラーのクラスは真名看破に各サーヴァント達に絶対命令を下せる特殊な令呪がありますから。味方に付けば頼もしいですが敵になると危険です。ですから先輩、ルーラーには出来るだけ関わらない方がいいですね。」

白野「……わかった、しっかしあれだな、BBは色々物知りだね。」

BB「当然です。なにせ私は1度はセラフを支配しムーンセル・オートマトンを手に入れました。英雄の情報やサーヴァントのクラスはほぼ調べ尽くしていますから。」

白野「へえ、まっいつか、それじゃあ色々ありがとなBB明日も早いしもう寝るね。」

BB「私としてはもつと先輩とお話したいのですが、仕方ありませんね、先輩の健康も大事ですし、先輩の為に私の写真集も作らないといけません。後は先輩の為に料理・洗濯その他もろもろ勉強もしないと……。キャツ！まるで新婚さんみたいです。」

白野「おやすみBB。」

BB「えっ？ちよっ！せんば……。」

白野「（ルーラーか、もし桜がルーラーのサーヴァンを召喚したら……。でも桜自身で決めてほしいし。）ユリウスまだ起きてるかな？」

白野はスマホを取りユリウスに連絡をする。しばらくして。

ユリウス「岸波か？どうした？」

白野「実は……。」



ユリウス「ルーラーの召喚か、桜、もしくは岸波が召喚できれば俺達はかなり有利になるだろうな。だがルーラーの召喚はほぼ不可能に近い。」

白野「そうなの？」

ユリウス「本来ルーラーとは聖杯戦争では召喚されない。今回の聖杯戦争は俺達イレギュラーが参加した。もしかしたら特殊な形式で結果が未知数な為ルーラーが聖杯によつて召喚されたのかもしれない。貴様のことだルーラーについてBBに聞いたのだから。」

白野「だけどルーラーにはマスターがいたけど？」

ユリウス「ルーラー自身マスターが必要だと判断したのだろう。だが、試してみる価値はあるかもしれない。冬木の第5次聖杯戦争は俺達のせいかどうかどうかわからんが全てが未知数だ明日桜に話してみるといい、召喚に必要な遺物品は俺が何とかしよう。召喚さ

れる確率はほぼ0に近いがな。」

白野「わかった、ありがとなユリウス。」

ユリウス「気にするな、じゃあな。」

〽次の日の夜〽

白野「本当にいいのか桜？」

桜「はい。私自身どんなサーヴァントを召喚するべきかわかりませんが、だったら先輩がルーラーを召喚するより私が召喚した方がいいと思います。」

凛「しっかし白野、ルーラーの召喚なんてよく思い付いたわね。だけどユリウスが言

うにはほぼ不可能なんですよ?。」

白野「確かにね、だけどやってみる価値はあると思う。なんにもせず後悔するよりやって後悔したほうがいいだろ?」

凜「何かちがうと思うけど、まあいいですよ!ルーラーが召喚されたらかなり心強いしね!たとえルーラーじゃなくても桜が召喚するんだから真つ当な英雄のはずだし。」

ラニ「そうですね。ですがユリウスはどのような遺物品を用意するのでしょうか?」

白野「ユリウスが何とかするって言ってたからな、だけど遅いなユリウス。」

ラニ「朝早く出掛けていきましたからもうすぐ帰って来るかと。」

ユリウス「遅くなってすまない。」

凜「あら?お帰りユリウス、遺物品は手に入れたかしら?」

ユリウス「当然だ、で?岸波、桜、どちらが召喚する?」

桜「は、はい、私が召喚します。」

ユリウス「そうか、ではこれを持っている。ルーラー召喚時に必要な遺物品のはずだ。」

白野「んっ？何だろ、布切れ？かな？ユリウスこれは。」

ユリウス「戦場時にいつも彼女が掲げてた旗の一部だ。」

ラニ「彼女？旗？ひよっとしてジャンヌ・ダルクですか？」

ユリウス「そうだ、オルレアンの乙女とも言われているな。」

凜「ジャンヌ・ダルク！フランスの大英雄じゃない！驚いた！神格化されたとまで言われた英雄の召喚なんて！」

ラニ「確かに英雄ジャンヌ・ダルクだとルーラーとしての確率は高いでしょうね。」

白野「ジャンヌさんが召喚にに応じてくれたらいいけど、それに・・・。」

凜「それに？」

白野「たとえルーラークラスじゃなくてもジャンヌ・ダルクさんならかなり強いクラスのはず。」

桜「そうですね。よし！私召喚します。お願いしますジャンヌさん召喚に応じて下さい。」

白野「よし！いけ桜！俺は応援するぞ！」

桜「はい！」

凜「別に応援は必要ないんじゃないかしら？」

白野「いいの！こうゆうときは勢いが大事だからな！いけ桜！」

桜「はい！……。素に銀と鉄。く。」

桜 「く天秤の守り手よーーーーー!!」

全員

「……………」

白野 「あれ？何も起きない？」

凜 「おかしいわね？まさか私の時と同じように別の場所に召喚されたのかしら？」

桜「えっ？」

ラニ「いや、待ってください！魔方阵から光が！」

瞬時光に包まれ皆が目を閉じる、そして光が収まり目を開けるとそこには1人の女性  
が。

??「サーヴァント、アヴェエンジャー。召喚に応じ参上しました。．．．．．どうし  
ました、その顔は？さ、契約書です」

桜「ア、アヴェエンジャー？さんですか？」

アヴェエンジャー「ええ、そうです、必要なら名も答えましょうか？」

白野「まさか、ジャンヌ・ダルク？」

アヴェエンジャー「あら？その貴方、正解よ。私はジャンヌ・ダルク。そしてクラス  
はアベンジャーです。よろしくお願ひするわね。素敵なマスターさん。」

白野「へっ？俺？いや、違う違う君のマスターは彼女、桜がマスターだよ。」

ジャンヌ「桜？貴方が私のマスター？」

桜「は、はい、私が貴方のマスターです。よろしくお願ひします。アヴェエンジャーさ  
ん。」

ジャンヌ「確かに貴方の魔力が私の中に流れてきてるわね、まあいいでしょう。では  
契約書を。」

桜「えっ？は、はい。」

ジャンヌ「それではさっそく始めましょうか？ねえ？そこにいるサーヴァント達？」

桜「えっ？」

エリザ「……………」

ライダー「アヴェンジャーねえ、まさかあのジャンヌが復讐者だなんて驚きだね。」

李「相手にとって不足なし、だが……。そう言うわけにもいかん、さて、どうする？マスターよ？」

呂布「■■■■■■■■■■——！」

ジャンヌ「??」

桜「ストップ！ストップです！アヴェンジャーさん。ここにいるサーヴァントは敵ではありません。」

ジャンヌ「は？どうゆうことなのかしら？」

桜「は、はい。実はですね……………」



ジャンヌ「仲間同士ねえ？ 気持ち悪い、吐き気がするわ！ そんな下らない理由で私が召喚され……ひょっとしてルーラーのジャンヌを召喚しようとしたのかしら？」

白野「ああ、そうだけど。」

ジャンヌ「あはははははははははは！ 人間ごときがルーラーの召喚なんて不可能！ 無理！ あり得ない！ 貴方達はおバカさんですか？ ああ、バカだからルーラーの召喚なんて思い付くのですね？」

凜「あんた、さつきから聞いていれば好き勝手言つて！」

白野「ストツプ凜、アヴェンジャー、いやジャンヌ・ダルク。」

ジャンヌ「あはははははははははははははははは！ ・・・。なんでしようか？」

白野「バカなのは俺一人だけだよ。ルーラーの召喚は俺が思い付いたことだからな。だからバカにするなら俺一人だけにしろ。」

ジャンヌ「貴方？名前は何？」

白野「岸波白野だ。」

ジャンヌ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ジャンヌ「・・・・・・・・・・。いいでしょう。さっきの発言は取り消します。マスター、貴方のサーヴァントとして此度の聖杯戦争、勝利に貢献しましょう。」

桜「あ、はい！よろしくお願いします。アヴェンジャーさん。」

ジャンヌ「(岸波白野、まっすぐな瞳、仲間意識が強くそれに綺麗な魂の持ち主、まるであの男みたいね。何故だかイライラするけど貴方が少し気に入りました)」

桜「？どうしましたアヴェンジャーさん？」

ジャンヌ「マスター、いえ、どうもしませんよ。気にしないで下さい。」

桜「??」

凜「ふう、まあいいわ。取りあえずは桜の召喚もOKね。後は白野、あんただけね、召喚の前に令呪が先だけど。」

エリザ「ちよつと待って凜！」

凜「なに？ランサー殺気だつて、どうしたのよ？」

エリザ「アイツ、アヴェンジャーだったかしら？私達サーヴァントに喧嘩売つとい

何シラフになつてんのよ！てっゆーかアヴェンジャーって何？強いのか？」

ジャンヌ「貴方は？エリザベート・バートリー、貴方まで召喚されてたのね、ま、どうでもいいですけど。」

エリザ「!?あんた何故私の真名を知ってるの？」

ジャンヌ「ん？・・・！そう、貴方には記録もしくは記憶が無いのかしら？」

エリザ「はあ？何いつてんのよ！」

ジャンヌ「それと、先ほどの発言ちやんと聞いてましたよ、エリザベート・バートリー。アヴェンジャーって何？強いのか？だったら試してみますか？」

エリザ「面白いわ、アヴェンジャーさん、貴方がどれだけ弱いか、確かめてあげる。」

凜「待ちなさいランサー！アヴェンジャーと闘うことは認めないわ！」

桜「アヴェンジャーさん、落ち着いてください！」

エリザ「凜、・・・。仕方ないわね。マスター命令だし引いてあげましょう。」

ジャンヌ「まあいいでしょう。貴方では役不足ですしね。」

エリザ「何ですって！」

凜「やめなさい！」

白野「はあく、これじゃあさきが思いやられるな。ん？どうしたんだアサシン？」

李「そうだな。アヴェンジャーよ、お主にうつつけの相手がおるぞ。」

ライダー「ま、私が相手してもいいけどあんたが相手しな。」

ジャンヌ「あら？よろしいので？」

エリザ「フンッ、いいわよ。あんたがどれだけ強いのか見ててあげる。」

白野「へっ？何？」

??「こいつは驚いたぜ、まかさサーヴァントが5匹もいるとはな。いや、家んなかにもう1匹いるな？あの嬢ちゃんと言った通りってわけだ！」

瞬時1人の男が白野達の前に現れる、そして……。

??「しつかしあれだな？5匹纏めて相手は厳しい……!?つて！はあ！何でてめえがいやがる！」

凜「!?貴方ランサー？ランサーじゃない！本当に召喚されてたのね！」

ランサー「どうなってんだ！おいおい、しかもほとんど知ってる顔ぶればつかじゃねえーか！てめえら2004年にどうやって来たんだ！」

凜「うるさいわね！こつちにはこつちの事情があるの！」

ランサー「……………」

凜「な、何よ？」

ランサー「嬢ちゃん、どうしちまったんだ！髪なんか染めて、後カラーコンタクトだっけか？そんなもんまでつけて！」

凜「えっ？」

ランサー「イメチェンってやつか？確かに嬢ちゃん、てめえはガサツで口も悪く性格も品曲がつてるし守護銭だ、おまけに胸も何もねえ、だからってわざわざ髪染めて金髪にしてまで自分を変える必要ねえだろ。」

ブチッ！

白野「殺気！」

凜「ランサー？いやクー・フリーン、ちよつとこつちにいらっしやい。」

ランサー「は？いやいや、たとえ元マスターといえ、んっ？違うな、2030年月の聖杯戦争のマスターといえ今は敵同士だ、そうは・・・。」

凜「いいからいらっしやい。」

ランサー「!?。何だってんだ？しょうがねえな、どうした嬢ちゃん？」

凜「ウフフフ、……。ランサー？誰が胸も何も無いって、ウフフフ、……。……。  
！ガンド!!」

ドコーン！

ランサー「グハッ！」

凜「アヴェンジャー。悪いけどこいつは私達が始末するわ。エリザ！」

エリザ「はい!？」

凜「宝具の解放を許します。あのデリカシーの欠片もない奴を消しなさい！」

エリザ「えっ? いや、さすがにこんな場所で宝具はダメでしょ！」

白野「……!? ハッ!? ヤバい、凜、落ち着いて、エリザの言うとおりで

！

凜「心配しないで、私は落ち着いているわ。」

白野「ほ、本当に？」

凜「大丈夫よ岸波君、さあエリザ！今すぐ宝具であのヤローを殺りなさい!!」

白野「落ち着いてないよね!?! むしろかなり怒ってますよね!?! だ、誰か凜を止めて！」

桜「アヴェンジャーさん凜さんを止めて下さい！」

ジャンヌ「サーヴァントを一騎始末できるから別にいいと思うのですが。仕方ないわ

ね、マスター命令だし。凜、少しよろしいかしら？」

凜「ああ？何よアヴェンジャー!？」

ジャンヌ「何故怒っているのかしら？」

凜「はあ？べ、別に怒って無いわよ！」

ジャンヌ「あら？さつきからかなりイライラしてますけど。ひよつとしてランサーに言われた『胸も何も無い』が原因でしょうか？」

凜「なツ！ち、違う、そんなんじゃない！」

ジャンヌ「そうですね。ですが凜、別に胸の大小などどうでもいいこと。だって、」  
凜「??」

ジャンヌ「貴方の意中の相手が貧乳好きなら喜ばしいことです。そうですね白野」  
「？」

白野「はい？」

ジャンヌ「どうしました白野？まさか貴方は貧乳じゃなく巨乳好きなのでしょうか？」

白野「(えっ？何で俺に振るの?)」

ジャンヌが白野の名を言うと女性陣が一斉に白野に振り向く(ライダーは除く)。

ジャンヌ「さあ、答えなさい。貴方は巨乳好き、もしくは貧乳好き？」

白野「おかしいよね？何をどうすればこんな展開になるの!？それに何で俺が答えな

いといけないの？」

ジャンヌ「だって今は男性が貴方しかいませんから、さあ！答えてもらいましょうか？」

白野「俺だけ？はっ！ユリウス？アサシン？あれ？いない？ユリウス？アサシン？」  
ライダー「二人ならとつくにいないさね。ま、諦めてどっちがいいのか答えないとね。」

白野「バーサーカー？・・・無理か！あ、ランサー？ランサーは？元はといえばランサーが原因だろ？何処に行つた？ランサー！」

ラニ「ランサーなら今さつきいなくなりましたけど、それよりも白野さん、どちらが好ましいのですか？」

桜「先輩・・・。」

エリザ「勿論白野は私みたいな体型好きよね！」

凜「・・・。」

ジャンヌ「さあ！覚悟を決めて答えなさい！さあ！さあ！」

白野「(だ、誰か助けてーーーーー!!)」



完 第6話

## 第7話

白野（どうも皆さん岸波白野です！昨日は色々ありましたが無事生き延びました。今現在学校の屋上にて新聞部の皆さんと昼休み中なのですが）

白野「学園に忍び込むですか？」

蔦寺「そう！今学園内で噂になつてゐる夜中にうろつく長身の女が存在するか否か真実を調べるの！」

白野「夜中にうろつく長身の女ねえ？」

蔦寺「何？白野文句ある？いいわ！だったらこれは部長命令です！私達4人今夜10時に学校前に集合よ！」

氷室「すまんな白野、蔦寺はどうしても気になるらしい。一度気になると全て調べないと気がすまないからな。」

白野「構わないよ、実は自分も気になつてたんだ。士郎から聞いてね、なんでも夜中だけじゃなく人気のない放課後とかにも現れるみたいだし。」

蔦寺「そうなの？うーん、でもやつぱ夜に集合よ。白野とゆー訳だからバイトが終わり次第学校前に来なさい！わかつたわね！」

白野「わかったよ。22時ね。」

白野「………と、言う訳だから今日はそっちに行けないんだ。」

凜「わかったわ。………ねえ白野、22時に学校に集合よね？」

白野「えっ？そうだけど。」

凜「私達も合流してもいいかしら？」

白野「へっ？」

ラニ「実はアヴェンジャーが話してくれたのですが、なんでも学園内に魔方陣が貼つてあると、それも一カ所じゃなく複数カ所あると。」

白野「魔方陣？まさかサーヴエントが？」

凜「もしくはマスターかしらね？なににせよアベンジャーが言うにはかなり厄介な境界らしいの、発動すると学園内にいる生き物の魔力は根こそぎ持っていかれるみたい。命に別状はないらしけど。」

桜「アヴェンジャーさんは発動するまでまだ時間があると云ってました。ですのて私達で結界を見つけ出し解除しようと結論がでたんです。」

白野「確かにそんな結界が発動したら危険過ぎるな。わかった、蒔寺達には俺から連絡するよ、それじゃ今晚22時に学校に。」

く22時学校前く

蒔寺「よっ！白野、ちゃんと時間通りに着たな。えらいえらい！」

白野「オッス！ところで学校に許可は取つてあるの？」

蒔寺「・・・・・・・・・・・・・・・・」

白野「何故黙る！・・・・・・・・まさか。」

三枝「藤村先生に「駄目！」つて言われたの。」

白野「駄目つて、さすがに許可が無いと学校にはこんな時間帯じゃ入れないよな。」

凧「大丈夫よ。私が許可もらつたから。藤村先生には忘れ物を取りに行くつて連絡したわ。一応「日直の先生に連絡しなさい」つて藤村先生に言われたの。」

白野「いつの間に！まあこれで学校には入れるか、とりあえずなかにはいるか？」

蒔寺「そ、そうね。ありがとう遠坂さん、ねえ？良ければ新聞部に入らない？」

凧「新聞部？そうね、面白そうだし考えておくわ。」

白野「えっ？」

ラニ「凧、とりあえず忘れ物を取りに行きませんか？白野さん達は例の長身の女性を探索して後で合流しましょう。」

白野「そ、そだな、それじゃ終わり次第連絡するから凧達も用件が終わり次第連絡してくれ。」

凧「ええ、それじゃまた後でね。」

白野「蔣寺なんで凜を新聞部に誘ったんだ？（蔣寺が勧誘したとき一瞬殺気を感じたし。）」

蔣寺「何となくね。遠坂さん達が新聞部に入ったら何か面白そうだと思つてね。それよりさつさと中に入りましょ。」

白野「ああ、とりあえず何処から調べる？」

蔣寺「三階からいきましようか？ そうね〜〜！ 白野、あんたと鐘で一階から調べな

さい。私達は三階から調べるから。」

氷室「!?。な、ちよ、蒔寺?ふ、二人でか!?!、いや、急に言われても、だが、いや、しかし、だけど、その、あの、・・・・・・。」

蒔寺「いいから、いいから、そうね、とりあえず23時に学校前に集合よ!由紀香行くわよ。」

三枝「うん!頑張ってね鐘ちゃん。」

氷室「なっ!?!」

白野「??」





凜「!?アーチャー!それに……。貴方確か隣のクラスの!」

リン「!?どうゆうこと?アーチャー、あんたあの二人の知り合い?いきなりあんたのクラスを当てるなんて。」

アーチャー「いや私は知らないが……。まさか!なるほど、私の中の記憶もしくは記録か。凜とラニⅡⅧ?驚いたな!どうやってこの時代に?」

凜「どうやらあのアーチャーは私達を知るアーチャーじゃないみたいね。」

ラニ「私達の知るアーチャーは確か正義のみかたの集合体みたいな存在、もしかして貴方はそのオリジナルでしょうか?」

アーチャー「もしかしてあの青年は私の記憶にある岸波白野なのか?」

凜「当たり前よアーチャー、でっ?どうするのかしら?遠坂さん?私達はアーチャーの技や宝具は知り尽くしているわ。アーチャー、貴方も私達のサーヴァントの情報は知ってるわね。知らないのは遠坂さん貴方だけね。」

リン「ちっ!アーチャー!何かムカつくから殴らせて!」

アーチャー「何故だ!?!」

リン「五月蠅い!何となくよ!ところでアーチャーあの二騎のサーヴァント情報教えてなさい!バーサーカーとランサーでいいのかしら?とりあえず殴るのは後でいいから。」

アーチャー「結局殴られるのか?・・・。バーサーカーとランサーで間違いない。流石に二騎相手は私には酷だぞマスター、どうする?」

リン「今は引きましようアーチャー。とりあえず魔方阵はある程度調べたしね。!?  
アーチャー!」

アーチャー「!?!」

エリザ「スキアリねアーチャー!くたばりなさい!」

凜「ちよ、ランサー?こんな場所で!」

アーチャー「くっ!いきなりかランサー!」

ランサー「聖杯戦争はなんでもアリのバトルロワイヤルでしょ?聖杯を手に入れるためあんたを始末させてもらおうわ!」

リン「アーチャー!!」

アーチャーは双剣干将・莫耶を構える。ランサーの槍がアーチャーの双剣とぶつかり合うだけに打ち合うこと2・30合・・・。

アーチャー「あいからわず一撃一撃が重いなランサー!」

エリザ「あんたこそ!さっさとくたばりなさいよ!バーサーカー!あんたも手伝いなさい!」

呂布「■■■■■■■■■■——!!」

アーチャー「!?チツ! バーサーカー! 引くぞマスター! こんな場所でバーサーカーが暴れたら学校が崩壊する!」

リン「わかつてるわ! とりあえず目眩ましで・ ・ ・ ガンド! 行くわよアーチャー!」

エリザ「あつ! コラツ! 逃げるな!」

凜「待ちなさいランサー! ラニ! バーサーカーを止めなさい!」

ラニ「バーサーカー! ストップです! 暴れてはいけません!」

呂布「■■■■■■■■■■!」

エリザ「凜!? せつかくアーチャーを始末できないのに何故止めるの?」

凜「こんな場所でバーサーカーと暴れたらアーチャーが言う通り学校が崩壊するわよ! それに今は白野達が学校内にいるのよ! 白野はともかく蒔寺さん達に見られたら後々面倒でしょ!」

エリザ「仕方ないわね。せつかくのつてきたのに、まあ次会うときは確実に仕留めてあげるわよアーチャー。」

バーサーカー「■■■■■■■■■■——!!」

ラニ「はあく。少し疲れました。とりあえず魔方陣を見つけて写メを取り白野さん達と合流しませんか?」



一方の白野達（エリザとアーチャーのバトルが始まる少し前）

白野「……………」

氷室「……………」

白野「うくん。さつきから一言も喋ってないけど、とりあえず何か話さないと、うん、何話そう？」

氷室「（ま、まずい、緊張する！ 蒔寺の奴め！ 確かに嬉しいが、いきなり二人きりだと……………ど、どうすれば？）」

白野・氷室「あ、あの。」

白野・氷室「!?」

氷室「な、なんだ白野。」

白野「い、いや、氷室こそ何か話があるのじゃ？」

氷室「は、白野からどうぞ。」

白野「そ、そうか。とりあえず一階は一回りしたけどこの後はどうする？ 二階に行つてみるか？」

氷室「そ、そうだな。……………ん？ 白野、あそこ？ 誰かいるぞ？」

白野「へっ?・・・・・・・・・・。ほんとだ、女の人?かな?・・・・・・・・・・!!  
危ない!」

氷室「えっ?」

白野は氷室の体を抱き締め守る様に偶々開いていた教室に飛び込む。

白野「いてて、だ、大丈夫か氷室?」

氷室「・・・・・・・・・・。」

白野「氷室?あつ?ゴメン!どっか怪我したのか?」

氷室「・・・・・・・・・・!」(は、白野に抱き締められ!ま、まずい、き、緊張する!)

??「驚きました。まさかあの一瞬を交わすとは、ただの人間なら即あの世行きですが  
どうやら貴方はただの人間ではないようですね?」

白野「(サーヴァント!ま、まずい、俺はともかく氷室が!)」

氷室「?・・・・・・・・。えっ?長身の女?」

白野「立てるか氷室?」

氷室「えっ?あ、ああ、っ!」

白野「足を挫いたのか?すまない俺のせいだ。」

氷室「だ、大丈夫だ、・・・・・・・・てっ!?!ひゃっ?」

瞬時氷室は白野に抱えられる、いわゆるお姫様だつこだ。サーヴァントの隙を見て教室から走り出す白野、兎に角白野は凜とラニに合流するべく自分の教室に走り出したが。

?? 「逃がしません。」

白野 「ちよつ！は、早つ！・・つて！くそつ！（せめて氷室だけは助けないと）」

氷室 「なななななな、何がなんだか！私今白野にお、お姫様だつこされてるのか？は、恥ずかしい！こんな姿誰かに見れたら。」

?? 「追い付きましたよ。ただ始末するだけでは駄目ですね。貴方達の魔力をいただきたい後で始末しましょう。」

白野 「くつ！氷室！俺が時間を稼ぐからお前は凜達と何とか合流しろ！」

氷室 「えっ？きやつ！」

白野はサーヴァントから守る形で氷室を降ろす。そして・・・。

白野 「行け！氷室！」

氷室 「ちよ、白野!？」

白野はサーヴァントを睨み付ける。サーヴァントは白野に警戒していた、自分の攻撃を瞬時に避け更には隙を見て一瞬で女性を抱え逃げ出す判断力に驚きを隠せないでいた。そのためサーヴァントは白野がどうするか警戒せざるおえないでいた。

?? 「何やってんだライダー？ さっさとそいつらの魔力奪えよな。たくつ使えないなお前は。」

ライダー 「ですがマスター、あの男は危険です。私の攻撃を瞬時避けました。」

?? 「偶々だろ？ …… って岸波？ それに氷室か？ 何？ お前ら学校に忍び込んでデートしてんの？」

氷室 「ち、違！ 間桐？ なんであんたが？」

白野 「し、慎二？ まさか？ 聖杯戦争のマスターなのか？」

慎二 「何？ なんでお前が聖杯戦争知ってるの？ ああ、なるほどな、あの女が言ってたな。第5次聖杯戦争のマスター以外に別のマスターがいるって。岸波、お前の事だったのか？ だけどサーヴァントがいないな？」

白野 「!? まさか学校内にある魔方阵は慎二が？」

慎二 「だから何？」

白野 「慎二！ わかっているのか！ あれが発動すれば学校内の奴等がどうなるのか!？」

慎二 「別に死にはしないだろ？ 魔力をすべて奪えば死ぬ奴もいるかもしれないが僕に貢献できるんだしむしろ感謝してもらわないと。」

白野 「慎二！ お前!!」



慎二「ライダー。二人を始末しろ。魔力を奪ってからな。」

ライダー「よろしいので?」

慎二「構わないさ、コイツらが死んだところで誰が悲しむの? ゴミ同志仲良く消えればいいさ。ああそうだ! お前から寄り添って始末してやるよ。そうすればいいゴシツプになるだろ? お互い新聞部だしな。『新聞部が心中!』って面白いじゃないか! アハハはははははは!」

白野「慎二!!」

慎二「えっ? ガツ!」

ライダー「マスター!」

慎二が白野に殴られ吹っ飛び隙ができる。

白野「氷室! 行け! 上の階に凜達がいるはずだ!」

氷室「な、何言ってるんだ! 白野を置いて行けるわけないだろ!」

慎二「岸波! よくも! ライダー! 魔力はいらない殺せ! 始末しろ!」

ライダー「わかりましたマスター。」

白野「ヤバイ! せめて氷室だけでも守らないと!」

ライダー「さよならです。」

ガギーンツ!!

ライダー「!?」

エリザ「大丈夫!? 白野? ギリギリ間に合ったわね!」

白野「エリ、じゃないランサー!」

凜「白野! 大丈夫!? 怪我してない。」

白野「凜! ああ大丈夫だ。それよりも。」

凜「ええ、まさか間桐君がマスターなんてね、とりあえず下がりなさい白野、後はランサーが何とかするから。」

白野「ああ、氷室? 大丈夫か?」

氷室「えっ? あ、ああ大丈夫。白野、マスターとかサーヴアントってなんなんだ?」

凜「氷室さん、後で説明してあげるわ。今はそれ所じゃないから。」

氷室「??」

エリザ「さっきアーチャーとは不完全燃焼だったからね! あんたで燃焼させてもらおうよライダー!」

ライダー「!? くっ! 一撃が重い、マスター! ここは引くべきです。」

慎二「はあ!?! ふざけるなライダー! ランサーごときに何やってんだ!」

ラニ「ランサーだけじゃないですよ。間桐さん。」

慎二「えっ?」



スターだなんて思いもしなかったわ。」

白野「アハハ、はあく、疲れた。」

ラニ「大丈夫ですか？白野さん。」

白野「ありがとラニ、大丈夫だよ。」

氷室「あ、あの、白野、いつたいどうゆうこと？聖杯戦争とかマスターって何？」

白野「あ、いや、それは、えくと、な、何て言えばいいのか。」

凧「ごめんなさい氷室さん。」

氷室「えっ？・・・あ。」

凧の言葉と同時に氷室は気を失う。

白野「ちよっ！何やってんだ凧！」

凧「心配しないで、気を失っただけよ。とりあえず彼女は

今起きたことを忘れてもらわないとね。目が覚めたら聖杯戦争やマスターにサーヴァントは忘れてるはずよ。」

白野「大丈夫かな？でも確かに氷室を巻き込む訳にはいかないしな。」

凧「大丈夫でしょ。そういえばラニ？魔方陣は調べてきたのかしら？」

ラニ「はい。スマホに登録しました。後でアヴェンジャーもしくはキャスターに見てもらいましょう。」

凜「そう、白野、後の事は任せるわ。私達は先に帰るから。じゃあね。」

白野「じゃあね。じゃない！えっ？ちよ、待つて！」

凜「何？私達は疲れたのよ、氷室さんはあんたが何とかしなさい。」

ラニ「それではまた明日。白野さんごきげんよう。」

白野「……………つて！マジですか？」

く学校前く

蒔寺「あっ!?きたきた、おくい白野って!?鐘!?どうしたの!?!」

三枝「岸波君が鐘ちゃんをお姫様だっこしてる!」

氷室「こ、これは、その、ち、違うんだ、私が足を挫いて、だから、その。」

カシヤツ!

白野・氷室「えっ?」

蒔寺「やく、いいのが撮れたわ!ありがとう白野。やっぱあんたら二人つきりにさせて正解だったわ!おかげでいい写真が撮れたわよ!」

氷室「~~~~~!」

白野「??」

蒔寺「さてと、いい写真も撮れたし帰りますか。ん?どうしたの由紀香、合掌なんかして。」

三枝「.....」。

トントン。

蒔寺「えっ?あ、鐘?」

ドコツ!

蒔寺「ガハアツ!」

白野・三枝「あ、」

氷室「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

蒔寺「ナ、ナイスボディーブロー・・・・・・・・ガクツ！」

氷室「さて、帰るか。」

白野「氷室？足は大丈夫なのか？」

氷室「心配するな、少し痛むが問題ない、すまないが白野、私達を家まで送ってくれないか？時間も時間だしな。」

白野「ああ、じゃ、帰るか。」

三枝「あ、あの、楓ちゃんは？」

氷室「心配するな、そのうち誰か拾うだろう。」

三枝「流石にそれは・・・・・・・・。岸波君？」

白野「仕方ないか、ほら、起きろ蒔寺！帰るぞ。」

蒔寺「う、お、お腹痛い、助けて白野、起きれない。」

氷室「さつさと起きろ、それとももう一度殴りたいか？」

白野・三枝「(、怖っ！)」

蒔寺「はい！起きます！だから殴らないで下さい！」

氷室「さ、帰るぞ。」

白野・三枝・蒔寺

氷室「宜しい。」  
「はい！氷室さん！」

〜第7話〜  
完







## 第8話

ピンポーン。

ガチャツ。

凜「いらつしやい白野君。とりあえずリビングに来て。」

白野「ああ。ん?.....。グハツ!」

ありす「いらつしやいお兄ちゃん!」

白野「や、やあ、ありす。何かいつもより勢いがあつたような?」

ありす「アリスが助走をつけて飛び込めつて言ったの。」

白野「な、何故に?」

ありす「わかかない!」

凜「ほらほら、馬鹿やつてないで行くわよ。ありすいらつしやい。」

ありす「は〜い!」

白野「.....。ハア。」

桜「あ、いらつしやい先輩。??どうしたんですか?お腹をさすつて?」

白野「えっ?あ、うん、ちよつとね。」

桜「??」

凜「さて、とりあえず白野が来る前にアヴェンジャーとキャスターとキャスターに魔方陣を見せただけどキャスター。」

アリス「何かしら凜？」

凜「あんたこれ消せるかしら？」

アリス「そうね……。消せないことはないけど。私がやるよりありますが適任かしら。」

ラニ「ありますがですか？」

アリス「そ、お兄ちゃんを含めて貴方達マスターの中で最も魔力が多いのはありますな。それもかなりの量よ、たぶんありますが本気になったらお兄ちゃん達は太刀打ちできないと思うわ。」

白野「ありますが？マジですか？」

アリス「ええ。マジです。」

ユリウス「ありますは月の聖杯戦争ではゴーストサイバーだったあなたぶんそのせいだろ。」

ラニ「ゴーストサイバーだった時のありますの魔力量がそのままですか？」

ユリウス「そうだな。月でのありますの魔力は有り余っていたはず、まさか地上のあります本人がそのままの魔力量ではな。」

凜「で？キャスター、ありますの魔力で間桐君が作り出した魔方陣……じゃないわね。ライダーが作り出した魔方陣をどうするのかしら？」

アリス「簡単よ凜、ライダーが描いた最初の魔方陣にありますが触れれば一瞬で解除できるわ。魔方陣を見た限り大したことはないから。私がやってもいいけどありますより少し時間が掛かりそうだし。」

白野「……」。ありますって凄いな、ひよつとして冬木のマスター達よりも魔力があるのかな？」

アリス「一人を除けばたぶんね。」

ありす「??、私スゴイいの?」

白野「うんうん、ありすは凄く可愛いよ!世界一ね。」

ありす「可愛いなの?~~~~~♪」

凜「シスコン。」

ラニ「ありすにはあまあまですね、白野さんは。」

白野「シスコンでかまわない!ありすは世界一可愛いんだ!」

ありす「わ~い!」

ユリウス「とにかく岸波達はライダーが描いた最初の魔方陣を見つけ出してくれ。見つけ次第俺に連絡をしてくれ。」

凜「わかったわ。とりあえず明日から探しましょう。」

ラニ「そういえば遠坂さんも魔方陣を調べていましたね。……!凜、遠坂さんに協力してもらおうのはどうでしょうか?」

凜「無理!」

白野「はやっ!」

凜「あたりまえでしょ!ついこの前ランサーと遠坂さんのサーヴァントが殺りあったのよ。此方がよくても向こうが協力しないわ。」

桜「ですが遠坂さんも魔方阵を調べてるとなると解除したいのでは？凜さんが話すのではなく先輩が話し合えば向こうも協力してくれるのでは？」

凜「……………。確かに私が話し合えば何か言い合いになりそうだけど、白野が間に入れば協力してくれるかも？」

白野「えっ？遠坂さんと別に仲良くはないけど何で俺が？」

桜「確か先輩は衛宮さんとは友人ですよ？たぶん衛宮さんと遠坂さんの二人は聖杯戦争ではお互い協力しあっていますよ。」

凜「白野、あんたが衛宮君に協力の話しを持ち込んでOK

が出れば遠坂さんも一緒に協力してくれるかもしれないわ。明日昼休みにでも衛宮君に話してみてもちようだい。」

白野「わかった。士郎に話してみても協力してもらおうように頼んでみるよ。」

桜「お願いします先輩。後は私達がお二方に信頼してもらえれば協力関係になれるはずです。」

ジャンヌ「話は終わったかしらマスター？タイミングが良いのか悪いのかお客さんが来ますよ。」

桜「えっ？」

ピンポーン

ラニ「こんな時間に誰でしょうか？」

ユリウス「俺が出る。」

凧「ねえキャスター。最初の魔方陣は何処にあるかわかるかしら？」

アリス「さあ？ だけど魔方陣を描いた中で一番魔力が強い魔方陣がそうだと思うわ。」

凧「一番強い魔力ねえ。ランサーやアヴェンジャーに探してもらった方がいいかもね。」

ユリウス「凧、お前達に客人だ。」

凧「えっ？ 誰かしら？」

士郎「こんばんわって白野！ あっ！ そうか白野達は仲間同士か。」

白野「し、士郎？ 何で？」

リン「こんばんわ岸波君。後その他の皆さんもこんばんわ。」

ラニ「その他ですか？」

凧「まさか家に来るとは、驚きね。それで？ 私達に何のようかしら？」

桜「私お茶を用意してきますね。」

リン「そうね、とりあえずはそこにいるサーヴァント達の殺気を何とかしてちょうだい。」

白野「あっ、みんなストップ！ 士郎達は俺の友人なんだ。それにこんな場所で闘った



ら家が消し飛ぶ。」

白野の言葉にサーヴァント達は殺気を収めるがランサーだけはいまだに士郎達のサーヴァントに敵意むき出しでいた。

凜「ランサー！落ち着きなさい！」

エリザ「何故かしら凜？私達は姿を見せてるのに向こうは霊体化のままよ？何時けしかけるかわかったもんじなやないわ。」

リン「アーチャー、セイバー、出てきなさい。じやないと話が進まないわ。」

アーチャー「仕方ないか、これでいいのかランサー？」

セイバー「わかりましたリン。」

白野「………！アーチャー？アーチャー！はいつ！えっ！アーチャー！」

アーチャー「落ち着きたまえ白野、確かに私は君が知るアーチャーだ、だが君のサーヴァントではない。本来の君が知るアーチャーは正義の集合体からのアーチャーだ。私はそのオリジナルみたいな存在だ。だからと言って君の事は記録もしくは記憶として知っているがな。」

白野「そ、そうなんだ。久し振り？でいいのかな？……つまいつか。何かややこしいしな。」

アーチャー「ふっ、あいからわずだな君は。」

凜「ランサー。これでいいでしょ？槍を納めなさい。」

エリザ「フンツ！」

白野「えくと、士郎？何しに此処に？」

士郎「ああ、実は白野達に協力してもらおうと思っただけ。学校内にある魔方陣は知っているかな？」

白野「ひよつとして慎二のサーヴァントライダーが描いた魔方陣の事か？」

士郎「知っているのか！遠坂の言った通りだな。」

凜「えっ？私？」

士郎「ち、違うよ遠坂さん。こつち、黒髪の方の遠坂の事だよ。」

凜「あら、そう。ごめんなさい衛宮君。確かに彼女の言う通りライダーの魔方陣は知っているわ。後解除の仕方もね。」

士郎「えっ？」

リン「まさか解除まで出来るなんてね。貴方達が良ければお互いに協力しない？あんな物騒な魔方陣は早く解除したいしね。どうかしら？」

凜「……………でっ？どうするの白野君？協力する？しない？」

白野「俺が決めるの？」

桜「そうですね。先輩がどうするのか決めてください。」

ラニ「私も白野さんが決めればよろしいかと。」

ユリウス「そうだな。岸波が決めればいい。」

白野「……………」。士郎、遠坂さん、俺達で良ければお互い協力しよう。ただし。」

士郎「?ただし?」

白野「俺達は今この時から仲間同士だ慎二の件が解決してもお互い協力関係でいよう。」

士郎「……………」。ははつ、ああ、そうだな。やっぱ白野は白野だな。遠坂かまわないだろ?白野達は裏切らない、信用してもいい。」

リン「……………」。はあ、いいでしょ。岸波君達よろしくね。協力関係になる以上慎二とライダーに関する情報はお互い必用よね。」

凛「ある程度の事は解っているわ。とりあえず必用なのはライダーが描いた最初の魔方阵の場所ね。それさえ解れば直ぐにでも解除できるんだけど。」

リン「最初の場所ね?……………!多分屋上じゃないかしら?あの場所は何故か魔力が強いよね。」

ラニ「魔力が強い場所ですか?キャスターが言った通りだと屋上で間違いないでしょう。」

白野「だったら話が早いな、明日休み時間にも調べてみて当たりならありますとキャ

スターを連れてきたらいいのかな？」

凜「そうね。さすがにすぐは無理としても放課後にありす達を連れてきましょう。ユリウスお願いね。」

ユリウス「ああ、連絡があり次第ありす達をつれてこよう。」

白野「ああ、ん？どうした士郎？ぼくとして？」

士郎「……………あ？いや、さつきから気になつていたんだがそこにいる男の子慎二にそっくりだな。」

シンジ「な、なんだよ？ボクがなに？」

リン「ほんとそっくりね！小さいけど。」

シンジ「!?ち、小さくて悪いか？ボクはまだ8歳だ！小さいのは当たり前だ！クソッ！いつかお前からより大きくなるんだからな！今に見てろよ！」

凜「はいはい、わかったわかった。ありすシンジ、もう遅いからお休みの時間よ。」  
ありす「ふわ〜。眠い。(コクツ。)」

シンジ「こ、子供扱いするな！」

凜「子供でしょ？」

シンジ「……………」

桜「ありすちゃんシンジさん部屋にいきましょうか、先輩、私二人を部屋につれてい

きますね。」

白野「よろしくね。俺ももう遅いし家に帰るか。凜、明日直ぐにでも調べよう、もしかしたら慎二は俺達の行動に気が付いているかも知れないしな。」

凜「そうね。明日は早めに学校に行きましようか。ユリウス、悪いけどありすとシンジ、明日の送り向かいよろしくね。」

ユリウス「ああ。」

〔早朝学校〕

白野「あつ！おはよう士郎、遠坂さん。」

士郎「おはよう、白野。」

リン「おはよう岸波君。あれ？他の皆は？」

白野「先に学校に行くつて。多分屋上にいると思うよ。」

リン「そう、それじゃ私達も行きませんか。」

士郎「そうだな。」

ガチャ。

白野「やつぱいた、おはよう皆。」

桜「おはようございます先輩。」

ラニ「おはようございます。」

凜「あら、おはよう白野。いま魔方陣を調べて見たけど、この場所の間違いないみたいね。」

白野「そうなんだ。ユリウスには連絡したの？」

桜「いまから連絡をします。あつ！衛宮さんに遠坂さん、おはようございます。」

士郎・リン「おはよう。」

白野「ところで魔方陣って何処にあるの？」

ラニ「此方です。」

ラニの案内で白野は後を付いていく。

ラニ「この魔方陣ですね。」

白野「ん？よく見えないけどこのうっすらしたのがそうなのかな？」

ラニ「そうですね、白野さんは魔方陣がよく見えていないのですね。私達ははつき

り見えているのですが。」

白野「まじで？」

士郎「白野もうっすらしか見えないのか。実は俺もなんだよ。」

白野「仲間だ！」

士郎「おう！仲間だ！」

ラニ「何をやってるんですか貴方達は。」

白野・士郎「すいません。」

白野「とりあえず後はありますがこの魔方陣に触れたら解除出来るんだな？」

白野は何となく魔方阵に触れる。

そして触れた瞬間……。

バチツ!

白野「えっ!？」

ラニ・士郎「あつ!」

凜・桜・リン「……………!」

白野「あれ? な、何で? ひよつとして発動した?」

凜「ちよ、白野、あんた何したの! 魔方阵が消えたわよ!」

白野「消えたって! 俺はただ触れただけなんだけど。」

リン「アーチャー! 魔方阵は発動したのかしら?」

アーチャー「いや、発動はしていない。どうやら白野が触れた瞬間解除したらしいな。」

アヴェンジャー「ええ、それも綺麗さっぱりと、さすがは白野、何故かは解りませんがつまらないですね。」

白野「つまらないって、だけど解除出来たのか。良かった良かった。うんうん。」

士郎「凄いな白野! だけどどうして解除できたんだろ? ……?」

凜「(ひよつとして白野はありすと同じ常態なのかしら? 元々月での白野は自我を



持ったNPCだったわね。そういえば私とラニとの対戦時白野はあり得ない筈なのに乱入して来れたし・・・まっ、なんにせよ解除出来たしよしとしますか」

桜「??凜さん?どうしました?」

凜「ちよつと考え事、あつ!そうだ、ユリウスに連絡しないとね。桜お願い。」

桜「はい、わかりました。」

リン「・・・・・・・・・・。」

士郎「あつ!そうだ!なあ白野、どうだろう、俺達仲間同士だし良ければ今晚俺の家で御飯を食べないか?皆一緒にさ。」

白野「まじで!凜、士郎が今晚食事を作ってくれるってさ。士郎が作る飯は天下一品なんだよ!」

凜「あら?いいのかしら衛宮君?私達結構な人数よ?」

士郎「ああ、大丈夫だよ。人数が多いほど作りがいがあるしね。」

白野「だったら俺も手伝うか、麻婆豆腐なら得意だしな。」

士郎「却下だ!」

白野「はやっ!」

士郎「白野、お前が作った麻婆豆腐は危険だ。前に藤村先生が食べた時藤村先生意識不明になっただろう。あれ以来藤村先生は麻婆豆腐恐怖症になったんだぞ。」

白野「そんなはずは、藤村先生はあの時あまりにも美味しくて気を失ったんじゃ。」

士郎「そんなわけあるか！」

白野「(・ー・)」

士郎「はあ、どうだろう遠坂さん良ければだけど？」

凛「そうね。私達は協力関係だし……。それじゃあお言葉にあまえて今晚お邪魔しようかしら、ユリウス達には私から連絡をしとくわ。」

士郎「ああ！よーし！それじゃあ早速今晚は何にするか考えないとな！いや、腕がなるよ。」

白野「楽しそうだな士郎の奴、ん？どうしたのアヴェンジャー？」

ジャンヌ「お客さんが来ますよ。」

白野「へっ？」

ライダー「驚きました。まさか解除してしまうとは。マスターに報告しないとイケませんね。」

白野「なっ！ライダー!？」

ライダー「こんな朝早くから戦闘はいたしません。ですが……。」

白野「ん？な、何？」

ライダー「貴方は何者のですか？一瞬で私が作り上げた魔方陣を消すなんて……。」

アヴェンジャー「只のお人好しのおバカさんですよ。後はフラグ一級建築士、それ以外に何もありませんね？」

白野とジャンヌとライダー以外

「うんうん。」

白野「……………」

ライダー「なるほど、なんにせよ厄介なのはよく分かりました。それでは失礼します。」

凜「あつ？こら！ライダー！」

リン「ほつときなさい。なんにせよ解除出来たんだし。良かったんじゃないかしら？」

凜「それもそうね。さてと、もうすぐ授業が始まるし教室に行きますか。」

凜の言葉でそれぞれ教室に向かう。一人残された白野は……………」

白野「お人好しのおバカさんって、それ以外に何も無いって……………」  
キーンコーンカーンコーン。

白野「あつ？チャイム。はあ、遅刻かな？」



く放課後く

凜「とりあえず一度家に帰りそのあと衛宮君の家にお邪魔するわ。白野は少し遅れるのよね？」

白野「新聞部の書類をまとめないといけないからな。蒔寺に頼まれてね、士郎には連絡したから、それじゃ。」

桜「はい。先輩、また後で。」

蒔寺「お疲れさん白野。早く終わって助かったわ。私達いまから用事があるから。」  
白野「えっ？だつたら別に今日じゃなくても・・・。」  
蒔寺「いや、私は別にいいんだけど鐘が白野に会えなくて寂し・・・。」

ドコンッ！

蒔寺「ガハア！」

白野・三枝「あつ。」

氷室「先生に言われてな、早く次の新聞を提出しろと。」

白野「そ、そうですか。とりあえず終わったし俺帰るね。今から士郎の家に行かないと。それじゃあまた明日。」

氷室「ああ、また明日な白野。」

三枝「またね岸波君。」

蒔寺「・・・・・・・・・・。」

白野「少し遅れるかな？まっ士郎に連絡したし大丈夫だろう。」

白野は士郎の家に向かい歩き出すそれからしばらくして異変に気づく。

白野「ん？なんだろ？学校の裏山かな？何か嫌な感じだな。」

本来なら凜達に連絡をすればいいのだが白野は一人学校の裏山に入っ

く・・・・・・・・・・。

白野「・・・・・・・・・・あつ！美綴!?!おい！大丈夫か！美綴！しっかりしろ！」

美綴「・・・・・・・・・・。」

白野「とりあえず救急車だな！えくとスマホスマホ。」

ガサツ！

白野「!?!」

慎二「はあ！何でお前がいるわけ岸波？おいライダー！人払いの結界はどうした！」

ライダー「ちゃんと発動はしてますよマスター。どうやら彼は効果が無いみたいです  
が。」

白野「慎二・・・・・・・・！まさか、美綴が倒れているのはお前が？」

慎二「だったら何？心配しなくても生きてるけど？けど魔力をほとんど奪ったからその内死ぬんじゃない、別にどうでもいいけどね。」

白野「慎二！」

慎二「何？怒ってるの？それは僕のほうだろ！お前のせいで僕の計画が台無しなんだよ！ライダー！そいつを始末しろ！簡単には殺すな！じっくりいたぶってから始末しろよ！」

ライダー「わかりました。」



白野「ヤバッ！あつ？美綴が！」

慎二「チツ！自分より他人が心配かよ！ライダー！岸波を捕まえろ！」

ライダー「……………」

白野「とっ！ライダー！……っとうわっ！」

ライダーの鎖で捕まる白野そのまま逆さ吊りになるさらにライダーの攻撃で右肩に激痛が走る。

白野「いつ!?はあ、はあ、くっ！」

慎二「あははははは！惨めだな岸波？ルーラーがお前には気を付けろって言ってたけど只のゴミじゃないか。」

白野「ルー、ラー？（ヤバッ！意識が）慎二？ルーラーに会ったのか？」

慎二「だったら何？お前には関係ないだろ。さてともう少しいたぶるかな。ライダー！」

ライダー「わかりましたマスター。」

白野「くっ！（ヤバいな意識が……………いやまだだ！まだ俺はなにもしてない！惨めでも構わない！生きていれさえいれば前に進めるんだ！）」

慎二「しぶといな、まだ意識があるの？まるでゴキブリじゃないか！あははははははは！もういいや、ライダー、始末しろ。」

ライダー「はい。」

ライダーが白野に詰め寄り止めを刺そうとする。

白野「……………っ！」

ライダー「その目、まだ諦めないのですね。ですが、  
……………終わりです。」

白野「お、終わらないさ、まだ俺は諦めていない！最後まで俺は足掻く！たとえどんな姿になろうとも生きている限りはな！」

白野の言葉の最後白野の左手が光出す。

ライダー「!？」

慎二「?なにやってんだライダー！さっさと始末しろ！」

ライダー「……………令呪？」

白野「えっ？熱っ！左手か？あっ！令呪だ！」

慎二「はあ!?何で岸波ごときに令呪が！クソッ！ライダー！」

ライダー「今度こそさよならです。」

白野「くっ！まだだ！来い！サーヴァント！頼む！」

左手を突きだし大声でサーヴァントに呼び掛ける。

白野の中ではすべてがスローモーションみたいな感覚になる。

ライダーの攻撃が白野に差し掛かるその時！

ガキンッ！

ライダー「なっ!?!」

「??」全く。まさか余が召喚されるとはな！余のマスターは愛しき奏者ただ一人。しかし、こうして召喚された以上は仮のマスターとして契約をしようではないか。

さあ！拳を握れ、顔を上げよ！命運は尽きぬ！なぜなら、そなたの運命はいま始まるのだから！」

白野「えっ？ひよつとしてセイバー？」

セイバー「いかにも！余はサーヴァントのなかで最良と言われる剣の英霊、セイバーだ………つて!?!…ん？な、ま、まさか？そ、奏者？奏者なのか？」

白野「あ、ああ。セイバー、久しぶりだな。」

セイバー「………そ、奏者！奏者………」

♪

白野「グハアッ！」

セイバーは始めはライダーに向かうかたちでいたが白野の声を聞き振り向く。

セイバーは白野だとわかるとあまりにの嬉しさに白野の胸に飛び込んでいく。

セイバー「奏者！奏者！奏者！余は、余は、ずくずくと奏者に逢いたかったのだぞ

！余は、余は嬉しい！」

白野「セイバー、うん、俺も嬉しいよ。」

セイバー「うむ、うむ、．．．ん？何をしている奏者よ、早く余の頭を撫でるがよい

！」

白野「えっ？あつ！ハイハイ。」

ナゲナゲ

セイバー「~~~~~♪」

白野「セイバー、再会できて嬉しいけど今は目の前の敵を何とかしないと。」

セイバー「むっ？敵？おお！すっかり忘れてたな！これも奏者が愛しすぎるからだな

！」

セイバーは立ち上がり慎二達に剣を向ける。

セイバー「さて、余の知るシンジにそっくりな奴よ。奏者との再会で嬉しすぎて忘れ

ていたが、よくも奏者に傷を付けてくれたな、貴様、覚悟はできておろうな！」

慎二「はあ!?ふ、ふぎけるな！岸波ごときが召喚したサーヴァントの癖に！ライダー

！岸波とあのサーヴァントを始末しろ！」

ライダー「かしこまりました、マスター。」

白野「来るぞセイバー！」

セイバー「任せよ奏者よ！すぐに終わらせようぞ！ライダーよ、余と奏者の絆、とくとみよ！」

く第8話く

完

## 第9話

ライダー「!?くっ!はあ、はあ、マスター、このままでは負けてしまいます。撤退す

べきです。」

慎二「ふ、ふざけるなライダー！岸波ごときに何故僕が撤退しないといけないんだ！さつさとセイバーを始末しろ！」

セイバー「……………。ライダー貴様、そいつの正規のサーヴァントではないな？シンジにそっくりな奴からは令呪が存在しない、その本が令呪がわりか？全くつまらん！ライダーに仮のマスターよ引くがよい！今のライダーを倒しても余はなんとも思わんからな！」

白野「えっ？そうなのセイバー？」

セイバー「うむ、マスターには必ずや体の何処かに令呪が刻まれる。だからあの男は令呪が刻まれておらん！大方本来のマスターの令呪を使い彼奴がマスターに無理矢理でもなったか、もしくは本来のマスターが聖杯戦争に参加する気はなく奴が代わったのだろうか。」

慎二「ふ、ふざけるな！僕はマスターだ！ゴミのサーヴァントごときがなに偉そうに……………」

セイバー「何？貴様！我がマスターをゴミと言ったか？ふ、ふふふ！許さん！許さんぞ！貴様は余自ら始末してくれる！覚悟せよ！」

慎二「!?ひ、ひい！う、ライダー！早く僕を助ける！早くしろ！」



ライダー「……………。セイバー、今回は引かせてもらいます。ですが……………。次は必ず。」

慎二「岸波！覚えてろよ！お前だけは僕が必ず殺してやるからな！」

セイバー「まるで負け犬の遠吠えだな。」

白野「セイバー、助かったよ。ありがとう。……………あつ！美綴のこと忘れてた！」

美綴「……………」

セイバー「うむ、心配するな奏者よ。気を失っているだけだ。コードキャストを使えば目を覚ますであろう。」

白野「コードキャスト？無理だよ。使えないから。とりあえずは救急車だな。」

セイバー「なぬ！使えぬとな！そんなはずはなからう。また余と契約したのだ、月の聖杯戦争でてに入れた礼装がスマホに入っているはずだ、奏者よ調べてみるがよい。」

白野「どれどれ、……あつ！礼装がある！何故に！」

セイバー「あるのであれば使ってみればよからう。奏者よ、まずは奏者自身に使うがよい、右肩が痛からう。」

白野「えっ？あつ！いつつ！すっかかり忘れてた。とりあえず試してみるか。……コード……heal。」

白野がコードキャストを自分自身に使い試してみる。  
すると……。

白野「ん？お、おお！痛みが取れた！右肩が治ってる！まさかコードキャストが使え  
るなんて……あつ！

これなら美綴にも。」

白野は美綴にコードキャストhealを使うしばらくして。

美綴「う、うくん……あ、あれ、ここは？」

白野「お、美綴、気がついたか！大丈夫か？どこも怪我はしていないな？」

美綴「へっ！き、岸波？な、何で岸波が……」。

白野「とりあえず立てるか？無理ならおぶつてやるけど？」

美綴「えっ？い、いやいや、だ、大丈夫、大丈夫だから、だけど何で私こんな場所  
で……」。

白野「何も覚えていないのか？（ある意味良かったかもしれないな。）まあ何にせよ美綴が無事で良かったよ。」

美綴「あ、ああ、（な、何で岸波が目の前に？や、やばい！私いま顔が赤いかもーお、落ち着け私）こんな場所で何で倒れてたのかわからないけど、岸波が助けてくれたのか？」

白野「たまたま通りかかったんだよ。……ひよつとして体調が悪いのか？とりあえず美綴の家までで送るよ。もう暗いしな。」

美綴「えっ？い、いや、その、あの、だ、大丈夫大丈夫だから、私の家まで送らなくても私は全然平気だからさ、あ、あははは。」

白野「もう暗いし、家まで送るよ？美綴は女の子なんだし何かあったら危ないだろ。」

美綴「お、女の子って……！こ、このフラグ建築士が！う、うわあ〜〜〜！」

白野「お、おい、あく。行っちゃった。大丈夫かな？」

セイバー「あいからわずよな奏者よ。ま、安心せよ。あの娘は強いみたいだしな。サーヴァントではない限りその辺の奴らには負けはせんだろ。」

白野「そ、そうなの？まあセイバーがそう言うなら大丈夫かな。あつ！いま何時だろ？……げっ！もう8時じゃないか！やばいな、士郎に連絡しないと。……うわあ、着信が30件で、凜と桜にラニからだ。」

白野は凜に連絡を入れる。

プルルル……プルルル。

凜『遅い！なにやってんのよ！もうあんたが遅いからみんな先にご飯食べてるわよ！』

白野「す、すいません、とりあえず士郎の家向かっているから。後2、30分で着くけど、もう食べ終わったかな？」

凜『白野を待ってたから今食べ始めたばかりよ。早く来なさい、じゃないとなにも残らないわよ。』

白野「わ、わかった。とりあえずまた後で。」

凜『ええ、それじゃあね。』

白野「セイバー、今から友人の家に行くからしばらくは霊体化でいてくれないか？」  
セイバー「何と！むうう。せっかく奏者と再会したのに……むうう。納得い  
かん！」

白野「今は我慢してくれセイバー。後でちゃんと皆に紹介するからさ、な？」

セイバー「むうう。仕方あるまい、これでよいか奏者よ。」

セイバーは納得してないが白野の言葉で霊体化になる。

白野「よし。セイバー、今から友人の家に行くから付いてきて。」

セイバー「うむ、よかろう。では行くぞ奏者よ。」

ピンポーン。

白野「すっかり遅くなったな。はあ、もう食べ終わったかな？」

ガラガラ

士郎「よっ！遅かったな。とりあえず上がりな。」

白野「ああ、悪いな士郎遅くなって。」

士郎「気にするなよ、まあ俺はともかくありすちゃんだっけ？あの子が寂しがってたな。」

白野「……げっ！そうか。ありすに謝らないとな。」

士郎「そうだな、おくい白野が来たぞ。」

ドタドタ！

ありす「お兄ちゃん！わーい！お兄ちゃん！お兄ちゃん。」

白野を見や否やありすは白野に飛び付く。

白野「ぐふっ！あ、ありす、もうご飯は食べたのかい？」  
ありす「うん！」

凧「遅い！全く、なにやってたの。早く座りなさい。」

白野「すまない、あれ？土郎、藤村先生と間桐さんがいないけど？」

土郎「藤ねえとさくらは帰ったよ、二人は用事があるみたいだから。」

白野「そうか、ならちようどよかったな。皆に紹介したい人がいるから。」

土郎「？」

ラニ「あつ！白野さんその左手はひよつとして令呪ではないでしょうか？」

凧「えっ！あ、ほんとね！まさか！サーヴァントがいるのかしら!？」

白野「まあ色々あつてな、セイバー、出てきていいよ。」

セイバー「うむ、まさかこうして再会するとはな、久しいな凧達よ。」

凧「ちよっ！セイバー！セイバーじゃない！」

セイバー「む？凧が二人とな！……いや一人は金髪ではないか！どつち

が余の知る凧なのだ？」

凧「あ。セイバー、私が貴方の知る遠坂凧よこちらは今の時代の遠坂さんなの。」

リン「……………」

セイバー「ほう。聖杯よりある程度知識はあるがこの時代にも凧が居るとはな、まあ

よい、余は奏者と再会できたのだからな！」

士郎「……………」

セイバー「所で奏者よ、凜達にもサーヴァントはおるのか？」

白野「ああ、凜、ランサー達は？」

凜「外にいるわ。他のサーヴァントも一緒にね。」

セイバー「何と！ランサーとな？奏者よ余はランサー達に会いに行ってくるぞ。」

白野「うん、わかったよ、また後でね。」

セイバー「いや。まさかランサーに会えるとはな！では行ってくる奏者よ。」

セイバーは懐かしの自称ライバルでもあるランサーに会いに外に向かう。

凜「だけど白野君、どうしてセイバーの召喚できたのかしら？」

白野「ああ、実は……………ん？どうした士郎？ボートして？」

士郎「えっ!?ああ、白野、セイバー召喚したんだな、俺もセイバー召喚したけど……………」

何か似てないか？なあ、遠坂？」

リン「え、ええ、えーと、どうかしらセイバー？」

青セイバー「？そうでしょうか？私は気にしてませんが、それより士郎、ご飯のおかわりをお願いします。」



士郎「あ、ああ、ちよつと待って、白野もどんどん食べてくれよな。」

白野「ああ、それじゃさつそく、いただきまーす！」

ラニ「白野さん、さつき凜が話しましたけど。セイバーの召喚はどうして、後右肩に血がついてますが、もしかして怪我でもしてるのでしょうか？」

桜「！怪我！せ、先輩！見せてください！」

白野「ちよつ！桜、だ、大丈夫だから、コードキャストで治したから。」

凜「はあ！あんたコードキャスト使えるの？何時から？」

白野「あ、ああ、実は……」

士郎「慎二が！」

白野「ああ、幸い美綴は無事だったけど、これ以上一般人に被害が出ないためにも慎二を先に何とかしないと。」

リン「確かにそうね、まずは慎二のサーヴァントを倒すべきかしら？」

ラニ「間桐慎二のサーヴァントですか。確かクラスはライダーでしたね？真名が解ればある程度は攻略できるのですが。」

凛「そうかしら？白野の話だと正規のマスターじゃないのよね間桐君は、だったらライダー自身本来の力が出せてないはず、本来のマスターに戻る可能性は在るか無いかわからないけどそうなる前に叩けば倒せるんじゃない。」

リン「幸い私達にはサーヴァントが9騎もいる訳だし、慎二からしたら卑怯かもしれないけどそうも言ってられないし。」

桜「ですか間桐さんはしばらくは身を隠すと思います。なんせ私達に魔方陣の事が解除したとはいえ知られてしまいました。間桐さん自身学校に行けば私達に倒されると考えているはずですから。」

白野「慎二が身を隠せそうな場所はやっぱり自宅かな？それ以外には思い付かないけ

ど。」

ユリウス「案外間桐慎二は学校に来るかも知らん、岸波の話聞く限り間桐慎二はかなりの自信家だ俺達の事はたいしたことないと思っっているはずだ。」

士郎「ユリウスさんの言う通り慎二は学校に来るかもしれない、けどどうやって慎二のサーヴァントを倒す？流石に真つ昼間からは戦えないし、しばらくは慎二を暗くするまで泳がすか？」

リン「もし慎二に会えば私の使い魔を使うわ、後は夜になるのを待つて慎二を人気がないところに誘い込みましょう。誰が戦うかはその時になってからということではないかしら？」

士郎「そうだな、とりあえずはその方面でいこう。慎二が学校に来れば遠坂が使い魔で見張りをしてもらおう。だけでもし来なければ……」

ユリウス「俺が間桐慎二の家に行こう。お前達の学校が終わるまで見張りをしている。学校が終わる次第俺に連絡をしてくれ。」

リン「いいんですかユリウスさん。」

ユリウス「なに、このての事は慣れているからな。それでいいな岸波？」

白野「ングツ！えっ？なに？」

凜「はあ、岸波君、ちゃんと話は聞いてたかしら？」

白野「ご、ごめんなさい。食べることに夢中で……あつ！セイバーさんそれは俺が食べようとした卵焼き！」

セイバー「モグモグ、士郎ご飯のおかわりをください。」

白野「おのれ！（ひよい）パクっ！」

セイバー「あつ！白野、それは私が最後に食べようとした唐揚げ！ぐぬぬ！」

白野「うんうん？やっぱ士郎が作るご飯は旨いな！」

セイバー「士郎！唐揚げのおかわりをください！」

士郎「えっ！いや、もう無いよ。材料は残ってないし、また明日買い出しにいかない」と。

セイバー「なっ！そ、そんな。」

白野「お！デザートもあるのか、し、しかも俺が大好きな餡蜜だど！よし、ではさっそく。」

ひよい

白野「へっ？」

セイバー「モグモグ、モグモグ、さすがは士郎です。デザートも、モグモグ、美味です。モグモグ、すね。モグモグ、」

白野「なっ！餡蜜……。お、俺の餡蜜が、おのれセイバー！返せ！俺の、俺

の餡蜜を返せー！」

セイバー「白野、食卓は戦場です。何時何があるかわからない、ですので餡蜜は諦めてください。」

白野「なっ！く、くうう。ま、負けた。……がくつ。」

凛「なにやってんのよ。二人して。」

白野「だって、だって、餡蜜、俺の餡蜜が。」

士郎「わかった、わかったから。次の機会があれば作ってやるから。」

白野「ほ、本当か？士郎！や、約束だぞ！絶対だぞ！」

士郎「ああ、約束だ。」

白野「ひやつほーい！餡蜜！餡蜜！」

セイバー「ふっ、白野、また次回があつても餡蜜が食べれるかわかりませんよ？私が全て頂くのですから。」

白野「セイバーこそ、餡蜜どころか士郎の作る食事が食べれるかわからないからな。」

セイバー「フフフフフフ。」

白野「フフフフフフ。」

リン「あの二人は似た者同士なのかしら？」

ラニ「食べる事に関してはでしょうね。」

あります「ふわく。．．．。お兄ちゃん、眠い．．．。」

白野「あります、あつ、もうこんな時間か？土郎、そろそろ帰るよ。」

土郎「そうだな、もう遅いしお開きにするか。間桐さん後は俺が片付けるからもういいよ。」

桜「えっ？ですが．．．。」

土郎「大丈夫だよ、それにもうほとんど片付けが終わってるしね。ありがとう間桐さん。」

桜「は、はい、此方こそ食事にお呼ばれしてありがとうございます。」

凜「それじゃあ帰りますか。衛宮君今日はありがとう。また明日ね。」

シンジ「ごちそうさまでした。」

ユリウス「それじゃ明日一間桐慎二の家に行く。見つけ次第岸波のスマホにメールを送ろう。」

あります「眠い。お兄ちゃん抱っこ。」

白野「ハイハイ、土郎、今日はありがとな。また明日。ん？ラニはどこだろ？」

桜「ラニさんはサーヴァントの皆さんを呼びにいきましたよ。」

白野「そうか、遠坂さんもまた明日。それじゃおやすみ。」

遠坂「ええ。」

サーヴァント達と合流し帰宅する白野達。

凜達の家に行きありすをユリウスに預け白野は自分の家に帰る。

ガラガラ。

白野「ただいま、セイバー霊体化を解いていいよ。」

ネロ「む、よいのか？奏者以外の家族に見られても。」

白野「大丈夫だよ。今はこの家には俺しか住んでいないからね。」

ネロ「何と！奏者は一人で暮らしているのか……。奏者は色々事情があるのだな。」

白野「まあね、とりあえずセイバーは空いてる部屋を好きに使ってよ。何故か部屋の数は多いんだよなこの家は。」

ネロ「??何をいつているのだ奏者よ。余は奏者と同じ部屋であろう？して、奏者の部屋は何処だ？」

白野「へっ！いやいや、一緒の部屋は駄目だよ！部屋は好きな所でいいからさ。」

ネロ「何をいつているのだ奏者よ、月の聖杯戦争では同じ部屋であつたであろう！余は奏者と同じ部屋がよい！余は奏者と同じベットで寝るのだ！」

白野「いやいや！ダメダメ！流石に同じベットは、俺の隣の部屋で寝て、お願いしませぬ。」

ネロ「むっ！余は納得いかん！奏者と同じ部屋がよい！奏者と一緒に寝るのだ！」

白野「駄目！お願いします。別の部屋で寝てください。」

ネロ「むくく。……!!仕方がない。奏者よ、余は奏者の隣の部屋で眠るとしよう。奏者よ部屋に案内せよ。」

白野「ほ、本当か！ああ、わかった。こっちだよセイバー。」

白野はセイバーを自分の隣の部屋に案内する。

白野「ここだよセイバー。」

ネロ「うむ、うむ、ほお。なかなかよい部屋ではないか。ではな奏者よ。明日はシンジにそっくりな奴を共に倒そうぞ。」

白野「ああ、おやすみセイバー。」

別の部屋で眠ることに納得したセイバー。

白野は流石に同じ部屋はよくないと感じていたため、ホツと胸を撫で下ろす。

しかし、明日の朝白野の部屋は修羅場と化す。

白野はそんなことは微塵も思わず眠りにつくのであった。



）第9話  
完

## 第10話

おはようございます。

私は岸波白野、穂群原学園に通う高校生であります。

今日は天気が良くとても気持ちがいい朝です。

それでは今日も一日元気よく学校に……。

凜「何現実逃避してるのかしら？岸波君？」

白野「……………」

おかしいです。何故か朝早くから凜さん達が自分の部屋で仁王立ち状態で自分を見  
ています。

さらに自分は。パジャマ姿で正座をしているのです。

蒔寺「いや、まさか白野が金髪美人と一緒に寝てるなんてね。鐘、あんたライバル  
が多すぎね……………」

ドコッ！

蒔寺「グハッ！」

氷室「白野、これはどうゆうことだ？確かお前は独り暮らしのはずだが？」

白野「え、えっと、あの、彼女は居候と言うかなんと言うか。だ、だけど何もやましい事はないよ！ほんとですよ！朝目が覚めたら何故か右に彼女がいて左にありますがいで、てつゆーか何故ありますが自分のベットで寝てるの？」

桜「ありすちゃん先輩の部屋に入るなり先輩とセイバーさんが同じベットで寝てるのを見て『私も一緒にお兄ちゃんと寝る。』と言つて布団に入りました。」

白野「そ、そうですか。」

ネロ「ムフフ、奏者よく。くくく。」

ありす「くくく。ウフフ、お兄ちゃん、くく。」

桜「先輩は両手に花状態でしたね。」

白野「(こ)、恐い、皆の視線が恐い！や、やばい、ど、どうすれば)」

美綴「岸波？どうした？急に黙りこんで、ん？」

ガタガタガタガタガタガタガタガタ

凜「あら？どうして震えているの岸波君？」

白野「……………」

ラニ「今度は顔が青くなりました。何故でしょうね？」

白野「あ、あの。」

凜「ん？何かしら岸波君？」

白野「ひ、ひいっ！」

氷室「どうした？何故怯えてる？別にやましい事はないんだろ？とりあえずお前が話したいことがあるなら話してみたらいい。」

美綴「早くしろよ。でないと学校に遅れるからな。」

白野「あ、あのですね。そ、その、何故皆さんが自分の部屋にいるのかなと思ひまして。何時もならチャイムが鳴るはずなのに、おかしいなと思ひまして。」

凜「白野、あんたユリウスに合鍵を渡して居るでしょ。それを預かったの。ま、たまには私達があんたを起こしてあげようかなと思つてね。時寺さん達はたまたま会つたら、彼女達もあんたを迎えに行くみたいだったから一緒にとね。」

氷室「とりあえず白野よ、学校があるから着替えるべきだろう。私達は外で待つていよう。」

時寺「鐘、随分あつさりしてるわね。白野の言葉信じてるの？」

氷室「まあ、それなりに付き合ひが長いしな、白野は嘘をつくことはまずない。だから、セイバーさん？だっけか？彼女と一緒に寝ていたのは事実だがな。フフフ。」

白野「(こ、恐い！だ、誰か助けて！あ、シンジって無理だな、桜は、何か微笑んでるけど目が微笑んでない！ほ、他は、三枝は、あつ、駄目か、凄くおろおろしている)」

凜「はあく。まあいいわ。あまり白野を追い詰めても仕方ないしね。私達は外にいる

からさつさと着替えなさい。あ、そうだ、ほらあります、起きなさい。学校に遅れるわよ。」

あります「むく。やつ！」

ラニ「やつ！つて、白野さんが着替えられませんかよあります。」

あります「んく、あ、お兄ちゃん！おはよう。」

チュツ！

白野「んっ！」

女性陣達

「……なっ!?!」

あります「んく、お兄ちゃん！」

白野「あ、あります！な、何を！……つ！殺気！」

凜「白野君？」

ラニ「白野さん？」

桜「先輩？」

氷室「白野？」

美綴「岸波？」

白野「ち、違うぞ！こ、これはありますが、ほらあります離れて、俺は着替えないといけ

ないから、ね？」

あります「お兄ちゃん大好き！」

蔦寺「いや、白野、朝からいい修羅場つぶりだわ。由紀香、先に学校に行こうか。」  
三枝「えっ、あ、うん、それじゃ岸波君私達先に行くね。」

白野「あ、待って！行かないで！お願いします！行かないでください！」

白野の言葉で蔦寺が近寄る。

蔦寺（とりあえず鐘達に何でも言うこと聞くといいなさい。たぶんそれで助かると思  
うからね）

白野（な、何でも言うこと聞くと？だ、だけど本当にそれで助かるの？）

蔦寺（あら？私が信用できないの？大丈夫よ、ま、その後は白野次第だけだね）

白野「……………」（わ、わかった。言ってみる）

蔦寺（うんうん、あ、貸し1つだから）「……………」  
由紀香、とりあえず先に学校行こ  
うか。」

三枝「うん、それじゃまた後でね。」

蔦寺と三枝がいなくしばらくして姿勢を正す白野。

白野「え、えくと、あの、とりあえず今回は、す、すいませんでした！まさかセイバーが自分のベットに入ってくるなんて思いもよらず、そのせいで皆さんに不愉快な思いをさせてしまい誠に申し訳ありません！つきましては皆さんの言うことを何でも受け入れますのでどうか許してください！お願いします！」

凜「何でも？」

ラニ「……………何でもですか？」

桜「何でも……………」

氷室「ほう？」

美綴「!？」

白野「何でもは流石に言い過ぎですが自分が出ることなら喜んで引き受けます！」  
セイバー「くくく。ムフフ、奏者よ、くくく。」

白野「．．．．．」  
　　〔学校内〕



士郎「オツス白野って！どうした！な、何があつたんだ？目が死んでるみたいだぞ！はっ？ま、まさか慎二が!？」

白野「し、士郎？お、おはよう、うん、大丈夫だよ。うん、大丈夫ですよ。」

士郎「お、おお、（な、何かこの世の終わりみたいなの顔つきみたいなの、そ、そうか、ならいいけど。」

凜「おはよう衛宮君。んっ、ほら白野、シヤキツとしなさい！朝のことはもう済んだんだから。あんたは今朝言ったことを忘れなければそれでいいの！わかつたかしら？」

白野「ひ、ひい！は、はい！わかりました凜さん！」

士郎「……………。白野、何があつたかは聞かないが……………。これだけは言わせてくれ。」

白野「し、士郎？」

士郎「頑張れ。」

白野「し、士郎……………。あ、あれ？何か目から涙が……………。」

士郎「頑張れ！白野。」

白野「あ、ああ、ありがとう士郎、やつぱ持つべきものは親友だな。」

士郎「当たり前だろ！俺達は親友だろ。」

白野「ああ！俺、頑張るよ！」

士郎「うんうん、何時ものお前に戻ってきたな！」

白野「サンキューな士郎、今度俺特製の麻婆豆腐をご馳走するよ！」

士郎「いや、それはいい。」

白野「なっ！」

凜「何やってんだか、あつ、そうだ衛宮君、さつきユリウスから連絡が来て間桐君まだ家から出てないみたいよ。たぶん間桐君は学校には来ないと思うわ。」

士郎「えっ？そうなんだ。わかった、遠坂には後で俺から伝えとくよ。後は学校が終わり次第皆ユリウスさんと合流しよう。」

凜「そうね、もしも間桐君が遅刻で来たら一応私も使い魔を出せるからそれに対応しましょう。」

士郎「ああ。」

ガラガラ。

藤村「はい、皆席に着いて、ホームルーム始めるわよ！あ、後間桐君は体調不良で休みだから、衛宮君、悪いんだけど放課後職員室に来てくれないかしら、今日渡すプリ

ントを届けて欲しいの、お願いね。」

士郎「あ、はい。わかりました。」

白野「ど、どうして誰も俺が作る麻婆豆腐を認めてくれないんだ。あんなに美味しいのに……。」

〈放課後〉

白野「なあ凜、ユリウスが指定した場所は此処で合ってるの？」

凜「ええ、ユリウスからのメールではこの付近にいるみたい、何処にいるのかしら？」  
ラニ「あつ！白野さんユリウスがいました。」

ユリウス「来たか岸波。皆揃っているな。」

白野「ユリウス！すまないな、朝から慎二の尾行何かさせてしまい。」

ユリウス「昨日も言ったがこういう事は慣れているからな、気にするな岸波。」

士郎「ところでユリウスさん、慎二は今何処に？」

ユリウス「間桐慎二はこの森の奥にいるはずだ。どうやらアインツベルン城に向かったみたいだな。」

リン「アインツベルンって！……！なるほどね。慎二の奴イリヤと手を組みに交渉しに行ったのね。ま、断られるでしょうけど。」

凜「それ以前にアインツベルン城にたどり着けるのかしら？確かアリ、じゃない、キャスターの話ではイリヤって娘のサーヴァントはバーサーカー、アインツベルン城にたどり着く前にバーサーカーに始末されてたりして。」

白野・士郎「……」

ラニ「ところで皆さん、間桐慎二を探すのにあたってはどうしましょうか？」

ユリウス「手分けして探すべきだな。まとまって探すよりは効率がいいだろう。」

リン「そうね、それじゃあ士郎、あなたは私と行きましょう。岸波君、私達はアイン

ツベルン城に最短のルートで慎二を探すわね。それじゃまた後で。」  
リンは士郎と共に森の中に消えていく。

凜「さて、私達はどうしましょうか？シンジとありすは流石にこんな暗い森の中に連れていけないし、ユリウスとシンジとありすは此処にいてもらおうかしら？ユリウス、二人をお願い出来るかしら？」

ユリウス「構わんが、いいのか？俺も間桐を探さなくて？」

凜「あんたは朝早くから間桐君を尾行してもらったからね、此処で休んでなさい。白野、それでいいわね？」

白野「うん、ユリウスには色々と助けてもらってるしな。少しは休んだ方がいいだろう。」

ラニ「それでは私達は二手に別れましょう。白野さんは私と一緒に。」

白野「えっ？あ、うん。」

ラニ「では、行きましょうか白野さん。」

ありす「私もお兄ちゃんと一緒に行く！」

白野「駄目だよありす、いい子だから此処にいてね。ね。」

ありす「むくく！」

白野「キヤスター、ありすのことお願いね。」

アリス「ええお兄ちゃん、ほらあります、お兄ちゃんの邪魔しちゃダメよ。私達は此処でお兄ちゃんの帰りを待っていきましょう。」

ありす「……………うん。」

白野「うんうん、いい子だなあります、ユリウス、シンジとありすを頼むな。」

ユリウス「心配するな、こっちにはサーヴァントが三騎いるからな。」

白野「そうだな、それじゃラニ、行こうか。」

ラニ「はい、では皆さんまた後程。」

白野とラニは士郎とリンとは別のルートから森へと消えていく。

凜「……………はっ！しまった！ラニめ、ちゃっかり白野と行動するとは。」

エリザ「くっ！ラニの奴。凜、何やってるのよ！ラニに先を越されたでしょ！」

凜「う、うるさい！はあ、まあいいわ。桜、私達も間桐君を探しに行きましょう。」

桜「……………。」

凜「さ、桜？桜？」

桜「へっ？あ、す、すいません凜さん、では、ユリウスさん、シンジさんとありすちゃんをお願ひします。」

く白野達がユリウスと合流する30分程前のアインツベルン城内く

イリヤ「………。はあ、悪いけど私は貴方と手を組む気はないから、他をあたりなさい。」

慎二「なっ!?!お前アインツベルン家の人間だろ!御三家の1つ間桐家と手を組めるんだ、それに聖杯戦争で勝利すれば聖杯を分けてやるって言ってるんだよ、いい条件だと思うけどね。」

イリヤ「間桐家?………。ああ、あの落ちこぼれのマキリね、えくと、貴方、慎

二だったかしら？昔のマキリならともかく今のマキリは聖杯戦争の仕組みがわかってないみたいね。なんとなく城に招き入れたけど下らない話です。私の前から消えなさい。」

慎二「はあっ！お前馬鹿なのか！この僕と手を組めるんだぜ。お前みたいな子供が聖杯戦争に生き残れないから助けてやると言つてんだろ！はあ、これだからお子様は……。」

イリヤ「……はっ？馬鹿なのは貴方でしょ？マキリの人間、所詮貴方は仮初めのマスター、そうね、今すぐ消してあげようかしら？バーサーカー。」

慎二「なっ!？」

イリヤ「選ばしてあげる。この城から消えるかバーサーカーに消されるか。さあ、選びなさい。」

慎二「……ちっ！行くぞライダー！おい！お前覚えてろよ！僕と組まなかったことを後悔させてやるからな！」

イリヤ「後悔？逆にマキリの蟲と組む方が後悔してしまうわ。」

慎二「ぐうっ！」

イリヤ「あ、そうだ、マキリの蟲さん、帰りは気を付けなさい。私達以外にもこの森にはマスターがいるみたいだから。」



慎二「……………なっ！」

くアインツベルンの森く

慎二「クソツッ！あのガキ、せつかくこの僕がわざわざここまで足を運んだのに……。」  
ライダー「マスター。どうやらイリヤスフィールが言った通りこの付近にマスターがいます。それも一人ではなく複数いるみたいですね。」

慎二「ほっとけばいいさ、僕が通ったルートは誰にも見つからないように細工してるからな。」

ライダー「……………」

慎二「そろそろ出口付近だな、何してるライダー！さっさと来いよな！たくつ！使えないサーヴァントだな。」

ライダー「……………?!マスター！」

慎二「え？」

ガキンツ！

慎二「な、何だ！クソツ！誰だ！」

ドレイク「おや？受け止めたかい。どうやらお前さんのサーヴァントは周囲を警戒してたみたいだね。」

慎二「サーヴァント？い、何時の間に！」

李「細工をしたみたいだが儂からすれば大したことはないのな。」

ドレイク「アサシン、邪魔するんじゃないよ。これは私の獲物だからね。」

李「カツカツカツ！邪魔はせんさライダーよ。だが、観る分には問題なからう？」

ドレイク「好きにしな、さて、間桐慎二のサーヴァント、悪いが此処で消えてもらおうよ。心配しないでいいさね、私とタイマン勝負といこうじゃないか！」

ライダー「……………」

完 第10話

## 第11話

ドレイク「そくらよっ！」

ライダー「クツ。．．．．．やりますね。ですが．．．．．」

ジャララ．．．．．

ドレイク「!?ちっ!まったく。鬱陶しいね!マスター!周りを警戒しときな!何時ライダーの武器が飛んでくるかわからないからね!」

シンジ「あ、ああ。(クソツ!僕だつてマスターなんだ!少しでもライダーの手助けができれば)．．．．．あつ!そうだ!」

シンジはスマホを取り出すスマホのなかにはコードキャストがいくつか入っている。  
シンジ「(岸波から貰ったコードキャスト。これがある!)．．．。」

ドレイク「マスター!」

シンジ「えっ!?!」

ガキンツ!

ドレイク「たくつ！大丈夫かいマスター！しっかりしな！」

シンジ「あ、ありがとうライダー。よし！ライダー！今から好きなだけ暴れていいよ。僕が全力でサポートする！」

ドレイク「へえー。言うじやないか、それじや遠慮なくいかせてもらいよ！」

アサシン「あのシンジ、本当に月の聖杯戦争でのシンジなのか？・・・ふむ、どうやら月の裏でユリウス達と何があつたのか？後でユリウスに聞いてみるかのう。」

ドレイク「さあライダー！さっさとけりを着けようじやないか！あんたも本気でかかってきな！」

ライダー「・・・。」

慎二「ちっ！なにやつてんだライダー！早くそいつを始末しろよ！たくつ！使えないサーヴァントだな！」

ライダー「了解しましたマスター。・・・行きます。」

ライダーはドレイクに攻撃を仕掛ける。

ドレイクは二丁拳銃でライダーを迎え撃つ。

互いに攻撃し攻撃を避け弾きながらの攻防戦になる。

そんななかシンジは機会を待っていた。

相手のサーヴァント、ライダーの隙がないかを。

ドレイク「あはは！楽しいねえ。ほらライダー！足元がお留守だよ！」

ライダー「なっ！ぐっ！……」

シンジ「!?（今だ！）コードキャスト《shock》！」

ライダー「がっ！」

ドレイク「!?……へえ、やるじやないかマスター！そんじや止めと行こうかい。」

ドレイクの言葉と同時に4つの砲台が現れる。

ドレイク「砲撃用意！藻屑と消えな！」

ライダー「（か、体が動かない？このままでは！で、ですが、わ、私はまだ負けてはいけない！負けられない！）」

ドレイク「!?」

ライダー「が、があああああああ！」

ドンッ！

ドレイク「……」

ライダー「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、……まだです。まだ私は……」

ドレイク「こいつは驚いたね。あの常態から動けるなんて。けどライダー、あんたかなりの致命傷だね。カルバリン砲を避けきれなかったみたいだ。」

ライダー「はあ、はあ、ええ、ですが私はまだ負けてません。はあ、負けるわけには

いけないのです。彼女の、．．．の為に、負けられないのです！」

慎二「はあ！なにやってんだライダー！なにガキのサーヴァントごときにやられてるんだ！このハズレサーヴァントが！」

ライダー「．．．．．。マスター、宝具を解放しします。ですので出来るだけ離れてください。」

慎二「ふ、ふざけるな！ザコのサーヴァントに宝具を使うなんて何考えてんだ！」

ライダー「ライダー、これが私の全力です．．．．。」

ライダーは瞬時上に飛ぶドレイクは上を見上げるとそこに翼がある白い馬に股がるライダーの姿が現れる。

ライダー「．．．．．。」

ドレイク「こいつは！ちっ！マスター！こつちも宝具を使うよ！構わないね！」

シンジ「あ、ああ、宝具の解放を許可する！ライダー！あのサーヴァントを倒せ！」

ドレイク「了解マスター！」

ライダー「行きますよ天馬。」

ライダーはドレイクに宝具を放つため魔力を全開放するまたドレイクも宝具解放するため魔力を集中させる。

ドレイク「さあ！いくよ！．．．アタシの名前を覚えて逝きな！ー」

ライダー「騎英のー！」（ベルレーー！）

ドレイク「テメロツソ・エル・ドラゴー！ー」

ライダー「手綱………!!!」（フオーン！）

ドレイク「太陽を落とした女、つてな！」

ドレイクとライダーとの宝具、《黄金鹿と嵐の夜》（ゴールデン・ワイルドハント）と《騎英の手綱》（ベルレフオーン）がぶつかり合う辺り一面の森が爆風でなぎ倒される……。

シンジ「うわ、うわ、と、飛ばされる、ライダー！」

李「しつかりせんかシンジ！ほれ、儂に掴まれ。」

シンジ「あ、ああ、ありがとうアサシン。」

李「カツカツカツ！構わんさ。……さて、宝具のぶつかり合いはどうなったかのう。」



ドレイク「・・・・・・・・・・。」

ライダー「・・・・・・・・・・。」

シンジ「あ、ライダー！」

ドレイク「よっ！マスター！大丈夫かい？」

シンジ「え、あ、うん、それよりも決着はどうなったの？」

ドレイク「アタシの勝ちさね！なあライダー!？」

ライダー「・・・・・・・・ええ、そうですね。どうやら私の敗けみたいです。さすがはイ

ギリスの大海賊エルドラゴいえ、フランシス・ドレイク、貴女の勝利です。」

ドレイク「そいつはありがとよ。ただ、もしあんたが正規のマスターとであつたら敗けはアタシだろうよ。ゴルゴン三姉妹の末妹メドゥーサ、あんたが乗っていた天馬はメドゥーサの仔だからね。」

ライダー「・・・・・・・・・・。」

ドレイク「そんなやとつと消えなライダー。何時までも大怪我のままいると苦しい  
だろ？」

ライダー「そうですね。」

ライダーはそう言うのと夜空を見上げる。

ライダー「(ああ、星が綺麗ですね。すみません……、私は貴女を守れませんでした。貴女を最後まで守ろうと誓ったのに、どうか、どうか……を守ってくれる方が現れますように……)」

そしてライダーの姿が消える。

ドレイク「はあく、疲れたね！じあなライダー、どうせならいい航海でもしてきな。」

シンジ「ぼ、僕も疲れたよ！ライダーが僕の魔力をかなり持っていったせいで。」

ドレイク「いいじゃないかシンジ。アタシ達が勝つたんだからさ！ほら、しっかりとしな！」

シンジ「痛い、痛い、背中を叩くな。」

ガサツ！

シンジ「!？」

慎二「な、何で！おい！ライダー！どこだライダー！クソツ！どうなってるんだ！つて！熱っ！あ、ほ、本が！僕の本が燃えてる！あ、き、消えろ！あ、あ、ほ、本が、僕の本が。」

シンジ「間桐慎二!」

ドレイク「なんだ、あんた生きてたのかい。」

慎二「な、お、お前ら。おい!ライダーはどうした!」

ドレイク「確か白野は間桐の令呪は本がそうなみたいなことを言ってたね、ねえワカメ頭、あんた解ってるだろ、本が消し炭になったんだ、あんたのサーヴァントはいなくなっただよ。要はあんたらの負けなんだよ。」

慎二「ま、負け、僕が、この僕が?クソツツ!ライダーなにやってんだ!何あつさり負けてんだクソツツ!クソツツ!使えないサーヴァントが!こんなのは全然違う!シナリオが違う!とんだハズレサーヴァントだ!あんなごみサーヴァントじゃなきや僕が勝ってるんだ!」

シンジ「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ドレイク「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

李「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

慎二「はあ、はあ、な、何見てるんだよ、何で僕がこんなめに!そうさ、あいつのせいで!あのクズライダーのせいで、あんなサーヴァントじゃなきや僕が、僕が・・。」

ドレイク「はあ、五月蠅い坊やだね、ほら、さっさとこの場から消えな。それともあれかい?アタシに殺されたいのかい?」

慎二「なっ!? ぼ、僕を殺すって! ふ、ふざけるな! 僕はサーヴァントがいなんだぞ! そんなのおかしいだろ!」

ドレイク「サーヴァントがいなくてもあんたはマスターだろ? 確かマスターが死んで決着はつくんだよね? ねえマスター?」

シンジ「え、う、うん。」

李「カッカッカッ。さて、どうする間桐とやらよ? 早く逃げんとライダーに殺されるぞ。」

慎二「ひ、ひい! . . . ! ぞ、そうだ! なあ! お前、僕のサーヴァントにならないか? そんなガキより僕のサーヴァントになれば聖杯戦争で勝ち残れる! そうだ! そうしよう! なっ! いい話だろ!」

ドレイク「なんだいこいつは、まるで月の聖杯戦争時のマスターみたいだね。いや、まだ月の聖杯戦争でのマスターの方がましか?」

シンジ「. . . . .」

慎二「ほら、僕のサーヴァントになれよ! 心配ないさ、ちゃんと聖杯は分けてやるからさ! なっ!」

ドレイク「はあ、馬鹿だねこいつは、そうだね. . . 。今から10数えるからその間に消えな! じゃないとこいつで蜂の巣にするよ。10、9、. . . . .」

ドレイクは慎二に二丁拳銃を向ける。

慎二「ひっ！な、ま、待ってって！僕のサーヴァントになれるんだぞ！そんなガキよりは僕の方がお前を上手く使えるからさ！なっ?!」

ドレイク「8、7、・・・。」

慎二「クソツッ！そ、そうだ！なあ！あんた、確かアサシンだよな！僕のサーヴァントにならないか？」

李「カッカッカッ！貴様みたいなマスター、興味がないのう。すまないが他を当たれ。」

ドレイク「6、5、・・・。」

慎二「・・・。くっ！お、覚えているよ！必ず後悔させてやるからな！」

ドレイク「4、3、・・・。」

慎二「ひ、ひい、は、早く逃げないと！」

ドレイク「2、1、・・・。」

ガサッ！

ありす「ほわ、木が沢山倒れてる！すごい！」

シンジ「あ、ありす！ば、馬鹿、何で此処に？」

アリス「ほらあります、危ないからこっちに來なさい。」

慎二「(あ、あのガキは確か……!!)は、はは!」

ドレイク「!?あります!そこから離れな!」

あります「??」

ガシツ!

あります「ほえ?」

慎二「あはは!お前ら、そこから動くなよ!こいつがどうなっても知らないぞ!」

シンジ「……っ!」

アリス「あります!コラツ!ワカメ頭、私のありすになにする気よ!」

慎二「なっ!だ、誰がワカメ頭だ!って!?!ガ、ガキが二人?えっ?同じ顔って!?!」

ドレイク「……。」

李「……。」

慎二「ま、まあいい、お前ら動くなよ。このガキは僕がちゃんと助かる為に預かっておく!いいか!そこから動くなよ!」

ユリウス「ちっ!すまない。俺が少し目を離れたせいで。アサシン、ありすを助けられるか?」

李「間桐とやらが少しでも隙を見せればいいのだが。」

ドレイク「あくあ、やつちまったね。あんた、その娘が誰なのか判つてんだらうね？ そんなことしたらただじやすまないよ？」

慎二「だ、黙れ！……。そうかよ。そんなにこのガキが大事なのか。はは、だつたらお前、僕のサーヴァントになれよ、それでこのガキを解放してやるよ。」

李「あー、間桐とやらよ、あります嬢を解放した方がよいぞ。でないと、んぐ、」

ドレイク「あははつ！ 間桐慎二、さつさとありますを置いて逃げな。じやないと酷い目に遭うよ。」

あります「んぐ、はぐなぐしぐてぐ。ワカメ頭いぐやぐ。」

慎二「う、五月蠅い！ 黙れガキ！」

ユリウス「んつ！ あく、なんだ、間桐慎二よ、その、あれだ、とりあえずありますを離そうか。」

シンジ「うんうん、うんうん。」

アリス「あくあ、ワカメ頭死んじやうのかな？」

慎二「？、？、な、なんだよ！ 何、えつ？」

ガシツ！

慎二「へつ!!？」

白野「慎二！ お前、何やってんだ！ ああ！ 今すぐありますを離せ！」

慎二「なっ！き、岸波!?っ！痛い、う、腕が！は、離せ！ぎやつ！や、止め、う、腕が折れる！」

白野「ありすを離せて言ってるんだ！」

慎二「わ、わかった！わかったから！あ、腕が！腕が！痛い、痛い、だ、誰か、た、助け……。」

ありす「ほえ？あ、お兄ちゃん！わくわく！」

白野「ありす！大丈夫かい。何処も怪我してない？」

ありす「うん！大丈夫だよ！」

白野「よ、良かった。とりあえずアリスの所に行きなさい。ねっ。」

ありす「はくわい。」

ありすはアリスの所に走り出す、そして白野は慎二に振り向き……。

白野「慎二！お前、誰に手を出したか判つてんだろな!?ぶっ飛ばしてやるから覚悟しろ！」

慎二「ま、待って！な、なんだよ、ちゃんとあのガキは解放しただろ！」

白野「……。」

慎二「ひ、ひいた、助け、誰か、こ、殺される！誰か。」

白野「……。」



ラニ「白野さんストップです。そんな怖い顔だとありますが怯えますよ。」

白野「……. . . . . なっ！あ、あります？大丈夫だよ俺は怖くないよ。ねっ。」

あります「んっ、うん！お兄ちゃんは怖くないよ！」

白野「あります！」

白野はありすに近寄り抱きしめ頭を撫でる。

あります「〜♪」

セイバー「むうっ。奏者よ！何をしておる！ありすより余の頭を撫でるがよい！あり

すよ、奏者は余の奏者だからな！」

あります「違うもん！お兄ちゃんは私のお兄ちゃんだもん！」

セイバー「むうっ。」

あります「むっ。」

ラニ「まったく、何やってるんですか？所でシンジ、間桐慎二のサーヴァントがいま

せんが？」

シンジ「間桐のサーヴァントはライダーが宝具で倒したよ。もう消えていないよ。」

ラニ「そうですね。やはり先程の爆破音はライダー同士の宝具でしたか。」

凜「あ、いたいた！ん？何やってんのありますとセイバーは？」

あります「べえっ。お兄ちゃん抱っこして。」

白野「はいはい。」

セイバー「なっ！ありすよ！ずるいぞ！そ、奏者よ余も抱っこだ。」

白野「えっ?!いい、いやさすがに二人同時は無理だよセイバー。」

セイバー「なっ！あ、ありすめ！早く奏者から離れないか！」

ありす「嫌っ！」

セイバー「むう。」

凜「はあ。あ、そうだ。さっきの爆破音はライダーが？」

ラニ「みたいです。間桐慎二のサーヴァントは消えていないみたいです。」

桜「あれ？間桐さんは何処に？さっきまでいたはずですが？」

ジャンヌ「ああ、それならさっき逃げましたよ。まつ、どうせ負け犬ですからほっときましょう。別にいてもいなくてもどうでもいいのですから。」

ドレイク「あははっ！確かにアヴェンジャーの言うとうりだね！」

李「サーヴァントのいないマスターなど捨て置けばよいではないか。」

凜「それもそうね。そうだ桜。悪いけど衛宮君に連絡して頂戴、間桐君のサーヴァントはシンジとライダーが倒したって。」

桜「あ、はい。わかりました。」

凜「でもまさかシンジがやるとはね。所で間桐君のサーヴァントの真名は何だったの

かしら？」

シンジ「えーと、確かメドゥーサだったかな。」

凜「メドゥーサねえ。とにかくシンジ、ライダー、よくやったわ！偉い偉い。」

シンジ「なっ！あ、頭を撫でるなっ！」

凜「なによ。せつかく誉めてあげてるのに。」

桜「凜さん、衛宮さんに連絡しました。向こうも今から此方に向かうみたいです。」

凜「そつ、それじゃ二人を待ちますか。所であの三人は何時までああしてるのかしら？」

セイバー「むうう、馬鹿者！ありすよいい加減奏者から離れないか！奏者も奏者でありすを下ろさぬか！」

ありす「嫌っ！お兄ちゃんは私と一緒になの！べえう、」

セイバー「むむむっ！そ、奏者！ずるいぞ！ありすばかり、余も抱っこしてくれないと、な、泣くぞ！」

白野「ちよっ！セイバー？あ、ありす。もういいかな？このままだとセイバーが、ねっ？」

ありす「~~~~~♪お兄ちゃん♪」

セイバー「……………ぐ、ぐすっ！」

白野「セ、セイバー？だ、誰か、助けて！お願いします。」  
桜「あはは。」

く第11話く

完

## 第12話

「教会」

可憐「暇ですね。」

マルタ「暇な事は良いことですよ。……しかしこの日本茶は美味ですね。マスター、もう一杯宜しいでしょうか？」

可憐「マルタ、貴女飲みすぎです。もうお茶の葉がありませんよ。また明日買いに行かないと。」

マルタ「なっ!？」

可憐「全く、はあく、暇です。聖杯戦争の監督者はこんなものでしょうか？」

マルタ「!？」。マスター、サーヴァントが一騎消えましたよ。どうやらライダーのようですね。」

可憐「ライダーですか？フム、でしたらこの時代のマスターである間桐慎二もしくは2030年から来た間桐シンジのどちらかでしょうね。どちらかわかりますか？」

マルタ「……」。そうですね。後30分程でわかりますよ。どうやらライダーのマスターさんはこの教会に近づいていますから。」

可憐「そうですか。教会に来ると言うことはこの時代の間桐慎二ですね。」

マルタ「ええ、もし2030年の間桐シンジさんなら白野様達が最後まで守りますからぬ。」

可憐「では間桐慎二が来るまで此処にいますか。」

バンツ!

慎二「はあ、はあ、はあ、おい!誰かいないのか!」

可憐「おやおや、随分騒がしいですね。ようこそ間桐慎二さん。いや、聖杯戦争のマスターさん。・・・で?どの様なご用件でしょうか?」

慎二「お前、監督者だよな!だったら話が早い。僕はもうサーヴァントがいらないんだ。」

だから今すぐ保護しろよな！そのための監督者だろ。」

可憐「そうですね、わかりました。ええ、ええ、大丈夫ですよ。丁重におもてなしますよ。なにせ貴方は聖杯戦争の一人目の敗者なのですからね。」

慎二「えっ？一人目？う、嘘だろ？そんなはずは？だって僕はマスターだろ、それも優秀なマスターだ！そんな僕が一人目の敗者だなんて、嘘だ！そんなはずは！」

可憐「優秀なマスター？貴方みたいな仮初めのマスターがですか？可笑しなことを言いますね。とりあえずは貴方は敗者です。聖杯戦争が終結するまでこの教会で保護させてもらいます。」

慎二「はあ!?聖杯戦争が終わるまで教会にいないといけないのか？ふ、ふざけるな！僕はもうマスターじゃないんだろ？何で聖杯戦争が終結するまで教会にいないといかないんだ！」

マルタ「今晚は間桐慎二さん。んっ？マスター？何故彼は興奮してるのですか？」

可憐「保護するにあたりワカメさんに全てを説明したからだ。」

慎二「なっ！だ、誰がワカメだ！」

マルタ「そうですね、………。間桐慎二さん、いいでしょうか？」

慎二「な、なんだよ。」

マルタ「例え敗者であろうと貴方は聖杯戦争に参加したマスターです。それが仮初め

であろうと。そして貴方は敗北を認め自らこの教会に保護されに來ました。ですが………」

慎二「……な、何。」

マルタ「私達は貴方が敗者だと認めています。が今聖杯戦争に参加している他のマスター達は貴方がリタイアしたことは知りません。例え知ったとしても、例え貴方が敗者だと説明してもマスターであった以上は貴方を他のマスターもしくはサーヴァント達は始末する可能性は高いでしょう。」

慎二「なっ！は、敗者だと！く、くそ！ジジイに知られたらどうなる。……だ、駄目だ！み、認めない！僕は優秀なマスターだ！そ、そうだ！もとはといえばあんな三流サーヴァントを超越すからいけないんだ！もつとちゃんとしたサーヴァントであれば僕が優勝してんだ！」

可憐「……？」

マルタ「マスター？この方はお馬鹿さんですか？」

可憐「保護するのは止めたほうがいいのかしら？」

慎二「おい！お前！」

可憐「？何でしょうか？」

慎二「サーヴァントを超越せ！あんなザコサーヴァント何かよりもつと一流なサー



ヴァントをだ！」

可憐「……………はい？」

慎二「さつさとしろよな！使えない監督者だな！さあ！早く！」

マルタ「はあく。間桐慎二、サーヴァントは一人に付き一騎までですよ。まあ、例外もあるでしょうが。ですが貴方みたいな元マスターに……………」

慎二「黙れ！ルーラーが……………！そうだ！お前、お前だよ！ルーラー！僕のサーヴァントになれ！その方がいいだろう！なんせ僕は優秀なマスターだからな。この僕がお前を使ってやるんだ！ありがたいと思えよな！」

マルタ「……………」

可憐「……………」

慎二「なにやっつてんだルーラー！さつさと令呪を寄越せよな！使えないサーヴァ……………」

ザクツ！

慎二「えっ!？」

マルタ「!？」

可憐「!？」

??「……………五月蠅い雑種が。」

く岸波邸く

白野「はあく、疲れた。」

凛「お疲れ様白野、ありす達とセイバーはもう寝たのかしら？」

白野「ああ、俺の部屋で熟睡してるよ。」

凛「そう、ねえ白野、とりあえず私も今日は此処に泊まるわ。何か嫌な感じがするの

よね。」

白野「はい？えっ？いや、でも明日学校だろ？着替えや制服は？」

凜「大丈夫よ、桜が私の着替えを取りに帰ってるし。」

白野「「そうですか。」

凜「何よ？嫌なの？」

白野「嫌じゃないさ。部屋数は多いし、好きな部屋で寝ていいよ。」

エリザ「だつたら白野、私と一緒に寝ましようよ、なんなら私が添い寝してあげるわ。」

凜「急に出てくるな！全く、とりあえず桜が来るまでお茶にしますか？白野、台所は何処かしら？」

白野「いいよ、俺が用意するから。適当にくつろいでてくれれば。」

ピンポン

白野「あ、桜かな？ちよつと待ってて。」

凜「はいはい。」

エリザ「でもあれね凜、白野の家ってかなり広いわね、いつそ私達も此処に住む？」

凜「それもいいかもね。まあ、そうなれば私だけじゃなく桜やラニも一緒に住むと思うけど。」

白野「凜、桜が荷物を何処に置くのか教えて欲しいみたいだけど、どうする？」

凜「ああ、とりあえずその辺でいいわ、ありがとう桜。」

桜「いえ、あとありすちやんの着替えも置いときます。」

エリザ「?ねえ桜、何か荷物が多くない?」

桜「私の着替えも有りますから。あ、先輩、台所は何処でしょうか?今お茶の用意をしますね。」

白野「ああ、俺がするよ。ちよつと待つてて。」

桜「えつ?でも。」

白野「いいから、いいから、桜達は座つて待つてて。」

桜「は、はい、ありがとうございます先輩。」

凜「ラニは来なかつたのね?」

桜「はい、何でも近いうちに先輩とお泊まりデートをすると約束したみたいです。そのためのお色々どどの様な所が良いのか調べるみたいです。」

凜「なつ!お、お泊まりデート!?!ラニの奴いつの間に、あ、あの時か!?!」

エリザ「なつ!白野とお泊まりデートですつて!ワカメ男を探すときに約束したのね!」

白野「ん?何?あ、桜、悪いけどお茶運ぶの手伝ってくれないか?」

桜「はい。」

凜「白野君、ちよつといいかしら？」

白野「えっ？な、何でしょうか？」

凜「貴方、ラニとお泊まりデートの約束をしたみたいね？ふくん、へえ、あんな可愛い子とお泊まりデートですか？ふくん。」

白野「お、お泊まりデート!?!いやいや、ラニはデートをしてほしいとだけしか聞いてないけど。」

桜「ですがラニさんは『白野さんとお泊まりデートの約束をした』とおっしゃってましたが。」

白野「……………!あつ？ま、まさか？」

く回想アインツベルン城の森く

ラニ『白野さん少しよろしいでしょうか?』

白野『ん?何?』

ラニ『この前の早朝の約束をしたと覚えてますよね?』

白野『は、はい!勿論です!』

ラニ『それはよかったです。と言う訳で貴方を2日ほど独占させてもらいます。』

白野『へっ?』

ラニ『よろしいですね?返事は?』

白野『2日間か、まあ、ラニのことだから何処かに泊まるとか無いだろうし、約束は、約束だしな).....うん、わかったよラニ、いいよ。』

ラニ『あ、ありがとうございます。』

白野「えっ？嘘？まじか？」

凜「あら？心当たりがあるみたいね白野君？」

白野「（や、やばい！こんなことセイバーが知ったら。）」

エリザ「あら？白野、どうしたのかしら？黙り混んで、それよりも、ねえ白野、私も貴方とデートがしたいな？ねっ？いいでしょ白野？」

凜「こらランサー、何急に話に入り込んでるの！」

エリザ「いいじゃない別に………ん？」

エリザ・ジャンヌ「!？」

凜「どうしたのエリザ？ジャンヌ？急に。」

エリザ「凜、外にサーヴァントがいるわ。白野、セイバーを起こしてきて。」

白野「あ、ああ、わかった。」

ジャンヌ「いいえ、白野、その必要はありません。エリザ、私達だけで大丈夫でしょう?」

エリザ「はあ、まあいいわ、凜、外に行くわよ。」

凜「そうね、さて、どんなサーヴァントかしら?」

白野達はサーヴァントの所に向かう。外に出るとそこには一人の女性が立っていた。

ジャンヌ「サーヴァントだけですか? マスターは何処でしょうか?」

??「今晚は、そして、さようなら。」

エリザ「なっ! あぶない!」

白野「へっ?」

キンツ!

ジャンヌ「あらあら、いきなりですか? アサシン、・・・おや? どうしましたアサシン? そんな怖い顔で。」

アサシン「何故? 何故貴女方かいるのかしら? アヴェンジャーにランサー! 聖杯戦争に召喚されつまらないマスターにあたりくだらないと嘆いていましたが、・・・まあいいでしょう。どうやら此度の聖杯戦争は愉しくなりそうね? そうでしょ? アヴェン



ジャーにランサー。」

エリザ「ま、まさかあんた？そんな事ってあるの？」

アサシン「？そう、ランサー、貴女何も知らないのね。どうやらアヴェンジャーは知ってるみたいだけど。」

ジャンヌ「ええ、勿論。ですが、まさか貴女が召喚されてるなんて、驚きですね。アサシン。」

アサシン「それは私の台詞ですよ。なにせ私が始末したい存在が2匹もいるのだから。」

エリザ「アヴェンジャー、悪いけどあれは私の獲物よ、あんたは此処で観てなさい。

凜、サポートお願いね。」

凜「え、ええ、ランサー、貴女、あいつが誰なのか判るのかしら？」

エリザ「あれは私が絶対に認めない存在よ。当然あいつも私を認めてないけどね。」

アサシン「……………」

エリザ「白野、桜、悪いけどアヴェンジャーの後ろにいなさい。」

白野「あ、ああ、わかった。」

桜「はい、アヴェンジャーさんもしもの時は。」

ジャンヌ「ええ、わかりましたマスター。」

エリザ「駄目よ！横槍はしないでちょうだい！あいつは、あいつだけは私が殺らないといけないの、そうでしょアサシン？」

アサシン「そうね、だけどねランサー、今回は引かせてもらうわ。だってそうでしょ？アヴェンジャーだけじゃなく此処には他にサーヴァントが2匹もいるのだから、貴女は一人の時に始末しましょう、それじゃあね、哀れな子豚達。」

最後の言葉で姿を消すアサシン。

エリザ「ちよつ！こらー！逃げるな！まてー！」

凜「待ちなさいランサー！こんな場所で暴れては白野の家が無くなるわ。ジャンヌ、貴女はあのアサシンを知ってるのでしょ？いったい何者なのかしら？」

ジャンヌ「あのサーヴァントはアサシンですよ。」

桜「それでジャンヌさん、真名は何でしょうか？」

エリザ「カーミラ。私のなれ果てよ、だけどね、私はあんな奴は認めない。認めるもんですか！」

白野「カーミラって！エリザと同じ人物じゃないか！」

凜「驚いた！まさか同一人物が召喚されるなんて。クラスはアサシンでなんて、エリザ？貴女の未来がああなるのかしら？」

エリザ「そうね、だけど認めるもんですか！あんな奴は認めない！凜、次こそは必ず

あいつを私が始末するんだから！絶対に！」

く第12話く  
完

## 第13話

ユリウス邸へ

B B 「先輩のためなら何処にでも駆けつける。先輩のためなら例え火の中水の中！そんな可愛い後輩美少女がお送りする……せ……の！B B チャンネル……！はい皆さん拍手です！」

白野・士郎

ばちばち！

B B 「さすがは先輩です！後先輩の隣の方もナイスです！」  
リン 「えっ？さ、さくら？えっ？えっ？」

B B 「おや？凜さんが二人？あ、なるほど！先輩はそこのお二方と手を組んでましたね。いや、ほんとそっくりですね！あ、でも、お胸は2030年の凜さんの勝ちみたいです！よかったでね凜さん！」

凜 「あいからわずか一言多いわねあんたは。ごめんなさい遠坂さん、あいつはあんな性格だから気にしないで。」

リン「ぐっ！た、確かに、私は胸はあまりに無いけど、いかしら？さくらのそつくりさん！」

B B 「はい？」

リン「女は胸より足よ！」

ダンッ！

白野「おお〜〜！」

凜「白野君？」

白野「えっ？あ、いや、ゲフンゲフン。」

B B 「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ラニ「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

桜「先輩？」

白野「す、すみません。」

B B 「さて、エロオヤジ先輩は置いて、サーヴァント情報ですね。」

凜「そうね。とりあえずはライダーが消えたわ。第5次聖杯戦争でのサーヴァントは残り六騎ね。キャスター以外は確認はしたけど・・・・。」

B B 「そうですね。まつ、とりあえずはほっときましょうか。冬木でのセイバーさんとアーチャーさんは置いて、それ以外で倒すのが大変なのはたぶんバーサーカーで

すね。」

白野「バーサーカー。」

B B「はい！私は真名は判りますがお教えすることはできません。ですので皆さんでバーサーカーの真名を暴いてください。」

凜「何ですよ！別に教えてもいいでしょうが！」

B B「そうしたいのはやまやまですが、私は冬木の聖杯戦争には関与してませんので。これも試練だと思ひ頑張ってください。あつ、愛しの先輩なら教えても構いませんよ。後で二人つきりでお話ししましょうね！先輩。」

白野「へっ？何か言いたいB B？」

B B「むくく、あいからわず考え込むと周りが見えていないですね。まあいいです。そこも先輩の可愛いところですからね！」

白野「あ、ありがとうB B。」

B B「いやん！照れてる先輩可愛いです！やはりこれは！私が先輩のサーヴァントになるべきかと、セイバーさんより役に立ちますしね！ですので先輩、今からセイバーさんとの契約を切り私を召喚してください。」

白野「へっ？ いやいや！そんなことは出来ないよ。俺のサーヴァントはセイバーだよ。」

B B 「セイバーさんが聞いたら大喜びしますね。」

ラニ 「あのB B？サーヴァント情報のはずですが、話がずれていつてるような気が……。」

B B 「サーヴァント情報？あゝ、先輩の素敵なお顔さえ見れたらどうでもよくなりました！ですので皆さん、サーヴァント情報は終了です！私はいまから先輩の素敵なお姿を画像に保存しないといけません！それでは先輩、聖杯戦争での活躍、期待してますね！では……！」

B B は白野の姿を見て満足し画面から居なくなる。

凜「はあく、あいからわず好き勝手な奴ねBBは……。そう言えば白野、あんたさつき何を考え込んでいたのかしら？」

白野「あ、ああ、バーサーカーってどんなサーヴァントなのかなって、ありすとキャスターは実際に会ってるからどんなサーヴァントかわかると思うけど。」

ラニ「二人は部屋でセイバーと寝てますしね。ありす達以外ではまだ会っていませんね。」

士郎「いや、俺と遠坂はバーサーカーに会ってる、そのマスターにもな。」

白野「えっ？まじか？どんな奴なの？」

リン「サーヴァントはぶつちやけ化け物ね。あんなの1対1で勝てる気がしないわ。真名が判ればある程度は攻略法が見付かるかもしれないけど。」

凜「それで、マスターはどんな奴なのかしら？」

士郎「女の子だよ、ありすちゃんとあまり変わらないぐらいの年齢のな。名前は……！ああ、イリヤ、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだったかな。」

桜「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンちゃんですか。可愛い名前ですね。」  
ユリウス「アインツベルン？何処かで聞いた名だな。」

リン「アインツベルンは遠坂家と間桐家、御三家の一つよ、冬木の聖杯戦争を始めた



家系なの、まさかまた聖杯戦争に参加してるなんてね。」

凜「それもまだ幼い女の子か、さらにサーヴァントはバーサーカー、やっぱバーサーカーにはバーサーカーかしら？」

ラニ「私は構いませんよ。ですがバーサーカー同士の間合いになるとかなりの激戦になりそうですね。下手をすれば周辺は更地になりうる可能性があります。」

士郎「えっ!？」

ユリウス「ならアインツベルン城の森なら構わんだろ？あそこなら人もいないし多少なら更地になっても誰も文句は言わないはずだ。アインツベルンは文句いいそうだな。」

リン「ユリウスさんの言うとうりアインツベルン城の森なら大丈夫ね、後は何時仕掛けるかだけど……。」

凜「間桐慎二の時は私達を探してたけど、今度は逆にイリヤスフィールに私達を探させるのはどうかしら？アインツベルン城付近で私達が居たらイリヤスフィールとサーヴァントが出向くと思うの。前は間桐君を私達を探していたからあの子遠慮してたんじやないかしら？」

リン「確かにそうね。私達がアインツベルン城に行き、後はラニとサーヴァントの所に誘導する、そんな感じかしら？」

ユリウス「そうだな、だか今回はシンジとありすは参加させないでおこう。かなり危険だからな。」

白野「うんうん！シンジとありすはお留守番だ！もしあの二人になんかあったら俺は………。シンジはしつかりしてるから大丈夫だけどありすは危なっかしいからな！」

凜「あんたのシスコンぶりはある意味やばいわね。ありすがまだ子供だからいいけどあの子が中学生位になったらあんた嫌われそうね。『お兄ちゃんうざい！』とか言われそう。」

白野「なッ！そ、そんな！もしありすにそんなことは言われたら俺は、俺は、立ち直れない……。」

桜「大丈夫ですよ先輩。ありすちゃんはそのんことは言いません。……多分。」

白野「た、多分？う、ううう、だあく！駄目だ想像したら、ありす、ありすが不良に、い、嫌だくく！」

リン「大丈夫なのかしら岸波君？」

凜「大丈夫よ。兎に角計画は出来たし、今日は無理でも早めに行動した方がいいわね、明日か明後日に行動しましょうか。」

士郎「な、なあ、サーヴァントは確かに倒さないといけないけど、マスターは、いや、

イリヤはどうするんだ？流石に女の子を叩くのは……。」

リン「大丈夫よ士郎、イリヤは殺さないわ。マスターを剥奪したら後はあの子次第だけどね。案外ありすちゃんも仲良くなりそうだけど。」

その後士郎と遠坂の二人は家に帰り凛達はそれぞれ自分の部屋に戻る。

一人残された白野は……。

白野「うう、ありす、お兄ちゃんを嫌いにならないで、あ、ありす、嫌だ……！」  
一人寂しくユリウス家でありすに嫌われる事を考え込んでいた白野であった。

↓次の日の夜アインツベルン城の森出入口付近↓

凜「とりあえずは全員集合ね。……でッ！白野はなぜそんなに機嫌が良いのかしら？」

桜「実はありすちゃんに『お兄ちゃんはずくと好きだよ。』と言われてからあんな感じしてして。」

白野「ふんふん、いや、今日はいいい日だな！」

ネロ「むむむ！奏者よ！ありすよりも余を構うがよい！奏者の事は余が一番好いておるのだからな！」

白野「うんうん、やっぱありすは世界一可愛い妹だな！」

ネロ「むむむむ！」

凜「はあ、まあいいわ、所でランサー、イリヤスフィールは私達が此処にいることは気づいているの？」

エリザ「ん、ええと……。どうやら気づいてるみたい、アインツベルン城前に居るわね。」

凜「そう、それじゃさつきとアインツベルン城に向かいますか。ラニ、貴女は白野とユリウスとで一番広い場所に居なさい。其所に私達がイリヤスフィールを誘導するわ。」

ラニ「わかりました。」

士郎「じゃつ、行くか！それじゃ白野また後で。」

白野「……！あ、ああ、後でな士郎。」

士郎「たくつ！しつかりしろよ！」

凜「それじゃ白野君、ラニ達をよろしくね！桜、行きましようか。」

桜「あ、はい。それでは先輩、行ってきます。」

白野「ああ、気を付けてな桜、アヴェンジャー、桜を頼む。」

ジャンヌ「勿論ですよ、我がマスターは私が守りますとも。」

凜達は二組に別れそれぞれアインツベルン城に向かう。

四人を見送った後白野達は闘いを行う場所を探し始めた。













白野「そ、そうか？ だったらイリヤスフィールちゃんを探さないと……」

イリヤ「その必要はないわお兄ちゃん。」

白野・ラニ・ユリウス「!?」

イリヤ「驚いたわ。まさか私のバーサーカーを一度の宝具で五回も殺すなんてね。流石は三國志最強と言われた呂布奉先まさにバーサーカーの名にふさわしいわ。」

ユリウス「五回も殺す？」

イリヤ「そ、本当はもう一人のお兄ちゃんに話したかったけど……。いいわ、特別に教えてあげる。私のバーサーカーは後七回殺さないといけないの。私のサーヴァントの真名はヘラクレス、宝具は十二の試練「ゴッド・ハンド」、生前の偉業で得た祝福であり呪いなの。代替生命を十一個保有しているの、だからバーサーカーを倒すには12回殺さないと死なないの。」

白野「ギリシヤ神話の大英勇ヘラクレス！ 倒すには12回殺すなんて……。」「イリヤ「なにも驚かなくてもいいのよお兄ちゃん。逆に私が驚いたぐらいだからね。ラニのサーヴァントがこれほど強いなんて。」

ラニ「……………」

イリヤ「さ、おしゃべりはおしまい……。バーサーカー！ まずは呂布のマスター、ラ



はたして勝つのはどちらのバレーサーカーなのか！

く 第13話  
く  
完

## 第14話

呂布「■■■■■■■■■■ー！！」

バーサーカー「■■■■■■■■■■ー！！」

イリヤ「本当驚くわ。ラニ、貴女のバーサーカーの魔力は底を尽き欠けてるのに、それでも主を守ろうとする、違うわね、主じゃなく貴女はバーサーカーにとってはお姫様かしら？」

ラニ「バーサーカー。」

呂布「■■■■■■■■■■ー！！」

イリヤ「あの裏切りの呂布がね……。だけでもう終わりかしら？バーサーカー！ラニとあの呂布を始末しなさい！今なら簡単に殺せるわ！」

バーサーカー「■■■■■■■■■■ー！！」

白野「!?、セイバー！ラニ達を……。。」

ネロ「奏者よ、その必要はない、ラニはまだ諦めていないみたいだからな。」









ガキンツ!

ラニ「!?」

イリヤ「なっ!!」

ネロ「くっ!この重い一撃、流石はバーサーカーだな!」

ラニ「セイバー!?!」

ネロ「うむ!大丈夫かラニよ。……。フム、どうやらバーサーカーは消えたみたいだな。」

ラニ「ええ、令呪のおかげとはいえ流石に宝具の連撃はかなりの魔力が必要……。ですがイリヤスフィールのサーヴァントは後2回倒せば消えます。行けますか?セイバー?」

ネロ「当然であろう!なあ!奏者よ!」

白野「ああ!ラニ達が頑張ってくれたんだ!俺達もいいところを見せないとな!セイバー!バーサーカーを必ず倒すぞ!」

ネロ「うむ!奏者よ、指示を!」

イリヤ「ちっ! (流石に不味いわね。後2回しかないバーサーカーの命、時間があればなんとか元のバーサーカーに戻せるけど)」

ネロ「さあ!行くぞバーサーカーよ!我が一撃とくと観よ!」



ネロ「うむ！さあ！バーサーカーよ！我が一撃受けるがよい！！天幕よ、落ちよ！花散る天幕《ロサ・イクトウス！》」

バーサーカー「■■■■！」

イリヤ「あ、バ、バーサーカー!?!」

ネロ「……むっ！ほう、我が一撃を受けてなお立ち上がるか、だが！余の花散る天幕を受け残るは後1度の命……」

??「セイバーよ。其所から離れることを勧める。」

ネロ「?……!奏者よ、幼女連れて此処から離れるぞ！」

白野「へっ？」

ネロ「早くせよ！すまないが幼女よ、バーサーカーは諦めよ。行くぞ！」

イリヤ「ちよっ？は、離しなさい！こら、セイバー!!」

ネロ「暴れるでない！奏者よ！」

白野「あ、ああ！此方だラニ！」

ラニ「は、はい。」

バーサーカー「■■■■■■■■■■ー!?!」

??「すまないがバーサーカー、お前には此処で消えてもらう……。我が骨子は捻れ狂う……偽・螺旋剣《カラドボルク》」



よ。」

アーチャー「……ふつ、まさか礼を言われるとはな、さて、そろそろ皆が此処に来るだろう。」

ネロ「アーチャー！貴様！よくも余の戦いの邪魔をしたくれたな！覚悟はできてるのであらうな！」

白野「セイバー、ちよつ！落ち着いて、ねつ。」

ネロ「奏者！これが落ち着いていられるか！余の華麗な戦いを邪魔しおつて！アーチャー！貴様、何故奏者の後ろに隠れる！」

白野「まあまあ、セイバーには感謝してるさ、それにセイバーがバーサーカーと闘っていたお陰でアーチャーも偽・螺旋剣を撃てたんだ、それに……。」

ネロ「それに……？」

白野「セイバーの戦いは凄く綺麗でかつこ良かったよ。」

ネロ「そ、奏者！そ、そうか？うむ！綺麗か、（テレテレ）うむ！仕方ない！アーチャーよ今回は特に許す！」

アーチャー「あ、ああ、（流石は白野だな、セイバーの扱いはお手のものか……）」

白野「セイバー、イリヤスフィールちゃんはどうしたんだ。」

ネロ「うむ！それなら……。」

士郎「大丈夫だ、気を失ってるけど怪我はない。」

白野「士郎！いつの間に？」

士郎「ついさっきな、どうやらイリヤはバーサーカーが消えたと同時に気を失ったみたいだな。」

白野「そ、そうか、バーサーカーは消えたのか、そう言えば凧達はまだかな？」

凧「いるわよ。」

白野「どわっ！いい、いつの間に？」

凧「何故驚くの？まあいいわ、しかし……。流石はバーサーカー同士の戦いね、周辺は殆ど更地じゃない。」

リン「そうね、ラニから話は聞いたけどまさかギリシヤの大英勇ヘラクレスを倒せるなんて、バーサーカー呂布のお陰かしらね、宝具の2度撃ちとかでヘラクレスを10回も殺すなんて、イリヤのバーサーカーは化け物だったけど、ラニ、あんたのバーサーカーも化け物ね。」

ラニ「私のバーサーカーはもういません、ですが、彼のお陰でバーサーカーヘラクレスを倒せたのは事実です。それとミス遠坂、彼は、いえ、呂布は化け物なんかじゃありません。私の為に最後まで戦ってくれた英雄です。」

リン「そうね、呂布奉先はラニを守る英雄ね、ごめんなさい、化け物は取り消すわ。」

白野「さて、そろそろ帰るか、そう言えば士郎、イリヤスフィールちゃんはどうするんだ？」

士郎「とりあえずは俺の家に連れていくよ、後のことはその時に考えるさ。」

白野「そうか、セイバー俺達も帰るか。」

ネロ「うむ、そうするか、早く帰って余は湯あみがしたい！奏者よ、余の背中を流すがよい。」

白野「……………さて、帰るか、それじあまた明日学校でな。」

ネロ「むっ！さて奏者よ、返事がないぞ。待たぬか！奏者！そ、奏者？」

桜「あいからわずですねセイバーさんは。」

ジャンヌ「……………なるほど、白野に背中を流させる、それは楽しそうですね。」

桜「アヴェンジャーさん？」

ジャンヌ「ふふ、冗談ですよマスター。」

桜「……………。」



く次の日の朝く

白野「あ、おつす士郎、ん？何か疲れてないか？」

士郎「おはよ白野、はあく、まあ昨日イリヤを連れて帰ったろ、その後イリヤが目を覚ましたんだけど色々あつてな。」

白野「そ、そうか。(何があつたか知らないがあまり検索しないでおくか)」

凛「おはよう白野、衛宮君、何？二人して暗い顔で。」

白野「凛、いや、俺じゃなく士郎がな。」

凛「ふくん。」

ありす「お兄ちゃんおはよう！」

白野「ありす、うん、おはよう。」

士郎「あつ！そうだ！ねえありすちゃん、今日学校が終わったら家に遊びに来ない？  
ありす「??」

白野「なっ！し、士郎？．．．！ま、まさか士郎ロリコ．．．。」  
士郎「違う！断じて違う！実は．．．。」

く放課後衛宮邸く

ピンポーン

セイバー「おかえりなさい士郎、おや、白野？それに凜達も．．．。」

ドタドタ

イリヤ「おかえりなさい士郎！」

士郎「ただいまセイバー、イリヤ。」

イリヤ「ん？あつ！貴方達は、確か昨日の……。」

白野「岸波白野だよ、よろしくね、イリヤスフィールちゃん、それと……。」

イリヤ「あります！」

あります「??」

イリヤ「また会えたねあります、うん、凄く嬉しいわ、さ、一緒に遊びましょ。」

あります「イリヤ……。」

ありますはイリヤだとわかるやいなや白野の後ろに隠れだす。

白野「?どうしたあります？」

あります「いや、私あの子嫌い。」

ユリウス「確かありますはイリヤスフィールとの出会いは余りよくなかったな、その時のせいだろう。」

士郎「そ、そうなのか?ご、ごめんねありますちゃん、嫌なこと思い出させてしまつて。」

イリヤ「……。」

白野「あります、確かにイリヤスフィールちゃんとの出会いは余りよくなかったかもし

れない、でもね、今は大丈夫だよ、イリヤスフィールちゃんはあるすとお友達になりた  
いんだ、ありすは優しいからきつとイリヤスフィールちゃんとお友達になれる、ねっ。」  
ありす「……………」

白野の言葉を聞きありすはイリヤに近づきイリヤに話し出す。

ありす「イリヤ、わ、私とお友達になってくれるの？」

イリヤ「ありす、あの時の私はマスターとしてだったの、ごめんなさい、だけど今は  
違う、もう私はマスターじゃないわ、だから私は貴女と、ありすと本当のお友達になり  
たいの、駄目かしら？」

ありす「駄目じゃないわ、私も貴女を嫌いと言ってごめんなさい、イリヤ、私達今か  
らお友達ね、凄く嬉しいわ。」

イリヤ「ありがとうありす！それじゃさっそく遊びましょう！士郎の家を探検しま  
しょ！士郎の家は大きいから楽しいわよ！あ、そうだ！キヤスター、貴女も一緒にどう  
かしら？」

アリス「仕方ないわね、だけどイリヤ、もしありすに変な事したら……………」

イリヤ「その心配は必要ないわキヤスター、私はありすのお友達だもん、それに私は  
バーサーカーはいないし聖杯戦争には興味ないしね。」

ありす「アリス、イリヤをいじめちゃダメ！イリヤは

私のお友達よ。」

アリス「わかったわありす、それじゃ遊びましょう、お兄ちゃん、また後でね。」

白野「ああ、気を付けるんだよ。」

ありす「はい。」

ありすとアリスはイリヤと一緒に手を繋ぎ士郎の家の中に入りいなくなる。

白野「うんうん、あの三人ならきつと凄く仲良しになるな。」

士郎「ああ、少しひやひやしたけど、まっ！イリヤ達なら

大丈夫さ。」

白野「なあ士郎、イリヤスフィールちゃんは、ひよつとして此処で暮らすのか？」

士郎「いや、まああの子には『何時でも遊びにおいで』とは言ったけどな。」

ラニ「きつと毎日遊びに来るでしょうね、どうやらあの子は衛宮さんのことがかなり

お気に入りなのでしょうから。」

桜「それに、ありすちゃんとも遊びたいでしょうし。」

ユリウス「なら衛宮士郎、俺達の住所を教えておこう、これで何時でもありすとイリ

ヤスフィールは遊べるだろうからな。」

士郎「ありがとうございますユリウスさん。」

白野「うんうん、ありすとイリヤスフィールちゃんはきつと毎日一緒に遊びそうだ

な。」

凜「ねえ白野、ありす達は大丈夫かしら？」

白野「えっ？」

凜「ほら、ありすってああ見えてかなりのいたずら好きだから、衛宮君の家大丈夫かなって。」

士郎「……………へっ？」

白野「……………。だ、大丈夫大丈夫、たぶん。」

完 〔第14話〕

## 第15話

ユリウス邸にて

マルタ「……………と言う訳で白野様、私に泳ぎを教えてください。」

白野「……………はい？」

凜・ラニ・桜「……………」

白野「えっ？何故？おかしいよね？だって今は聖杯戦争中だよ？何処をどうすればそんな話が来るの？」

マルタ「これには深い訳がありました。実は我がマスターに私が泳げないことをバカにされまして、『今時泳げないとは、マルタ、貴方は生まれたての赤ちゃんですか？何でしたら私が教えますようか？ウフフ。』と言われました。」

白野「だからって何故俺なの？て言うか何してるの二人して、監督者は何？暇なの？」  
マルタ「……………。暇では在りません。（た、たぶん、）何故か最終的にそうなつてしまったのです！可憐、我がマスターには頼る訳にはいきません。だからといってこの時代には知ってる方は貴方以外にいない、だからさっさと教えなさい！」



白野「なんか口調が変わってませんか!」

マルタ「ウッフ、気のせいですよ白野様、でっ? 私に泳ぎを教えてくれるのかしら?」  
(パキパキ)

白野「(な、何故拳を鳴らすの!) い、いや、流石に今は、それに学校もあるし、あ、後、時期が時期だし。」

マルタ「大丈夫ですよ、最近できた室内の温水プールのチケットがあります。其処でしたら問題在りませぬね。ちなみにチケット一枚につき5人です。それを私は5枚持っています。白野様が誘いたい方がいるのでしたら後23人は大丈夫ですよ。」

白野「そ、そうなの? えっ? 何故マルタはそんなの持つてるの?」

マルタ「ゴホン、秘密です。では白野様、次の休みに泳ぎを教えてくださいね。では……。」

白野「えっ? ちよっ? ウソ? マジでか? 何故俺? ……いなくなつた! ……。」

凜「でっ？どうするの白野君？」

白野「ど、どうしましょうか？」

ラニ「どうするのですか？白野さん？」

白野「ど、どうしたらいいのでしょうか？」

桜「どうするんですか？先輩？」

白野「ど、どうしようか？」

凜「ハッキリしなさい！行くの！？行かないの！？」

白野「ひ、ひい！」

ネロ「奏者よ。余はその温水プールとやらに行ってみたい！プールは泳ぐ所、余の水着姿を見て我が奏者を今まで以上にメロメロに見せようではないか！」

エリザ「(ダーリンに私の水着姿を……、良いかもしれないわ!) 白野! 行きましよう!」

ジャンヌ「面白そうですね、では私も参加しましょう。」

ドレイク「なかなか楽しそうじゃないかい、シンジ! 私達も行こうじゃないかい。」

シンジ「へっ?」

白野「あれ? 何でサーヴァント達はノリノリなの? ま、まさかアサシンも?」

李「フム、ユリウスよどうする?」

ユリウス「興味がないな、俺は行かないでおこう。」

凜「エリザが行くなら私も行かなくちゃね。サーヴァントにはマスターがいないとダメだしね。」

ラニ「……、皆さんが行くのでしたら私も参加しましょう。」

桜「せ、先輩が行くのでしたら私も参加します。」

白野「……。」

凜「何? どうしたの? どうせ行くならいいでしょ、私達が参加しても。」

白野「い、いや、まだ行くと決めた訳では、そ、それに今は聖杯戦争中だろ?」

凜「大丈夫でしょ。それに間桐君とイリヤスフィールとの連戦で皆結構疲れてるし、ま、ようは息抜きよ、息抜き。」

白野「だ、だけど……」

ラニ「あります、少しよろしいですか？」

あります「なくに。」

ラニ「(ゴニョゴニョ)」

あります「うん！わかったわ。」

白野「ん？」

あります「お兄ちゃん！私、お兄ちゃんと一緒にプールに行きたいな！」

白野「よし行こう！いや〜！楽しみだな！なああります！」

あります「うん！」

桜「ラニさん。」

ラニ「何か？」

凜「あんたありますに何て言ったの？」

ラニ「さつきありますが言った通りですよ、白野さんはありますに關しては激甘ですか  
ら。」

凜「なるほど、確かに白野はありますに關しては激甘なぐらいシスコンだったわね。」

あります「お兄ちゃん、私水着が無いよ、どうしよう。」

白野「プールに行く前に凜達と買に行けばいいよ。」

ありす「わかった。」

白野「(行く)と決めた以上は行かないとな。だけどシンジは子供だしせめてもう少し大人の男子がいてくれたら、あつ！土郎でも誘ってみるか？後は……！」ユリウスさん。」

ユリウス「!?な、何だ、岸波？さん付けで呼んだりして。」

白野「流石に男俺一人はあれだから、ユリウスも行こうじゃないか！なっ？」

ユリウス「興味がないな。それに男ならシンジがいるだろ。」

白野「シンジはまだ子供だし、頼む！いや、お願いします！ユリウスさん！」

ユリウス「……、はあ、仕方ないな、行くだけだぞ、俺は泳がないからな。」

白野「ありがとうユリウス！後は土郎に連絡だな。」

ユリウス「やれやれだな。」

李「カツカツカツ！ユリウスよお前は白野達にはやはり甘いな、白野でなくても凜達に言われても行くと言うだろうよ。」

ユリウス「フツ、そうだな。」

その後白野は土郎に連絡をしプールに行く約束をする。

士郎の他に遠坂凜、間桐さくら、イリヤスフィール、セイバー、アーチャーも参加。さらにどうせならと白野は新聞部の三人と美綴綾子も誘ったのである。

「プール出入口前」

白野「いや、流石に多すぎたかな？ けどあれだな、俺達以外には誰もいないのかな？」

士郎「プールかあ、此処の温水プールはまだオープンして間もないはずだよな、なんで周りには誰もいないんだろ？」

凜「そう言えばマルタは何処かしら？あいつがチケットを持つてるのよね。」  
ありす「お兄ちゃん！私早く泳ぎたい！一緒に遊びましょ、お兄ちゃん！」

白野「そうだね、それにしても何処にいるんだろ？」

マルタ「おはようございます白野様、おや、結構な人数ですね？」

白野「!?いい、いつの間にも！」

マルタ「では早速中に入りましょう。」

白野「あ、ああ。」

受付嬢「いらっしやいませ、おや、貴方は白野様一行ですね、どうぞお入り下さい。今

日は貸し切りでございますので。」

白野「貸し切り?てか何故俺の名前を知ってるんですか?」

受付嬢「あるお方から写真を見せてもらい『白野様が来られたらお通しするように』と。」

士郎「白野、お前プール関係者と知り合いでもいるのか?」

白野「いや、いないけど。」

凛「まあいいんじゃないかしら。とりあえず中に入りましょう。」

白野「そうだな。」

白野達は中に入りそれぞれ別れ水着に着替える。

白野・士郎・シンジは先に着替えが終わりプール内に入る。「ユリウスは着替えていない」

すると、プールの中に一人の女性が浮き輪でプカプカ浮かびながら優雅に浸っていた。

白野「あれ?誰か泳いでいないか?」

士郎「えっ?あつ!ほんとだな、誰だろ?」

??「おや?白野さんに士郎さん、お待ちしました。」

白野「か、可憐さん!?ど、どうして此処に!」



可憐「ウフフ、勿論マルタを笑いに……、じやなかつたわ、白野さん達がこのプールのリゾート地で遊ぶと聴きましたので、そこでとあるルートでこのリゾート地を貸し切りにしたまです。まあ、ついだから私も仲間に入れてもらおうかと思ひまして。」

士郎（白野、可憐のやつ絶対マルタさんで遊ぶつもりだぞ）

白野（だよな、どうしようか？）

マルタ「どうしました白野様、士郎さん……つて！か、可憐!?何故貴女がいるのですか！」

可憐「あらマルタ、偶然ですね、まさか貴女がいるとは、泳げないのに、ウフフ。」

マルタ「くっ！ま、まさかこのプールの貸し切りは貴女がしたのですか！」

可憐「さあ、なんの事でしょうか、私にはさっぱり、泳げないのに、ウフフ。」

マルタ「こ、この！我がマスターがこのような事を。」

可憐「白野さんに士郎さん、どうやら他の皆さんが来ましたよ。お二方は今からエロオヤジ全開ですね、マルタは泳げない、ウフフ。」

マルタ「クソマスターが。」

可憐「マルタは泳げない、ウフフ。」

マルタ「~~~~~！」

白野「とりあえず二人はほつとくか？」

士郎「だな。」

凜「お待たせ白野君、．．．．ん？何やってるのあの二人は。」

白野「凜、まあ、あの二人はほっとけばいいんじゃないかな．．．．！」

ラニ「お待たせしました。」

桜「凄く広いプールですね。」

エリザ「あ、あの白野、どうかしらこの水着は？」

ジャンヌ「おや、どうしました白野。」

ドレイク「へえー、此処は色んな種類のプールがあるのかい。」

あります「凄く広いわ！ねえアリス。」

アリス「そうねあります。」

ネロ「うむ！どうだ奏者よ！余の水着姿は、さあ遠慮はいらん。余を賛美するがよい

！」

白野「（こ、これは！）」

ネロ「？どうした奏者よ。早く余を誉めよ！」

白野「（うんうん、やっぱ皆それぞれ水着姿は似合ってるな、ありすとアリスは可愛いフリルのワンピースか、凜とジャンヌはビキニか、凜の赤のビキニもいいがジャンヌの黒のビキニも捨てがたい！ラニと桜とエリザはワンピースですか、うんうん最高です！

ドレイクは・・・！な、な、なんと！ビキニ！その体でビキニだと！は、反則ではないだろうか！セイバーは・・・。真つ赤なビキニですか！凜と被るが、だが！やはりセイバーはナイスバディー！見事にマツチしているではないか！」

桜「？せ、先輩？どうしました？」

白野「あ、」

凜「あ・・・？」

白野「ありがとうございます！」

ネロ「うむうむ！奏者よ！もつと余を誉めるがよい！」

凜「あいからわずエロオヤジね。」

士郎「何やってんだ白野のやつは。」

リン「士郎、お待たせ。」

イリヤ「士郎！遊びましたよ！」

セイバー「お待たせしました士郎。」

士郎「あ、ああ……！」

さくら「？どうしました先輩。」

士郎「(き、さくらのワンピース姿が、リンはナイスビキニ！イリヤはありすちゃんと同じのフリルのワンピースですか、セイバーは水色のビキニか、うんうん、最高です)」

セイバー「？」

リン「……。はあく、あんた岸波君と同じエロオヤジですか！」

士郎「な！何を根拠に！」

白野 「そう言えば、美綴達は？」

美綴 「私達がどうした？」

白野 「おっ？ やつと来たかつて……！」

氷室 「ど、どうした！」

白野 「美綴と氷室はスポーツタイプの水着とは、蔦寺はし、白のビキニだと！ 三枝さんはフリルのワンピース！ 四人とも凄く似合ってるではないか！」

蔦寺 「おっ、何だ白野、私達の水着姿がそんなに可愛いってか。」

白野 「し、士郎！」

士郎 「はい？」

白野 「此処はやはり！」

士郎 「パス！ 無理！ お前だけで言え！」

白野 「ならシンジ！」

シンジ「……………(無視)。」

白野「ユリウスっていない！ならアーチアー！」

アーチアー「ふざけるな！」

白野「仕方がない、なら、俺が男子代表者として。」

三枝「えっ？何？」

白野「ありがとうございます!!」

マルタ「仕方がないですね、白野様？」

白野「えっ？何？」

マルタ「鉄拳聖裁!!」

白野「グルハアー！」

白野「すみませんでした。つい……」

マルタ「まあいいでしょう。それでは早速私に泳ぎを教えてください。」

マルタの鉄拳聖裁で正気に戻る白野、その後皆それぞれ解散し遊びに繰り出す。

白野は約束通りマルタに泳ぎを教えようとするが・。

桜「よろしくお願ひします先輩。」

ジャンヌ「これはこれは愉しそうです。」

氷室「す、すまないな白野。」

ネロ「うむ！奏者よ、余に泳ぎを教えるがよい！」

白野「は、はい。」

マルタ以外にネロ・桜・ジャンヌ・氷室の4人も教えることになった白野。

白野「(土郎は、セイバーとイリヤスフィールちゃんに泳ぎを教えるのか、ありす達は……?) シンジをからかって遊んでるか。まつ、大丈夫だろ)」

ジャンヌ「どうしました白野、さ、早く私達に泳ぎを教えてください。」

白野「そうだな、とりあえずは水に慣れることかな、水中で目を開けてそこからかな。」

マルタ「な、なるほど、水中で目を開けて、では……」

それぞれ水中に潜りだす。

白野「よし、ちゃんと目を開けてるか確かめるか」

白野も水中に潜り四人の確認をする。

白野「セイバーと桜と氷室、それにマルタも大丈夫だな、後は……、ジヤンヌは何故必死に目をつぶっているんだろ？」

ネロ「うむ！奏者の顔がよく見えたぞ！」

白野「ねえセイバー、ひよつとしてセイバーは泳げるのかな？」

ネロ「うむ！当然であろう！」

白野「えっ、じゃあ何で泳ぎを教わってるの？」

ネロ「奏者と遊びたいからだ！」

白野「そ、そうですか。セイバーは問題ないとして、桜と氷室とマルタはちゃんと水中で目を開けてたから大丈夫だな、ジヤンヌは……」

ジヤンヌ「!?な、なんでしょうか？」

白野「駄目だよちゃんと水中で目を開けないと、はい、もう一度。」

ジヤンヌ「くっ！な、何故解るのですか！」

白野「俺はちゃんと潜って確かめたからね。」

ジヤンヌ「お、おのれ、卑怯な！」



白野「卑怯って、もう一度潜ろうかジャンヌ、じゃないと次の行程に行けないよ。」  
ジャンヌ「し、仕方ありませんね、では……。」

白野（よし、ちゃんと目を開けてるかどうか）

ジャンヌ（目を開けて、目を開けて……）

ジャンヌは水中で恐る恐る目を開ける。

すると……。

ジャンヌ（!? なっ！ は、白野が目の前に！）

ジャンヌ「ぶはあー！ ゴホゴホッ！ な、何故貴方がいるのですか！ ゴホゴホッ！」

白野「いや、ちゃんと目を開けてるか確かめないと、まあこれで次の行程に行けるな、

じゃあ次は……。」

ジャンヌ「くっ！ 白野、貴方って人は！」

マルタ「ひよっとして白野様はスパルタなのかしら？」

氷室「……へっ？」

桜「せ、先輩？ お手やらかにお願いします。」

白野「何いってるんだ桜、四人とも今日は100メートル泳げるまでは帰れないから

な！」

ジャンヌ「……なッ！」

桜「は、はい！よろしくお願いします！」

氷室（白野といたくてこうしたが、し、仕方ないか、ついでだから100メートルにチャレンジしてみるか。）

マルタ「ひよつとして私は教えを乞う方を間違えたのかしら？」

士郎「あはは、白野はあいからわずだな。」

セイバー「士郎？ひよつとして白野に泳ぎを教えてもらったことが。」

士郎「ああ、お陰で俺は一キ口は軽く泳げるかな、ああ見えてあいつはかなりのスパルタだからな。」

リン「へえ、所であの子、可憐は何故ビデオデッキで岸波君達を撮ってるのかしら？」

士郎「さ、さあな。」

可憐「ウフフ、必死なマルタ、楽しいですね。」

白野「うんうん、ある程度は泳げるようになったかな、よし！とりあえず少し休憩するか。」

マルタ「はあはあ、な、何故貴方はまだ元気が有るのですか？」

桜「つ、疲れました。」

氷室「……………」

ネロ「奏者よ！次は何して遊ぶのだ！」

ジャンヌ「今回は貴方に頼ります、主よ、どうか白野に災いを与えたまえ……」

白野「そうだな、どうしようか？」

ありす「お兄ちゃん！一緒に遊んで！」

白野「ありす、そうだな！遊ぶか！」

ありす「わーい！」

ネロ「奏者よ！余も遊ぶぞ！」

アリス「それじゃ、流れるプールに行きましょう！」

その後白野はそれぞれの仲間と遊びその合間マルタ達を指導して行く。その甲斐あってマルタ達は優に500メートルまで泳げるようになる。

白野「いや、まさか500まで泳げるなんてな！どうせなら一キロぐらい泳げるように指導した方が良かったかも知れないな。」

マルタ「……………」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

氷室「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ジャンヌ「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

白野「返事かない、ただの屍のようだ・・・。」

マルタ「生きてます！」

桜「ま、まさか先輩がここまでスパルタでしたとは、ですが、先輩のお陰で私も泳げるようになりました。」

氷室「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ジャンヌ「主よ、どうか、どうか白野に災いを与えたまえ！」

凜「白野、そろそろ帰る支度をしないとって！何？どうしたのこの子達は！」

あります「凜お姉ちゃん皆死んでるの。」

ジャンヌ「白野に災いを、災いを。」

桜「あ、ありすちゃん、死んでませんよ。」

マルタ「生きてます！」

氷室「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

凜「氷室さん以外は大丈夫そうね、蒔寺さん、ごめんなさい、氷室さんをお願いしていいかしら？」

蔭寺「あんた大丈夫なの！ほら、捕まって。」

氷室「……す、すまない、まさか白野があそこまでスパルタだったとは、しかしそのお陰で私はかなり泳げるようになったな。」

三枝「あはは。」

美綴「私も衛宮と一緒に教えて貰ったけど、あいからわず人に教えるとなると岸波はすごいな。」

エリザ「良かったわ、私白野に教えて貰わなくて。」

白野「ん？ひよつとしてエリザ泳げないの？だったら言わないと、俺がちゃんと教えてやるのに。」

エリザ「!?だ、大丈夫よ、私は大丈夫だから！」

ネロ「奏者よ！今日は実に楽しい日であったな！特にありますとイリヤスフィールが遊んでる所はまさに素晴らしかった！」

白野「(あいからわずセイバーは幼女趣味ですか！まあセイバーは美しければ何でもアリだったな)」

イリヤ「楽しかったわ、あります、また一緒に遊びましょうね。」

ありす「ええイリヤ、また遊びましょう。」

ジャンヌ「主よ、お願い、白野に、白野に、災いを、天罰を与えたまえ。」  
可憐「あらあら、貴女も随分愉しい姿ですね、ウッフ。」  
ジャンヌ「主よ、この女も災いを与えたまえ。」

完 第 15 話



## 第16話

BB「モニター前の皆さんこんにちはー！さあー！やって来ました皆大好きBBちゃんネルの始まりでーす！今回はなんと！無理矢理参加のゲストさんが来ていまーす！本当は無視したいのですが『ご主人様に会わせろ』と五月蠅いので仕方なくの参加です！本当鬱陶しいですよーね！．．．．。』

??「このアバズレか！早くしやがれっつてんです！私『ワタクシ』をさっさと出しやがれ！」

BB「はあ、仕方ありませんね、それでは先輩、覚悟してくださいね！それではどうぞ．．．．。(鬱陶しい淫乱狐です)」

??「ん？BBさん？何か言いましたか？」

BB「いえ！何も。」

??「そうですか？．．．．。まあいいでしょう。ゴホンッ！では．．．．。」

白野「えっ？ま、まさか？な、何で？」

??「キヤツ！やつと！やつと！お逢いすることが出来ました！モニター越しですが今是我慢しましょう。きやはくん！ご主人様！貴方のキヤスター！今此処に推参！あくん

！あいからわらずイケ魂です！ご主人様！ご主人様！タマモ！早くご主人様にタマモを召喚してほしいなく。」

白野「キャ、キャスター!? え、あれ? な、何で?」

タマモ「ささっ! 早くご主人様私の召喚を、そして、その後は私と6畳1間の愛の巣で一緒に暮らしましょう。」

ネロ「えーい! やかましい! キャス狐! 貴様何故そこに要るのだ! それに奏者はすでに余の奏者だ! 貴様の出る幕ではない!」

タマモ「むむっ! セイバーさん! 貴女こそ何時までご主人様に引っ付いているのですか! とつとご主人様から離れる!」

ネロ「むゝゝゝ!」

タマモ「キシヤーー!」

白野「.....」

凜「はあく、とりあえずセイバーとキャスターは置いといて、BB? どう言うことなのか説明してちょうだい。」

BB「あくん! 困った顔の先輩、素敵です! えっ? 何か言いましたか凜さん。」

凜「こ、この!」

BB「はいはい、ちゃんと聞いてますよくだ、そうですね、何処から説明しましよ

うか？」

白野「とりあえずは一から説明してほしいんだけど。」

B B「了解です！実はですね、どうやら此処にキャスターさんが要るのはそちらの世界に関係が在るのではないかと。」

ラニ「……白野さんの言うことは素直に聞き入れるのですね。」

B B「当然です！……でつ、先輩は既に知っていますですが冬木には先輩のサーヴァントセイバーさん、それとそちらの世界、リンさんのサーヴァントアーチャーさんがいますよね？」

白野「あ、ああ。」

B B「さらに言えば、セイバーさんは兎も角、アーチャーさんは先輩のサーヴァントだったと記憶もしくは記録として覚えていました。」

白野「うんうん。」

B B「そしてどうやら冬木の第5次聖杯戦争には先輩の事を良く知るサーヴァントがもう一騎いるみたいなんです。」

白野「もう一騎って、エリザじやないの？」

B B「エリちゃんじゃありませんよ、エリちゃんはいつでもいいのでほつといて。」  
エリザ「ちよつと！いつでもいいって！」

白野「えっ?じゃあ誰が?まさかバーサーカー?」

B B「ブーツ!外れです、先輩?バーサーカーは例え月の聖杯戦争と一緒に戦った同士でも先輩には記憶が残ってませんよね、可愛そうなバーサーカーさん。」

白野「ぐっ!(すまないバーサーカー)じゃ、じゃあいったい誰なの…….あつ!ま、まさか?」

B B「はいです!今先輩が思っている方がそうです。」

白野「ギ、ギルガメツシュ!」

B B「ピンポン、大正解です!」

凜「はぁー!何で彼奴がいるのよ!おかしいでしょ!冬木のサーヴァントは7騎揃ってんのに何で彼奴がいるわけ!」

B B「冬木のサーヴァントは後5騎ですよ凜さん。」

凜「わ、解ってるわよ!だから何でギルガメツシュがいるの!」

B B「ギルガメツシュは第5次聖杯戦争は無関係ですね、どうやら第4次聖杯戦争にアーチャーとして参加してみたみたいです。ですがギルガメツシュはどうやら先輩の事を良く知ってるみたいなんですよね。」

白野「な、何故?」

B B「さあ?それはギルガメツシュ本人に聞いてみてくださいね。ですがア—

チャーさんは先輩の事を覚えていましたし、ギルガメツシユも先輩の事を覚えていてもおかしくはないかと。」

白野「た、確かに、ギルガメツシユなら俺の事を覚えているな、だ、だけどそれとキャスターは関係がないと思うけど。」

BB「セイバーさんにアーチャーさんさらにはギルガメツシユが今冬木にいるのですよ。先輩の元を含めてサーヴァント達が3騎も、ならキャスターさんもいておかしくないかと、最も既に先輩はセイバーさんがサーヴァントとしていますから、キャスターさんは月に現れたのではないかと。」

白野「ややこしいな、だけどそれだけじゃ理由にはならないんじゃない？」

タマモ「むむ！何をおっしゃいますかご主人様！理由は無くは無いのです！今ご主人様がおられる時代にはセイバーさんとアーチャーさんとギルガメツシユがいるのですよ！私キャスターがご主人様の前に現れてもおかしくはないはずですよ！」

白野「そ、そうですね。」

BB「セイバーさんにアーチャーさん、さらにギルガメツシユにキャスターさん、先輩との繋がりが強いのが関係してるのではないのでしょうか？まあなにせよ私はどうでもいいのですが。」

タマモ「私が月にいるのは些か納得いきませんが、こうしてご主人様のサーヴァント

が4騎、しかもご主人様は私達の事を覚えて居るのです！これは何か有るかも知れませんね。」

白野「……へっ？い、いや、怖いこと言わないでキヤスター。」

タマモ「いやくん！ご主人様の困った顔もステキです！きやつ！」

白野「ん？さて、何でギルガメツシュが今冬木に居るんだろ？」

凜「確かにそうね。」

白野「……。。。。。。。」

桜「どうしました？先輩？」

白野「確か第4次聖杯戦争は10年前に始まったんだよな。」

凜「そうね、イリヤスフィールが全て教えてくれたわ。」

白野「ああ、そうだったな、第4次聖杯戦争はかなりの惨劇だったってイリヤスフィールちゃんは話してくれた、確か行方不明の子供達がいる……！！」

ラニ「どうしました白野さん？」

白野「ギルガメツシュは10年間どうやって今まで生き残れたんだろ？それに月の聖杯戦争時はあいつは2000年間の裏にいたはず、アーチャーと同じでギルガメツシュは別のギルガメツシュなのかな？じゃあ何でギルガメツシュは10年間も生き残れ……。」

ユリウス「ギルガメツシユか、アーチャーと同じ記録か記憶が在るのだろう、岸波、ギルガメツシユとは関わらないほうがいいと思うが？」

白野「多分無理だと思おうよ、ギルガメツシユ自体俺に何かしら理由を付けて会うはずだし……。」

凜「でっ？どうするの白野。」

白野「……」。BB、キヤスターを俺のスマホかタブレットに入れることは出来ないか？」

BB「大丈夫ですよ！キヤスターさん、宜しいですね？」

白野「……」。

タマモ「ご主人様と一緒に要られるのならこのキヤスター喜んで！」

白野「後は……、セイバー、少し付き合ってくれ、今から出掛ける。」

ネロ「むっ！奏者よ？デート……、では無いな、まあよかろう。」

白野「後は……」。

凜「？どうしたの白野君、急に怖い顔で……」。

白野「もし俺の考えが正しければ俺はギルガメツシユを許すことは出来ない。」

凜「えっ？」





〈教会前〉

アーチャー「……………」

白野「すまないなアーチャー、こんな時間に呼び出してしまった。」

アーチャー「気にするな、お前の事だ何か理由が在るのだろう？」

白野「すまない、後で遠坂さんにも謝らないと。」

アーチャー「その必要はない、ただ。」

白野「……………」

アーチャー「すまないな白野、お前の事をリンに洗いざらい話してしまった、そうでもしないとリンが納得しなくてな、すまない。」

白野「構わないさ、俺のことなんか。」

タマモ「むむ！その声はアーチャーさんですか？」

アーチャー「!?キャ、キャスター!ど、何処に？」

タマモ「此方です。タブレットの中に。」

アーチャー「!?キャスター!何故そこにいるんだ!」

タマモ「色々事情があるんです!本来なら私がご主人様のサーヴァントとして召喚されてるはずなんです、ですがこのキャスターご主人様のタブレットの中だけに今は幸せなのです!」

ネロ「むむ！おのれキャス狐め！」

アーチャー「やれやれだな。」

白野「……………」

アーチャー「?どうした白野？」

アーチャーの言葉を無視し白野は教会の中に入る。

ネロ「そ、奏者？」

タマモ「ご主人様？」

アーチャー「セイバー、キャスター、どうやら今はふざけてる場合ではないようだ。」

ネロ「む！」

アーチャー「行くぞセイバー。」

ネロ「うむ！」

ガチャッ！

白野「……………」

可憐「これはこれは白野さん、今日はどのようなご用件でしょうか？」

マルタ「……………」

白野「ギルガメツシユは何処にいる？」

可憐「……………！驚きましたね、まさか貴方がギルガメツシユの存在をご存じとは。」

白野「ギルガメツシユは何処にいるんだ！」

可憐「!？」

マルタ「マスター、どうやら白野様はギルガメツシユに会いに来たみたいですね、しかし何故貴方がギルガメツシユの存在をご存じで？」

白野「俺はギルガメツシユが何処にいるかを聞いているんだ、邪魔をするなら……。」

白野の言葉でセイバーとアーチャーが姿を現す。

マルタ「なっ!?セイバーさんは兎も角アーチャーさんまで！」

タマモ「私もいますよマルタさん。」

マルタ「キヤ、キヤスターさん！……？何故貴女はタブレットの中に？」

タマモ「色々事情があるんです！ま、その事は兎も角さつさとギルガメツシユさんを出しやがれ！」

可憐「白野さんは何故ギルガメツシユに会いに来たのか理由を教えて欲しいのですが？」

白野「……………」

可憐「無視ですか、仕方ありませんね、マルタ、どうしましょうか？」

マルタ「白野様、貴方がお怒りなのは当然です。ですか、今ギルガメツシユさんに会ってどうするのですか？」

白野「……………、考えてた。」

マルタ「えっ？」

白野「第4次聖杯戦争に参加したギルガメツシユがどうやって10年間の歳月を生き延びたかを、イリヤスフィールちゃんから聞いた話はギルガメツシユのマスターは10年前の聖杯戦争で死んでいる。」

マルタ「……………それで？」

白野「前回の聖杯戦争は誰も聖杯を手に入れる事は出来なかった、サーヴァントが聖

杯を壊したからな、それなのに何故ギルガメツシユはいるのか、前回の聖杯戦争はかなりの惨劇だったとイリヤスフィールちゃんは言っていた、何人もの子供たちが行方不明になったと教えてくれた、唯一の生き残りが士郎だけだと、おかしいだろ？ どうして士郎だけが生き残り他の子供達は行方不明なんだ？」

可憐「死んだのでは？」

白野「黙れ！言峰可憐！」

可憐「!!」

マルタ「マスター、余り白野様を刺激しないほうがよろしいかと。」

可憐「……………」

白野「あいつは、ギルガメツシユはマスターに収まる器じゃない、俺もあいつに何度も殺されかけたからな、ましてや前回のマスターは死んでいる、あいつが他にマスターを、魔力を貰えるマスターを見つける事はあり得ない、だったら……………」

アーチャー「白野、あまり無理して喋らなくても。」

白野「いや、大丈夫、ありがとうアーチャー。」

マルタ「……………」

白野「行方不明になった子供達を誰かが拐いギルガメツシユに魔力を与えるように仕向けてるんじゃないか！無関係の子供達を！10年間も！」

ネロ「……」

白野「さっきマルタは俺が怒っていると云ったな？お前は全て知ってるんだな!?」

マルタ「は、白野様？」

白野「10年だぞ！何の罪のない子供達が10年間もギルガメツシュに魔力を与え続けてるんだぞ！お前は何とも思わないのか！」

マルタ「そ、それは……」

白野「セイバー！アーチャー！ギルガメツシュを此処に引きずつてでも連れてこい！俺はギルガメツシュと話がしたい。」

ネロ「了解したマスター！」

アーチャー「心得た白野！」

??「その必要はない、この我が此処にいるとよく解つたものよ、流石は元マスターよ、誉めて使わず。」

白野「ギルガメツシュ！」

ギルガメツシュ「久しいな雑種、しかし、まさかセイバーにアーチャー、キャスターまでとは、ふ、ふははははは！これは愉快だ！雑種よ今から同窓会でも始めるつもりか？」

白野「……」

ギルガメツシュ「どうした雑種、黙り混んで。」

白野「ギルガメツシュ、お前に聞きたいことがある。」

ギルガメツシュ「……………」。

白野「10年前の第4次聖杯戦争にお前は参加した、さらにお前のマスターは10年前に死んでもういない、どうやってこの10年サーヴァントとして生き延びた!」

ギルガメツシュ「なんだ、そんなことか、白野よ、お前はもう判つてるはずではないか、我がどのようなサーヴァントであるかを。」

白野「ギルガメツシュ! 貴様!」

ギルガメツシュ「く、くははははは! いいぞ白野、やはりお前は我を愉しませてくれる!」

マルタ「白野様、落ち着いてください! こんな所で暴れては教会が!」

白野「セイバー! マルタを、いや! ルーラーを足止めしろ! あいつは! ギルガメツシュは俺が殴る!」

ネロ「了解した! ルーラーよ奏者の邪魔はさせん!」

マルタ「セイバー!?!」

白野「アーチャー! 俺を援護しろ!」

アーチャー「仕方ない、すまないリン、今だけは白野のサーヴァントになる……………」

行くぞマスター！」

ギルガメツシュ「その目、やはりお前はそうでなくてはな！さあ！我を愉しませろ白野！」

白野「ギルガメツシュ！」

アーチャー「!？」

タマモ「どうしましたアーチャーさん、早くご主人様の援護を。」

アーチャー「いや、どうやらその必要はないと見た。」

タマモ「はい？」

白野はギルガメツシュに向けて拳を放つ、ギルガメツシュは白野の拳を避けもせずそのまま受け止める。

白野「ギルガメツシュ？えっ？何で？」

ギルガメツシュ「どうした？もう終わりか？」

アーチャー「もういいだろギルガメツシュよ。」

ギルガメツシュ「あいからわず貴様は全てお見通しか？贗作者よ、まあよい、我はすこぶる機嫌がよいのでな！くはははははははは！」

白野「えっ？えっ？」

ネロ「ギルガメツシュ！貴様！奏者をからかったのか！」



タマモ「ギルガメツシユさん？どう言う事か説明して下さいまし！」

ギルガメツシユ「煩い、まあよい、では付いてこい白野よ。」

白野「あ、ああ。」

その後白野とネロ達はギルガメツシユの後に付いていきとある部屋に案内される。

「白野達の後ろにマルタ達も付いてくる」

ギルガメツシユ「白野よ、この部屋に入るがよい。」

白野「……………」

ガチャツ！

白野「何だ！この悪趣味な部屋は！」

ギルガメツシユ「私の部屋を悪趣味と捉えるか！くはははは！いいぞ、やはり貴様は面白い！」

白野「当たり前だろ！こんな金ぴかな部屋、で？何故此処に俺達を連れてきたんだ？」

ギルガメツシユ「そうさせるな、先ずは好きなどころに座るがよい、ルーラーよ今回は特別だ貴様ら雑種も座るがよい。」

マルタ「では、失礼して。」

白野達はそれぞれの空いている椅子やソファーに腰を掛ける可憐は白野達にお茶を渡していく。

白野「あ、ありがとう可憐さん、それとさつきはすまない。」

可憐「いえいえ、白野さんの怒った姿は素敵でしたよ、ウフフ。」

ネロ「貴様！可憐よ！奏者は余のマスターぞ！触るでない！」

タマモ「そうです！ご主人様は私のマスターです！お茶を出したらとつとと離れやがれってんです！」

アーチャー「やれやれ、それでギルガメツシュ、ちゃんと説明はするのだろうか？」

ギルガメツシュ「少し待て、贋作者よ、……。フム、どうやら今は我達以外の者は居らん、では白野、今からこの我が説明してやろうではないか、心して聞くがよい！」

白野「あ、ああ。」

ギルガメツシュ「前回の聖杯戦争時の令呪が我が蔵にある。以上だ！」

白野「……。へっ？」

ギルガメツシュ「何だ雑種、ちゃんと聞いていると言ったではないか、この我に二度同じことを言わせるとはつくづく強欲なマスターよな！仕方がないもう一度だけで、心して聞くがよい。」

白野「あ、はい。」

ギルガメツシュ「前回の聖杯戦争の令呪が我が蔵にある！以上だ！」

白野「……………はい？」

ギルガメツシュ「さあ！私の説明を聞いたのだ！賛美するがいい！うははははははははははは！」

白野「デ……………」

ギルガメツシュ「ん!？」

白野「デキルカー！！」

タマモ「ご主人様！お、落ちて着いてくださいまし！」

ネロ「奏者よ、金ぴかは何を言っているのだ？余にはわからぬ。」

アーチャー「仕方ない、ギルガメツシュよ、貴様前回の聖杯戦争のマスターから令呪を奪った、それでいいな。」

ギルガメツシュ「ほう、贋作者、よく私の説明が理解出来たな、流石は贋作者と言うことか。」

白野「アーチャー？ギルガメツシュの説明が理解出来るのか？」

アーチャー「ある程度はな、それでギルガメツシュ、マスターをどうした、まさか始末したのではないな。」

ギルガメツシュ「ふんつ、我がマスターは我が認めた白野だけだ、前回のマスターの最後は呆気ないものよ、だが我は召喚されたと同時に白野がこの時代に転生している事

がわかり仕方なく前回のマスターに付き従っていたに過ぎん。」

タマモ「それでギルガメツシユさんはご主人様に再開するために前回のマスターを始末し令呪だけを奪いその令呪で今までサーヴァントとして生き延びたのですね。」

ギルガメツシユ「少し違うな。」

タマモ「??」

ギルガメツシユ「前回のマスターには仕方なく付き従っていたが始末したのではない。」

白野「どう言う事？」

ギルガメツシユ「あの雑種が死にかけの時に我が令呪だけを切り離した、そして令呪はそのまま我の蔵に入れたに過ぎん。その後我はその令呪を使いこうして白野に会うまで生きていた訳だ。」

ネロ「ギルガメツシユよまだ令呪は有るのか？」

ギルガメツシユ「令呪1画使いまだ2画残っている、令呪とは大した物よな、くははははは！」

白野「……………」

ギルガメツシユ「どうした？雑種よ、何だそんなに我様に会えて嬉しいのか！嬉しいすぎて声も出せんか！うはははははははははははは！」

白野「だつたら……」。

ギルガメツシュ「ん？」

アーチャー「やれやれだな。」

ネロ「ギルガメツシュよ今回は貴様が悪い。」

タマモ「ご主人様、もう好きだけ叫んでくださいね。」

白野「だつたら！ 始めからそう説明しろー！！ 何だよあの説明は！ 話飛ばしすぎだろ！ 何がうははははははははははは！ つだ！ てっゅーか最初に会ったときに何故言わなかつた！ 何だよ！ 何だよ！ あれだけムキになった俺って何なの！ あつ！ やば！ 思い出したら恥ずかしくなってきたつて！ 何笑ってるんだギルガメツシュ！」

ギルガメツシュ「くはははははは！ いいぞ！ やはりお前は我を愉しませてくれる！ くはははははは！」

白野「もうヤダこいつ！ 誰か何とかして。」

タマモ「ご主人様？ あくあ、すねちやいましたね。」

ネロ「拗ねてる奏者も愛らしいではないか！」

白野「………はっ！ ま、まさかマルタも始めから知つて！」

マルタ「知りません！ ギルガメツシュ！ 貴方私を騙したのですね！」

ギルガメツシュ「くははははははははははは！ 何故雑種に話さないとかん！ それにルーラーよ貴

様の事だ真実を知れば白野に全て話すであろう、貴様は何故か白野に甘いからな、くははははは！」

マルタ「くっ！おのれ！」

ギルガメツシユ「くははははははは！」

可憐「何でしようか？この状況は。」

アーチャー「さあな。」

完 第16話

## 第17話

（衛宮邸）

アーチャー「……………」

リン「お帰りアーチャー。」

アーチャー「!?…………」。マスターか、どうした。」

リン「どうした、ね、それはこっちのセリフじゃないかしらアーチャー？そんな顔を  
して。」

アーチャー「気にするな。」

リン「ま、いいでしょ、でっ？岸波君に呼ばれて教会に行つたけど、何をしてたのか  
しら？」

アーチャー「……………」

リン「無反応って、令呪でも使おうかしら？」

アーチャー「なっ！わ、分かった、話す！話すから！」

リン「じゃ、教えてちょうだい、教会で何をしてたのかしら？」

アーチャー「仕方ないか……………」



リン「ギ、ギルガメツシユ！驚いた。まさかあの英雄王がサーヴァントで召喚されたなんて。」

アーチャー「第4次聖杯戦争だかな。」

リン「それもお父様のサーヴァントとしてね、アーチャーから聞いた話からすればギルガメツシユは慢心でわがまま、お父様ですらマスターとしてじゃなくギルガメツシユの下僕状態だなんて、そんなサーヴァントを岸波君は使役して、更にはギルガメツシユが唯一認めたマスターだったなんて。」

アーチャー「白野の話では何度も殺されかけたみたいだがな。」

リン「ふくん、しっかしあれね、あんたから岸波君の事は聞いたけど、月の聖杯戦争の勝利者で転生者、生前の記憶もあるなんて、今回の聖杯戦争が一番厄介なのは岸波君かも知れないわね。」

アーチャー「その点は大丈夫だろう。」

リン「何でよ？」

アーチャー「白野は仲間となった以上決して裏切りはしない、あの男はそんな人間だからな。」

リン「今はそれでも終盤は分からないわよ？最終的には岸波君達は兎も角私達は一組になって始めて勝敗が決まるんだから、彼らが敵になる可能性は高いわよ。」

アーチャー「ま、その時はその時さ。」

くユリウス邸く

凜「でつ、白野、ギルガメツシユは結局教会に留まるつてことでいいのね。」

白野「ああ、まあどうでもいいよギルガメツシユは。」

凜「??」

タマモ「凜さん、ご主人様はギルガメツシユさんに遊ばれて拗ねちゃってますから、取  
敢えずはそつとしときましよう。」

凜「そうね、問題はこれからの事ね、タマモ、キヤスター達がギルガメツシユから聞  
いた話が本当なら聖杯は余り期待できないわね、何せ聖杯は汚染されてるんだから。」

タマモ「はい、何でもギルガメツシユさんの話では第3次聖杯戦争の時にあるサー  
ヴァントが聖杯に吸収された瞬間泥まみれになり汚染されたと……。」

ユリウス「この世の全ての悪、アンリマユか、アインツベルンは最悪なサーヴァントを召喚したな。」

ラニ「そうなのですか？」

ユリウス「ああ、アンリマユ自体は大した英雄ではないがな、反英雄ではあるが、なにせアンリマユは只の人間だ、この世の全ての悪事態をアンリマユに押し込めたに過ぎん、用は生け贄みたいな者だ、そんなサーヴァントが聖杯に吸収されたとなれば。」

凜「全ての悪が聖杯に存在しているみたいなものね、しかも第5次聖杯戦争の聖杯の中にアンリマユは未だにあり続けている、もしそんな聖杯を手に入れたら・・・。」

桜「危険すぎますね、下手をすれば冬木だけではなくこの世の全てが悪に染まる可能性があります。」

ユリウス「聖杯を使えばの話だかな。」

凜「ちよつと待って、えっ？と言うことは例え聖杯を手に入れても私達の願いは叶わないと言うことかしら？」

ユリウス「聖杯を使えば俺達は元の2030年に帰る事は可能だ、だが・・・。」  
ラニ「??」

ユリウス「聖杯の中にはこの世の全ての悪がある、この世界は悪に染まるだろうな、下手をすればこの時代の全てが滅びる可能性がある。」

凜「はあ！そんな聖杯どう考えても使えないわ！そんなことしたらこの世界は最悪終焉を迎えることになるわ。」

桜「いつその事聖杯を諦めては？私は始めから2030年に帰るつもりはありませんでしたし。」

凜「へっ？桜、あんたこの時代に残るつもりなの？」

桜「はい。私は先輩と一緒にこの時代で生きていくつもりでした。」

ラニ「桜もですか、私も残るつもりでこの時代に来たので、凜とユリウス、後はシンジの3人が元の時代に帰ると言うことですね。」

凜「ラニまで、あつ？ありすは？あの娘も残るつもりなのかしら？」

ラニ「わかりませんが、ですが凜、ありすは残る可能性は高いです、なにせこの時代は白野さんがいますから。」

凜「た、確かに、（くっ！まさかラニ達が残るなんて、私も元々残るつもりでいたけど）。」

ユリウス「聖杯を使わず元の時代に帰ることが出来ればいいが、なにせよその事は後回しだな、今は聖杯戦争を終わらせることが先だ。」

凜「そうね、第5次聖杯戦争のサーヴァントは残り5騎、セイバーとアーチャーが以外で厄介なのはランサーかしら？」

ジャンヌ「いいえ、凜、厄介なのはキャスターでしょうね。」

凜「はあ? 何でよ?」

エリザ「ランサーの事は凜はよく知ってるし、アサシンは《私》なんだし、ある程度の攻略方は調べれば出来るんじゃないかしら?」

ラニ「確かに、私達はまだキャスターと出会っていませんね。」

凜「……、ならランサーかアサシンを先に攻略しましょうか、ランサーは二対一が好ましいかしらね、あいつはそんな男だから。」

李「なら儂がランサーを仕留めようか、奴とは一度闘いたいと思っていたものよ、かつかつ!」

ジャンヌ「なるほど、二対一で戦い隙を見て別のサーヴァントが止めを刺す実に愉しいですね。」

凜「何を言ってるのよあんたは! まあ、勝つためならそれもアリなのかしら?」

エリザ「……。」

ドレイク「あつはつはつはつ! 流石凜だねえ、案外あんたとジャンヌが組めば最強かも知れないねえ。」

凜「う、五月蠅い!」

ジャンヌ「!? ……」

桜「?、どうしました? ジャンヌさん。」

ジャンヌ「外に誰か居ますね。サーヴァント? でしょうか?」

エリザ「もしかしてルーラーかしら?」

ユリウス「アサシン、すまないが様子を観てくれないか? 嫌な予感がする。」

李「フム、よかろう、しばしまっている。」

ネロ「余も付き合うぞアサシン、何故だか余の癖つ毛が警告しているのな。」

ジャンヌ「・・・。」

ガチャッッッ!

ネロ「なっ!」

李「サーヴァントっ!」

エリザ「えっ? でもこいつら何か黒いんだけど!」

ドレイク「おかしいじゃないかい! サーヴァントは私達も入れて残りは1・2騎のはず、何でこんなにサーヴァントがいるんだい!」

ジャンヌ「黒いサーヴァント・・・、まさかシャドウサーヴァントですか?」

凜「シャドウサーヴァント? ジャンヌ、あんたはこいつらの事知ってるの!?!」

ジャンヌ「ええ、ですが今は目の前の敵を。」

ネロ「うむ! サーヴァントの数はざっと見て1・2・3といった所か、黒いサーヴァン

トは本来のサーヴァントとは少し劣るとみた。余達で倒せるだろう。」

タマモ「私も参戦したいのですがタブレットのの中ではお役に立ちませんね、ですので皆様ご主人様の為に気合いをいれて頑張ってくださいまし。」

ドレイク「さあ！ひと暴れしようじゃないかい！」

エリザ「まずはコイツらを外に出すことが先ね！」

李「かっかっかっか！ユリウスよサポートは任せるぞ！」

ジャンヌ「さて、どれからいこうかしら？」

それぞれのサーヴァント達はシャドウサーヴァントに攻撃を仕掛ける。

ネロ「はあー！」

シャドウサーヴァント1「くくくく！」

エリザ「セイバー！そっちに行つたわよ！」

ネロ「うむ！任せよ！」

ドレイク「あつはつは！なんだいコイツら、全く怯まないねえー。楽しいじゃないか

！」

ジャンヌ「さあ、死になさい！はあー！」

シャドウサーヴァント2「がぁー！？」

李「かっかっか！なかなかどうして、こやつらどうやら本能で動いてるものみたいだ



な！」

ジャンヌ「……、おかしいですね、どうやらシャドウサーヴァントは私達が目的ではないみたいなの。」

李「……、確かに、なら何が目的で此処に来た。」

ドレイク「さあね、ん？何か様子が変だね。」

ネロ「動きが止まったな、どうなってるのだ。」

エリザ「ねえ、シャドウサーヴァントの数がおかしくない、さっきより少なくなってるわ。」

李「確かに、……、……、!?こやつらまさかマスター達が目的では！」

ネロ「そ、奏者!？」

エリザ「分からないわよ！凜！大丈夫！」

ジャンヌ「マスター！大丈夫ですか？」

凜「エリザ、私は大丈夫よ。」

ラニ「私もいます。」

ユリウス「!?見ろ！シャドウサーヴァントが退いていく！」

桜「せ、先輩!?先輩がいません！」

ネロ「なっ！奏者！奏者！」

凜「白野がいない！セイバー！白野君を探して！エリザ！二階に行つてシンジとありすを見てきて！早く！」

エリザ「え、ええ！分かつたわ。」

ネロ「奏者？奏者！」

凜「……………あ、エリザ！シンジ達は無事だったかしら？」

エリザ「ええ、シンジにありすとアリスは熟睡してたわよ、だけど……………」

ネロ「……………」

タマモ「……………」

凜「白野がいないわね、アイツらの目的は白野ってことね。」

桜「先輩……………」

ラニ「白野さん……………」

ネロ「奏者、おのれ！何処の誰だか分からぬか許せん！」

凜「待ちなさいセイバー！」

ネロ「何故だ凜よ！余の奏者が拐われたのだぞ！何処の誰だかわからぬが叩きのめし

てくれる！」

タマモ「誰が余の奏者ですか？私のご主人様です！」

ネロ「余の奏者だ！」

タマモ「私のご主人様です！」

ネロ「ムムム！」

タマモ「キシヤーー！」

凜「はあく、まあいいわ、兎に角白野が拐われたのは何か目的があるはず、多分命は

大丈夫だと思うけど。」

ジャンヌ「ルーラー、マルタなら何か解るのでは？」

エリザ「そうね、だったら教会に行くべきかしら？」

ドレイク「その必要はないさね、なあ？ルーラー。」

マルタ「ええ、こんばんは皆様、……。白野様がないみたいですが？」

ジャンヌ「ええ、どうやら拐われたみたいですね。シャドウサーヴァントに。」

マルタ「アヴェンジャー、黒いサーヴァント、シャドウサーヴァントにですか？」

可憐「？マルタ？シャドウサーヴァントとはいったい？」

マルタ「サーヴァントであつてサーヴァントではない存在、ですが……。」

ジャンヌ「誰がシャドウサーヴァントを召喚したのか？それに何故白野を拐ったのか？」

桜「先輩、アヴェンジャーさん、先輩は無事なんでしょうか？」

ジャンヌ「白野を拐う理由があり後は目的がある以上命は大丈夫なはずですよ。ですが……、もし始末することが目的であれば。」

桜「先輩。」

ネロ「くっ！奏者！何処に。」

タマモ「キシシャー！ご主人様！おのれ！何処の誰だかわかりませんが！ご主人様に

傷をつけてみやがれ！ただじやおきません！」

マルタ「白野様が何処に拐われたのかわかりませんがこのマルタ、かならず白野様を見付けて見せます！」

凜「大変なことになったわね、こんな事態もありすが知れば……。あの子の事だから、白野を一人で探しに行くかも知れないわ、なんとか誤魔化さないと。」

ラニ「私が何とかします。ですので凜達は白野さんを。」

凜「そうね、だったら衛宮君にも伝えるべきかしら？」

桜「一応私が連絡しておきます。後BBに連絡も。」

凜「そうだわ！BBよ！アイツなら白野の居場所がわかるかも知れないわ！桜、今すぐBBに連絡してちょうだい、アイツなら白野が拐われた時点で調べてるはずだから。」

桜「はい！」

くユリウス邸地下室く

B B 「全く！何をしてるんですか貴方達は、まあいいでしょう、先輩の居場所はわかりますから。」

ネロ 「ならB Bよ、早く奏者の居場所を答よ！」

タマモ 「そうです！さっさと答えろってんです！」

B B 「うるさいですね、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ、先輩のスマホの中にはメルトがいますから、問題なのは何故先輩が拐われたかです。」

マルタ 「シヤドウサーヴァントを召喚した人物が誰なのか分かるのですか？」

B B 「さあ？ですが先輩を拐った理由は多分ですが月に関係が在るのではないかと。」

凜「月？まさか……、この時代にムーンセルの情報を知る奴がいるの!？」

B B「そうみたいですわね、どうやってムーンセルの事を知り先輩が月の支配者だと言  
う情報を手に入れたのかはわかりませんが。」

ネロ「そんな事より奏者は何処に拐われたのだ！余は早く奏者を助けたい！B Bよ早  
く教えよ！」

B B「うるさいですね、今メルトに連絡をしています。全く………！あつ  
！繋がりましたね、もしもしメルト？」

メルト『あら？B B？なんの用かしら？』

B B「先輩は無事なんでしょうね、後今何処にいますか？さっさと答えなさい。」  
メルト『白野は無事よ、今は眠らされてるみたいね、場所は………。』

くとある廃墟

白野「……………う、うくん、あ、あれ、此処は？」

メルト「あら？目が覚めたのね白野、おはよう。」

白野「そ、その声はメルトリリス！何処に？」

メルト「貴方のスマホの中にいるわ。」

白野「はい？……………あつ、ほんとだ！でもどうして？」

メルト「貴方が何者かに狙われてる情報をBBが見付けたの、それで私が白野のスマ



ホに潜みもしものためにね。」

白野「狙われている！じゃあ此処は？」

メルト「さあ？ま、手足が自由だから何処かの牢屋じゃないかしら？」

白野「そうですか、参ったなく、どうしようか？」

メルト「ストツプ！白野、誰か来るわ。」

白野「へっ？」

??「今晩わ、哀れな子ブダ、もう目が覚めたのね。」

白野「あ、あんたは！アサシン!？」

アサシン「ええ、まさかこんなに簡単に貴方を捕らえる事が出来るなんて、貴方はほんと隙だらけなのですね。」

白野「……………」

アサシン「素敵な目をしてるわ貴方、だからかしら？エリザベートやジャンヌ・ダルクが貴方を気に入るのは。」

白野「えっ？」

アサシン「まあ、その事はいいでしよう、さて、貴方には聴きたい事があります。心配しなくても大丈夫ですよ、情報さえ手に入れば貴方を解放しましょう。」

白野「……………」

完 第17話

## 第18話

「ユリウス邸」

凜「ごめんなさいアーチャーこんな時間に呼び出したりして。」

アーチャー「気にするな、それで、白野は何処に拐われたんだ。」

B B「メルトの話ではアインツベルン城の森の廢墟らしいですね。ま、森と言ってもアインツベルン城からかなり離れてますが。」

ラニ「それで、誰が白野さんを拐ったのですか？」

B B「アサシンですね。ですから何か府に落ちませんね。調べたのですがアサシンのマスターは魔術協会から派遣された只のペーペーさんなんですよ、そんなゴミカスさんがシヤドウサーヴァントを召喚出来るとは思いません。」

凜「アサシンのマスターが誰かと手を組んだ可能性があるってことね。」

士郎「な、なあ、情報は兎も角白野を助けにいかなくていいのか？」

凜「ああ、その点ならもうセイバーとアヴェンジャーが向かつてるわ。アヴェンジャーのマスター、桜とね、後単独でユリウスとアサシンも行動してるから大丈夫でしょ。」

士郎「そ、そう。」

B B 「一応セイバーさんにはアサシンは始末しても構いませんがアサシンのマスターは捕らえるようにと言っておきましたから捕らえ次第アサシンのマスターに尋問、もしくは拷問して全てを吐き出させましょう。」

エリザ「ちよつ！駄目よ！アサシンは私が始末するの！今すぐ桜に連絡してアサシンは始末しちゃダメと伝えてちょうだい！」

B B 「却下します。何か面倒くさいので。」

エリザ「むきくく！凜！今すぐセイバー達を追いかけるわよ！」

凜「はいはい、分かったから、ま、そう言う事で私とランサーは今から白野の所に行くわ。ラニ、ありすをよろしくね、もし白野が拐われたと知れば何をするか分からないから。」

ラニ「分かりました。」

凜「ヨロシクね。衛宮君、悪いけど此処にいてちょうだい、もし何かあれば私か桜に連絡してほしいから。」

士郎「わ、分かった、遠坂もそれでいいか？」

リン「ええ、構わないわ。」

マルタ「凜さん、私も行きましょう。白野様はもちろん心配ですが何か嫌な予感がす

るので。」

凜「えっ？わ、分かったわ。可憐はどうするの？」

可憐「行きましよう。マルタのマスターですから。」

凜「よし、それじゃあ行きますか！ラニ、後の事ヨロシクね。」

ラニ「はい。」

くアインツベルン城の森付近く

ネロ「むうー！奏者は何処にいるのだ！」

桜「セ、セイバーさん、落ち着いて下さい。もう既にアインツベルンの森の中です、何時敵が出で来るか分かりません。」

ジャンヌ「まあ、アインツベルンの森と言つても大分離れてますが、さて、どうしましょうか？」

桜「BBの話によれば先輩は此処から数キロ離れた場所にいます。ですが……。」  
ジャンヌ「シャドウサーヴァントですか？ウフフ、いいでしょう。所詮はシャドウサーヴァント、本来のサーヴァントに戦いを挑むなんてなんて愚か、ですが……。」  
桜「??」

ジャンヌ「私のオモチヤを拐った報いは受けてもらいましょうか？簡単には消さず少しづついたぶりましょう。ウフフ……。」

桜（ジャ、ジャンヌさんが恐いです、やはり私一人ではこの方達は荷が重すぎです。）  
ネロ「うむ、どうやらBBの言った通りのようだ、既に囲まれているみたいだ、ほう、それもかなりの数だな。」

ジャンヌ「それはそれは、ではマスター、ちゃんと付いて着て下さいね、今から愉しい殺戮の時間ですから。ま、無理ならゆつくりで構いませんよ、私が通った後はシャドウサーヴァントは消えていますから。」

桜「えっ？」

ネロ「うむ、ではジャンヌよ、余と勝負と言うのはどうか？どちらがシャドウサーヴァントを多く倒せるか。」

ジャンヌ「まあ！なんて素晴らしい事を、いいでしょうセイバー、ま、勝つのは私ですが、ウフフ……。」

ネロ「ジャンヌよ、勝つのは余であろう。セイバーこそ最も優れたサーヴァント！貴様より多くシャドウサーヴァントを倒し、奏者に頭を撫でもらうのだ！」

ジャンヌ「その願いは叶いませんよセイバー。」

ジャンヌの言葉が終ると同時にネロとジャンヌは敵陣に瞬足で走り出す。一人残された桜は……。

桜（……。。と、兎に角、先輩の所に、ジャンヌさん達には追い付けませんが、少しでも早く行きましょう）

そう思いながら白野の捕らわれている廃墟に向かうのであった。

凜「はあ、やつと着いた。あいからわずここまで来るのは疲れるわね。」

エリザ「何やってるの凜！早くしないとセイバー達がアサシンを倒してるかもしれないわ！さっ、行くわよ！」

凜「分かったから、．．．ん？どうしたのマルタ？」

マルタ「いえ、シャドウサーヴァントの気配が無いので、おかしいですね、私達が此処にいる以上何時仕掛けてきてもおかしくはないのですが．．．」。

可憐「所詮はシャドウサーヴァント、先に来たセイバーさんとアヴェンジャーさんに倒されたのでは？」

マルタ「それでもシャドウサーヴァントの数はかなりのはず、こんな短時間で倒すなど。」

凜「いいんじゃないかしら、シャドウサーヴァントがいなければ好都合



よ、さ、早く行きましょか。」

マルタ「そうですね、余り深く考えては先に進めませんね。」

く 廃墟付近く

ネロ「うむ！どうやらさっきのシャドウサーヴァントで終わりのようだな。」



?? 「くだらない事を、計算が出来ないのは貴女達お二人なのでは？」

ネロ・ジャンヌ「・・・!?」

?? 「因みに貴女方の勝負は1ー1騎と1ー1騎の引き分けですよ、セイバー、アヴェンジャー。」

ジャンヌ「それはどうも、まあいいでしょう、セイバー、勝負は又の機会に。」

ネロ「アヴェンジャーよ、では今日の前のサーヴァントを倒したら勝負が着くのではないか？」

ジャンヌ「ウフフ、そうですね、では私が始末するので貴女は下がっていなさいセイバー。」

ネロ「何を言っておるか！余が倒す！貴様が下がっておれ！」

ジャンヌ「いいえ、私が始末します。」

ネロ「いいや、余が倒す！」

ジャンヌ「私が始末します！」

ネロ「余が倒す！」

ジャンヌ「私です！」

ネロ「余だ！」

ジャンヌ「……………。」

ネロ「むむむむむむ！」

ジャンヌ「はあく、仕方ありませんね、では目の前のサーヴァントに決めてもらいますか？ねえ??アサシン。」

アサシン「……………」

ネロ「仕方がない、良からう！ではアサシンよ貴様が決めよう！」

アサシン「そうですね？私の目的はエリザベートとジャンヌ・ダルクを始末する事、セイバー、貴女は興味がありません、ですのでジャンヌ・ダルク、私は貴女を殺したい、始末したい、貴女の血を一滴も残らず私は飲み干したい！私は貴女を少しずついたぶり殺したい！アヴェンジャラー！アヴェンジャラー！アヴェンジャラー！アヴェンジャラー！アヴェンジャラー！アヴェンジャラー！………いいえ！貴女はジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！！！！」

ネロ「お、おおく、ジャンヌよ、おぬしはアサシンにかなりの怨みを買っておるのだな、あの女、まるでバーサーカーみたいだぞ。」

ジャンヌ「はあ、まあいいでしょう、下がりなさいセイバー、アサシンは私が始末します。」

ネロ「良からう！ではアサシンは任せるぞ、なに、心配しなくとも貴様が負けそうになれば余が助太刀してやろうではないか。」

ジャンヌ「言つてなさい！クソ皇帝が！」

アサシン「はあ、はあ、フフフ、ジャンヌ・ダルク！ジャンヌ・ダルク！ああ、今日、この日を感謝します！貴女を始末できる！貴女をなぶり殺せる！貴女の血を私が飲み尽くす！」

ジャンヌ「（．．．．．。変ですな？アサシンは冷静なサーヴァントのはず、セイバーの言つたとおりまるでバーサーカーみたいな、．．．．．）」

ネロ「何をしておるアヴェンジャーよ！アサシンが来るぞ！」

ジャンヌ「!？」

アサシン「さあ、死になさい！」

ジャンヌ「ちっ！死ぬのは貴女ですよアサシン。」

アサシン「アハハハハ！ジャンヌ・ダルク！ああ、素敵です！貴女は私を愉しませてくれる！貴女を始末できるのはなんて素晴らしい事！貴女を殺した後はエリザベトを！喜びなさいジャンヌ・ダルク！この私殺されるのですから！」

ジャンヌ「うるさいですよアサシン、ウフフ、お喋りばかりで貴女は周りが見えてないみたいですね。」

アサシン「……………っ！」

ジャンヌの言葉でアサシンは周囲を警戒する。

ジャンヌ「もう遅いですよ。」

アサシン「なっ!？」

ジャンヌ「さあ！串刺しにしてあげましょう！」

アサシン「しまっ！」

アサシンの足元から無数の槍が飛び出す。

無数の槍と同時にアサシンは炎に包まれる。

アサシン「あ、ぎゃー！ー！ー！」

ジャンヌ「あはははは、私の槍は憤怒の槍、さあ！アサシン、私の槍と炎で串刺しと丸焼きになりなさい！」

ネロ「なんと！アヴェンジャーめ、たいした女よな。」

ジャンヌ「ふんっ！さて、決着は着きましたし、後はアサシンのマスターを……………」

!？」

ネロ「っ！いや！まだだアヴェンジャーよ！」

ジャンヌ「ええ、どうやらアサシンはまだ生きていますみたいですね。」

アサシン「……………」

ジャンヌ「まだ死んでないとは、まるでゴキブリみたい、ほんとしぶといですね。アサシン。」

アサシン「ジャンヌ・ダルク、私が貴女を殺す！貴様を始末し、エリザベートも私が始末する！」

ジャンヌ「!?魔力の開放？宝具！」

アサシン「さあ！ジャンヌ・ダルク！八つ裂きになりなさい！」

ジャンヌ「宝具じゃない！八つ裂き？．．．．．なるほど、そうですか、アサシン？貴女はどうやら宝具が使えないみたいですね？」

アサシン「黙りなさい！八つ裂き、八つ裂き！」

ガキーン！

ジャンヌ「ぐっ！バーサーカー並みの重さ！アサシン風情が！」

アサシン「ハハ、アハハハハ！八つ裂き！八つ裂きですジャンヌ・ダルク！」

ジャンヌ「ちっ！いい加減にしなさい！このっ！アサシン風情が！」

アサシン「がはっ！．．．．．はあ、はあ、フフフ、アハハハハ！いい！いいわ！ジャンヌ・ダルク！」

ジャンヌ「はあ、はあ、．．．．．」

アサシン「宝具を使わないのですか？ジャンヌ・ダルク。」

ジャンヌ「!?……………フフ、いいえアサシン、この私が貴女ごときに宝具など、ですが……………」

アサシン「??」

ジャンヌ「あらあら、アハハハハハ！いい！いいわ！貴女は私の思惑通りに動いてくれました！ほんとと貴女は間抜けさんです！」

アサシン「何？」

ジャンヌ「ウフフ、アハハハハハ！さあ！さよならです！アサシン、憤怒の炎に焼かれなさい！そしてもがきなさい！蟲のように！醜く！恐怖を感じなから！アハハハハ！アハハハハハ！」

アサシン「なっ！炎の槍が！」

アサシンの周りには炎の槍が無数に、ジャンヌの言葉を最後に槍はアサシンに向かいアサシンを串刺しにしていく。

アサシン「が、がぁー……！！」

ジャンヌ「あらあら、醜い悲鳴ですね、アサシン、貴女ならもつといい悲鳴が出せるはずでは？」

アサシン「い、イヤ！恐怖が！悲鳴が！あ、あ、あ、苦しい！呼吸が！だ、誰か！」

ジャンヌ「はあ、しぶといゴキブリです。早く灰になりなさい。フフフ、アハハハハ



ハ！」

アサシン 「私は、まだ死んでない！まだ……。」

ジャンヌ 「……………」

アサシン 「あ、あ、あ。」

「recover！」

ジャンヌ「!?」

ネロ「!?」

アサシン「……………」。

白野「はあ、はあ、ま、間に合った！」

ネロ「そ、奏者！」

ジャンヌ「……………」。

アサシン「あ、貴方は？」

白野「はあ、あ、やっぱ全力疾走は疲れるな。」

メルト「アサシンなんかほっとけばいいのに、全く！」

白野「で、でもアサシンは俺を助けてくれたし、このぐらいはいいだろ？」  
メルト「はいはい。」

ネロ「奏者！無事だったのだな！奏者〜！」

白野「セイバー！あはは、ああ、大丈夫だよ。だけど何故此処がわかつの？」

ネロ「うむ！BBとメルトリリスがなつ！奏者〜〜！」

白野「なるほどな、．．．ん！ど、どうしたのジャンヌ？何故俺を睨むの？」

ジャンヌ「白野、何故アサシンを助けたのですか？さあ！答えなさい！」

白野「え、えっと、あの、その、ですから？あのですね。」

ジャンヌ「白野！どうしたのかしら？さあ！答えなさいな、白野さん？」

白野「ですから、その、えくと。」

メルト「アサシンに助けられたのよ。」

ネロ「むっ！その声はメルトリリス！何処に？」

メルト「白野のスマホの中よセイバー。」

ネロ「ほお〜！キヤス狐と同じみたいなものか？」

メルト「そ、で、アヴェンジャーさん、さつき話した通り白野はアサシンに助けられ

たの。」

ジャンヌ「どう言う事でしょうか？えくと、メルトリリスさん？」

メルト「アサシンから尋問受けたのは確かだけどね、アサシンは白野に月のムーンセルの情報聞き出したの、本当ならその後は白野を始末するようにと命じられてたみたいんだけど、何故かアサシンは白野を殺さなかつたわ。」

ジャンヌ「はあ、それで、アサシンを助けたのですか？白野。」

白野「は、はい！そうです！」

ジャンヌ「まあいいでしょう。さて、アサシン、立ちなさい！貴女には聞きたい事があります。」

アサシン「……………」

ジャンヌ「あらあら、アハハハハハ！貴女には黙秘権はありませんよ。それとももう一度私が貴女を焼き殺しましょうか？」

アサシン「何故？」

白野「へっ？」

アサシン「何故私を助けたのですか？私を助けても何の意味がないのに。」

白野「わからない、気づけば体が勝手に動いてたから、それに……………。アサシンは助けてくれたし。」

アサシン「……………。私が貴方を拐つたのはマスター命令です。貴方を拐い月のムーンセル情報を聞き出せと命じられました。その後は私の好きにせよと言

われ。」

白野「……………」

アサシン「本当なら私は貴方を殺すつもりでしたが、何故か殺せなかった。何故でしようね？」

ジャンヌ「さあ？それで？」

アサシン「流石にこの男を自由にはさせられません。ですので牢屋に閉じ込め後は勝手にと、それだけです。」

ネロ「ほおー、してアサシンよ、奏者にムーンセル情報を聞き出し、おぬしのマスターに全て話したのだな。」

アサシン「ええ、そうね。」

ジャンヌ「でっ？そのマスターは何処にいるのかしら？」

アサシン「その辺に隠れてるのでは？あの男はそんな男ですから、自分が有利になるならどんな事にも手を付ける男です。今回の事も何処の誰だかわかりませんがその人物にたぶらかされたようなもの、本当に情けないマスターです。」

ジャンヌ「確かに、未だ姿を現さないのですから、臆病なマスターですネ……………」

ネロ「全くだな！弱いマスターなど、アサシンよ、貴様はハズレマスターを引いたみたいだな！」

ジャンヌ「アハハハハハ！ハズレマスターとは、セイバー！貴女は実に愉快です、アハハハハハ！」

ネロ「フハハハハハハ！」

アサシン「フフフ。」

白野「あれ？なんか意気投合してない？」

メルト「やれやれね。」

??「ふ、ふざけるな！何がハズレマスターだ！俺様は魔術協会から派遣された優秀なマスターだぞ！」

ジャンヌ「おやおや、やつと姿を見せましたか？ハズレマスターさん？」

ネロ「むっ！なんと！あのぶくぶくがマスターとなっ！まさにハズレではないか！」

アサシン「マスター！」

??「アサシンっ！貴様っ！何敵であるサーヴァントと仲良くなってるんだ！それに何故岸波白野を始末していない！」

アサシン「……………」

??「ぐぐぐぐっ！ふ、ふん、まあいい、アサシン、貴様はもう用済みだからな！」

アサシン「!？」

ジャンヌ「セイバー！」

ネロ「うむ！」

??「あははは、遅いわ！さあ！令呪を持って命ず！アサシンよ自害しろ！」

アサシン「……………あ。」

白野「アサシンっ！」

??「あはははっ！貴様のようなサーヴァントなどもう必要ないからな！俺様にはもつと相応しいサーヴァントがいる！アサシンのような使えないサーヴァントとは違う優秀なサーヴァントがな！」

ネロ「貴様は！」

??「ではな、聖杯は俺様の物、貴様など直ぐに始末してやる！あははは……………」

凜「ガンドツ！」

??「へっ？」

エリザ「はぁ……………」

ドコン！

??「がッ？」

ドサッ！

白野「り、凜？それにランサー！」

桜「先輩！こ無事ですか？」

白野「桜！」

凜「無事ね白野？それにしても……これはどう言う事かしら？何故アサシンが？」

白野「……………」

エリザ「ちよっ！アサシンっ！」

凜「諦めなさいエリザ、アサシンはもう駄目よ。」

エリザ「……………」

アサシン「……………岸波白野。」

白野「アサシンっ!？」

アサシン「ああ、素敵な瞳ですね、なるほど、不思議でした、何故私は貴方を始末できなかつたのか……………」

白野「待つてろ、今回復を……………」

アサシン「その必要はありませんよ、何せマスターに自害しろと命じられたのです……………はあ、はあ。」

白野「で、でも。」

アサシン「フフ、貴方は優しすぎですね、あの時も私の質問に簡単に答えるし、だからでしょうね、私が貴方を殺せなかつたのは、貴方が私のマスターなら……………」



白野「アサシン……」

アサシン「ほんとそっくりね、ねえ？ ジャンヌ・ダルク、顔ではなく姿でもないですが、真つ直ぐな心にどんな状況でも諦めない心、ほんとあの男にそっくり……」

ジャンヌ「……」

エリザ「ちよつと！ アサシン！ 私との勝負は？ てつ！ 何微笑んでるのよ！ こら！ アサシン！」

アサシン「エリザベート、良い所で邪魔を……。心配しなくても貴女との決着は着けますよ、次の機会があれば必ず。」

エリザ「ふんっ！ だったらさっさと消えなさい！ 何時まで白野に抱き締められる気よ！」

アサシン「ふんっ！」

エリザ「ムカーーーーー！」

凜「全く！ 少しは大人しくしてなさいエリザ！」

エリザ「むう……！」

白野「あはは。」

アサシン「もう直ぐ消えるわね、気を付けなさい岸波白野、貴方を利用してして人物が存在するわ、ムーンセルを手に入れようとしてる人物がね……」

その言葉を最後にアサシンの姿が消える。

白野「アサシン……」

ジャンヌ「ではアサシンのマスターを尋問しましょう。」

ネロ「うむ！だがっ！その前に。」

白野「へっ？」

ネロ「奏者よ！アサシンを抱き締めるとはな！奏者よ！余も奏者に抱き締められたい！さあ！余の胸に飛び込んで来るがよい！」

白野「はい？」

ネロ「どうしたのだ奏者よ！さあ！余の胸に飛び込んで来るがよい！」

白野「えくと、あの、セ、セイバー？流石にこんな場所ではって！いやいや！ダメダメ！今はそれどころじゃないだろ。」

ネロ「むううう！何故だ！アサシンは良くて余は駄目なのか？」

白野「そうじゃなくて、だ、誰か！」

ジャンヌ「ではアサシンのマスターを連れていきましようか。」

凜「そうね、エリザ、よろしくね。」

エリザ「ちよっ！嫌よ！こんな醜いブタを運ぶなんて！と言う訳でマルタよろしく。」  
マルタ「はあく、仕方ありませんね。（しかし変ですね？何か嫌な予感がしてここに来

たのですが、何も感じないとは、私の気のせいでしょうか?」

可憐「流石はマルタ、力持ちですね、……怪力聖女。」

マルタ「冷血マスターが!」

桜「では先輩、先に帰りますね。」

白野「えっ? ちよっ! 待って! 行かないで!」

ネロ「奏者よ! 余も奏者に抱き締められるのだ! 早くしないと余は、余は、な、泣くぞ!」

白野「ちよっ! セイバー! 落ち着いて! ね?」

ネロ「むうくく! ぐ、ぐす、余を抱き締めよ! 奏者!」

白野(なんか前にもこんなことがあったような、だ、誰か助けてくく!)

完 第18話

## 第19話

くユリウス邸地下室く

白野「はあく。」

B B 「ん？どうしました先輩？ため息なんかついて。」

白野「えっ？あ、いや、あの魔術協会から来た人、大丈夫かなと。」

B B 「生きてはいると思いますよ。たぶん……。」

白野「へっ？」

B B 「尋問してるのはサーヴァント達ですからね、それにアサシンに先輩を拐つてこいと命じた張本人ですから。」

メルト「気にする必要はないわよ白野、情報を手に入れたら解放する訳だし。」

タマモ「そうですねご主人様、あんなぶくぶくマスター何かより問題はこれからの事です！シャドウサーヴァントでしたっけ？そんなサーヴァントを召喚できるほどの実力者がご主人様を狙っているのですよ！即急に対策を取らなくてはいけません！」

白野「月のムーンセルを知りシヤドウサーヴァントを召喚できる実力者か、ひよっとして一人じやなく複数で行動してるのかも知れないな。」

BB「その可能性もありですね、．．．．．ひよっとして、ですがいったいどうやってこちらの世界に来れたのでしょうか？」

白野「ん？BB？思い当たる人物がいるの？」

BB「そうですね、ですがあくまでも可能性ですが。」

ガチャツ。

ジャンヌ「お待ちせしました。」

李「かっかツかッ！あの男は実に口が軽いのう、洗いざらい全て話おったわ！」

エリザ「ちよっ！ねえ！いいの？あの男を逃がして！」

凜「いいのよ、あんなのほっとけば、どうせ逃がした所で脅威にはならないし。」

ネロ「奏者よ黒幕がわかったぞ！まさかあいつがこの時代にいるとはな。」

ラニ「問題はどうかやってこちらの時代に來れたのかですね。」

白野「あいつ？セイバー、誰なの？魔術協会から來たマスターをたぶらかしたのは？」  
ユリウス「．．．．．だ、それだけじゃないそいつはこの時代の魔術師達を仲間にしている、それも一人じやなく複数な、仲間になつた奴等はサーヴァントを召喚できるほどの実力者達だ。」

白野「……!!」

B B「……さんですか、当然目的は先輩とムーンセルを手に入れる事でしょうかね？ アサシンのマスターは先輩を始末するべきだと個人的な判断だったのでしょう。」

桜「それだけではないんです。その人は先輩だけではなくもう一人手に入れたい人がいるんです。」

白野「もう一人？」

桜「はい。」

凜「ありますよ。」

白野「えっ？」

ラニ「ありますの魔力は今回の聖杯戦争のマスターの中では随一です、イリヤの話では『ありますは私よりも魔力は高いわそれもかなりの量よ。』と言っていました。あのイリヤが言うぐらいですから。」

凜「たぶんありますを拐ってシャドウサーヴァントを増やすつもりかもしれないわね、それとも別の事にありますを利用してしようとしてるかも知れないわ。」

白野「ありますが……！駄目だ！ありますは聖杯戦争に参加したとはいえまだ子供だぞ！ありますは絶対に俺が守って見せる！この岸波白野が……いや！ありますのお

兄ちゃんが!!」

凜「はいはい、このシスコン兄貴が。」

ユリウス「そう簡単には拐われんだろ、ありすにはキャスターがいるしな、それにジャバウオツクがありすを守っている、よほどの事が無い限りはまず拐われることはない。」

白野「何言ってるんだユリウス! ありすは俺が守る!」

ユリウス「そ、そうか。」

白野「はっ? まさか今ありすが危険なのは! あ、ありす! 今お兄ちゃんが行くぞ! ウオオオオオオオオ!」

白野はありすが危険なのではと感じありすの部屋に走り出す。

士郎「……………、あいつつてあんなキャラだったか?」

リン「知らないわのよ!」

凜「シスコンなだけよ、それもかなりのね。」

ラニ「白野さんはありすの事になると人が変わりますから。」

士郎「白野も危険な状態なはずなのに、ありすちゃんがよほど心配なんだな。」

ネロ「むう! 奏者め、ありすより余を構わないか!」

タマモ「そうですご主人様! ありすちゃんよりも私を構ってくださいませ!」

ネロ「むっ!」



タマモ「あ？」

ネロ「ふんっ！キヤス狐よ、奏者は余の奏者！貴様が出る幕ではないわ！」

タマモ「セイバーさんこそ、ご主人様は私のご主人様！さっさと消えろってんです！」

セイバー「ふんっ！タブレットの中にいるキヤス狐の癖に何を偉そうに。」

タマモ「ぐぬぬぬ！」

ネロ「ふんっ！」

凜「はあく、とりあえずは今後のことね、聖杯戦争はまだ終わってないけどランサーとキヤスターのマスターには会うべきかしら。」

マルタ「会ってどうするのですか？」

凜「ねえマルタ、一時的に聖杯戦争を中断は可能かしら？それが可能ならランサーとキヤスターのマスターに協力してもらおうかなと。」

マルタ「……、まず無理でしょうね、ランサーは凜とは知ってる仲とはいえキヤスターは協力とか多分ですが不可能です。それに聖杯戦争の中断は私ルーラーの名において認めるわけにはいきません。ですので……。」

ジャンヌ「戦争を継続しつつ白野とありすを守る、そういう事ですね。」

マルタ「はい。」

凜「白野は大丈夫でしょ、とりあえずはありすを守る事が最優先ね。」

ラニ「そうですね、白野さんの事ですから自分の事よりありすを守ってほしいはず  
す。」

ユリウス「いつその事第5次聖杯戦争を無視するのはどうだろうか？」

凜「どう言う事？」

ユリウス「本来の第5次聖杯戦争は俺達は無関係だ、あくまで聖杯を手に入れるため  
に無理矢理参加したに過ぎんからな、なら俺達は戦争を放棄し月のムーンセルを手に入  
れようとしている……を何とかする事を第一に行動したらどうだろうか？」

凜「聖杯は私達には必要性が無くなった訳だけど、それでも聖杯は手に入れて壊さな  
いといけないわ、あんな汚染された聖杯は使いたくないし、誰かに使われたくないしね、  
だから衛宮君達との協力関係は継続しないとイケないわ。」

ラニ「そうですね、もし協力関係を破棄すれば白野さんが黙ってないですから、やは  
り私達は聖杯戦争を継続するべきです。」

リン「ねえ、今汚染された聖杯って言ったけど、どう言う事？」

凜「へっ？」

アーチャー「しまっ……！」

リン「アーチャー？あんたそんな事一言も私に喋って無かったわよね？」

アーチャー「そ、それは。」

リン「さあ！アーチャー、ちゃんと説明して貰おうかしら！」  
アーチャー「……………」

凜「アーチャー、あんた遠坂さんに何も言っていないの？白野の事は喋っておいて聖杯の事は何も教えて無いなんて。」

士郎「へっ？な、何？聖杯って汚染されてるのか？」

セイバー「!?」

凜「はあく、まあいいわ、遠坂さん、衛宮君、私が説明してあげるからよく聞きなさい。」

凜は二人に聖杯について説明をする。

リン「この世の全ての悪、アンリマユ、そんな汚染された聖杯だなんて。」

セイバー「……………」

士郎「俺は別に聖杯は興味なかったからな、だけどそんな聖杯がもし使われたら。」

凜「ま、想像に任せるわ、今の私達には必要が無い物だしね、だけど衛宮君、第5次聖杯戦争は終決させないといけないわ、だから……………」

士郎「聖杯を壊すか。」

凜「ええ、私達の今の目標は聖杯を手に入れて壊す事なの、これは白野も了諾済みよ。」

桜（ユリウスさん、先輩は確かあの時の会話に入ってませんでしたよね？）

ユリウス（ああ、凜のとっさの判断だろうな、問題はあの二人とアーチャーとセイバーがどう判断するかだ。）

士郎「聖杯を壊すべきだ、聖杯戦争を終わらせて聖杯を壊す！もう二度とこんな戦いはやりたくないからな！」

リン「私が聖杯戦争に参加したのは遠坂家のためであって聖杯には興味は無かったわ、だから私も士郎と同じ考えよ、聖杯は壊すべきだわ。」

アーチャー「私は元よりそのつもりだからな、そんな聖杯は私にとって必要がない、後

は……。」

セイバー「……………」

士郎「セイバー？」

ガチャ。

白野「……………グス。」

桜「せ、先輩！どうしたんですか？」

白野「さ、桜、キャスターに怒られた、『ありすが気持ちよく寝てるのに邪魔しないです！』って、俺はただありますが、ありすが心配なだけなのに。」

桜「は、はあ、そうですか。」

白野「……………って、何？この雰囲気は？」

凛「全く、とりあえず白野はいいとして……………」

白野「えっ？何？何？」

ラニ「静かにしてください白野さん。」

白野「あ、はい。」

セイバー「私は……………、どうしても聖杯が必要なんです。祖国を、私が治めていた国を戻すため、はじめからやり直すために。」

士郎「やり直すために？」

セイバー「はい、結果的に私は国を滅ぼしてしまった、私のせいで、だから私は聖杯を手に入れて私のいない国を、初めから私が存在しない国を、そうすれば祖国を救うことができる、(そう、私さえいなければ国は豊かに、平和に、)だから私はどうしても聖杯を手に入れ全てをやり直す事が必要なんです！それが王としての最後の務めなのです。」

士郎「セイバー。」

セイバー「……………」

士郎「セイバー、それは間違っている、結果的にはそうなってしまったけど、それは違う。」

セイバー「違わない！私は間違っていない、聖杯さえあれば全てを、私のいない平和な国を……………」

士郎「だけど……………」

セイバー「すいません、士郎、しばらく一人にしてください。」

士郎「セイバー？」

セイバー「大丈夫です。少しの間一人になるだけです。」

セイバーは家を出る。

士郎「セイバー。」

白野「なあ士郎、さつきセイバーになんて言おうとしたんだ？」

士郎「ああ、まあ、結果的にはそうなっちゃったけど、だけどな。」

白野「……？」

ネロ「ふんっ！くだらぬ！衛宮士郎よ、お主あのセイバーに言いたい事があるのだろう。ならば言うがよい！安心せよ、余が付いていこうぞ！奏者よ、奏者も一緒に来るがよい！」

白野・士郎「へっ？」

ネロ「何をしておる！余はあのセイバーを認めるわけにはいかん！間違つてるとな！何が王だ！あのような王など余は認めん！」

白野「……」。わかつよセイバー、行こう士郎、士郎がいないと意味がないから。」

士郎「ああ、行こう。」

白野「凜、出掛けてくるよ。」

凜「まあいいわ、一応周囲は警戒しときなさい、あんたは狙われてるんだからね。」

白野「俺は大丈夫だよ、俺よりもありすを頼むな。」

凜「ええ。」

桜「先輩。」

白野「何も心配しなくても、大丈夫だつて、すぐ戻るからさ。」  
桜「は、はい、気お付けてください。何かあれば直ぐに連絡してくださいね、先輩。」



く  
とある橋の下にある公園  
く  
セイバー「……………」  
」。

セイバー「(土郎、私は間違っていないはずですが、貴方は………、土郎、私は何が間違っているのですか？ わからない、わかりません、土郎)」

ネロ「ふんっ！ 貴様の様なやつが王などとは、貴様に付き従った者共は無様ではないか！」

セイバー「!？」

ネロ「何だ、余が近づいてる事に気がつかぬとは、貴様、本当にサーヴァントなのか？ まるで覇気が感じられぬ、貴様の様な覇気が無いサーヴァントなどどつと消え失せるがよい！」

セイバー「貴方は？ セイバー！ 何故此処に？」

ネロ「何だ、余が居ては困るのか？ まあそんな事はどうでもよい事だ！」

セイバー「何のつもりですか？ 今の私達は仲間同士です。私は貴方と戦う気はありません。」

ネロ「であろうな、だが！余は貴様を認める訳にはいかないのでな、余が王であるよう貴様も王、貴様の様な王など余は認めん！本来ならマスターである衛宮士郎が言う事であるが全てを受け入れられぬ王など王ではない！それではガウエインが無様である。」

セイバー「なっ!? な、何故貴女かガウエインを？」

ネロ「ふんっ！貴様はあのアーサー王であろう。貴様が持つ剣は星の聖剣エクスカリバー！ならばもう一つの姉妹剣、その保有者はガウエイン！ならば自ずと貴様の聖剣を見れば貴様がどの英雄なのか一目当然であろう。」

セイバー「貴方はガウエインと出会っているのですね？」

ネロ「うむ！あの者は中々の強敵であった！それに比べ貴様は大したこと無さそうだな、王でありながら全てを受け入れられぬなど貴様は王失格だな！そんな王など余が認めん！」

セイバー「私を侮辱するのか？セイバー、私は王だ！だからこそ……」

ネロ「ふんっ！何を言うか！余は貴様を侮辱などしておらん！馬鹿にしてるだけだ！」

セイバー「なっ!? き、貴様！」

ネロ「さあ！剣を構えよ！余が貴様の性根を叩き直してくれる！」

士郎「白野、お前のサーヴァント、セイバーの真名解つてたんだな、それも剣を視ただけでだなんて。」

白野「へっ？ いや、違う違う！ 教えられたんだサーヴァントの真名を、英雄王に。」

士郎「英雄王って、……ま、まさか？」

白野「ああ、英雄の中の英雄王、ギルガメツシュだよ、とりあえずギルガメツシュについての理由はまた今度でいいか？ 今はそれ所じゃないからな。」

士郎「あ、ああ、でも大丈夫なのか？セイバー同士の戦いなんて、下手したらこの辺りが……」

白野「大丈夫だろ、多分、まあ、流石にやばくなったら止めるさ、令呪を使ってもな。それよりも士郎、悪いけど俺セイバーの所に行くな、俺はセイバーのマスターだから。」

士郎「……、ああ、そうだな、俺もセイバーの所に行くか……、んん、なんかあれだな、仲間同士だけどまさか白野とこうなるなんて、まあ、お互いに本気じゃないし大丈夫か。」

白野「そう思ってるのは士郎達だけだぞ、俺はセイバーをサポートするしな、例え仲間同士でも、俺とお前が幼なじみで親友でも、俺はセイバーのマスターだ、マスターになつた以上全力で俺はセイバーをサポートする。」

士郎「は、白野？」

白野「ま、言い方が悪いかもしれないが殺しはしないさ、さつきも言ったけど本当にやばくなつたら令呪を使つても止めるからな、だから士郎、俺はセイバーを全力でサポートする、お前も全力で自分のサーヴァントをサポートするんだな。」

士郎「白野……、だな！ああ！そうだな！俺はセイバーのマスター、サーヴァントをサポートするのはマスターの役目だ！だから白野！」

白野「んっ？」

士郎「お互いに本気で、全力で戦おう！」

白野「ああ！それと士郎、ちゃんとセイバーに言いたい事を言えよ、中途半端は良くないからな。」

士郎「そうだな、まあ、お前のセイバーが言ってるかも知れないけど俺がちゃんと話さないといけないはず、俺はセイバーのマスターだから！」

白野「大丈夫さ、例えセイバーが話していても士郎の言葉の方がきつと届くから、じゃあな。」

ネロ「遅かったな奏者よ、衛宮士郎との話は済んだのであろうな。」

白野「ああ、．．．さて、セイバー、戦うからには俺はセイバーを全力でサポートする、安心して戦いに専念しろ。」

ネロ「うむ！流石は奏者！余は奏者のサーヴァントになれて本当に嬉しい！さあ！行こうではないか！」

士郎「セイバー！」

セイバー「なっ！し、士郎？」

士郎「セイバー、俺ができる限りサポートする、お前がああ赤セイバーに勝てるように。」

セイバー「何を言ってるのです！下がってください！私は大丈夫です！あんなセイバーには負けません！」

士郎「駄目だ！俺はお前のマスターだぞ！マスターはサーヴァントをサポートする、それに……。」

セイバー「？」

士郎「白野と赤セイバーはお互いに信頼し合っているしお互いに信じ合っている、もしセイバー一人だけで戦えば負けてしまう。」

セイバー「……。」

士郎「セイバー、俺はセイバーの隣で、一緒に戦いたい！セイバーが勝つと信じている！俺はお前を信頼している！だから……。」

セイバー「士郎……、私は、私は……、ええ！そうですね！士郎が、いや、マスターと一緒に言うなら私も貴方と一緒に戦いたい！マスター！私は貴方を信



頼っています！マスターのために、私は貴方の

剣となり、貴方に勝利を与えます！さあマスター！指示を！あの赤セイバーを倒しましよう！」

士郎「ああ！」

セイバー「所で士郎、何故赤セイバーなのですか？」

士郎「えっ？あゝ、だってお互いにセイバー同士だからな、一応区別のためにと思つて。向こうは服装が赤いし。」

セイバー「ふふ、そうですか、ではマスター！全力で赤セイバーを！」

士郎「ああ！行くぞ！」

白野「……?!?セイバー!初めから全力で戦うぞ!」

ネロ「であろうな!どうやら向こうは雰囲気が変わった様だな!」

白野「ああ!それに……」

ネロ「どうした奏者よ。」

白野「目付きがさつきとは全然違う、多分お互いに信頼し合っている、気お付けろセイバー、下手をすればこつちが負ける。」

ネロ「ふんっ!安心せよ奏者よ!余は負けぬ!余には愛しき奏者がいるのだからな!今この時出来た信頼より月の聖杯戦争の時から信頼し合っている余と奏者が負ける訳が無かるう!」

白野「……、そうだな、俺達が負けるはずがない!」

ネロ「うむ!さあ!行くぞ奏者よ!あの青セイバーを打ち負かそうぞ!」

白野「……青セイバー?」

ネロ「うむ!お互いにセイバー同士だからな、あいつは青い!ならば青セイバーで良かるう。」

白野「そ、そうですか。」

ネロ「ふんっ！青セイバーめ、余と奏者の絆を見せつけてくれる！」

白野「よし！行くぞセイバー！初めから全力で青セイバーに！」

ネロ「うむ！行くぞ奏者！さあ！開幕の時だ！」

完

## 第20話

「ユリウス邸」

凜「さて、とりあえずはアサシンのマスターから情報を手に入れてください。問題は……。」

ラニ「……の居場所ですね。」

ユリウス「アサシンのマスターは最後まで知らないの一点張りだったからな。」

リン「だけど仲間の人数は知ってみたいね、余り期待できないけど。」

エリザ「??」

リン「はあく、あのねランサー、居場所が知らない時点で仲間の人数なんて教えるわけないでしょ、アサシンのマスターを信頼させるための方便よ。」

エリザ「な、なむるほどね、だけどそんなことあの男は信用するなんて、よっぽどのバカなのかしら？」

凜「自分が聖杯戦争に勝つためならなんでもすがり付くようなヤツだからね。」

ラニ「あの、とりあえずは解散しますか？白野さんがいないのでは先に進めませんし。」

凜「うーん、とりあえずは白野達が戻ってくるまで待つてみましょうか？」



リン「アーチャー！行くわよ！」

凜の瞬時の判断でユリウス達は動き出す。凜とランサーはありすの部屋に走り出すが。

ガチャ！

ありす「凜お姉ちゃん！」

凜「ありす！無事だったのね！良かった！」

ありす「アリスが、逃がしてくれたの、お願い凜お姉ちゃん！アリスを助けて！」

凜「ランサー！早くありすの部屋に！」

エリザ「ええ！」





?? 「邪魔なんだよ!どけっ!

ジャバウオック「■■■■ー!」

アリス「あ、(あくあ、やつとありすに逢えたのに、ごめんねありす)」

エリザ「でりやー!」

?? 「なっ?!.....がっ!

エリザ「大丈夫?キヤスター?」

アリス「えっ?あ、ランサー!」

?? 「テメエ!不意打ちかよ!!」

エリザ「なくにが不意打ちかよ!っよ!そっちは三騎でしようが!」

?? 「はあ!?テメエ!殺してやる!」

エリザ「ふんっ!殺してやるですって!それは此方の台詞よ!私達の可愛いありすと

キヤスターを!三匹纏めてかかってきなさい!」

?? 「なっ?!ぶっ殺してやる!」

?? 「待ちなさい!.....」

?? 「はあ!ふざけんな!あのランサーは俺が殺す!テメエは黙ってる!」

?? 「私の言うことが聞けないのですか?セイバー?」

セイバー「.....ちっ!」

?? 「……で？どうするのだ？」

?? 「私達の目的はありすちやんを拐うことです、キャスターがありすちやんを逃がしたせいで目的を見失いました。それに……」

?? 「ん？どうしたのだ？」

?? 「どうやら私達は囲まれていますね。この部屋にサーヴァントが二騎、外にはサーヴァントは四騎いるみたいですね。」

セイバー 「そんなもん全部殺せばいいだろうが！」

?? 「ふははははは！それもよいな！だが……」

セイバー 「あんっ！なんだよ！」

?? 「流石にそれは疲れるな、さて、どうするか？」

?? 「ありすちやんを拐うこと、それ以外は特にあなたの方からの命令はありません。」

エリザ 「えっ!?ちよっ！何で？どういうこと？何であんたが!?あ、でも何か雰囲気が違うような？」

?? 「私がおかか？エリザベート・バートリーさん。」

エリザ 「なっ!?ま、まさかあなた、ルーラー？ルーラーのジャンヌ・ダルク？」

ルーラー 「驚きましたね。まさか私を知っているなんて、あの方はあの時の記憶はないと言っていたはずですが。」

エリザ「……………」。

ルーラー「まあいいでしょう。それではさようなら、エリザベート・バートリーさん、セイバー、ライダー、行きますよ。」

セイバー「ちっ！おい！テメエ！」

エリザ「えっ？」

セイバー「テメエは俺が殺してやるからな！首を洗って待ってろ！」

エリザ「……………」。

ライダー「ではな小娘よ。」

アリス「……………」。

くユリウス邸庭く

ジャンヌ「……………」

桜「どうしました？」

ジャンヌ「マスター、どうやら私達が当たりみたいですよ。」

桜「えっ？」

セイバー「あんっ！サーヴァントか！って！はあ!?何であんたが？」

ライダー「ほほう、これは驚いたな、同じ顔がもう一騎いるとはな。」

セイバー「どう言うことだ！ルーラーが二騎いるってーのかよ？」

ジャンヌ「ルーラー？」

桜「ルーラーって、マルタさんの事でしょうか？」

ジャンヌ「違いますよマスター、うふふ、なるほどね、まさかまたあんたと会うことになるとは、ねえ、ルーラージャンヌ・ダルク。」

ルーラー「……………。どうして貴女が？」

セイバー「!?ちよっ！雰囲気が違うけど！どうなってるんだ！」

ジャンヌ「どうして貴女が? . . . . 私は聖杯戦争に呼ばれたサーヴァントですよ、あんたとは違う真正銘のサーヴァント、ちやくんとマスターも存在します。」

ルーラー「アヴェンジャー! 貴女のクラスはアヴェンジャーなのですね? どうして?」

ジャンヌ「あんたに答える必要はないわ、さて、とりあえず纏めてかかつてきなさい、私が消してあげるわ。」

セイバー「上等だ!」

ルーラー「待ちなさいセイバー! アヴェンジャー、まさか貴女が召喚されるとは驚きです。」

ジャンヌ「私も驚いたわね、あんたが召喚されてるなんてね、人間ごときがルーラーの召喚なんてあり得ないのに、ひよつとしてあの女同様聖杯に呼ばれたのかしら?」

ルーラー「あの女? それはどう言う事でしょうか?」

マルタ「私の事ですよ、ルーラー・ジャンヌ・ダルク。」

ジャンヌ「いつの間に居たのかしら? ルーラー・マルタさん。」

ルーラー「なっ!? 貴女は! マルタ様。」

可憐「ルーラーが二騎も? どうなってるのかしら? 今回の聖杯戦争は?」

桜「. . . . .」

マルタ「アヴェンジャーさん、ルーラージャンヌと少し話がありますので戦闘は待ってください。」

ジャンヌ「はあ？話すことなんてあるのかしら？さっさと始末した方がよろしいのでは？」

マルタ「ルーラージャンヌ・ダルク、貴女に問います、何故ありすちゃんを拐おうとしたのでしょうか？それと、貴女達は誰に召喚されたのでしょうか？」

セイバー「ちっ！おい！ teme エルーラーマルタって言ったな！何でわざわざ答える必要があるんだよ！」

マルタ「……………」

ルーラー「申し訳ないですが、答える訳にはいきませんので。」

ジャンヌ「ありすを拐えば白野が黙っていないでしょうね、逆もしかり、もし白野が拐われたらありすも白野を捜すはず、そうすれば……………の目的である二人を捕獲できる、そんなところかしら？」

ルーラー「……………」

ジャンヌ「黙りね、拐う目的は解りませんが拐う理由はだいたい当たりかしら。」

マルタ「ジャンヌ・ダルクが、貴女が人拐いとは、ルーラーが聞いて呆れますね。」

ルーラー「マルタ様、これにはちゃんと理由が有るのです、ですが……………」

マルタ「答えられないのですね？」

ルーラー「……………」。

セイバー「おいルーラー！何やってんだ！さっさと引き上げるぞ！後の事はあいつらに任せとけばいいだろう。」

ライダー「そうだな、あのアサシンとランサーならありす嬢ちゃんを拐うことは簡単だろう。」

ジャンヌ「アサシン？ランサー？……………！マスター！直ぐ凜に連絡を。」

桜「あっ！はい。」

ルーラー「それでは失礼します。」

ジャンヌ「……………!?マスター、連絡はしなくていいみたいです、馬鹿ね、私達が逃がすとしても。」

桜「えっ？」

セイバー「あ？」

ライダー「なんと！いつの間に？」

李「かつかつかつ、まさかまたルーラーを目にするとはこのう。」

アーチャー「だが、こんな場所で戦闘する訳にはいくまい、どうするマスター？」

リン「捕らえるしかないでしょうが、その後に尋問すればいいわ。」

エリザ「一騎だけでいいんじゃないかしら？ 私はセイバーを始末したいし。」  
セイバー「テムエ！」

凜「落ち着きなさいランサー！ あんたが暴れたら家と周囲が吹き飛ぶわ。」

ジャンヌ「あらあら、いいのかしら凜、ありすをほったらかしで？」

凜「大丈夫よ、ライダーにキャスターとジャバウオックがいるし、後ラニとシンジが  
ありすを護っているから。」

ジャンヌ「ありすはお姫様ね、皆に守られているのだから。」  
ルーラー「……………」

ジャンヌ「どうしました？ 急に黙り混んで、まあいいでしょう。それではうくん、そ  
うですね、ルーラー以外は消えてもらいますか？」

セイバー「上等っ！ アヴェンジャー！ テムエも俺が殺してやるよ！ かかってきな！」  
ルーラー「……………」待ちなさいセイバー、ライダー。」

ライダー「おうよ！ ではな、何、心配せんでもいずれ貴様らとは闘うであろう、それ  
までしばしの別れだ。」

凜「ちよっ！ ライダーが持つてるやつってリターンクリスタルじゃない！」

ユリウス「ちっ！ アサシン！」

李「おうさ！ 逃がしはせん。」



ライダー「はっはっはっ！遅いわ！」

ジャンヌ「逃げられましたね、まあいいでしょう。それよりも凜、ありす達は何処に？」

凜「地下室に避難しているわ。」

桜「凜さん、さつき連絡しそびれましたがもう二騎アサシンとランサーがいるみたい

なんです。私達も地下室に行った方がよろしいのでは？」

凜「アサシン!?ランサー!?ちよっ!ラニ達は大丈夫かしら。」

ユリウス「ライダーとキャスターがいるから大丈夫なはずだが。」

リン「とにかく地下室に行きましょう!」

アーチャー「!?待てマスター!・・・!?そこか!」

キインツ!

??「あらあら、どうして見付かったのかしら?」

??「貴様の殺気のせいであろうに。」

??「貴方の殺気じゃないのかしら?あの小娘を見た瞬間凄く殺意を貴方から感じたけど。」

??「……………」

凜「一騎はアサシンで間違いないわね、それと……………」

エリザ「なっ?お、伯父様!?!な、何で?」

ランサー「あく、駄目だ!駄目だ!エリザよ、エリザベート・バートリーよ、貴様を

見た以上は私はお前を殺さなくてはいけない!」

エリザ「お、伯父様。」

李「待て！ユリウス、あのアサシンが抱えているのは。ユリウス「ありす！ラニ達は？」

アサシン「ふふ、その他は私の毒で眠っていますわよ、本当なら殺さなくてはいけなのですが、この子と一緒にでしたからそうはいきませんでした。」

ランサー「さあ！槍を構えよエリザ！我が槍で貴様を串刺しにしてあげようではないか！」

エリザ「待って！伯父様！私の話を聞いて！お願い！」

ランサー「聞く耳持たんわ！さあ！死ぬがよいエリザ！」

エリザ「ちよっ！」

アサシン「待ちなさいランサー！」

ランサー「!?!?!?!?!何故邪魔をするアサシン。」

アサシン「私達は目的を果たしました、あの方の命令はあります嬢を拐う事、今は退くべきですよ。」

ランサー「ぐぬぬ！仕方がない、今は退こう、だが！」

アサシン「!?!」

ランサー「あの小娘は我が殺す！必ずだ！」

アサシン「ふふ、構いませんよ、では皆様、いずれ会うこともあるでしょう、ごきげ

んよう。」

エリザ「待ちなさい！」

リン「アーチャー！」

アーチャー「逃がしはせん！」

アサシン「……」。

??「はぁー！ー！ー！」

アサシン「なっ？」

?? 「そこまでです。アサシン。」

アサシン 「くっ！いつの間？」

凜 「セイバー？と白野！」

リン 「士郎！」

白野 「間に合ったな士郎。」

士郎 「ああ！全力疾走だったからけっこう疲れたけど。」

白野 「あれだけで疲れたなんて、まだまだだな。」

士郎 「うるさい！あんだだけ暴れた後での全力疾走だったんだ！逆にお前がおかしいだろ！」

白野 「あはは、………さて。」

アサシン 「………岸波白野。」

白野 「アサシンって言ったな、今すぐありすを離してもらおうか！」

アサシン 「………嫌だと言ったら？」

白野 「………。」

アサシン 「ふふ、凄い殺気ですね、それほどこの子が大切なのかしら？」

白野 「………。」

アサシン 「サーヴァントならともかくたかが人間ごときにこの私が怖気づくとは、あ

の方が欲しがる訳だわ)」

ランサー「逃げられなくなったなアサシンよ。」

アサシン「ふふ、仕方ありませんっね！」

白野「あります！」

ネロ「なっ？ありますを投げ出すとは！アサシン！貴様！」

アサシン「ふふ、ランサー、貴方はどうしますか？」

ランサー「……………」

アサシン「任務失敗ね、あの方に怒られちゃうわ。」

士郎「あの方？」

白野「セイバー！ありますは!？」

ネロ「案ずるな奏者よ、ありますは眠っているだけだ、安心せよ。」

あります「くゝ、くゝ。」

白野「あります、よ、良かった。」

エリザ「なっ!?!危ない！白野！」

白野「えっ？」

ガキーン！

ランサー「ほう、まさか貴様まで出てくるとは、英雄王よ。」

ギルガメツシュ「……………」

リン「はぁー！はぁー！な、何で？えっ？えっ？」

ギルガメツシュ「うるさいぞ雑種。」

リン「くっつ！……………」

白野「助かったよ、ありがとうギルガメツシュ。」

ギルガメツシュ「ふんっ！さて、どうする白野、こやつらを捕らえるか？それとも此処で始末するか？」

白野「捕らえる方を優先で行くべきだな、聞きたいこともあるし。」

アサシン「……………くっつ！」

ギルガメツシュ「ほう、ならば一騎だけでよかろう、もう一騎の雑種は始末するか。」

白野「いや、流石にギルガメツシュが暴れたらユリウス達の家が消し飛ぶから、ギル

ガメツシュは待機でお願いします。」

ギルガメツシュ「ふははははははは！この我に待機と命ずるか！流石は元マスターよな！後にも先にもこの我に命令できるのは貴様だけであろうよ！」

リン「う、嘘でしょ！あの英雄王に？岸波君って何者なの？」

凜「馬鹿な奴よ、後只のお人好しね。」

アーチャー「それに天然でもあるな。」





白野 「  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
ぐす。  
」



完 〔第20話〕

## 第21話

「白野と凜達が合流する数十分前」

白野「セイバー、相手はあのアーサー王、俺の予想じゃ多分スピードや剣術においてはかなりのはずだ。」

ネロ「ならば奏者よ、先手必勝！こちらから仕掛けるぞ！」

白野「ああ！行くぞセイバー！」

ネロ「うむ！はあー！はあー！」

士郎「!?セイバー！」

セイバー「はい！はあー！はあー！」

ギインツ！

ネロ「!?くっ！まさかほぼ同時とは！良い！流石はアーサー王、だが……」

セイバー「なっ!?なんて力だ!」

ネロ「どうした青セイバーよ、ふふん、どうやら力は余の方が上みたいだな!」

士郎「セイバー!?!」

セイバー「くっ!大丈夫ですマスター、所詮は力押し、ならば。」

ネロ「なっ?消え……!」

白野「セイバー!後ろだ!」

ネロ「……!?!」

セイバー「っ!驚きました。まさかこれを避けきるとは、流石は赤セイバー。」

ネロ「奏者のお陰だがな!しかし、たいしたスピードだな、奏者がいなければ余は貴様の剣を避けきれなかったであろう。」

セイバー「なるほど、士郎が言った通りあなた達は強い絆で結ばれているのですね、流

石は月の聖杯戦争を勝ち抜いただけの事はある。」

ネロ「ほう、月の聖杯戦争を知っているのか?」

白野「アーチャーが遠坂さんに俺の事を話したからな、ならばおのずと士郎にも俺の事は遠坂さんに教えられたはずだ。」

ネロ「なるほどな、ならば奏者よ、コードキャストも士郎は知っておるのか?」

白野「どうだろ?アーチャーが俺が使えると知ってれば話してると思うけど。」

ネロ「ふむ、奏者の事をほとんど把握してるのか、して奏者よ、あの青セイバーをどう見る。」

白野「流石はアーサー王つて事はあるな、セイバーの名にふさわしいよ、力はセイバーが上だけど青セイバーのスピードはかなりの物だ、下手をすれば長期戦になるかもな。」

ネロ「流石に青セイバーは宝具を使いまいであろうな、ならば奏者よ、奏者の観察眼が頼りであるな！余の全てを奏者に！余は奏者のサーヴァント！奏者の指示に従うのみ！奏者に勝利を与えるこそ余の喜び！行くぞ奏者よ！」

白野「ああ！セイバー！士郎が何か企んでる、気を付けろよ！」

ネロ「うむ！はぁー！はぁー！」

セイバー「っ!? さっきよりスピードが上がっている!? いやいよ本気ですか？ 赤セイバー！」

ネロ「何を言うか？ 余は初めから全力疾走だ！ スピードが上がっているのは奏者がサポートしてるからである！ だからこそ余は奏者に勝利を与える！ 奏者に頭を撫でて貰うのだ！」

セイバー「くっ！ 私も我がマスターに勝利を！ その後士郎に頭を撫でて貰いましょう！ はぁー！ はぁー！」

士郎「駄目だ！サポートしたいけどスピードに付いていけない、……白野は……  
えっ!?!」

白野「……………」。

士郎「(み、見えてるのか!?!あのスピードを、えくく?どんな動体視力してるんだあい  
つは!?!)」

白野「……………」。

士郎「(何か構えてる?確か遠坂が『岸波君はコードキャストとかいう魔術を使える

わ、だから士郎、岸波君と戦うときは彼にも注意が必要よ。』とか言ってたな、なら此方も)……………トレースオン、……………はあ、駄目だな、やつぱりアーチャー見たいにはいかないか、何かいびつな刀だな、あはは……………。」

白野「(えっ!?!士郎の両手から刀が?……………。アーチャーと同じで魔力を具現化できるとか?)」

士郎「……………。」

白野「(何か企んでると思っただけ……………。だったら)」

士郎「えっ!?!白野がいない?」

白野「後ろですよ士郎さん。」

士郎「なっ、えっ!?!いつの間に!」

白野「スピードを上げたからな、悪いけどそれは使わせない。」

士郎「コードキャストか?てか何で俺が刀の具現化出来るって知ってるんだ!」

白野「アーチャーと同じだろそれ?てか何でコードキャスト知ってるんだ!アーチャーの奴だな!おのれアーチャー!許さん!」



士郎「アーチャーと同じって！」

白野「遠坂さんに教えられただろ、アーチャーも月の聖杯戦争では俺のサーヴァントだったからな、何かいびつな形だけどアーチャーの双剣に似てるし。」

士郎「どんな動体視力してるんだお前は！」

白野「兎に角、その双剣は壊させて貰う！」

士郎「くっ! だったら！」

白野「なっ!? セイバー! 後ろに跳べっ!」

ネロ「っ!?! くっ!」

セイバー「ふっ、流星は士郎! はあ—————!」

ネロ「ちっ!」

白野「させるか! コードキャスト《hack | skill》」

セイバー「がっ! は、白野!?! な、何を!」

ネロ「見事だ奏者よ! 終わりだ青セイバー! はあ—————!」

白野「……っ! 駄目だ! セイバー! 下がれ!」

ネロ「むっ!」

ザンツ!

ネロ「な、なんと! ……先程の双剣か?」

士郎「ちっ！」

白野「まさか双剣をセイバーに投げつけるとは、それにそれはブーメランみたいな形をしているからな、いびつな形である意味危ないと判断してて良かった。」

士郎「いびつな形って、……くそ！まだまだ修行が必要だな。」

白野「さて……、悪いな士郎、ここからはセイバーの邪魔はさせない、セイバー！」

ネロ「うむ！さあ！青セイバーよ！余とのマスター無しでの一騎討ち、覚悟せよ！」  
セイバー「はあ、はあ、貴女こそ、どちらの剣技が上か今此処ではつきりさせましよう。」

（数十分後）

ネロ「はあ、はあ、はあ、はあ、えーい！いい加減諦めぬか！青セイバー！」

セイバー「はあ、はあ、はあ、はあ、そちらこそ敗けを認めなさい！赤セイバー！」

ネロ「むううう！ならばこれで最後！我が情熱の炎！受けるが良い！」

セイバー「そちらこそ！全てを吹き飛ばす風を受けて貰いましょう！」

士郎「なっ！赤セイバーの剣から炎が！」

白野「エクスカリバーに風が纏っている！ちよっ！そんな状態で打ち合えば……  
ヤバイ！」

ネロ「はあ——————！！」

セイバー「はあ——————！！」

白野・士郎「……っ！セイバー！下がれ！」

ネロ・セイバー「っ！」

ドカカカカツ！

ネロ「な、何!？」

セイバー「誰です!?!邪魔をするのは!？」

??「……………」。

白野「ギ、ギルガメツシュ！何で……？」

ギルガメツシュ「何をしている雑種どもよ、まあ良い、我が此処に来たのは白野に話があるのだからな。」

セイバー「なっ!? ギ、ギルガメツシュだと! 何故貴方が此処にいるのです!」

ギルガメツシュ「さて、白野よ、貴様に話さなくてはならぬ事がある。」

セイバー「答えなさい! ギルガメツシュ!」

ギルガメツシュ「五月蠅い蠅が、貴様らのことはどうでも良い、我を気にせずさつさと殺し会えばよからう。」

士郎「ギルガメツシュ、あれが英雄王ギルガメツシュ。」

ネロ「ふんっ! 金ぴかよ、貴様のせいで興が冷めた、して奏者に何用だ。」

ギルガメツシュ「本来なら我は関係ない事だが白野は我の元マスター、少し助言をしてやろうとな。」

白野「助言?」

ギルガメツシュ「ユリウスとか言ったな、あの者達に危険が迫っている、それだけよ。」

白野「危険が……っ! セイバー! 今すぐユリウス達の所に帰るぞ!」

ネロ「うむ!」

ギルガメツシュ「急ぐが良い雑種よ、でなければ貴様の大事な雑種が拐われるぞ、ふははははは!」

白野「大事な……っ!! あ、あります! 急ぐぞセイバー! 待ってろあります! 今お兄ちゃんが助けにいくぞ! うお……!!」

ネロ「そ、奏者!?ま、待たぬか!奏者————!」

ギルガメツシユ「ふむ、あれがシスコンと言うやつか、くははははは!」

セイバー「ギルガメツシユ!」

ギルガメツシユ「ん?何だ、まだいたのか?」

セイバー「答えなさい!何故貴方がいるのかを!」

ギルガメツシユ「下らん質問だな、セイバーよ、貴様に答える必要はない、ではなセイバー。」

セイバー「何処に行くのです!」

ギルガメツシユ「……。」

セイバー「くっ!あいからわず人を見下すその目、ですが……。」

ギルガメツシユ「……。」

セイバー「良いでしょう、何故貴方がいるのかはこの際置いときましょう……士郎。」

士郎「ああ!行こうセイバー、遠坂達が危ないんだ。」

セイバー「ええ、それと……。」

士郎「ん?どうしたセイバー?」

セイバー「いえ、大丈夫です。行きましょうマスター!」

ギルガメツシュ「……………」。

セイバー「まさかあの英雄王が助言だなんて、それに白野を元マスターと、白野、貴方はいったい何者なのですか？」

白野 「……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……」

「……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……  
……」



アサシン「くっ!?ランサー! 引きますよ! 何故か分かりませんがあの男は危険な感じがします。」

ランサー「ふははははは! 流石は月の支配者よ! 良い! 良いぞ! ふははははは!」

アサシン「ランサー!」

ランサー「アサシンよ、リターンクリスタルは持つておるな。」

アサシン「え、ええ。」

ランサー「ではさっさと消えるが良い! 貴様は邪魔だからな。」

アサシン「くっ! ま、まあ良いでしょう、では失礼しますね。」

白野「アサシン! . . . . . 消えたか、まさかりターンクリスタルを持つてるなんて。」

凜「アサシンは兎に角、よりにもよって厄介な奴が残ったわね。」

白野「ああ、ランサー. . . . . いや、ヴラド三世、サーヴァントの数は此方が上だけドヴラド三世からすればむしろ好都合かもしれないな。」

凜「あいつの宝具はそれに特化してるからね、下手をすれば一瞬で全員串刺しよ、対一が好ましいわね. . . . . 仕方ないか、エリザ! あんたが相手しなさい。」

エリザ「えっ!? わ、私がおじ様と!? ちよつ、冗談でしょ!」

凜「いいから、何だか分からないけどあのランサーはあんたに怨みが有るみたいだ

し。」

エリザ「うっ！し、仕方ないわね、だけど凜！ちゃんとサポートしてよね！」

凜「分かってるわよ、白野君、皆を安全な場所へ。」

白野「ああ、頼んだ、凜、ランサー。」

凜「………よし！きて、ヴラド三世、あんたの相手は私達よ！」

エリザ「うゝゝ、お、おじ様？」

ランサー「ふははははは！それは構わぬが、どうしたエリザベートよ、覇気が無いで

はないか、まあ良い、エリザベートよ、貴様は我が槍にて串刺しにしてくれよう。」

凜「何やってんの！来るわよ！構えなさいランサー！」

エリザ「くっ！よ、よし！頑張れエリザ、おじ様相手とはいえちやんと戦わないと。」

ランサー「ふははははは！さあ！死ぬがいい、エリザベート・バート……。」

エリザ「えっ？き、消えた!?えっ？えっ？」

凜「はあー！何で？」

エリザ「あれ？あれ？お、おじ様？おじ様？」

凜「……はっ？ま、まさか強制帰還？ランサーのマスターもしくはランサーを召喚した奴が無理矢理帰還させたのね。」

エリザ「えっ？そうなの？な、何か分からないけど助かったのね！」

凜「あんたねええ、どれだけあのヴラド三世を恐れてるのよ、まあ、ある意味助かったのは確かだけど。」

エリザ「う、五月蠅い！でも……、そうね、確かに私はおじ様を恐れてるわ、だけどそれじゃあ駄目ね、うん、よし！頑張れ私！次こそはちやんと戦わないと、おじ様とちやんと向き合わないとね！」

凜「はあ、次こそはねええ、まあ良いでしょ。」

白野「凜、エリザ……って!?あれ？ランサーは？」

凜「ちよっ！白野！……はあ、まあいいか、ランサーならいいわよ、多分強  
制帰還でもされたんでしょうね。」

白野「強制帰還？」

凜「そ、なんにせよ助かったわね、私の判断とはいえあのヴラド三世とエリザは相性  
最悪だわ、エリザはびびりまくってたし。」

エリザ「だ、大丈夫よ、次こそはちゃんとおじ様と戦うわよ！た、多分。」

凜「はいはい、所で白野、皆はどうしたの？」

白野「安全な場所へ行ってるはずだよ、後ユリウスは地下に行ってる、ラニやシンジ  
達を起こすとか言ってたな。」

凜「そう……、ぶはぁー！つ、疲れた！て言うか何なのいったい！あ  
のランサーといい、ルーラーといい、後セイバーにライダーにアサシン！……っ  
は！まだキャスターにアーチャー、バーサーカーもいるのよね！どうなってんの冬木の  
聖杯戦争は!？」



くとある場所

ランサー「……………」

??「ご機嫌斜めですねランサー。」

ランサー「……………」

??「黙りですか？まあ仕方ないでしょうね、ですがこれはあの方のご指示ですので今は我慢してくださいね。」

セイバー「けっ！あいからわずいかすけねえ奴だな！」

ルーラー「黙りなさいセイバー、ランサーの機嫌を損ねてはいけません。」

セイバー「ちっ！何ランサーごときにびびってるんだ！」

ルーラー「セイバー！」

ライダー「ふははははは！セイバーよ、貴様はランサーの恐ろしさがわかつとらんみたいだな！この征服王でも恐ろしさがわかると言うのにのう。」

セイバー「けっ！」

アサシン「…………岸波白野のせいでありす讓を捕らえられませんでしたね、あの方に何て言えば。」

??「大丈夫ですよアサシン、キャスターの報告によれば問題ないとの事です、まだチャンスはあるとの事。」

アサシン「……………」

??「おや、どうしました？」

アサシン「貴女は本当にあのバーサーカーのですか？バーサーカーが自我を持つなど信じられません。」

バーサーカー「あらあら、間違いなく私はバーサーカーですよ、試して見ますか？アサシン？」

アサシン「結構です、そういうえばアーチャーはどうしました？」

バーサーカー「アーチャーでしたら他のサーヴァント達の所ですよ、本当あの方の力は素晴らしいですね、私達だけではなく全てのサーヴァントの使役をするのですから。」  
セイバー「けっ！所詮は只のトップなだけだろ、俺達にはちゃんとマスターが要るんだ。」

ルーラー「ですがマスター達はあの方に崇拜しています。

あの方が要るからこそ私達はこうしていられるのです。」

ライダー「ふははははは！ルーラーよお主は聖杯に呼ばれたのであろうに。」

ルーラー「そうですね、ですがそれが何か問題でも？私はある方のサーヴァントとして従うのみ、ただそれだけです。」

ライダー「ふははははは！そうかそうか、それも良からう、だが、確かに我がマスター達はあの方に崇拜してるからのう、しかもマスター14人全てが崇拜してるとは驚きであるな。」

バーサーカー「うふふ、果たしてそうでしょうか？何人かは何か企んでいる見たいですよ、私達のマスターはともかく他のサーヴァントのマスターの中にですが。」

アサシン「捨て置けば良いのでは？数人だけではさして問題ないでしょう。」

バーサーカー「うふふ、ええ、ええ、そうですね、ですが私達は岸波白野さんとあり



すちやんを捕らえなければいけません、月の支配者の岸波白野さんに爆大な魔力量を持つありすちやんを、全てはあのお方の為に。」

ルーラー「そうですね、裏切るかもしれないマスターは私が請け負いましょう、もし裏切ることがあれば私が始末します。ですがそうなる前にあの方の望みが叶えられれば何かを企んでいるマスターも気が変わるはず。」

アサシン「望みですか？ いったいあの方は何を望んでいるのでしょうか？」

セイバー「けっ！ 知るかよ。」

ルーラー「さあ、私にも分かりませんが。」

アサシン「??」

ルーラー「きっと素晴らしい願いのはず、あの優しく全てを包み込む包容力、あの方こそ、私が望むお方、私の新たな主として、ああ、我が主よ、私の全てをあなたに捧げます。」

バーサーカー「あらあら、貴女こそ崇拜していますね、ルーラーさん。」

ルーラー「ああ！ 我が主よ、全てはあなたのために、汝は

我が全て、汝こそ我が主にふさわしいお方、この身この命はあなた様の物、あなた様の望みこそ我が幸せなのです！」

ライダー「ふははははは！ ああなるとルーラーは周りが見えとらんな、では失礼する、

次に何をすべきなのかマスターに聞かなくてはならんからな。」

セイバー「俺もそうするぜ、サーヴァントはマスターに従うのみ、じゃあな。」

アサシン「では私も……、ランサー、貴方はどうするのですか？」

ランサー「マスターの所に行く、ではな。」

バーサーカー「おやおや、皆さんルーラーさんをほったらかしで、はあ、仕方ありませんね、私が見ていますか、しかし本当に貴女はあのお方に崇拜してるのですね、ルーラーさん。」

ルーラー「さあ！我が主よ、次の指令を私に、あなた様の為ならば私はどんな悪事も手を染めましょう！あなた様の為なら私は我が身を命を、あなた様の為に使います！う！」

完 第21話

## 第2話

白野「ふわ〜。」

凜「大きなアクビね……。」

白野「っ!!」

凜「何驚いてるのよ、まあいいわ、はいこれ、氷室さんに頼まれてた書類。」

白野「あ、ありがとう……。」

凜「……ん?何?」

白野「えっ?い、いや、何、まさか凜達が新聞部に入るなんて思わなかったから。」

凜「そうね、蒔寺さんに誘われたときは余り興味なかったけど、新聞部が使っている書斎庫って結構な情報が眠っているからね。」

白野「新聞部顧問の趣味もあるからな、あの先生は一度興味を持つと一から十まで調べてるし、そういうった書類や本がああの部屋には沢山あるんだ。」

凜「確かに、まさかこんな物まで見付かるとは思わなかつわ。」

白野「……?」

凜「冬木の歴史の本、それもかなりの貴重な本よ、先生に貸してほしいと聞いたら『構わないが』って貸してくれたわ。」

白野「そんな本が！」

凜「見付けにくい所にあつたからね、多分私カラニみたいな魔術師じゃないと見付けられないわ。」

白野「はい？」

凜「この本に少しだけ魔力を感じたのよ。」

白野「魔力って？何か嫌な予感が……。」

凜「大丈夫よ、今は見ないし、帰ってから調べるわ、それより白野、あんた今から衛宮君と弓道対決よね、行かなくていいの？」

白野「えっ？あつ！そうだった！」

凜「じゃあ行きましょうか。私もあんたと衛宮君との弓道対決観たいしね。」

白野「ああ、そういうえばラニと桜は？」

凜「あの二人なら蒔寺さんに弓道部の道場での場所取りを頼まれてたわ。」

白野「場所取りって、そんな人が集まるわけでもないのに。」

凜「……. . . . .はあ、そう思ってるのはあんたと衛宮君だけよ。」

白野「??」

凜「たくつ、さ、行くわよ。」

く弓道道場く

白野「な、なんじゃこりやー！」

ワイワイガヤガヤ。

凜「これまた、凄いわね。」

白野「な、何でこんなに人が！」

氷室「おっ？来たな白野、兎に角更衣室へ行くぞ、美綴達が待っているからな。」

白野「あ、ああ、なあ氷室、何でこんなに人が要るんだ？」

氷室「そりやあ、白野と衛宮を觀に来たんだろうな、だが、蒔寺が宣伝していたしそのせいもあるのかもな。」

白野「・・・・・・・・・・。」

凜「とりあえず更衣室に行きましようか。」

ガチャ。

美綴「お、来た来た！じゃ、これに着替えろな、衛宮はもう道場で待っているから急

げよ。」

白野 「はい？えっ？いや、別に体操服でもいいんじゃない。」

美綴 「……………あの時の約束覚えてるよな？」

白野 「すぐに着替えます！」

美綴 「着替えたら道場に来いよ。」

白野 「……………はあゝゝ、着替えるか。」

蒔寺 「綾子、あれ？白野は？」



美綴「今着替えてる、もう少ししたら道場に来るだろ。」

蒔寺「ふうん、でもさ、良かったの？ どうせなら白野とデートとかすれば良かったのに。」

美綴「なっ!? な、な、な、何言ってるんだ！ そ、そそそそそそんな事言えるわけないだろ！」

ドコーン！

蒔寺「アベシ〜〜！」

氷室「……………」

凜「……………」

美綴「はあ、はあ、はあ、……………さ、道場に行くぞ。」

凜「そうね、行きましょ。」

氷室「……………バカな奴だな。」

蒔寺「……………」

リン「あら？美綴さん、岸波君は？」

美綴「もう少ししたら来るだろ、でもあれだな、まさかあんたまで観に来るとはな。」  
リン「確か去年士郎と岸波君が対決した時は引き分けだったのよね、あの二人が対決とかある意味面白そうだしね。」

氷室「しかし、本当道場が満席だな、そんなにあの二人の対決が珍しいのか？」

リン「違うわよ氷室さん、友達から聞いたけど岸波君てかなりモテるのよね、士郎の胴着姿は見慣れてるけど岸波君の胴着姿はかなりのレアだって言ってたわ。」

凜「なるほどね、どうりで女子が多いわけだわ。」

三枝「あ、鐘ちゃん、こっちこっち！」

氷室「うむ、いい場所が取れたな。」

ラニ「当然です、言われたからには完璧にこなす、それが私、ラニⅡⅧなのです。」  
氷室「そ、そうか。」

桜「あ、あの、氷室さん、先輩は？」

氷室「ああ、もう少ししたら来るだろ。」

凜「へえ、いい場所じゃない、さすがラニね。」

三枝「所で楓ちゃんは？」

氷室「そのうち来るだろ。」

凜「ええ、そのうち来るわね。」

三枝「そ、そう。」

桜「あつ！先輩が来ましたよ。」

女子生徒1「きやくやく！岸波君！」

女子生徒2「や、やばい！岸波の胴着姿はかなりやばいわ。」

女子生徒3「照れてる姿も可愛い！くそー、新聞部め、カメラ禁止なんかして、折角のシャッターチャンスが。」

女子生徒4「岸波先輩、す、素敵です。」

男子生徒「はあ、はあ、はあ、ヤバス、岸波君ヤバス。」

女子生徒5「岸波君×衛宮君か……アリね！」

凜「………何か変な声混ざってなかった？」

ラニ「気にしない方がいいですよ凜。」

蒔寺「さあ！新聞部の皆気合い入れてくわよ！」

氷室「お、復活したのか？」

蒔寺「てつゆーか、何で誰も起こしてくれないの？気が付けば私一人だけだし！白野だつて通りすぎたはずなのに、何か私の扱い段々酷くなつてない!!」

氷室「気のせいだろ。」

凜「気のせいね。」

リン「気のせいでしょ。」

蒔寺「ぐぬぬ……！」

リン「そう言えば、女子生徒の会話で新聞部がカメラ禁止にしたとか言つてたけど、中でカメラ禁止なんかにしたの？」

氷室「一応白野と衛宮の真剣勝負だからな、カメラが多いと二人とも気が散るだろ、撮影関係は新聞部と写真部で行からと言つておいた。」

桜「三枝さん、先輩のカッコいい所よろしくお願ひしますね。」

三枝「カメラの担当は岸波君なんだけど……、うん、よし！頑張るね！」

士郎「お、来たな白野、まさかまたお前と真剣勝負するとはな。」

白野「まあ、美綴の願いだしな。」

士郎「へえー、美綴と何かあったのか？いきなり俺と弓道勝負だなんて。」

白野「………色々と事情があるんですよ士郎さん。」

士郎「そ、そうか。」

白野「所で士郎、悪いなこんな事に付き合わせて。」

士郎「構わないさ、お前とはもう一度勝負したかったしな。」

美綴「岸波、とりあえず軽く練習したらいい、何せお前は弓道なんて久しぶりだろ、

ウオーミングアップ程度ほどやってから衛宮との勝負といこう。」

白野「そうだな、とりあえず軽く練習するか、何せ胴着着てなんて初めてだし。」

士郎「俺もそうするか……、そうだ、白野。」

白野「何？」

士郎「やるからには真剣勝負だからな、弓道歴は俺が上だけど白野との対決は本気でやらないとな。」

白野「……あ、あの士郎さん、少しは手加減をしてほしいな、なんて……。」

美綴「衛宮には手を抜くなど言っている、じゃないと岸波が勝つだろ、去年の弓道対決も衛宮は本気でやってたし、素人の岸波相手にあの時は真剣だったんだ、今回も真剣勝負だからかな、ま、私が観てるしお互いまじでやれよ。」

白野「わかりました、美綴さん！」

桜「あ、先輩が出ましたよ。」

氷室「軽くウオーミングアップでもするんだろ。」

三枝「シャッターチャンスだよね？」

蒔寺「そうよ、バンバン撮りなさい！白野の胴着姿なんてレア中のレアなんだから。」

三枝「う、うん、頑張るよ！」

凜「へへ、それなりの形になってるじゃない。」

ラニ「今度で三枝さんに白野さんの写真をプリントアウトしてもらいましょう、出来れば一番カッコいい姿を、うふふ、私の宝物ですね」

BB「センパイの格好いい勇姿！これは見逃せません！メモリーに保存です！それにしてセンパイの胴着姿なんて……、最高級品じゃないですか！私の新たなセンパイ写真集に追加です！」

メルト「へへへ、いいわ！白野の胴着姿、最高ね！」

リップ「先輩のカッコいい胴着、……、素敵です、先輩。」

タマモ「あーん、ご主人様！そんな素敵なた姿、このタマモ一生タマモの脳内に永久保存です！ もく、イケ魂過ぎです！まさか胴着姿でここまで変わるとは！ご主人様は私に何度惚れさせる気ですか！はあ、はあ、はあ、いけねえ、ヨダレが。」

白野「……………ん。」

士郎「？、どうした？」

白野「い、いや、気のせいかな？」

士郎「??。」

美綴「そろそろいいか？んじゃ、始めるか、先攻は岸波からな、お互い真剣勝負だからかな、衛宮も手を抜くなよ、それじゃあ、試合始め！」



〈試合終了後〉

桜「すっかり暗くなりましたね、早く帰らないと。」

凜「そうね、で、やっぱ勝てなかったわね白野。」

白野「やっぱって、まあ、どちらかが勝つまで試合は終わらないからな、流石に士郎相手だと勝てる確率はあんまりないよ、他の弓道部員でも俺は勝てないだろうな。」

ラニ「そうでしょうか？白野さんと衛宮さんの勝負はかなり接戦していたと思うのですが。」

凜「そうね、でも二時間近くお互い射ちっぱなしじや流石に体力が持たないわ、集中力も途切れるしね、多分勝敗の結果は集中力でしようね。」

桜「でも先輩胴着に素敵でしたよ、矢を射っている時の姿も凛々しかったです。」

白野「えっ？そ、そう、あ、ありがとうございます桜。」

桜「あ、い、いえ。」

凜「まったく、だけどあれよね、二時間近く試合したのに誰も道場から出なかったわよね、やっぱあんたらの勝負事は珍しいのかしらね。」

白野「士郎と勝負とか去年の弓道対決以外は無いと思うよ、だから今回で二回目かな、だけどあんなに人が集まるなんて思わなかったな。」

ラニ「白野さんと衛宮さんはかなりの天然ですね、フラグ建築乙です。」

白野「んっ？何か言ったラニ？」

ラニ「何でもありません。」

白野「そう、あ、俺は此方だな、それじゃまた明日な。」

凜「待ちなさい白野、駄目よ、あんたは今日から私達と一緒に住むの、あんたは狙われてるんだから一人には出来ないでしょ。」

白野「大丈夫だよ、なっ？セイバー。」

ネロ「うむ！当然であろう！最強である余がいるのだ！奏者は余が守る！」

凜「却下よ、悪いけどセイバー、白野は今日から暫くは私達と一緒に暮らすわ、セイバーは大丈夫かもしれないけど白野はバカだから一人だと何があるか分からないからね。」

ネロ「うゝむ、確かに我が奏者はお人好しで天然、優しすぎるしな、更にはかなりの男前、本来なら余が奏者を守るが、仲間が多いことに越したことはない・・・だが、それだと余の奏者を独り占めできぬ・・・むむむむ。」

ラニ「なら、白野さんとセイバーを同じ部屋にするのはいいいのでは？」

凜「却下よ！」

桜「だ、駄目です！」

エリザ「ダメに決まってるでしょ！」

ジャンヌ「なら、白野は私と同じ部屋にと言う事で。」

桜「ぜ、絶対駄目です！」

ジャンヌ「あら残念。」

凜「兎に角白野、あんたは暫くは私達と一緒に住むの、いい？わかったかしら？」

白野「……………」。

凜「返事は？」

白野「は、はい！」

凜「よろしい。」

ネロ「むむむむ、どうしたものか？……………」。

ジャンヌ「あらあら、もう決まってるにまだ考えてるとは、セイバーは白野の事を考  
えると回りが見えないみたいですね。」

エリザ「ほっとけばいいのよ、その内わかるから。」

ラニ「……………っ!?凜、桜。」

凜「ええ、人払いの結界ね、まさかこんな道端でやるなんて。」

桜「いったい誰でしょうか？」

?? 「やあ岸波、ようやくお前に会えたよ、これでやっとお前を始末できるよ。」

白野 「……えっ？ あっ？ し、慎二？ 慎二か？」

慎二 「何？ 僕で悪い、まあいいさ、僕はお前に会えたんだし、本当ならあの糞ガキとそのサーヴァントを始末したいんだけど、ここには居ないみたいだし、まあ、後で殺すか。」

白野 「……あ？」

凜 「白野、落ち着きなさい、それで？ 間桐君、いったい何の用かしら？ 悪いけど私達はまだ帰るんだけど。」

慎二 「遠坂、チツ、同じ名前が二人、めんどくさいな、こいつも始末するか。」

凜 「……始末する？ サーヴァントもない貴方がどうやって？ 第一貴方は聖杯戦争ではリタイアしたはずじゃないかしら？ 間桐慎二君？」

慎二 「ああ、そうだよ、僕は第5次聖杯戦争はリタイアしたさ、だけどあんなのは不公平だろあの時の僕のサーヴァントはハズレなんだからさ、あんなゴミカスサーヴァントじゃ話にならない。」

ラニ 「仮初めのマスターが何を言い出すかと思えば、所詮は仮初めマスター、貴方の魔力ではあのライダーの力は半分ぐらいしか出せてませんよ、宝具事態はかなり強力みたいでしたが。シンジのサーヴァントも言っていました『本来のマスターなら、勝ちは

向こうさね。』と。」

慎二「だ、黙れ！何が向こうの勝ちだ！あんなサーヴァント、ただのゴミサーヴァントだろ、じゃないと僕が聖杯戦争に勝ち残るはずなんだよ！そうさ、僕は優秀なマスターだからね、ちゃんとしたサーヴァントなら今ごろ僕が勝ち残ってるんだよ！」

凛「……………」

ラニ「……………」

桜「……………」

白野「……………」

慎二「はあ、はあ、はは、まあいいさ、あんなゴミサーヴァントの事なんて、本当なら岸波だけを始末する予定だったけどお前ら纏めて始末してやる、さあ！出番だ！ライダーー！」

白野「……………？ライダーー！」

凛「またライダーー！」

ラニ「間桐の名はライダーが召喚されるんでしょうか？」

桜「あ、あの、私は違いますけど。」

慎二「う、五月蠅い！ライダーー！こいつらを始末しろ！」

ライダー「仕方ありませんわね、はい、ライダー参上です！」

慎二「さあ！ライダー！こいつらを始しろ！」

ライダー「うくん、それは出来ないわマスター、だって岸波白野さんは捕らえなくちゃいけないんですもの。」

慎二「はあ〜！僕はお前のマスターだろ、マスターの言うことはちゃんと聞けよ！」  
ライダー「うくん、やっぱり駄目ですわ、皆仲良くした方がきつと楽しいですもの、そうでしょ？ジャンヌちゃん。」

ジャンヌ「はあ〜、何なの、またなの？どうして何度も私の知るサーヴァントが出てくるのかしら？誰かの作意なのかしら？」

ライダー「作意？何の事だかわからないけど、お久しぶりね！あの時は敵同士だったけどまたこうして貴女と会えて嬉しいわ！」

ジャンヌ「今も敵同士だけ。」

エリザ「何？またあんたの知り合い？」

ライダー「あら？まあ！エリザベートちゃん！久しぶりだわ！ええ、ええ、本当に！」  
エリザ「あんた誰？」

ライダー「あれ？私の事覚えてないのかしら？残念。」

エリザ「ちよつ！何もそんな落ち込まなくても。」

凜「何なのいったい？」

ラニ「どうやらあのサーヴァント、いえ、ライダーはアヴェンジャーとランサーの知り合いみたいですね。ランサーは覚えてないみたいですが。」

桜「随分フレンドリーみたいですね。それによく見るととても愛らしいサーヴァントさんです。」

白野「うんうん、確かに、見ていて和むライダーさんだね、癒し系なのかな？」

ライダー「あら、ありがとう！岸波白野さん、私も貴方を見ていると何だか落ち着くわ、あのマスターのせいかしら？」

白野「あのマスター？」

ライダー「気にしないで白野さん、それは私個人の事ですから。」

白野「は、はあ。」

ネロ「何を呆けておる奏者よ！あのライダーは敵であろう！まったく、貴様も貴様で余達の敵ならさっさと掛かってこい！」

ライダー「あらあら、どうしまししょう？どうしまししょうか？マスター？」

慎二「はあ!?! 始末するんだよ！百歩譲って岸波は始末しなくてもいいけど、後は始末できるだろ！」

ライダー「貴女方はどうすればいいと思うかしら？」

そう言うときライダーは後ろへ振り向く。



セイバー「はんつ！そんなもん岸波以外は殺せばいいだろうが！てか、いきなり話しかけんな！」

アーチャー「まったくだね、ライダー君、君はもう少し状況を把握した方がいいんじゃないかね、お陰で不意打ちが出来なくなってしまったではないか。」

バーサーカー「あらあらまあまあ、不意打ちだなんて、アーチャーさん、何て事を考えて、正々堂々と正面から戦いを挑む事こそサーヴァントとして冥利に尽きるものですよ。」

アーチャー「バーサーカー君、君だからこそ言える言葉だと思うがね、私みたいなサーヴァントで正々堂々とはとてもとても。」

ライダー「ふははははははは、流石はバーサーカーよ、アーチャーよ、お主は少し見習うべきではないか？」

アーチャー「いやいや。」

凜「サーヴァントが5騎も！不味いわね、こっちは3騎しかいないのに。」

ラニ「それよりも慎二以外のマスターが見当たりませんか？それに……」

バーサーカー「あら？私に何か？」

ラニ「バーサーカーが自我を持つなんて、あり得ないことです。貴女は本当にバーサーカーのですか？」

バーサーカー「ええ、私は紛れもなくクラスはバーサーカーですよ。それが何か？」  
ラニ「……………」

白野「ラニ、下がっている、ええと、バーサーカーさんだったね、慎二は俺達を始末したいみたいだけど。」

バーサーカー「まあ！貴方が岸波白野さん、あらあら、何て愛らしい御方。」

白野「……………」

バーサーカー「綺麗な目をしてますわね、心配には及びませんよ白野さん。」

白野「えっ？」

バーサーカー「貴方は捕らえないといけませんから殺しませんよ。」

白野「俺は？」

バーサーカー「ええ、ええ、ですので白野さん以外の方は死んでもらいますね、邪魔ですから。」

白野「セイバー！」

ネロ「うむ！相手はバーサーカーにセイバー、さらにはアーチャー、ライダーが2騎！相手にとって不足なし！纏めて掛かってくるがよい！」

白野「凜！俺とセイバーが退路を開くその隙に逃げろ！」

凜「……………はあ、何を言い出すかと思えば、ランサー！」

エリザ「ハイハイ、わかってるわよ。」

桜「アヴェンジャーさん！」

ジャンヌ「ワカメ以外は殺していいんでしょ？うふふ、教えてあげましょう、私の恐ろしさを。」

白野「ちよつ！俺が隙を作るからその隙に…………。」

凜「ストップ、まったく！あなたは何考えてんのよ、あなた一人残せるわけないでしょうが、そのせいであなたが捕まったら元も子もないでしょ。」

白野「いや、でも。」

凜「あんたが心配するのは何時もの事だけど、少しは私達を信用しなさい！あんたと私達は大切な仲間でしょうが！」

ラニ「そうですね、私にはもうバーサーカーはいませんがそれでも皆さんをサポートすることが出来ます！」

桜「私は何もできないかも知れませんが心強いサーヴァントがいます！それに私は先輩を置いて逃げるなんて出来ません！」

白野「っ?!・・・ああ、そうだったな、俺達は強い絆で結ばれてる、俺達  
が負けるはずはないさ。皆で戦おう!戦って彼奴らに俺達の強さを見せてやろう!」

凜「よろしい!さて・・・ランサー!わかつてるわね?」

エリザ「トウゼン!白野に良い所を魅せなくちゃね。」

桜「アヴェンジャーさん、行きます!」

ジャンヌ「ええマスター、さつきも言いましたが私の恐ろしさを見せてあげましょ  
う。」

ネロ「張り切りおつて!そうまで余の奏者に良い所を見せたいのか?奏者は余の愛し  
き奏者だと言うのにな!」

白野「よし!いくぞセイバー!凜!ラニ!桜!ランサー!アヴェンジャー!必ず勝つ  
て俺達の居場所に帰るんだ!」

ネロ「うむ!」

凜・エリザ「ええ!」

ラニ・桜「はい!」

ジャンヌ「うふふ、愉しくなりそうね。」

完  
第22話

## 第23話

ジャンヌ「あつははははは！さあ！私が相手してあげる、来なさいライダー！」

ライダー「ふむ、よかろう、どうやらお主らの中では貴様が一番厄介な相手と見た。」  
アーチャー「確かに、アヴェンジャーは厄介な相手だね、まさかこうして再開するなんて思いもしなかつよ。」

ジャンヌ「………ちっ！アーチャー、はあく、またあんなの？鬱陶しいわ、私の前から消えなさい、邪魔ですから。」

アーチャー「つれないじゃないかアヴェンジャー君、どうかねライダー君、私と共同作業といかないかね。」

ライダー「共同作業？アヴェンジャーを片付けるのに共同作業ときたか？わはははははは！いいだろう、余一人では少々骨がある、アーチャーよその話乗った！」

アーチャー「と、言うことだアヴェンジャー君、君の相手は私達で行おうではないか。」  
ジャンヌ「あんたの声を聞くと吐き気がするわ、ホント気持ち悪いしライライする、まあ良いでしょう、纏めて消してあげるわ、私の焰に焼かれなさい。」

セイバー「ランサー！ やつとてめえを殺せるぜ！ 覚悟しやがれ！」

エリザ「フンツ！ そつちこそ覚悟しなさい！ 私の槍で串刺しにしてあげる。」

セイバー「ランサーごときが！ 死ねー！！！」

エリザ「ちよつ！ はや・・・・・・つて、言うと思つたか！ はあー！！！」

ガキンツ！

セイバー「ちつ！ この！ くつ！ この怪力女が！」

エリザ「だ、誰が怪力女よ！ この男女が！」

セイバー「てめえ！このゴリラ女が！」

エリザ「ちよっ！この貧乳が！」

セイバー「てめえもだろが！この怪力ゴリラ女が！」

エリザ「なッ！この貧乳男女が！」

セイバー「こ、殺す！」

エリザ「それはこっちのセリフよ！」

凜「……（罵りあって何やってんのかしらあの二人は？）。」

ネロ「ふむ、となると余の相手はバーサーカーと、ワカメのサーヴァントか。」



慎二「ま、またワカメって！おいライダー！はやくあのセイバーを始末しろ！」

ライダー「ごめんなさいマスター、私には出来ないわ、だつてあんなにも愛らしい方ですもの、ねえセイバー、私達つて良いお友達になれそうな気がするの、貴女はどうかしら？」

ネロ「むっ！なんだ貴様は、余達は敵同士であろう、だが、うむ！そうだな、お主の  
ような愛らしい者なら余は構わんが。」

ライダー「まあ！まあ！聞いたかしらマスター、ええ！ええ！貴女とお友達になれば  
きつと楽しいはずよ！」

慎二「いいかげにしろ!!」

バーサーカー「下がりなさいライダー、貴女はどうやら闘いには向いてないみたいで  
す、仕方ありません、セイバー、貴女は私がお相手しましょう。」

ライダー「あら？あら？バーサーカーちゃん？」

バーサーカー「間桐慎二、ライダーを下がらせなさい、邪魔ですの。」

慎二「なッ!!?・・・くそっ！ライダー！お前のせいで僕が恥をかいたじゃない  
か！この役立たずが！」

ライダー「あらマスター？役立たずだなんて、私が仕方なく貴方のサーヴァントに  
なつて差し上げたのに、ひどいことを言うのね、何でしたら契約を破棄しても良いんで

すのよ？私は別に問題ないですから。」

慎二「くっつ！う、うるさい！とりあえず下がれ！バーサーカーの邪魔だからな！」

ライダー「仕方ないですね、ではセイバー、また後でお話ししましょう。」

ネロ「何なのだ！アイツは何を考えておるのだ！全く戦う気が無いではないか！」

バーサーカー「ごめんなさいねセイバーさん、あの娘はあまり乗り気じゃないですから、こういった戦いはっね！」

ネロ「なッ!？」

ギインツ！

バーサーカー「あらあら、あの娘のせいで気が緩んでますね、駄目ですよセイバーさん、既に此処は戦場なのですから。」

ネロ「くっつ！」

白野「セイバー!？」

ネロ「すまない奏者よ、余は少し気が緩んでいたみたいだ、あのライダーめ、中々の策士と見た。」

白野「(いや、違うと思うけど、とりあえず黙っとくか)」

ネロ「だが案ずるな奏者、我が剣にてバーサーカーを直ぐに倒して見せようではないか！ふふふ、行くぞバーサーカー！貴様を倒し奏者に頭をナデナデしてもらおうではな

いか！」

白野「(ええ?)……………」

バーサーカー「うふふ、どうやら貴女の力の源はその岸波白野さん見たいですね、いいでしょう、私がその願いを叩き斬ってあげましょう。」

ジャンヌ「うふふ、あははは！さあ！まずはあんた！アーチャー！串刺しにしてあげる！くたばりなさい！」

アーチャー「私からか？ライダー君、助けて。」

ライダー「仕方ない、アヴェンジャー、余が相手をしよう。」

ジャンヌ「!?ちっ!」

ライダー「?どうしたアヴェンジャー?来ないのなら此方から行くぞ。」

ジャンヌ「(ウザイアーチャーから始末した方がいいのですが、仕方ないわね)まあいいわ、来なさいライダー、いえ、違うわね、征服王イスカンドル。」

ライダー「ほう、余の真名を当てるとは、何故判った?」

ジャンヌ「あら、当たり前なのかしら?青セイバーに感謝ね、まさか貴方があの征服王だとは、驚きね。」

ライダー「青セイバー?成る程、そう言う事か。」

ジャンヌ「……………」

アーチャー「!?ライダー君!後ろに注意した方がいいと思うが。」

ライダー「っ!?なんと!赤黒い焔か?くっ!」

ジャンヌ「ちっ!アーチャーの奴。」

アーチャー「おやおや、ライダー君、大丈夫かね?まさか死んだのかな?」

ジャンヌ「うふふ、馬鹿ねアーチャー、さあ!アーチャー!あんたも死になさい!」

アーチャー「なんと!私にもか!」

ジャンヌの攻撃でライダーは赤黒い焔に包まれる、さらにアーチャーはジャンヌが

放った無数の槍の攻撃を受ける。

ジャンヌ「あははははは！何て呆気ないのかしら！驚異であるあんた達がこうもあつさりとは。」

桜「……………凄い、……………っ!?アヴェンジャーさん！危ない！」

ジャンヌ「!?……………ちっ！アーチャー！」

アーチャー「危ない危ない、全く、アヴェンジャー君、君の攻撃は恐ろしいね、お陰で私の体に傷が付いたではないかね!!」

ズドドドドドッ！

ジャンヌ「くっ！ばかデカイ魔弾ね！あんたホントにアーチャーなの？ガンナーの間違いでは？」

アーチャー「うゝむ、私はアーチャーのはずだが、ま、そんな事はどうでも良いが、さて、アヴェンジャー君、終わりで行こうではないか、くゝくゝチエツクメイトだ！」

ズドドドドドドドドドドドドドドドッ！

桜「アヴェンジャーさん！」

ジャンヌ「下がりなさいマスター！つたく！こんな所で乱射だなんて、はあー！」  
アーチャー「ふふふ、突っ込んでくるかね！流星はアヴェンジャー君！では蜂の巣になつてもらおうとするか。」

ジャンヌ「蜂の巣？冗談？アーチャー、貴方に良いことを教えてあげましょう、勝利が確定していると思つていますが、油断は大敵ですよ。」

アーチャー「はて？何を言い出すかと思えば、アヴェンジャー君、君はもう負けてるのだよ、何せ私のこの魔弾銃で蜂の巣につ!?!? . . . がつ!?!? な、なんだ？か、体が動かな . . . !?!?」

ラニ「隙だらけですねアーチャー、貴方は周りが見えてないようです。」

アーチャー「ま、魔術師？何時の間に!?!?」

ラニ「申し訳ありませんが貴方の体を封じさせてもらいました、アヴェンジャー!」

ジャンヌ「あははは!?!? ざまあないわねアーチャー!?!? ではさよならです、死になさい。」

ザクツ!

アーチャー「 . . . . . ははは、参つたね、この私がこうもあつさりとは、宝具も使わずに、更には使われずに、ふふふふ . . . . . 」

ジャンヌ「うふふふ、無様ねアーチャー、いえ、ジェームズ・モリアーティ、所詮は作り物の人物つてどこかしら?」

アーチャー「 . . . . . 」

ジャンヌ「あらあら、あはははははは!?!? 黙りね!?!? いい、いいわ!?!? その顔、これで二度目だけど貴方のその屈辱的な顔立ちが最高よ!?!? あはははははは!?!?」

アーチャー「このクソアマが！がっ！がはっ！次だ！次こそは必ず貴様を、貴様を……」。

そう言い残しアーチャーは消える。

ジャンヌ「うふふ、次ですか？そんな事は起こりませんよ、小説の中の物語さん。」

桜「アヴェンジャーさん、大丈夫ですか？」

ジャンヌ「あらマスター、私は大丈夫ですよ、其よりも、ラニ、助かりました、礼を言います。」

ラニ「？」

ジャンヌ「どうしました？」

ラニ「まさかジャンヌから礼を言われるとは、驚きです。」

ジャンヌ「フンツ！」

ライダー「これは驚いた、まさかあのアーチャーを倒すとは。」

ジャンヌ「!?ライダー！」

ライダー「アヴェンジャーよ、もしやあの焔で我が死ぬとでも？」

ジャンヌ「マスター！ラニ！下がりなさい！」

桜「は、はい。」

ラニ「征服王イスカンドル、驚きです、あの焔を浴びて生きてるなんて。」

ライダー「あのくらいでは余は死にはせん、少しダメージを負ったが只それだけよ。」  
ジャンヌ「フンツッ！だったら直ぐに止めを指してあげる！くたばりなさいライダー  
！」

ライダー「はははははは！良いぞアヴェンジャー！来い！貴様は余が消し去ってやろう！」

ジャンヌ「はぁー！ー！ー！」

ライダー「フンツッ！」

ギギンツ！

ジャンヌ「力が！くっ！重い！」

ライダー「どうしたアヴェンジャー、早く本気を出さんか。」

ジャンヌ「この！筋肉だるまがつ！もう一度燃やしてあげる！」

ライダー「フンツッ！」

ジャンヌ「なツッ！．．．がつ！」

ドゴーンツ！

桜「アヴェンジャーさん！」

ラニ「ジャンヌ!?桜！此方へ。」

桜「ラニさん、いいえ、私はアヴェンジャーのマスターです、彼女を助けないと。」



ライダー「流石はアヴェンジャーのマスター、だが、言葉だけでは意味はないが、さて、どうするつもりだ、魔術師よ？」

桜「あ………、ライダーさん、私には戦う力は有りません、ましてやサーヴァントをサポートできるほどの技ななかないです、ですが……。」

ライダー「？」

桜「私の、私の魔力は、魔力はサーヴァントを癒す力があります！だから……。」  
ライダー「？」

ジャンヌ「ライダー……!!はあ……!!」

ライダー「なんと！くっ！」

ラニ「ジャンヌ!？」

ジャンヌ「離れなさい！マスター！ラニ……それとマスター、貴女の魔力は素晴らしいです、まさかこれほどとは、桜、貴女はありすよりも重要性が有るのでは？」

桜「アヴェンジャーさん、よ、良かったです、無事です。」

ジャンヌ「ええ、あのライダーの一撃はかなり堪えました、まさかたつたの一撃での威力、さあ！立ちなさいライダー！私が貴方を始末しましょう！」

ライダー「この余が膝をつくとは、ふははははは！良い！良いぞアヴェンジャー！貴様こそ余の全てを！行くぞアヴェンジャー！」

そして2騎は激突する、互いに全力をだし相手を始末しようと奮闘する。

ジャンヌが攻撃しライダーは受け流し、ライダーの攻撃をジャンヌは綺麗に捌く………。

ライダー「はあ、はあ、ふははははは！素晴らしい！此処までやるとは！いやあつばれ！喜べアヴェンジャー！この余が貴様を賛美しているのだからな！」

ジャンヌ「はあ、はあ、はあ、黙りなさいライダー！はあ、はあ。」

ライダー「マスターの魔力があるとはいえ、流星に限界が来ておるな、では、そろそろ止めといこうか？」

ジャンヌ「はあ、はあ、はあ。」

ラニ「征服王が魔力の開放！まさか？」

桜「………。」

ライダー「心配するな魔術師達よ、余の宝具は固有結界、この街は壊れはせん。」

ジャンヌ「……………はは、か弱い乙女に宝具ですか？」

ライダー「アヴェンジャー、いや、ジャンヌ・ダルクよ、お前は我が宝具で始末する、光栄に思うがいい！貴様は

それほどの強敵である！」

ジャンヌ「あら嬉しい、征服王にそこまで言われるなんて。」

ライダー「……………、肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を越えて我が召喚応じる永遠の盟友たち。彼らとの絆こそ我が至宝！我が王道！イスカンドルたる余が誇る最強宝具——

『王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ』

なり!!」

ジャンヌ「……………!」

王の軍勢アイオニオン・ヘタイロイ。

征服王イスカンドルの切り札的宝具。

イスカンドルに忠義を誓いしライダーの固有結界の中にのみ現れる近衛兵団達。

展開される心象風景は見渡す限りの大砂漠。

ライダー「いざ！遙か万里の彼方まで！」

「ウオーーーーー！！！」

ジャンヌ「流石にこれは不味いわね、こんなの食らったら……。」  
アヴェンジャー、ジャンヌ・ダルクは目を閉じる。

ジャンヌ「はあ、何故かしら？目を閉じたらあんたの顔が出てくるなんて……  
白野。」

キンツ！

ジャンヌ「……えっ？」

桜「アヴェンジャーさん！」

ラニ「ジャンヌ!？」

ライダー「はあ、はあ、ふはははははは！アヴェンジャー貴様の敗けだ！」

桜「ライダーさん!?!い、何時の間・・・に？」

ラニ「ジャンヌがいけません！そ、そんな。」

ライダー「はあ、はあ、アヴェンジャーはもういない、余の宝具にて消えたのだから、ふはははははは！素晴らしい！素晴らしかったぞアヴェンジャー！まさか此処までとは！ふははははははは！」

ラニ「ジャンヌが負け、た？」

桜「……………」

ライダー「ああ、そうだ、余の勝ちだ！……さて、後は貴様ら魔術師達だな、本来なら捨て置くが貴様らはこれから先驚異になると見た、余が自ら始末してやろう。」

ラニ「……………くっ！……………？桜？」

ライダー「……………ん？」

桜「……………ライダーさん、この勝負は私達の勝ちです！」

ライダー「何を言うかと思えば、アヴェンジャーはもういないのだぞ！ふはははははは！魔術師よ、まさか恐怖で頭が……………」

【ザクツ！】

ライダー「……………な、何？」

ジャンヌ「…………………………」

ライダー「な、な、何故？貴様が!？」

ラニ「ジャンヌ！」

ジャンヌ「……………まさかこんな物がこうも役に立つとは、あいつのお陰ね、はあ、はあ、でも何故かしら？凄くイライラするわ、あいつに借りができたせいかしら？……………はあ……………!!フンツ！」

ライダー「ガバツ！き、貴様？アヴェンジャー？ど、どうして？」

ジャンヌ「はあ、ふふふ、そうね、流石にあの宝具を食らえば私は死んでたわ、ですが……」

ラニ「？あ、あれは！礼装アトラスの悪魔！？どうしてジャンヌが？」

ジャンヌ「本来なら我がマスターにと、白野から言われましたが、マスターは受け取らないと判断したのでしようね、マスターは白野を守ることを第一に考えているからね、ですので白野はこれを私にと。」

桜「先輩が？」

ラニ「礼装アトラスの悪魔、一度目の攻撃を無効にするコード・キャスト、私が白野さんに。」

ジャンヌ「あら、そうなのですか？はあ、はあ、無効にするね、出来ないけど！それなりにダメージを受けたけど！何が無効にするのですか！？はあ、はあ、ふふふ、まあ良いでしょう、この礼装のお陰で助かりましたし。」

ライダー「がつ、がつ、くっ！アヴェンジャー！貴様は！貴様は！……ふ、ふはははははは！はーっははははははは！ぐふ！」

ジャンヌ「あら？まあ、まだ死んでないとは、ライダー、いえ、イスカンダル、しぶといわ、はあ、はあ、はあ、だけど貴方消えかけるわね。」

ライダー「おうとも、余はもうすぐ消えるだろう。」

ジャンヌ「だったら早く消えなさい、鬱陶しい筋肉だるまが。」

ライダー「ふはははははは！ではそうするか、ではなアヴェンジャーよ、貴様との戦いは実に素晴らしかったぞ！ふははははははは！」

そう言い残しライダーは消える。

ジャンヌ「はあ、はあ、流石に今回は疲れましたね、化け物二騎相手したのですから。」

桜「だ、大丈夫ですかアヴェンジャーさん。」

ジャンヌ「マスター、ええ、死にはしませんが大丈夫ですよ、ですが……」  
ラニ「ジャンヌ、貴女の魔力はもう殆ど残ってませんね、桜の魔力も余り有りません、ですの……」

ジャンヌ「ええ、私は休むとしましょう、マスター、貴女も休む事です、後の三騎は白野達に任せましょう。」

桜「は、はい、アヴェンジャーさんも、いえ、ジャンヌさんもしっかりと休んでくださいね。」

ジャンヌ「うふふ、(厄介な二騎は消したからいいとして、問題はあのバーサーカーです、果たしてセイバーに務まるでしょうか?)……」

桜「どうしましたジャンヌさん。」



ジャンヌ「いえ、どうせなら白野に癒してもらいましょうかと思ひまして、私の裸体のマツサージなどしてもらいましょう。」

ラニ・桜「だ、駄目です！」

ジャンヌ「あら残念。」

完 第 2 3 話

## 第24話

エリザ「この！この！この！さつきと死になさいよ！この！この！」

セイバー「うるせえー！てめえが死ぬ！このドチビトカゲが！」

エリザ「誰がトカゲよ！私はドラゴン！あんなのと一緒にするな！この男女が！」

セイバー「こ、殺す！ぶつ殺す！」

エリザ「フンツ！さつきから殺す殺すつて、私に傷ひとつつけてない、セイバーつて名だけであんた大したことないんじゃない？」

セイバー「……………」。

エリザ「あらあら、急に黙り混んで、ひよつとして凶星なのかしら？」

セイバー「……………」。

エリザ「ちよっ！何黙ってんのよ！」

凜「……っ！馬鹿！ランサー！槍を構えなさい！」

エリザ「えっ？」

セイバー「……死ね。」

エリザ「なッ!?は、早、くっ！」

ギギーンッ！

セイバー「チッ！あのランサーと書いてめえと言いついて、イライラするぜ、マスターから周囲を壊すなど言つてたけどもうどうでもいいか、おい！エリザベート！こつから本番だ！」

エリザ「……なっ！魔力開放って、あんた！何考えているのよ！」

セイバー「なんも？別にこの周囲の奴等がどうなるうが知つたこつちゃねえーよ、俺はてめえとあのアヴェンジャーさえ殺れたらそれでいいんだからな。」

エリザ「……そう、だつたら。」

セイバー「あん、だつたらなんだ？」

エリザ「本気で相手してあげる！悪いけどあんたじや私達には勝てないから、あんたのマスターがどこで隠れてるか知らないけど私にはマスターがサポートしてくれるし、それに比べてあんたは可哀想ね、マスターはいるみたいだけど隠れてこそそしてる臆

病なマスターなんだから。」

セイバー「!?て、てめえって!?な、なんだ?魔力が?ち、力がでねえ!ど、どうなつてんだ?」

エリザ「馬鹿ね、さつきも言ったでしょ、私にはマスターがサポートしてくれるつて。」

セイバー「マスター?」

凜「たくつ、悪いわねセイバー、貴女の魔力は封じさせてもらったわ。」

エリザ「流石はマスター、じゃないわマネージャーね、ウンウン、完璧じゃない。」

凜「ほらランサー、さつきと止めを指しなさい、セイバーを倒したら白野達の所に行くわよ、白野が相手してるあのバーサーカー、何か凄く嫌な感じがするわ。」

エリザ「了解!それじゃあねセイバー、あなたの真名は興味ないから名のならくわいていわ。」

セイバー「てめえ…….…….えっ?なッ!何であんたが?」

エリザ「ん?何?何処視てるの?」

凜「ん?つて!あ、え、衛宮君?それに青セイバー?二人とも何時の間に?」

士郎「大丈夫か、遠坂さんつて大丈夫そうだな。」

凜「え、ええ、衛宮君、貴方何時からいたの?」

衛宮「今さつきな、けど、なんだ、別に俺達が来なくても大丈夫そうだな、もう決着



エリザ「はぁー！何ですよ？ちよつと青セイバー！こいつを倒すのは私よ！行きなり現れたと思えば何いいとこ取りしようとするのよ！」

青セイバー「べ、別に私はそんなつもりでは・・・。」

凜「ほら、行くわよランサー！」

エリザ「嫌よ！あのセイバーは私が始末するんだから！」

凜「・・・つたく、だつたら早くしなさい、モードレッドだつたけ？あいつなんだか青セイバー見た時からバーサーカーみたいに可笑しくなってるみたいだから。」

エリザ「ふんっ！凜、貴女のお陰であいつはもう魔力が引き出せないみたいだし、直ぐに終わるわよ、さぁ！覚悟なさいセイバー！」

セイバー「はぁ、はぁ、セイバー！セイバー！はぁ、どけ！ランサー！てめえなんかどうでもいいんだよ！邪魔なんだよ！」

エリザ「・・・すうー、はぁー。」

セイバー「そこをどけランサー！邪魔！邪魔！てめえなんかはなから眼中にねえんだ！遊んでやつただけなんだよ！」

エリザ「・・・エステート・レピユレス！（絶頂無情の夜間飛行）」

セイバー「がつ!?な、なんだ？てめえ何時の間に？」

エリザ「何時の間に？貴女、青セイバーを見た時から私には眼中に無かつたみたいだ

けど、これは私と貴女の戦いです、決着が着くまで最後まで私に集中しなさい。」

セイバー「がっ、がはっ！言つたら、俺はあのセイバーを見た時からてめえなんか眼中にねえって、それを邪魔しやがって。」

エリザ「駄目ね貴女は、そんなんだから私に殺されるのよ、青セイバーしか見ていないなんて、私から言わせてみれば絶好の機会、もしちゃんと私との戦いに集中してれば例え魔力が引き出せなくても私に勝てたかもしれないのに、哀れな娘ね。」

セイバー「ふ、ふざけんな！ランサー！くそ！くそ！てめえのせいで！てめえが不意討ちなんかしなければ俺が……。」

エリザ「不意討ちね、そう思うのなら別に構わないでしょう、だけどねセイバー、例えどんな状況でも、例え貴女以外のサーヴァントがいても、例え途中で別のサーヴァントが割り込んできても、私はあんたを始末することに集中するわ、それ以外の事はマネージャーか仲間に任せればいいわけだしね、ま、その結果がこうなんだけど。」

セイバー「くそヤローが！たまたま上手くいったくせに調子に乗るなよ！」

エリザ「戦いには運も必要よ、その運が私にはあるんだから、貴女は運が無いだけ、所詮はメイinjやない只のモブキャラなだけ、私に殺されて当然！」

セイバー「傲慢ヤロー！」

エリザ「それは誉め言葉として取っておくわ！私はワガママで傲慢ですから。」



青セイバー「……………」

そしてセイバーの姿が消える。

エリザ「さよならセイバー、出来れば貴女との再会はしたくないわ、次は勝てる気がしないしね。」

凜「確かに、たまたま勝てたから良かったけど、あのセイバー、かなりの強者よ、今回は私の方が運が良かったって事ね。」

エリザ「マスターがいないサーヴァントなんてこんなものよね、セイバーが消えたのに未だに姿を見せないんだから。」

青セイバー「モードレッドのマスターですか？姿を見せないなんて、何を考えているのでしょうか？」

衛宮「まあ、とりあえず勝てたわけだし、いいんじゃないか。」

凜「それもそうね、それじゃあ白野の所に行くわよ。」

プルルルル、プルルルル、

凜「あら？電話？誰かしら？」

ピッ、

凜「もしもし？」

BB『あ、やっと出ましたね、全く、五秒も無駄にするなんて何を考えてるのやら。』

凜「……………」

B B 『あれあれくく？もしもし？凜さん？お金大好きさん？ツンデレさん？センパイが大好……………』

凜「わ……………！わ……………！ 何言ってるの！この馬鹿AIは！」

B B 『うるさいですね、別にそんな叫ばなくてもいいじゃないですか。』

凜「あんたがそうさせたんでしようが！」

エリザ「ねえ凜？だ、大丈夫？何を言われたか知らないけどあまり癩癩を出すと身が持たないわよ。」

凜「あんたもでしょうが！」

B B 『もしもし？凜さん、あれくく、無視ですかくく？シカトですかくく？私のことはほったらかしですかくく？もしもし、もしもくくし？』

凜「はいはい、ちゃんと聞いてるわよ、で？急に電話なんかして、何の用かしら？」

B B 『凜さんに聴きたい事があるのですが、リターンクリスタルはお持ちですか？』

凜「えっ？ええ、一応持つてるけど？」

B B 『ちなみに幾つほどお持ちでしょうか？』

凜「えくくと、確か三個ほどあるけど、それがどうしたの？」

B B 『そうですか、ラニさんや白桜は幾つほどお持ちでしょうか？』

凜「ラニと桜？知らないわ・・・。」

ラニ「私がおかか？」

凜「うわ！ビックリしたって、何時からいたの？」

ラニ「今さつきですが。」

桜「あれ？凜さん、セイバーさんはどうしたのですか？」

エリザ「私が始末したわ。」

ジャンヌ「あら？これは驚きですね、まさか貴女がああセイバーを倒すとは。」

エリザ「ムカーカー！何よその言い方！」

凜「うるさいわね、落ち着きなさいランサー、それよりもラニ、桜、あんた達はリターンクリスタルは幾つ持つてるかしら？」

ラニ「リターンクリスタルですか？確か二個ほど持ってたはず。」

桜「私は持ってませんね。」

凜「そう、聞いてたかしらBB、とりあえずリターンクリスタルは全部で五個有るけど。」

BB『そうですか・・・。。。。』

凜「何考えてるの？」

BB『うゝゝん、本当はセンパイだけ助かれば良いのですが、そんなことをすればセ

ンパイはきつとあれですし、……」

凜「ちよっと！何ブツブツ言ってるの？」

B B『仕方ないですか、えーと、凜さん、とりあえずマスターとサーヴァント一組だけ残して後の皆さんは撤退してください。』

凜「は？何言ってるの？ 私達はこれから白野の所に行くんだけど。」

B B『却下します、もしそんな事したらセンパイ以外の皆さんは殺されますよ。』

凜「どういう意味かしら？ 私達が殺されるって。」

B B『そのまんまの意味ですが、いいですか、今センパイとセイバーさんが戦ってるサーヴァント、えーと、バーサーカーさん、あれはかなり危険です、ぶっちゃけ化物です、分かりやすく言えば像対アリンコです、あ、ちなみに凜さん達がアリンコですよ。』

凜「なッ！もしその話が本当なら、白野達が危ないんじゃないや！」

B B『危ない所か下手をすればセンパイは大丈夫かもしれませんがセイバーさんは消えちやいますね。』

凜「皆！白野の所に急ぐわよ！じゃないセイバーが危ないわ！」

桜「は、はい！」

B B『あのー、私の話聞いてました？』

凜「うるさいわね！いい、よく聞きなさいBB、私達が白野達を残していなくなると思う？一組だけ残して他の皆がいなくなると思う？あんたの事だからそんな事わかりきってるはずよ！」

BB『センパイの事を思つて連絡したのですが、仕方ありませんね、せいぜい全滅しないように頑張つてくださいね、まあ、私としてはセンパイさえ大丈夫であればどうでもいいんですが、それじゃあ失礼しますね。』

ピッ、プッ、プッ。

凜「はあく、何なのよ、話すだけ話して……。」

ラニ「凜、BBは何と？」

凜「とりあえず白野の所に急ぎましよ、走りながら説明するわ。」

「その頃の白野とセイバー」

ネロ「はあ、はあ、はあ、はあ。」

白野「セイバー！」

ネロ「くっ！奏者よ、案ずるな、余は大丈夫だ。」

バーサーカー「大丈夫だ、ですか、そうは見えないのですが。」

ネロ「ふんっ！バーサーカーよ、余を甘く見るな、ここからが本番だ！いくぞ！」

バーサーカー「うふふ、たかが貴女ごときに、私が本気になるでも？もう少し遊びましようか？」

ネロ「はぁー！ー！！」

バーサーカー「あらあら、さつきよりは少しスピードが上がりましたね、ですが…。」

ネロ「なッ!?消え？」

バーサーカー「こつちですよセイバーさん。」

ネロ「ぐっ！何時の間に？」

白野「セイバー！コードキャスト、《shock》！」

バーサーカー「あら？あら？体が？」

白野「セイバー！バーサーカーから離れろ！」

ネロ「おお！流石は奏者！バーサーカー！」

バーサーカー「うふふ。」

白野「ッ！駄目だセイバー！バーサーカーから離れるんだ！」

白野の言葉でネロは白野の隣に近づく。

ネロ「何故だ奏者よ、バーサーカーの動きが止まっている今がチャンスではないか！」

白野「駄目だ！セイバー、バーサーカーをよく見て。」

ネロ「むむ！なッ!？」

バーサーカー「なるほど、今のがコードキャストですか？  
ですが、はい。」

ネロ「なッ！コードキャストを瞬時に解いただと！」

バーサーカー「うふふ、コードキャストがどんな魔術かと思ひ受けてみたのですが大した事ありませんね。」

白野「わざと受けたのか!？」

バーサーカー「ええ、さて、そろそろ終わりにしましょうか？」

ネロ「……奏者よ、宝具の許可を、バーサーカーを全力で叩く！」

白野「ああ！セイバー！バーサーカーを。」

ネロ「うむ！行くぞバーサーカー！余の黄金劇場を魅せてやろう！」

バーサーカー「黄金劇場？あらあら、自ら真名を明かすなんてお馬鹿なサーヴァント。」

ネロ「余の真名などどうに知っておろう！……がいるのだからな！そうであるバーサーカー！」

バーサーカー「あのお方をご存じでしたか、お喋りマスターが、やはりあのマスターは始末するべきですね。」

ネロ「っ！……がつ！」



白野「セイバー!？」

ガシツ!

白野「ぐっ!セイバー!しつかりしろ!大丈夫か?」

ネロ「そ、奏者、はあ、はあ、たった一撃でこの威力、バーサーカーめ、今まで本気ではなかったのか、体が動かぬ。」

白野「セイバー。」

ネロ「そんな悲しそうな顔をするな奏者よ、大丈夫だ、余はまだ負けておらぬ、はあ、はあ。」

白野「今回復するから待つてろ。」

ネロ「よせ、それ以上コードキャストを使うと奏者の魔力が持たぬ。」

白野「セイバー。」

バーサーカー「さて、そろそろ死んでもらいましよるか、セイバーさん。」

白野「……俺はセイバーを、皆を守ると決めたんだ、……バーサーカー。」  
バーサーカー「はい。」

白野「俺を……の所に連れていけ、俺がお前に捕まればセイバーを殺さなくてもいいだろう。」

ネロ「そ、奏者!？」

バーサーカー「本来なら始末するのですが、岸波白野さんがあのお方の所に自ら望んで来るのであれば助けてあげましょう。」

白野「いいだろう、行こう、……の所に。」

ネロ「そ、奏者！だ、駄目だ！駄目だぞ！そんな事は余が許さぬ！奏者は余と共に：。」「バーサーカー」「邪魔ですよセイバーさん。」

ネロ「ぐっつ！」

白野「止めるバーサーカー！それ以上セイバーを傷つけたら俺はお前を許さない！」「バーサーカー」「……!?（一瞬寒気が？この私が？）分かりました、では岸波白野さん。」

白野「……」

ネロ「駄目だ！駄目だぞ！奏者！奏者！行くな！余を置いて行くでない！奏者！」

白野「大丈夫だよセイバー、俺は死なないさ、必ずまた逢えるから。」

ネロ「奏者！嫌だ！嫌だ！奏者！余を！私を置いて行かないで！私を一人にしないで……」

白野「セイバー、俺はセイバーをネロを守ると決めたんだ、例えマスターとサーヴァントの間柄でも俺にとってネロは大切な人だから。」

ネロ「そ、奏者！」

バーサーカー「うるさい小娘が、やはり始末するのがいいですね。」

ガシッ！

バーサーカー「っ!？」

白野「言つたらバーサーカー、セイバーを殺したら俺はお前を許さないと……。」  
 バーサーカー「……（恐ろしい目付き、もしセイバーを始末したら、私はどうなるのかしら？）冗談ですよ、岸波白野さん、では……。」

グサッ！

バーサーカー「えっ?？」

ネロ「……あ。」

白野「がっ!?!な、なんだ?？」

ドサッ！

バーサーカー「……。」

ネロ「そ、奏者?？」

白野「……。」

バーサーカー「岸波白野さん?？」

慎二「は、はは、あははははは！やった！やったぞ！どうだ！岸波！思い知ったか！

僕をさんざんこけにした報いだよ！いい様だな岸波！ああ!？」

ネロ「あ、あ、あ、そ、奏者？奏者？」

バーサーカー「間桐慎二！貴方は！何て事を！」

慎二「何だよ！岸波ごときがどうなるうが僕の知ったことか！それにこんな奴を捕らえて何の役に立つ？こんな虫けらなんざゴミの用に死ねばいいのさ、あははは！」

バーサーカー「……貴様は！間桐慎二！！」

慎二「な、何怒ってるんだ？岸波程度の事で、そんな奴より僕の方が役に立つさ、何てつたつて僕は優秀な魔術師なんだからさ、そうだろ、僕がゴミクズの代わりにあの人の願いを叶えてあげるさ、僕は最高の魔術師なんだからさ！あははははは！」

バーサーカー「ゴミクズは貴方ですよ、間桐慎二！」

慎二「えっ？……がはっ！」

バーサーカー「ゴミの分際で偉そうにして、岸波白野さんがどのような人物なのか、あのお方にとってどれ程必要なのか、何もわかっていない！」

慎二「な、何で？ひ、ひい、ま、待って！岸波ごときに何が出来るんだよ！た、助けて！おい、ライダー！ライダー！早く僕を助ける！」

ライダー「はあく、大変な事をしてしまいましたねマスター？戦いを嫌う私でも貴方には殺意を持ってしまいます。」

慎二「は？お前何言ってるの？僕が死ねばお前も消えるんだぞ！それでもいいのか!？」







桜「え？あ、はい、あの、これは？」

バーサーカー「葉草です、これを岸波白野さんに飲ませてください、少しは傷も和らげるはずです。」

桜「あ、ありがとうございます。」

バーサーカー「いえいえ、では失礼しますね。」

ルーラー「……………」

ジャンヌ「……………」

ルーラー「それでは失礼しますね、岸波白野さんの回復を願います、それと間桐慎二、貴方は必要ありません、私の前から消えなさい。」

慎二「へっ？な、何で？僕が必要じゃないのか？あの人は僕を必要だつて？」

ルーラー「岸波白野さんを始末しようとした貴方など必要ありません、あのお方はそう言っています。」

慎二「ちよっ？待って！僕は魔術師だ！必ず役に立つ！」

ルーラー「黙りなさい間桐慎二！必要無いと言っているのです！バーサーカーに殺されないだけありがたく思いなさい！」

慎二「……………ひい。」

ルーラー「では失礼しますね、またお会いしましょう。」



凜「た、助かったの？」

ジャンヌ「ええ、まあ、白野が危険な状態ではあるのですが、どうやらバーサーカーの薬草が効いてるみたいですね。」

凜「そう、桜、白野の常態は？」

桜「大丈夫です、気を失ってますが命には別条ありません、ですが……。」  
ラニ「どうしました？桜。」

桜「傷がかなり深く、今は止まりましたが出血の量が多かったので何時目が覚めるのか……。」

凜「……、大丈夫よ桜、こう見えてこいつはしぶといんだから！すぐに目を覚ますわ。」

桜「先輩……、そうですね、先輩は強いです！すぐに目を覚ますはずです！」

凜「さて、とりあえず白野を連れて帰るわよ、ランサー、アヴンジャー、どちらか白野をおぶってちょうだい。」

ネロ「余が奏者を連れて帰る。」

ジャンヌ「無理をしなくても宜しいのでは？セイバー、貴女もかなり危険な状態ではあるのですが。」

ネロ「無理をしておらぬ！」

ちよん。

ネロ「~~~~~っ!!」

ジャンヌ「そんな身体で白野をおぶるなど無理ですよ、ですので私が……。」

エリザ「何勝手に決めてんのよ! 私が白野を連れて帰るわ!」

ジャンヌ「貴女のような怪力女では白野の傷が増えます、

私が連れて帰ります。」

エリザ「だ、誰が怪力女よ! ってあんた何故白野をお姫様だっこしてるの?」

ジャンヌ「おや? いけませんか? うふふ。」

ネロ「なっ!? 貴様! 奏者を離さぬか! 余が奏者を連れて……。」

凜「セイバー、貴女は身体を休めなさい。」

ネロ「ぐぬぬっ! み、認めぬ! アヴンジャーよ! よく聞け! 奏者は余のマスター! 貴様の用な邪心の塊など奏者は何とも思っていないのだからな!」

フニユンツ、

ジャンヌ「あら、私の胸が白野の顔に、幸せそうな顔をしていますね白野ったら。」

フニユフニユ、

ネロ・凜・ラニ・桜・エリザ「なッ!」

ジャンヌ「うふふ。」

ネロ「えーい! アヴンジャー! 貴様は! 貴様は! 奏者を放せ! やはり余が奏者を連れ

て帰る！」

エリザ「ダメよセイバー！私がダーリンを連れて帰るんだから！」

ネロ「誰がダーリンか！アヴンジャー！貴様も貴様で何時まで奏者の顔を胸に埋めて  
いる！」

ジャンヌ「白野が幸せそうなのでついつい。」

ネロ「そんな事あるわけなからう！」

凜「何やってんだか。」

士郎「な、なあ、別にそんな事しなくても確かりターンクリスタルだっけ？それを使  
えば直ぐに戻るんじゃないか？」

士郎と青セイバー以外

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ。」

）第24話）

完

## 番外編

く白野陣営く

〔マスター〕

『岸波白野』

この物語の主人公、みんな大好きザビ男君！

長が付くほどお人好しで頼み事は断れない。

一級フラグ建築士でもありかなりの女性人から（サーヴァント含む）好意を寄せられている。（本人は自覚なし）

少しオヤジの所がありリンの太ももをまじまじと視たりラツキースケベを（本人は戸惑うが）心のなかで喜んでいる。

前世では月の聖杯戦争の勝利者でサーヴァントとの信頼も厚く、仲間たちからは其なりに信頼されている？

白野の長所は例えどんな状況であろうとけして諦めない心強さがある。

観察眼が凄く初めの内は戸惑うが二度三度と戦う内に相手の行動が先読み出来るようになる。

「サーヴァント並かそれ以上の目をしている」と、サーヴァントや仲間達からは絶賛されるほどである。

『遠坂凜』

2030年から白野に会いに来たこの物語のヒロイン。

マスターとしてはかなりの強者でサーヴァントとはいいいコンビでもある。

また機械関係も得意である。

少なからず白野に好意を寄せているがかなりのツンデレさん。（ツンが99に対しデレが1）

『ラニ＝Ⅷ』

2030年から白野に会いに来た物語のヒロイン。

彼女のサーヴァントであるバーサーカーとは相性が良くラニがお姫様に対しバーサーカーはラニを守るナイトみたいな関係であった。

白野の事はかなりの好意を寄せていて積極的に白野と二人きりになろうとしている所がたまにある。

『間桐シンジ』

2030年から白野に会いに来た友人。

月の聖杯戦争では白野と同級生であったが本来はまだ8歳の少年である。



サーヴァントとの相性は良くも悪くもない感じでサーヴァントからよくからかわれたりしている。

シンジにとって白野はただ一人の友人でもあり自称ライバルでもあるが今の白野にとってシンジは大切な弟みたいな存在である。

『ありす』

2030年から白野に会いに来た物語のヒロイン？

白野が大好きでお兄ちゃんと呼び白野に会うたび抱きついてくる。

サーヴァントとの相性が抜群でサーヴァントにとってありすは大切な存在、ありすを傷つける相手は誰であろうが許さない。

白野にとつてありすは大切な妹で更にありすの頼みは断らない程のシスコンでもある。

『ユリウス・ベルキスク・ハーウエイ』

2030年から白野に会いに来た白野の友人。

白野達にとつてユリウスは兄みみたいな存在でもある。

サーヴァントとは仲はユリウスは殺し屋サーヴァントは武人であるため話は噛み合わない。(かといって互いに嫌いあつてはいない)

今のユリウスは白野は大切な友人であり凜達は妹・弟みみたいな存在。

『桜』

2030年から白野に会いに来たムーンセル元AI健康管理者で今は月の聖杯によつて人間として生きているヒロインの一人。

サーヴァントとの相性は其ならない感じである。

白野の事を先輩と慕い、大切な存在で彼と一緒に生きていきたいと思うほど、そのため白野の事を第一に考えている（他の仲間達も大切だがやはり白野優先的である）

【サーヴァント】

『セイバー』

白野のサーヴァントでヒロイン、真名はネロ・クラウディウス。

ローマ帝国の第五代皇帝。

白野の事を奏者と呼び白野大好きかまってワンコでもある。白野好きであるため白野が別の女性と仲良くしているとすねる、白野に甘えたいのでよく白野を困らせるような大胆な行動もする。

普段は自分の事を「余」と言うが大切な人の前だと（白野の事であるが）「私」と言う

事がある。

『ランサー』

凜のサーヴァントで真名はエリザベート・バートリー。

ハンガリーの貴族で血の伯爵夫人と言われているかなりの拷問好き。

白野の事は初めは子ブタと呼んでいたが白野に好意を抱いてからはダーリンや白野と呼ぶようになる。

かなりの力持ちでマイクスタンドも兼ねた身の丈以上の大きさの槍を軽々と振り回して戦う。

『バーサーカー』

ラニの元サーヴァントで真名は呂布奉先。

中国の三国志時代の名高い武将であり、バーサーカー・ランサー・ライダー・アサシン・アーチャーと5つのクラスに該当する資質がある。

『ライダー』

シンジのサーヴァントで真名はフランシス・ドレイク。

イギリスの大海賊で世界一周を生きたままなし得た人類最初の偉人でもある。

マスターのシンジの事は弟として扱いよくからかつて遊んでいる。

『キャスター』

ありすのサーヴァントで真名はアリス。

実在する絵本の総称「ナーサリー・ライム」マスターによってはビジュアル・能力を自由に変化させる。

マスターのありすとは大の仲良しでキャスターはありすの事を第一に考えている、またありす同様白野の事はお兄ちゃんとして慕っている。

『アサシン』

ユリウスのサーヴァントで真名は李書文。

八極拳の創始者であり、(二の打ち要らず)(神槍)などの二つ名で恐れられた中国拳法史上屈指の使い手。

マスターのユリウスとは能力的には相性は良い。

もしランサーで召喚されてたらかなりヤバイ!

『アヴェンジャー』

桜のサーヴァントでヒロイン?真名はジャンヌ・ダルク。

フランスの国民的英雄で初めはルーラージャンヌを召喚しようとしたが何故かアヴェンジャージャンヌが召喚された。

ジャンヌは毒舌で高慢・過激たまにいじけて根暗っぽいところがある。

マスターの桜とは仲は良くジャンヌは特に桜の魔力を気に入っている。(桜の魔力は

癒しを含めているため)

また白野に対しては何故か初めから気に入っておりたまにからかって遊んでいる。  
(直接ではなく白野が気を失っている時)

ジャンヌは白野に少なくとも好意を持っているため白野の顔をまともに見れないでいる、白野が他の女性と仲良くしていると隠れていじける事もまれにある。

【その他】

『BB』

ムーンセルの上級A1白野好きで凜達を2004年に送り出した本人でヒロイン？ぶつちやけ白野に再開できれば後はどうでもいいと思っっている。

白野をセンパイと呼び白野の為なら例え周りがどうなるうがお構い無し、凜曰く「もしBBがサーヴァントとして召喚されたら聖杯戦争は最短で終結する」とまで言われている。

『メルトルリス』

BBにより産み出されたアルターエゴで白野好きAI。

白野と再開した時白野さえ視れたらそれで幸せと思うほどで今でも彼女は白野を

ムーンセルから眺めている。

彼女はよく白野のスマホに入り込む。

『パッションリップ』

BBにより産み出されたアルターエゴ。

白野を先輩と慕うストーカーAI。

白野を見付けるのが得意ではあるが白野と直視して話すことが出来ない照れ屋さん。その為彼女は白野の写真を眺めている事が今の幸せでもある。

『ギルガメッシュ』

元白野のサーヴァントで英雄の中の英雄王。

第4次聖杯に参加していた。その時のクラスはアーチャー。

白野が今の時代に転生してると知って再開するために呪令を使い2004年まで教会に住んでいた。

ギルガメッシュにとって白野は唯一認めたマスターでもある。

『キャスター』

元白野のサーヴァントでヒロイン、真名は玉藻御前。(通称タマモ)

魂がイケメンである白野に好意を寄せていて白野をご主人様と慕っている。

隙あらば自分をサーヴァントとして召喚されたいと願うセイバーとはよく言い争つ

ている。

『レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイ』

『臥藤門司』

『ダン・ブラックモア』

『ジナコリカリギリ』

白野を慕う仲間達。

現在は2030年に残り白野が眠っていた廃墟を守っている。余り出番はない。

く冬木の第5次聖杯戦争のマスターとサーヴァントく

『衛宮士郎』

第5次聖杯戦争に参加しているマスター。

白野とは幼い頃からの幼馴染み。

士郎は幼い頃からの正義の味方に憧れている。

自分より他人の考えであったが白野との出会いにより改善されている。お人好しで白野と同じフラグ建築士でもある。

『遠坂リン』

第5次聖杯戦争に参加しているマスター。

士郎とは仲が良いが凜と同じくツンデレ、但しリンの方が若干デレが多い。

『間桐慎二』

第5次聖杯戦争に参加していた元マスター。

自信家で白野と士郎とは友人、皆からはワカメと呼ばれている。(白野と士郎は除外)

『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』

第5次聖杯戦争に参加していた元マスター。

士郎をお兄ちゃんと慕っている。

ありすとは仲は良く一緒に遊ぶことが多い。

『?????』

第5次聖杯戦争に参加していた元マスター。サーヴァントはアサシンで名前は不明。

『?????』この先も不明のまま。

『?????』

第5次聖杯戦争に参加しているマスター。

サーヴァントはランサー。

その内出て来るはず。

『?????』

『?????』



第5次聖杯戦争に参加しているマスター。

サーヴァントはキャスター。

その内出て来るはず。

【サーヴァント】

『セイバー』

士郎のサーヴァントで真名はアルトリア・ペンドラゴン（アーサー王）

士郎との相性は良いが士郎の魔力が余り行き渡っていない。

それでも白野のサーヴァントとは互角に渡り合えるほどの実力がある。

『アーチャー』

リンのサーヴァントで真名は不明。

白野の元サーヴァントとしての記憶もしくは記録があるため真名は今の所無銘としている。

初めの頃は士郎に殺意を持っていたが今はなし。

マスターであるリンには弱い。

元マスターである白野にも何故か弱い。

『ライダー』

慎二の元サーヴァントで真名はメデューサ。

慎二に対しては仕方なく従っていた。

本来のマスターである人物を守りたいと常々願っていたサーヴァントでもある。

『バーサーカー』

イリヤの元サーヴァントで真名はヘラクレス。

ギリシャの大英雄でかなりヤバイサーヴァントでもあるがイリヤにとつては大好き

なサーヴァント。

もしラニのバーサーカーがいなければ白野達は全滅していたほどの実力がある。

『ランサー』

第5次聖杯戦争に参加しているサーヴァントで真名はクーフリーン。

ケルト、アルスター伝説の勇士。

マスターは不明。

凛の元サーヴァントでもあり白野達はランサーを「その内味方になるのでは？」と

思っている。

出番はあるはず。

『アサシン』

第5次聖杯戦争に参加していたサーヴァントで真名はカーミラ。

エリザが成長し完全なる怪物と為った姿。

エリザとは仲が悪く互いに嫌っている。

またアヴェンジャージャンヌの事も殺したい程嫌っている。

マスターは不明。

白野に対しては何故か弱く、ある人物と重ねているのか最後には白野に助言する。

『キヤスター』

第5次聖杯戦争に参加しているサーヴァントで真名は不明。

全てにおいて今だ不明。

【その他】

『言峰可憐』

第5次聖杯戦争の監視・監督者。ヒロイン？なのかな？

白野と士郎を気に入っておりたまにからかって遊んでいる。

サーヴァントとの相性が抜群だがサーヴァントをからかって遊ぶ事が多い。

何故かそうなったのか判らないが少なからず白野に好意を持っているかも知れない。

『言峰綺礼』

第5次聖杯戦争の元監視・監督者。

今は何処にいるのか不明。

もし白野と麻婆豆腐について語り合えば危険なほどヤバイ！ 兎に角ヤバイ！ 周りが引くほどヤバイ！ この二人は会わせてはいけないほどヤバイ！ 絶対に会わせたいじゃない！

【サーヴァント】

『ルーラー』

可憐のサーヴァントで真名は聖女マルタ。

悪竜タラクスを鎮めた、一世紀の聖女。

可憐との相性がは抜群であるが、よく可憐にからかわれている。

何故か白野の事を白野様（本人は自覚なし）と呼びかなり気に入っている。

く敵陣営マスターとサーヴァントく

【マスター】

『……………』

全てにおいて謎の人物。

『その他14人のマスター達』

今の所慎二と第5次聖杯戦争に参加していた元アサシンのマスターのみ。それ以外は今だ不明。(その内出番はあるはず?)

【サーヴァント】

『セイバー』

14人のマスターの一人によって召喚された元サーヴァントで真名はモードレッド。

アーサー王伝説に出てくる円卓の騎士の一人である。

マスターは不明。

『セイバー』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。

マスターも不明。

『ランサー』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名はヴラド三世。

15世紀ルーミアのワラキアの領主。

マスターは不明。

エリザからはおじ様と呼ばれているがヴラド三世はエリザの事を殺したい程憎んで

いる。

また敵陣営のサーヴァント達からはかなりの脅威的とされておりあのバーサーカー  
でさえ恐れるほどの実力がある。

『ランサー』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。

マスターも不明。

『ライダー』

14人のマスターの一人によって召喚された元サーヴァントで真名はマケドニアの  
征服王イスカンダル。

マスターは不明。

『ライダー』

あるお方から召喚されたサーヴァントで真名不明。

戦いを好まず誰からも愛される癒しキャラ。

何故か白野を気に入っている。

『アーチャー』

14人のマスターの一人によって召喚された元サーヴァントで真名はジェームズ・モ  
リアーティ。

物語のシャーロック・ホームズシリーズに出てくる。

マスターは不明。

『アーチャー』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。

マスターも不明。

『キャスター』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。

マスターも不明。

『キャスター』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。

マスターも不明。

『アサシン』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。

毒殺を得意とするサーヴァントでかなりの自信家でもあるがその分打たれ弱く上の者には逆らえない。

マスターも不明。

『アサシン』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。  
マスターも不明。

『バーサーカー』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。  
バーサーカーでありながら自我を持っているが怒りか頂点にたつと自我を失う。

かなりの実力者で白野のサーヴァント、セイバーすら足元にもおよばないほどである。

マスターは不明。

『バーサーカー』

14人のマスターの一人によって召喚されたサーヴァントで真名は不明。  
マスターも不明。

『ルーラー』

召喚された経緯は不明であるがある人物を崇拝しているサーヴァントであり真名は  
ジャンヌ・ダルク。

その人物の為ならどんな事にも手を出す。

ルーラージャンヌの実力はかなりのものでバーサーカーの暴走を瞬時に止めるほど、  
また白野陣営のサーヴァントや第5次聖杯戦争に参加しているサーヴァントの真名を



把握しているため危険なサーヴァントでもある。

く学園内の友人達く

『蒔寺楓』

白野とは同じクラスで同じ新聞部。

白野に対しては男友達でありよく一緒に遊ぶ事が多い。

『氷室鏡』

白野とは同じクラスで同じ新聞部でもある。

白野に好意を寄せていて楓にその事だからかわれているがその後に楓をぶつ飛ばす。

新聞部員達にとって彼女は姉のような存在。

『三枝由紀香』

白野とは同じクラスで同じ新聞部。

新聞部員の皆を温かく見守る癒しキャラ。

『美綴綾子』

白野の友人の一人。

なにかと白野を弓道部に入れようとしているが全て空振りに終わっている、また好意も寄せている。

『桐生一成』

白野と士郎の友人であり二人にとっては良き理解者。

一成の頼み事は基本断らない。

## 第25話



暗い

何も見えない

だけどしっかりと立っている感覚はある





ん ???  
? ┌  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
└

誰かが呼んでいるような？



「???  
う?。」  
「今のお前は夢の中か、だか、例え夢の中であろうが目を開けることは出来るだろ

あ、さつきよりは良く聞こえる・・・てっ?夢の中?

??? 「さあ、目を開けろ、それとも永遠に其のままにいるのか？」  
流石に永遠は困る、よし、目を開けるか、

??? 「やっと目を開けたな我がマスター。」

白野 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

??? 「?・・・・・・・・どうした?」

白野 「・・・・・・・・・・・・・・・・えつと?どちら様でしようか?」

??? 「・・・・・・・・・・そうだな、お前は私の事を覚えていない、いや、覚悟はしていたが  
こどもあつさりと言われると結構堪えるな。」

白野 「えつと!あの!な、何か良くわからないけど、ごめんなさい!!」

??? 「・・・・・・・・・・ふふ、あいからわずだなお前は、構わないさ・・・・・・・・さて、何か  
ら話せばいいのか?」

白野 「・・・・・・・・・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

??? 「どうした?」

白野 「此処って俺の夢の中何だよね?そして君は俺のサーヴァント?でいいのかな?  
ただ俺は君の事は知らないんだけど。」

??? 「あいからわず状況の飲み込みが早いな、ああ、これはお前の夢の中、そして私は

お前のサーヴァント、私の記憶が無いのはあのサーヴァントが最後にお前の記憶を消したからだ。」

白野「記憶を？」

???「そうだ、だから私の事をお前は覚えていない。」

白野「あのサーヴァント？」

???「それ事は気にするな、もう消えていないからな。」

白野「……………」

???「やつと逢えた、ああ、やつと、例えお前の記憶の中に私がいなくても私はお前の事を良く知っている、お前は私に全てを与えてくれた。」

白野「へっ?、」

???「だか、この夢ももうすぐ消え。」

白野「ちよっ? えっ? 夢の中に入って来れたんだから、また直ぐに会えるんじゃないの?」

???「それは違うな我がマスター、私はお前の中に眠っていた記憶の欠片だ、本当に奥深くに眠っていたほんの一握りの欠片だ。」

白野「俺の記憶の欠片。」

???「そうだ、あのサーヴァントに記憶を消されていたがどうやら奥深くに私の記憶が

残っていたようだ。」

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

???「そんな悲しい顔をするな、夢の中の私は消えるが、お前の奥深くに私の記憶が眠っている、ほんの少しだがな、それだけで私は充分だ。」

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

???「こうして夢の中とはいえマスターに逢えるだけでも奇跡なんだ、だから私はお前に逢えた事が何よりも嬉しい。」

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

???「やはりお前は優しいな、ではな我がマスター、私の最愛のマスター。」

白野「ま、待った！ストップ！えっ？あれ？な、何だ？体が？」

???「心配するな我がマスター、お前はもうすぐ目覚めるだけだ、それに・・・・・・・・。」

白野「・・・・・・・・・・それに？」

???「何故だろうな？また逢える気がする・・・・・・・・。」

白野「・・・・・・・・・・えっ？」

???「・・・・・・・・ああそうだな、忘れていたな、気お付けろマスター、お前の住む世界に終焉が訪れようとしている、それを阻止出来るのはお前とお前を慕う仲間達だ、ありすと桜と衛宮士郎か、特にその三人は重要な役割を示しているお前を中心に。」



白野 「えっ？ちよっ！？待って！」





??? 「あら？白野のかけ布団がはだけて．．．．．仕方ありませんね、直してあげますか。」

白野 「．．．．．ん。」

??? 「おや？」

白野 「．．．えつと？．．．．．あれ．．．．．此処は？」

フニユン

??? 「．．．．．。」

白野 「(あ、あれ？えつと？目が覚めて、起き上がって、何故か柔らかい感触が?)」

??? 「．．．．．。」

白野 「(ど、どうなって？ってあれ?) ジャンヌ？」

ジャンヌ 「．．．．．。」

白野 「えつと、お、おはようジャンヌ。」

ジャンヌ 「．．．．．ギ。」



く  
そ  
し  
て  
く

桜「先輩大丈夫ですか？」

白野「あはは、大丈夫だよ桜、えっと、セイバー、俺は大丈夫だからもう抱きつかなくとも。」

ネロ「ぐす、何を言うか奏者よ！余は、余は、どれ程心配したと、うわくくん！やつと余の奏者が！奏者が！」

白野「心配してくれてありがとうセイバー、桜もありがとうな。」

桜「いえ、先輩が目を覚ましてくれて凄く嬉しいです。」

白野「それとジャンヌもありがとう。」

ジャンヌ「……………それはどちらのありがとうございますか？」

白野「えっ？（どちらのつて……………あ？やつぱりあの感触はジャンヌの？）」

ジャンヌ「……………何を思い出しているのですか？白野？」

白野「……………えっ？」

ジャンヌ「忘れなさい。」

白野「な、何をでしょうか？」

ジャンヌ「さつき起こったことは全て忘れなさい。」

白野「……………ああ、やつぱりさつきの感しょ……………」

ジャンヌ「忘れろと言っているのです！それとももう一度殴りたいのですか？」

白野「はい！忘れました！」

ジャンヌ「……………よろしい。」

ネロ・桜「??」

タマモ「ちよつと!?桜さん! いい加減タブレットをご主人様に渡してくださいませ  
!」

桜「あ、すみませんキャスターさん、あの先輩、此方を。」

白野「ん?何?」

桜からタブレットを受け取る白野、すると。

タマモ「ご主人様!?あ、や、やつと、やつとお目覚めになられたのですね!タマモ物  
凄く心配したんですよ!ご主人様、ご無事で何よりです!」

白野「キャスター、うん、ありがとう、心配かけてごめんな、もう大丈夫だから。」

タマモ「あくくん、イケ魂最高ですご主人様!タブレットの中でなければこのタマモ  
ご主人様に飛び付いて抱きしめます!きやつ!言っちゃった!」

ネロ「ふんつ!何を言い出すことと思えば、下らんことを。」

マタモ「むむ、ちよつとセイバーさん、何時までご主人様に抱きついているのですか  
? いい加減ご主人様から離れやがれてっんです。」

ネロ「奏者は余の奏者だ、抱きつくのは余の自由であろう。」

タマモ「怪我人に抱きつくとか有り得ないんですが、それにセイバーさん、貴女がもつ



としつかりしてればご主人様がこんな目に遭わなかったのでは？」

ネロ「な、くっ！ぐぬぬ！」

タマモ「ご主人様、やはり私がご主人様のサーヴァントとして貴方をお守りした方がよろしいかと。」

ネロ「なっ！何を言うか！奏者は余のマスター！貴様など必要ないわ！次こそあのバーサーカーを余が倒してみせる！必ずな！」

タマモ「バーサーカーに手も足も出せなかった貴女が何を言っているのです！」

ネロ「ぐぬぬ！」

タマモ「キシヤ〜〜〜！」

白野「ちよっ、セイバー、キャスター、喧嘩しないで、俺は無事だったんだしさ。」

タマモ「何処がご無事ですか！ご主人様はあれから6日近く眠っていたのですよ！」

白野「そ、そうなの？」

桜「はい、あの子の先輩の傷はもう治りかけてますが6日はずっと眠っていました、出血の量がかなり多かったのでそのせいかと思うのですが。」

白野「そうか、……あれ？そう言えば他の皆は？」

桜「皆さんは学校です、私は先輩の事を看病するため今日はお休みです。」

白野「ご、ごめん桜、迷惑かけてしまつて。」

桜「迷惑じゃないですよ先輩、私は健康管理者です、それに私ちゃんと学校には行つてますから。」

白野「えっ？」

桜「ユリウスさんと交代で先輩の看病をしました、後何時もセイバーさんやキャスターさんが先輩の側に居ましたから。」

白野「そうか、後でユリウスに礼を言わないとな、それと……。」

ネロ・タマモ「??」

白野「ありがとうセイバー、キャスター。」

ネロ・タマモ「ッ！」

白野「な、何?ど、どうした?」

ネロ「そ、奏者くくく♪」

白野「グホッ！」

タマモ「ちよっ!セイバーさん!ご主人様に抱きつかないでくださいまし!それは私の役目でしょうが!」

ネロ「ふんっ!タブレットのの中にいる貴様が何を言っておる、奏者くく♪」

タマモ「ぐぬぬ、(何とかして私もご主人様の時代にサーヴァントとして召還されなければご主人様がセイバーさんの物に、いや、セイバーさんだけではなくともご主人様を

慕う方はかなりの数々、どうすれば私も……」

白野「キャスト？……（何か考え込んでるな……ほつとくか）あれ？ジャンヌは？」

桜「ジャンヌさんなら今皆さんに連絡をしています、先輩が目を覚ましたら逐一連絡するようにと凛さんに言われましたので。」

ジャンヌ「マスター、凛にえくと、メールでしたっけ？それに連絡を入れときました。」

桜「ありがとうございますジャンヌさん。」

白野「ジャンヌってスマホの操作できるの？」

ジャンヌ「ッ！は、白野！え、ええ、勿論です、マスターに教えて頂きましたから。」

白野「???'」

ジャンヌ「（お、落ち着きなさい私！あの事はもう終わったことです）」

白野「そうだ、桜、俺が眠っている間何もなかったの？」

桜「そうですね、特に問題は在りませんでした、ですが……。」

ジャンヌ「（……って言うか何故白野は何もなかったようにマスターと話しているのですか、確かに私は忘れろと言いましたか）」

白野「えっ？何？」

桜「逆に変なんです、先輩が眠っていたこの6日間何もなかった事が、敵のサーヴァントにも会わず、ましてや第5次聖杯戦争のマスターやサーヴァントにも会わずで、あ、衛宮さんや遠坂さんは別ですよ。」

ジャンヌ「(忘れろと言いましたが少しは恥じらうとかあるのでは？私だけ意識しているとか・・・はっ？何を考えているのです私)」

白野「確かに、・・・?」

ネロ「そんな事はどうでもよいではないか、奏者が無事であったのだからな。」

白野「セイバー。」

バタバタバタバタツ!・・・ガチャツ!

ありす「お兄ちゃん!」

白野「へっ?あります?」

ありす「わくわく!お兄ちゃん!お兄ちゃんお兄ちゃん!」

ドゴツ!

白野「グハツ!」

ありす「お兄ちゃんくく♪」

白野「ナ、ナイスタツクル、あります。」ガク

ネロ「そ、奏者くくく!」

タマモ「ご、ご主人様くくくく！」

桜「せ、先輩！大丈夫ですか!?!先輩！」

ありす「あれ？寝ちやつたのお兄ちゃん、私も一緒に寝る。」

凜「ちよつ！白野！こちらありす！白野は怪我をしてるんだから白野に飛び込んだら駄目でしょう！」

ありす「いや！私はお兄ちゃんと一緒に寝るの！」

ラニ「気を失ってますね、まあ、無事だったんだしよろしいのでは？」

エリザ「何でそんな冷静なのよあんたは！」

く地下室く

B B 「さあ〜！皆さん！ついにやつ（；ーωー）ノ来ました！皆大好き！・・・せ  
くくくくのつ！B B くくくく！チャンネルくくくく！はいセンパイ！拍手です！」

白野 「・・・えっ？あ、はい。」

パチパチパチ

B B 「センパイの拍手は最高ですね！うんうん！センパイも無事だったし、本当によ  
かったよかった！私凄く心配していたんですよ、センパイが眠っている間私のテンショ

ンはただ下がりでした、ですが！こうしてセンパイと無事会えることが出来てBBちゃん  
のテンションはうなぎ登りです！」

白野「あ、その、心配かけてごめんなBB、もう大丈夫だから。」

BB「ツ！セ、センパイが私に……つ！今の場面は私のセンパイDVDコレク  
ションに永久保存です！それではセンパイ！これにてBBチャンネル終了です！  
ではは〜〜！」

凜「待ちなさい！あんたが集まるようになって言っただけでしょうが！何かつてに終わ  
うとしてるの！」

BB「……？あ、すっかり忘れてました！センパイがあまりに素敵さんでし  
たので、このく、センパイの罪作りさん！」

白野「(な、何故に?)」

BB「ごほん、では、今現在の情報なのですが、特に無し！以上です！」  
凜「はぁー！特に無しって！だったら何故私達を集めたの！」

BB「実際この6日間何もなかった訳ですから、そうですね〜、ああ、そうだ、セ  
ンパイ、白桜から話は聞いています、不思議だと思いませんか？」

白野「何もなかった事に？確かにどうしてだろう？」

BB「第5次聖杯戦争に参加しているその他さんも特に動きが在りませんでした

し、……は多分ですがセンパイを死なせたくは無かったかと考えるべきですね、センパイはかなりの重症でしたから。」

ユリウス「岸波はそれであれ俺達には何かと接触が合ってもいいはずだがそれすら無かったからな。」

ラニ「気を使ったのでしょうか？あの時のバーサーカーはかなり白野さんを心配していました、ライダーもそうでした。」

BB「……センパイ、覚えてますか？ルーラーマルタさんに言われた事を？」

白野「マルタに？」

BB「第5次聖杯戦争においてセンパイが重要な、まるで必要な人物だと言われた事を。」

白野「……そう言えば、始めてマルタに会った時にそんな事を言っていたような？」

BB「その事に何か関係があるのではないかと、あくまでも憶測ですが。」

白野「……。」

クウ~~~~~、

ありす「お兄ちゃん、私お腹すいた。」



白野 「よし！それじゃあご飯にするか！あります、何が食べたい？」

あります 「お子さまランチ見たいな可愛い食べ物がいい！」

白野 「そうかそうか、だったら外で食べるか？レストランに行けばお子さまランチがあるからな！」

あります 「わくわく！お外でごはん！くく♪」

凜 「白野、今はそれ所じやないでしょうが、食事なら家で食べましょ、いいわね。」

あります 「えくく！やだ！」

凜 「わがまま言わない！白野もそれでいいわね？」

白野 「えっ？でも？」

凜 「いいわね？」

あります 「ぶくく、ぶくく。」

白野 「やつぱり外で食事しよう！ありますの願いを叶えるのがお兄ちゃんの役目だからな！」

あります 「わくわく！お兄ちゃん大好き！」

白野 「うんうん、やつぱりありますの笑顔は癒されるな。」

あります 「くくくく♪」

ネロ 「むくく！奏者よ！余の笑顔はもつと癒されるぞ！」

タマモ「セイバーさんの笑顔は癒される事は無いですね、ご主人様に癒しをもたらすのは私です！」

ネロ「むむっ！」

タマモ「ふんっ！」

ピンポーン

ラニ「誰か来ましたね、私が出ます。」

凜「全く、とりあえず終了ね、B B、いいわね？」

B B「そうですね、センパイには一応何日かはおとなしくしてるようにお伝えください、では失礼しますね。」

そして白野達は地下室を後にするが。

B B「待ちなさい桜。」

桜「??どうしたのB B？」

B B「貴女に話す事があります、残りなさい。」

桜「話すこと？」

白野「・・・・・・・・あれ？士郎？どうして此処に？それにその袋は？」

士郎「白野、お前が目を覚ましたって遠坂さんから連絡が来てな、だったら俺が飯でも作ってやろうと思つてな。」

リン「こんにちは岸波君、無事で何よりね。」

イリヤ「あ、ありす！一緒に遊びましょう！」

ありす「ダメ！お兄ちゃんとお子さまランチを食べに行くの！そうだ！イリヤも一緒に行こう！」

イリヤ「お子さまランチ？」

白野「……………あつ！そうだ士郎！お子さまランチとか作れるか？」

士郎「作れると思うけど。」

白野「だったら頼む！ありすの為に作ってくれ！いや待てよ、遠坂さんがいるという事はアーチャーがいるな！アーチャー！アーチャー！」

アーチャー「うるさいぞ白野。」

白野「アーチャー！頼む！ありすの為にお子さまランチを作ってくれ！お願いします！」

アーチャー「お、おい、しがみつくな！判った！判ったから！」

白野「流石アーチャー！話がわかる！ありす！アーチャーが凄く可愛いお子さまランチを作ってくれるぞ！」

ありす「可愛いお子さまランチ！お兄ちゃん！私お家でごはんを食べる！」

アーチャー「は、白野？あまりハードルを上げるな！」

士郎「白野、あれ？俺は？」

白野「士郎、大丈夫さ、アーチャーはああ見えて料理が得意なんだ、士郎はお子さまランチ以外の食事を作ってくれたらいいよ、なんなら俺も手伝うか？」

士郎「駄目だ！お前はなにもするな！」

白野「え？いや、麻婆豆腐ぐらい。。。」

士郎「だ、駄目だ！お前は大人しくしてろ！」

白野「は、はい！……あ、そうだ、アーチャー！お子さまランチは4人分で。」

アーチャー「4人分？」

白野「ありすとシンジとキャスターとイリヤスフィールちゃん、よろしくなアーチャー！」

アーチャー「はあ、仕方ない、台所を借りるぞ。」

白野「楽しみだなありす！」

ありす「うん！」



（教会）

マルタ「可憐、少し出かけてきます。」

可憐「珍しいですね、貴女が一人で出かけるなんて。」

マルタ「そ、そうですか？」

可憐「それで……、どちらに？」

マルタ「えつ？ええ、えつと、（白野様がお目覚めになられたからお見舞いに行くと言えば可憐も付いてくる、しかし可憐が白野様の所に行くとは何か不吉な事が起こるはず、どうすれば）」

可憐「どうしました？」

マルタ「は、はえ？えつと、そ、そう！す、少し風にあたりに行こうかなと思ひまして。」

可憐「……………そうですか。」

マルタ「え、ええ、では失礼します。」

ヒラリ

マルタ「ん？可憐、何か落としました……………っ!? なっ！こ、これは!？」

可憐「……………ふふ。」

マルタ「……………これは！白野様の胴着姿の写真!?! な、何故貴女が持っているのです!?!」

可憐「前にプールに行った時に仲良くなつた方がいまして、その方に譲つて貰つたのですが。」

ひよい

マルタ「……………あ。」

可憐「まだ何枚かあるけど、見ますか？」

マルタ「是非!」

可憐「どうぞ。」

マルタ「……………これは!?! 白野様の水着姿！それに、なっ！半裸の胴着姿ですと!?! はあ~~~~♪あ、後は、なっ！白野様の凛々しい姿!?! か、かつこよすぎです。」

可憐「差し上げましょうか？」



マルタ「ゆ、譲ってくれるのですか!？」

可憐「・・・・・・・・・・で?今からどちらにお出かけに?」

マルタ「・・・・・・・・・・へっ?」

可憐「あ、良ければ此方も差し上げましょう。」

マルタ「なっ!?!な、な、なななななんとー!?!白野様の下着姿!?!欲しい!・・・・」

じゃないでしょうが私!ハ、ハレンチな!」

可憐「・・・・・・・・・・では行きますか?」

マルタ「えっ?あの、どちらへ?」

可憐「勿論、白野さんのお見舞いにですが。」

マルタ「なっ!?!貴女は初めから知って!?!」

可憐「知りませんが、そうでしたしか、白野さんがお目覚めになったのですか。」

マルタ「・・・・・・・・・・はっ?」

可憐「カマをかけてみたのですが、ふふ、マルタ、貴女は本当に解りやすいですね、初めから顔に出まくりですよ、あ、心配なくともその写真は差し上げます、また今度お友達に譲って貰いますので。」

マルタ「・・・・・・・・・・」

可憐「では行きますか。」

マルタ「はい（お許し下さい白野様、ですがマルタ！必ず白野様をこの魔の手からお守りします！）」

可憐「ふふ、愉しくなりそうね。」

マルタ「（無理かもしれませんが）」

くユリウス邸く

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・つ！」

桜「??どうしました先輩？」

白野「えつと？ん？何か嫌な予感が？」

桜「???°」

完 第 2 6 話

## 第26話

ネロ「奏者よ、その者は一体何者なのだ？」

白野「分かりません。」

タマモ「分かりません、じゃありません！その姿からして多分ですがサーヴァントには間違いありませんが。」

白野「あ、やつぱりそうなんだ。」

ジャンヌ「随分白野になっていますね、白野から離れようとしませんし。」

???「ヴ？」

ネロ「えーい！いい加減奏者から離れるか！」

???「ヴー！」

タマモ「ヴー！って、何を喋ってるのかさっぱりですねくく？」

桜「敵のサーヴァントライダーさんは癒し系でしたが、この方は可愛い系のサーヴァントさんですね。」

??? 「ヴ？」

桜 「せ、先輩!? この子の頭を撫でてもいいでしょうか？」

白野 「え? あ、うん、多分大丈夫だと思うけど。」

桜 「で、では、始めまして私は桜と言います、少しだけ宜しいでしょうか？」

??? 「ヴ? ヴ？」

ナデナデ

??? 「ヴ~~~~~♪」

桜 「か、可愛いです! 先輩! 凄く可愛いです！」

白野 「そ、そう。」

ネロ 「奏者よ、余も撫でてもよいか！」

??? 「ヴー!!」

白野 「ゴメンセイバー、何か嫌がってるみたい。」

ネロ 「なっ!!」

??? 「ヴー!! ヴー!!」

白野 「えつと? 桜は安心できるからいいけど後は邪心を感じるから嫌だ! って言っ

ます。」

タマモ 「ご主人様はその子が何を言ってるのか分かるのですか？」

白野「い、一応何となくだけど。」

ジャンヌ「白野には心を開いているのですねそのサーヴァントは、桜に関しては直感で安心できると判断したのでしよう。」

???「ヴー、ヴー、ヴー！」

白野「何々？桜は優しさの塊だからほつとする、後桜のサーヴァントは好きになれない、だそうです。」

ジャンヌ「……………」

タマモ「どうやらこの子は純粹さんみたいです、まるでありすちゃんみたいです。」  
???「ヴー、ヴー、ヴー！」

白野「キャスターは優しいけど邪な感じかするから近寄りたくないって、言ってます。」

タマモ「なっ！」

ネロ「はははははは！見事だな！サーヴァントよ、大当たりではないか！だが、安心せよ！こやつはタブレットから出てこれぬからな。」

タマモ「ぐぬぬ、所で話はずれましたがご主人様、結局の所、その子は何処でお会いに？」

ジャンヌ「まさか拾ってきたのですか？可愛さの余りに？」

ネロ「はぐれサーヴァント？ ではないだろうな？ 奏者よ？ 何処で？」  
白野「えっと、その、じ、実はですね……………」

〈数時間前〉

桜「あれ？ 先輩？ どちらに？」

白野「（ビクッ！）えっと、さ、散歩に、行きたいなど。」



桜「何を言ってるのです先輩、怪我が治っていても、まだ安心できません、大人しくしててください。」

白野「いや、だつてさ、俺が目を覚ましてからもう3日経ってるから大丈夫だろ？流石にずっと布団の中じゃ退屈だしさ。」

桜「大人しくしてください。」

白野「さ、散歩だけだから、直ぐに帰ってくるし、それにもう傷は治ってるし。」

桜「…….…….…….はあ、仕方ありませんね、いいですか先輩、ゆつくりしてきても構いませんが何か在りましたら直ぐに連絡してください。」

白野「ありがとう桜！それじゃあ行ってきます。」

〈商店街〉

白野「うーくん、いい天気だ！何だろ久々に外に出たから結構気持ちいいな！……しかし皆過保護過ぎたよな、もう傷は治ってるのに。」

白野は商店街を後にする。

その後白野の行きつけ店である麻婆豆腐と餡蜜を買い公園で休息をとる。

白野「麻婆豆腐!! いやー、何か久々だな！何時もなら週5で通ってたけど聖杯戦争が始まってから食べられなかったからな、それにしてもあいからわず赤黒くて美味しそうだな！では!! いただき……。」

??? 「……………」。

白野 「……………」。

??? 「……………」。

白野 「……………」。

??? 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ヴ？」

白野 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ヴ？」

??? 「・・・・・・・・・・・・・・・・ウー！」

白野 「え、えつと、麻婆豆腐食べたいとか？」

??? 「ウー、ウー。」

白野 「えっ？違う、じゃ、じゃあ、ひよつとして餡蜜かな？」

??? 「ヴー、ウー！」

白野 「(て、この子何故にウエディングドレスなの？結婚式から脱走とか？・・・ん？額にツノ？・・・あ!?サーヴァント・・・？かな?)」

??? 「ウ、ウ、ヴー！」

白野 「え、あー、はいはい、餡蜜ね、どうぞ。」

??? 「ウウ！・・・(パクパク)・・・、ヴー！ヴー！ヴ!!。(。ロ。(ノ)ノ)」

白野 「な、何々？どうしたの？」

??? 「お・・・い・・・しい！(\*、▽、)♪」

白野 「!♪か、可愛い！何だこの子は癒し系なのか？ほっこりする！」

??? 「ヴー！ヴー！」

白野 「え、おかわり？」

(コクコク)

白野 「ゴメンね、もうないよ。」

??? 「ウ~~~~~。」( ; . ω . )

白野 「(や、止めて!そんな悲しそうな顔をしないで!) く…………、ちよ、ちよつと待つてて!」

??? 「ウウ?」

白野 「すぐ戻るから!待つててね。」

??? 「ウ?ウ?」

く数十分後く

白野「はあ、はあ、はあ、お、お待たせ、はいこれ。」

???「ウー、ヴー! ヴー!。」

白野「まさか本当に待ってるなんて……、まいっか) 沢山買ったから全部食べていいよ。」

???「ウー! ヴー!。」

白野「(まんべんもない笑顔! ヤバイ! 可愛すぎる……は!? 何やってるんだ俺は!?)  
れじやまるで……、か、帰るか)」

???「……ウウ? ウ?」

白野「そ、それじゃあ俺帰るね、君もちゃんと家に帰るんだよ、じゃ。」

???「……ウ!」

白野「うーくん、大丈夫かなあの子……、サーヴァントだと思うし大丈夫だろ、よし！帰ろ。」

くユリウス邸く

白野「ただいまく。」

桜「あ、先輩、お帰りな．．．さ．．．い．．．。」

白野「ど、どうしたの桜？な、何？え、え？」

桜「．．．あ、あの、先輩？その子は？」

白野「その子？」

???「．．．．．ウウ！ヴ！（△▽△）」

白野「．．．．．おおう、って！付いてきたの？」

???「ウー！」

白野「マジですか？」

桜「．．．．．先輩？」

白野「な、何でしょうか桜さん。」

桜「とりあえず中に入りませんか？その子の事はその後で詳しく聞かせてください

ね。」（ニコツ）

白野「（．．．こわっ！）．．．はい。」

く  
く  
く  
く

白野「と、言うことです。」

ジャンヌ「餌付けですね。」

白野「ち、違う！断じて違う！」



タマモ「まさかご主人様がそんな事を……よよよ。」

白野「だぁー！ー！違う！違うぞキャストァー！」

ネロ「奏者が人拐いとな！いや、違うな、サーヴァント拐いとな！確かにこの娘は愛らしいが。」

白野「セイバーまで!?違うんだー！そうじゃないんだ！この子が俺の餡蜜を見て美味しそうな顔をしてたからつい！」

ジャンヌ「餌付けで人拐いとは、白野は変態だったのですね。」

白野「うう、違うんだ、違うんだ、この子が勝手に付いてきただけで、うう、確かにこの子に餡蜜をあげただけど、そんなつもりは無かったんだよ、あまりにも愛らしくてついつい餡蜜をあげただけで、まさか付いてくるなんて思いもしなかったんだ。」

???「……?ウー?ヴ?」

ナデナデ

白野「……あ、俺を慰めてくれるの?うう、ありがとう。」

???「ウー！」

桜「……あの先輩、今思ったのですがその子ひよつとしてクラスはバーサーカーでしょうか?」

白野「……え?バーサーカー?」

桜「はい、多分ですが、バーサーカーだと思うのですが。」

ネロ「奏者よ、もしバーサーカーなら危険ではないか！それにもし……のサーヴァントなら余達の敵であろう！」

タマモ「う〜ん、確かにこの子はサーヴァントでクラスはバーサーカーっぽいですね、真名は分かりませんが、しかしどうして公園なんか居たのでしょうか？」

ジャンヌ「バーサーカーね、桜、もし……のサーヴァントならば今この場で始末するべきでは？」

???「……ウウ?……ッ!ヴー!!!」

桜「ストップ!ストップです!」

ジャンヌ「……のサーヴァントならば私達の敵ではないのですか?まあ、マスターは誰かは分かりませんが。」

白野「……確かにそうだけど、だけど例えそうでも多分大丈夫じゃないかな?もしそうだとしたら俺は拐われてるし、ひよつとしてこの子は召喚されてまだ日が浅いのかな?」

ジャンヌ「まあいいでしょう、それにしても桜、何故貴女はこのサーヴァントがバーサーカーだと?」

桜「実はですね、BBからサーヴァント情報を教えて貰いました、真名までは分から

ないですが敵サーヴァントがどの様な姿をしているのとかこの姿ならクラスはこのクラスとか。」

ネロ「ほう、この子はバーサーカーだと、うゝむ、ウエディングドレス姿とは、して桜よ、他のサーヴァントはどの様な姿をしておるのだ。」

桜「実際に見てみないと確信は持てませんから、それよりも先輩、この子をどうするべきでしょうか？流石に此のままでは、危険が無いにせよ後々の事を考えては危険ではないでしょうか？」

白野「どうでしょうか？帰る場所とか分かるのかな？えっと、バーサーカー・・・でいいのか、帰る所は何処か分かるかい。」

バーサーカー「ウー、ウウ、ヴー！ウウ！」

白野「何々？公園でマスターとはぐれたから分からないって、だったら公園に行くべきか？ひよとしたら其処にマスターが探してるかも知れないし。」

バーサーカー「ウー、ヴー！ウー！」

桜「え、な、何か嫌がつてるような、戻りたくないのでしょうか？」

バーサーカー「ウウ、ヴー！ウウ！」（コクコク）

ネロ「マスターの所に戻りたくない？」

ガチャ

あります「ただいま〜！お兄ちゃん！」

白野「あります、ああ、お帰・・・ぐふっ！」

凜「あいからわずありますは白野に飛び込むのねって・・・ん？ウエディングドレス？え  
？何々？この子誰なの？」

ラニ「・・・・・・逃げた花嫁さんですか？何故此処に居るのでしょう？」

エリ「違うわよ！この気配はサーヴァントじゃない！ちよつと！どう言う事よ！」

桜「え、えつと、じ、実はですね・・・・。」

くくく

ラニ「餌付けですか、何をやってるんです白野さんは。」

白野「違う！違うぞラニ！そうじゃないんだ！」

凜「餌付けでしょ、サーヴァントを餌付けって何やってんだか。」

白野「凜まで!? 違うんだ！この子が勝手に付いてきただけで……。」

凜「はいはい、で？どうするのその子、サーヴァントでクラスはバーサーカー？でいいのね、流星にこのままってことにはいかないし、始めにいた場所に連れて行くべきじゃないかしら？」

桜「そう考えたのですがどうやらこの子は行きたくないみたいでして、マスターにも会いたくないと。」

ユリウス「そう言う訳にもいかないだろ、俺たちにとってこいつは敵だ、元の場所に捨て置くべきだな。」

白野「流星にそれは、だったら俺が一緒に公園に行くよ、この子のマスターが居たら話し合っただけでどうするのか決めてもらおう。」

凜「どうするのかって、この子が嫌がってるし。」

白野「だよな、だったら暫くは此処で様子を見てようか？ひよつとしたらこの子のマスターが迎えに来るかも知れないし。」

ユリウス「わざわざ敵の場所に来るとは思えんが。」

白野「今から俺が公園に行ってみるよ、もしマスターが居たら話し合っただけでどうするのか聞いてみようか？」

凜「却下、なに考えてるの？わざわざ敵の場所に行くとか馬鹿なの？」

白野「うーん、大丈夫だろ、俺一人じゃないし、セイバーがいるし、それでも駄目なら何人か一緒に行くってのはどうだろ？」

李「ふむ、ならば白野よ、儂が付いていこう、ユリウスよ、構わんな？」

ユリウス「珍しいな、アサシン自ら名乗り出るとは、そうだな……、アサシンにセイバーか、あのバーサーカーに出会わなければ大丈夫だと思うが。」

シンジ「あの……。」

ラニ「どうしましたシンジ？」

シンジ「何かライダーが行きたがってるんだけど。」

ドレイク「いや、最近暴れてないし、構わないだろ？」

ユリウス「……はあ、仕方ないか、なら、俺と白野にシンジで公園に行くか。」

白野「流石ユリウス！」

ユリウス「あくまで行くだけだぞ、だが、このバーサーカーのマスターがいたら捕まえて情報を聞き出すが、すまないが凜、暫くバーサーカーを見ていてくれ。」

凜「まあ、サーヴァントが三騎もいれば大丈夫だと思うけど、いい事白野、もしあのバーサーカーがいたら直ぐに逃げなさい、一応リターンクリスタルを渡しとくから。」

白野「わ、分かった。」

バーサーカー「……ヴ？」

白野「バーサーカー、少しの間此処にいてくれな、直ぐに戻るから。」

バーサーカー「ヴ? ……ウー!」(コクコク)

（公園）

シンジ「すっかり暗くなったね、本当にパーサーカーのマスターがいるのかな？」

白野「どうだろ？今まで……陣営のマスターは慎二しか見た事ないし、アサシン、近くに誰かいるかな？」

李「うゝむ、逆に誰もいないのが変ではないか？公園に入ってから誰にもすれ違つたらん。」

ネロ「確かに、おかしいではないか？余達以外に人が居らんとは。」

ドレイク「アサシン、あんた本当にアサシンかい、ほら、其処に要るじゃないかい。」

アサシン「……ルーラーマルタは敵では無かるう？」

マルタ「ゴ、ゴホン、今晚は皆さん、何故此のような所に？」



可憐「今晚は白野さん。」

白野「可憐、マルタ、何故？どうして？」

可憐「実はですね……、っ！マルタ、どうやらビンゴですよ。」

マルタ「マスターが3人とサーヴァントが2騎ですか？」

ユリウス「!?いつの間に？」

ネロ「奏者よ余の後ろへ。」

ドレイク「シンジ、下がってな！」

???「岸波白野!?何故此処にいるんだ！クソツッ！バーサーカーを探しに来たのに。」

白野「あ、あんたは!?えくと、誰ですか？」

???「なッ！俺様を忘れたのか！俺は……。」

ネロ「ブクブクマスター!？」

???「だ、誰がブクブクか！」

???「何をしているのですか？」

マルタ「……あら？貴女はキャスターですね。」

キャスター「ルーラーですか、困りましたね、ルーラーがいるとは予想外ですね、ど

うしまししょう？」

???「くっ！おいランサー！何とかしろ！」

ランサー「うるさいマスターが、そんな風だからバーサーカーが逃げたのではないか？」

???「黙れ！サーヴァント風情が！俺様はマスターだぞ！貴様らは俺様の命令を聞いてればいいんだ！さっさと岸波達を始末しろ！」

ランサー「私はお前のサーヴァントではないのだが？それと、岸波白野は捕らえなければならぬ、あのお方にそう言われたのではないか？」

???「岸波など何の役に立つ！俺様がいればあのお方の………がッ！」

ドサツ！

ランサー「くだらんマスターが、暫く寝ている。」

キャスター「殺せば良かったのですが、そうすればバーサーカーが消えますし、困りましたね、このマスターは本当に役に立たない。」

ランサー「サーヴァントを召喚するしか役に立たないとは、令呪を使う事すら忘れているからな。」

キャスター「令呪を使えばバーサーカーも強制ではありませんが帰ってくるのに、お馬鹿なマスター。」

李「ならばそう教えればよからう、ランサーにキャスターよ。」

キャスター「そうしたかったのですが、あのお方に捨て置きなさいと言われまして、

困った方です、あのお方は遊んでおられる。」

ランサー「ほう、アサシンか、どれ、私が相手になろう、召喚されてからまだ暴れてないのでな。」

李「かつかつか、構わんが……うむ、ユリウスよ、あのランサーは儂が引き受ける、よいな。」

ユリウス「ああ……ん？どうした岸波？」

白野「……あのランサーが持つ槍、何処かで見たような？」

ユリウス「……っ！あの槍はヴラド三世が持つ槍と同じ!?何故あのサーヴァントが？」

ランサー「貴様らはあのヴラドに会っていたな、我が真名はヴラド三世、ただし、私は王としてのヴラド三世である、貴様らの知るヴラド三世は騎士としてのヴラド三世、私達は同じであり同じでない存在。」

マルタ「自ら真名を名乗るとは、余程自分に自信があるのですねヴラド三世さん。」

ランサー「ルーラーがいる時点で真名看破できよう、それに……。」

李「……それに？」

ランサー「真名がわかれど、私を倒せる者など存在しないからな。」

李「かつかつか、なかなか面白い事を言う、ならば儂が貴様を始末してみせよう。」

ドレイク「へえ、アサシン対ランサーねえ、こいつは面白そうだ、それじゃあ私はキャスターの相手をしようかい。」

キャスター「私ですか？ 困りましたね、私は戦いは嫌いです、苦手です、ですの  
で………」

ドレイク「??」

キャスター「この者達が代わりに相手になりますね。」

ネロ「なツ!? シヤドウサーヴァントだと！ 何時の間に？」

ドレイク「ざっと2・30騎だね、ルーラー！ あんたも加勢しな！ 流石にこの人数は  
手に余る。」

マルタ「ええ、そのつもりですよライダー、セイバーにライダー、貴女方どちらかキャ  
スターを倒してください、シヤドウサーヴァントは私一人で何とかしましょう。」

ネロ「ならば余がキャスターの相手をしよう、構わぬなライダーよ？」

ドレイク「いやいや、私がキャスターの相手をするさね、セイバーはその他の相手を  
してな。」

ネロ「むむ！ 余がキャスターを倒すのだ！ ライダーは下がっておれ。」

ドレイク「あんたが下がってな、さあキャスター！ 私が相手だ、掛かってきな！」

ネロ「えらい！ 邪魔だライダー！ キャスターの相手は余だ、キャスターよ余が貴様を

倒す！」

ドレイク「邪魔だねえ、いいかいセイバー、私がキヤスターを始末するんだよ、分かったらあんたはシャドウサーヴァントの相手でもしてな。」

ネロ「何を言うか！キヤスターは余が倒すのだ！ライダーよ、貴様こそシャドウサーヴァントの相手をしてるがよい。」

ドレイク「……………」

ネロ「……………」

シンジ「はあ、キヤスターならもういなくなつたよ。」

ネロ・ドレイク「なに！」

シンジ「二人が言い争つてる間に消えたけど。」

ドレイク「…………、せっかくの獲物が!?セイバー!あんたのせいだ。」

ネロ「何を言うか！ライダーが邪魔をするからだろう！」

白野「セイバー、キヤスターはもういないんだからいいだろ？先にシャドウサーヴァントを何とかしないと。」

ネロ「むむ、奏者がそう言うなら仕方がない、ランサーはアサシンに任せるとして…………、むむ、ライダーよ、シャドウサーヴァントの数が多くなつておらぬか？」

ドレイク「そうさね…………確かに、40騎程に増えてるさね、どう言う事だい。」

マルタ「……………魔力の強いマスターが居ますね……………」

白野「……………えっ!? この魔力つて、嘘だろ、さっきまで感じなかったのに。」

???「今晚は岸波白野さん、ええ、ええ、本当に久し振りの再会ですね、私は嬉しいですよ。」

シンジ「はあ!? 何で!？」

ネロ「何故貴様が此処に!? あり得ん!」

ドレイク「シンジ、誰だい? あの女は?」

シンジ「えっ!? えっ? と? き、岸波!」

白野「……………殺生院キアラ、まさかあんたもこの時代に要るなんて……………と一緒に来たのか?」

キアラ「そうですね、あの方は私を救いました、私は救われあの方に忠誠を誓いました、岸波白野さんが必要だと言われたあの方は私と一緒にこの時代に来たのです。」

白野「一緒について、どうやって?」

キアラ「うふふ、簡単な事ですよ、月の聖杯に願いを叶えたのですから、ご存じでしょう、私は一度だけムーンスセルと一体化した事を。」

白野「一体化しただけでそんな事……………あっ?……………いや? そんな

な事は？」

キアラ「確か桜さんでしたね、あの娘もムーンセルと一体化した、そのお陰で岸波白野さんの聖杯を使うことが出来たはず。」

シンジ「あり得ない！だつてそうだろ！岸波の聖杯による願いは全部使つたはず！桜が言つてたよ、一つは岸波が使い、後の3つの内2つは桜が使い残りは僕達が。」

白野「シンジ、月の聖杯戦争での俺のサーヴァントはセイバー、アーチャー、キャスター、それに月の裏はギルガメツシユ、だけど……。」

シンジ「えっ？何？」

白野「もう一騎のサーヴァントが要るんだ。」

シンジ「へっ？え？え？だ、誰？」

白野「バーサーカーだよ、桜が言つてただろ、俺達が参加した月の聖杯戦争は俺が優勝する仕組みだった、その時ムーンセルはどのサーヴァントが優勝する可能性があるのか調べ選ばれたのはセイバーにアーチャー、キャスター、それにバーサーカーだった、月の裏に落ちたときはギルガメツシユがサーヴァントになってバーサーカーはいなくなつたけど、もし月の裏に行かなかつたら、俺のサーヴァントはバーサーカーのままだったはず。」

シンジ「バーサーカー………っ!?そうか！岸波が優勝する可能性が5回あつ

たんだ！残りの一つを殺生院キアラが使ったんだ！」

キアラ「ご名答です、シンジさん、流星は月の聖杯戦争の参加者ですね、子供でありながら頭の回転が早い。」

シンジ「う、うるさい！」

キアラ「あらあら、折角誉めて差し上げたのに。」

白野「殺生院キアラ、この時代に来れた理由は分かった、だけど何故俺がこの時代に転生している事が？」

キアラ「簡単な事ですよ、確かB Bちゃんでしたか、あの娘が岸波さんを探している時に偶々ムーンセルにアクセスしていただけです。」

白野「そうですか。」

ネロ「B Bの奴め、何が完璧少女か！キアラにハッキングされおって、しかし解せぬなキアラよ、ムーンセルにアクセスできる貴様なら何故奏者が必要だと？」

キアラ「アクセス出来るだけなので、聖杯は使えましたがムーンセルは使えない、使えるのは唯一の優勝者である岸波さんのみ……、です。」

白野「……っ!？」

キアラ「貴方を捕らえます、あの方に貢献を、さあ、シャドウサーヴァント達、岸波白野さんを捕らえなさい！」



ネロ「たかがシャドウサーヴァントごときに我が愛しき奏者を捕まえる事が出来ようと？笑わせる！」

ドレイク「シンジく、下がってな、久し振りのおお舞台上だ！派手に暴れさせて貰うよ！」

シンジ「相手はシャドウサーヴァントだけど？」

ドレイク「こう言うのはのりが大事さね！」

マルタ「よし！いっちょ派手に行きますか！マスター！離れて下さいね、殺生院キラ以外は始末してあげるわ！」

可憐「流石はヤクザマルタ、一応応援はしますね。」

マルタ「誰がヤクザですって！このクソマスターが！」

可憐「うふふ。」

完 第 2 6 話

## 第27話

白野「セイバー、シャドウサーヴァント達を先に倒すぞ、殺生院キアラはその後だ。」  
ネロ「うむ！キアラには色々聞きたい事がある、しかし、まさかキアラまでとはな、  
キアラのサーヴァントは多分キャストであろう。」

白野「・・・多分ね、・・・ん？あれ？」

ネロ「む、どうした奏者よ？」

白野「いや、気のせいかな？何か嫌な予感が？何だろ？何故だか？・・・つ  
!!?セイバー！ライダー！此処から離れるぞ！」

ネロ「むむ！どうしたのだ？」

ドレイク「なんだいなんだい？」

白野「早くしろ！シンジ！」

シンジ「うわっ！何？おい！岸波！離せ！」

白野はシンジを抱き抱え今要る場所から離れる。

白野「セイバー！ライダー！ルーラー！離れろ！」

『王の財宝【ゲート・オブ・バビロン】』

ネロ「……………っ！」

ドレイク「……………っ！」

マルタ「王の財宝!？」

白野の言葉といい覚えのある言葉でセイバーとライダーにルーラーは瞬時にこの場を離れる、……………そして。

白野「いてて、．．．あ？シンジ!?大丈夫か？」

シンジ「重い。」

白野「ああ、すまんすまん、何処も怪我してないな？」

シンジ「うん、．．．．．てっ！いきなり何!？」

白野「あのヤロー！いきなりか！シンジが怪我をしたらどうするんだ！このクソ金  
びかがー!!」

シンジ「え？え？何？」

ギルガメツシユ「ふはははははははっ！所詮はシャドウサーヴァント、さあ白野よ、こ  
の我を褒め称えよ！」

白野「出来るかー!!この傲慢慢心金びかがー!!」

ギルガメツシユ「ふむ、殺生院キアラ、貴様が此処に要るとはな。」

白野「人の話を聞け！ギルガメツシュ！はあ、はあ。」

ギルガメツシュ「まさか貴様がこの時代に要るとは、……………と来たのか？」

白野「……………そうですか？無視しますか？このクソ金ピカさんは、……………ふふ。」

ネロ「奏者よ！無事か？……………奏者？」

ドレイク「無事かいシンジ？……………？シンジ？白野はどうして拗ねてるんだい？」

シンジ「あれのせいだと思う。」

シンジの指を指す方向にはギルガメツシュとキアラが向かい合っている。

マルタ「何を考えているですか！あの英雄王は！白野様達が怪我をしたらどうするのです！」

可憐「マルタは白野さんが大事ですからね。」

マルタ「なっ!?!何を言うのですか可憐！」

ネロ「ギルガメツシュ、いきなり宝具を放つとは、奏者に何かあったらどうするのだ！」

ドレイク「まあいいさね、シンジ、付いてきな、確かサーヴァントがもう一騎いたはず、そいつを探すよ。」

シンジ「う、うん、岸波達は？」

ネロ「安心せよシンジ、奏者には余が付いている。」

シンジ「わ、分かった、行こうライダー。」

ドレイク「おうさ。」

シンジとライダーはもう一騎要るサーヴァントを探しになくなる。

白野「別にいいさ、俺の事は、いいんだけどさ、いいんだけど。」

ネロ「奏者よ、奏者よ！」

白野「………っ！え？あ？セイバー？」

ネロ「奏者よ！しっかりせぬか！シンジ達はもう一騎のサーヴァントを探しに行つたぞ、余達もキアラの所に行こうではないか。」

白野「へっ？シンジ？あれ？何時の間に？って！？はい？シンジが？大丈夫なのか？」

ネロ「奏者よ、シンジもマスターの一人であろう、心配せずともよい。」

白野「そ、そうだな、シンジはしっかりしてるし、大丈夫だな、よし！行くぞセイバー。」  
ネロ「うむ。」

ギルガメツシユ「さて雑種、私の質問に答えて貰おうではないか、貴様の目的と誰の指図で動いている？まさか……ではあるまい。」

キアラ「あらあら、まさかあの英雄王がこの時代に存在するとは、驚きですね。」  
ギルガメツシユ「質問の答えになつて無いな雑種よ、では死ぬ。」

キアラ「ふふ、不思議ですね、何故貴方のような英雄王が白野さんをマスターとして認めたのか、本当に不思議です。」

ギルガメツシユ「……。」

キアラ「どうしました？私を殺さないのですか？」

ギルガメツシユ「雑種よ、貴様は分かっているな、我が貴様を殺さない事を。」

キアラ「あらあら。」

ギルガメツシユ「まあよい、……さて、いい加減出てくるがいい、サーヴァント。」  
??「驚いたぜ、まさかテメエが要るなんてな、英雄王さんよ。」



ギルガメツシュ「……………」

白野「ギルガメツシュ、いきなり宝具放つとか何考えてんだ！つて！ギルガメツシュ？」

ギルガメツシュ「少し黙れ白野。」

白野「(ギルガメツシュの目付き)ギルガメツシュ、近くにサーヴァントが要るな？」

ギルガメツシュ「ほう、流星は白野、私の雰囲気を読むとはな。」

白野「何度もお前に殺されかけたからな、そのせいでギルガメツシュが何を考えているのかはある程度なら分かる、それで？どんなサーヴァントが？」

ギルガメツシュ「さて、何が出てくるか？」

???「ちつ、マスター命令とは言えめんどくさいぜ。」

白野「……………はい？なっ!?ラ、ランサー!？」

クー・フリーリン「よう、また会ったなボウズ。」

ネロ「奏者!……………ん？ランサー！貴様ランサーではないか！」

マルタ「ランサー、貴方まで要るとは。」

クー・フリーリン「おいおい、ルーラー、テメエは知ってたろ、俺が近くに居る事はよ、まあ、ボウズの前でしおらしくってーのも納得はいくが、ボウズ、お前も大変だな、癖のある奴ばつかに好かれてよ、ルーラーさんよ、いい加減本性現せよ、何だかんだでお

前が一番癖が有るんだしよ。」

マルタ「何を言っているのでしょうか？」

クー・フリーリン「……………ま、いいや、んじや始めるか？なあ！セイバーさんよ！」

ネロ「ほう、まさかまた貴様と戦うとはな、好かろう！奏者よ、下がっておれ、いくぞランサー！」

クー・フリーリン「いいね、このピリピリした感じ、やつぱこうでなくちやな！」

白野「殺生院キアラ捕らえないといけないのに、ま、仕方ないか、可憐、ルーラー、此処から離れた方がよいよ、じゃないと巻き込まれるから。」

可憐「白野さんはどうするのです？」

白野「セイバーのサポートだよ、俺はマスターだし、セイバーを勝たせないとね。」

ルーラー「可憐、此処から離れますよ、私達はギルガメツシュの所に行きましょう。」  
可憐「分かりました、では。」

白野「後は……………ギルガメツシュ！お前は殺生院キアラを捕まえておけ！絶対に殺すなよ！」

ギルガメツシュ「この我に命令か白野……………、いいだろう、元マスターの命令を受けてやろう出はないか！」

白野「捕らえたら直ぐに此処から離れるよ！じやないとギルガメツシユといえ巻き添えを喰らうぞ！」

ギルガメツシユ「……さて、雑種よ、元マスターの命令だ、貴様を捕らえなくてはな、逃げたければ逃げるがよい、何、安心せよ、命までは取らん、だが、無傷で生きられると思うなよ、さあ、どうするのだ雑種よ。」

キアラ「逃げませんよギルガメツシユさん、ここは素直に捕まりましょう。」

ギルガメツシユ「ほう、まあよい、では雑種よ、付いてこい、ここは危険だからな、ルーラーにルーラーのマスターよ、貴様ら雑種も付いてくるがよい、死にたくなければな。」

ルーラー「行きますよ可憐、今のギルガメツシユには逆らわない事です。」

可憐「只要るだけでこの殺気、白野さんはあんな化け物のマスターだったのですね。」

ギルガメツシユ「どうした？早くしろ雑種、白野の邪魔をするでない。」

マルタ「……………」

ギルガメツシユ「どうした雑種、言いたい事でもあるのか？」

マルタ「あの英雄王が元マスターといえ白野様の命令を聞くなんて信じられませんね……………」

いえ、では行きましょうか。」

ネロ「うむ、これで邪魔者は居なくなつたな！ さあ！ 始めるとしよう出はないか！ ランサー！」

クー・フリーリン「ああ、俺を楽しませろよセイバー。」

く  
く  
く

李「……………」。

ユリウス「どうしたアサシン？」

李「なに、どうやら儂ら以外に暴れてるサーヴァント達があるのでな……………ふむ。」

ユリウス「気になるか？」

李「そうさの、気にはなるがそうもいかん、ユリウス、いや、マスターよ、どうやら儂はここで終わるだろうよ。」

ユリウス「……………!? 驚いたな、まさかお前がそんな言葉を。」

李「なに、さつきから隙あらば仕留めようと思つとるのだがあのランサー、隙が無いのでな。」

ユリウス「其処までの相手か。」

ランサー「どうしたアサシン、かかってこないのか? 何をしている、貴様はアサシンであろう、私を楽しませてみよ。」

李「かつかつかつ! 楽しませるとききたか、では……望み通りにつ!」

ユリウス「!?!」

ランサー「ほう、姿を消すかアサシン、……………驚いたな、魔力すら消すか。」

ユリウス「随分と余裕だなランサー、貴様は遊んでいるのか?」

ランサー「……………。」

ユリウス「??」

ランサー「……………。」

ユリウス「まさかこいつ、アサシンの居場所が分かつてるのか? いや、そんな事は……………つ!」

ランサー「さあ、殺戮の時間だ、我が槍を喰らうがよい。」

ランサー、ヴラド三世の言葉と同時に無数の槍が地面から飛び出す。

ユリウス「くっ！」

ランサー「安心せよアサシンのマスターよ、貴様は我が槍の餌食にはせん、聞きたい事が在るのでな。」

ユリウス「何？」

ランサー「………ほう、流石はアサシン、致命傷を逃れたか。」

李「………っ！かっかっかっ！流石はヴラド三世、儂が近づけんとは………だが。」

ランサー「??」

李「隙を見せたなランサー、武の真骨……味わってゆけ！」

【二の打ち要らず（无二打）】

ランサー「っ！………がぁー！」

李「はあ、はあ、（ランサーの槍をまともに受けたか？）すまないユリウス、どうやら儂はここまでのようだランサーの槍を受けきれんかったようだ。」

ユリウス「アサシン、すまない、何も出来なく、俺の実力不足のせいだ、だが、アサシンお前は勝ちはないが負けもない。」

李「かつかつかつ！あのラヴラド三世が相手だ、瞬時に決まるとは言え儂もまだ修行が足りなかつたようだな。」

ユリウス「ふ、随分と余裕だなアサシン、もう消えかけてるぞ。」

李「かつかつかつ！まだまだ暴れ足りないがな、ではユリウスよ。」

ユリウス「ああ。」

アサシン「……李書文の姿が消える。」

ユリウス「俺の令呪も消えたか、後はラニⅡⅧ同様岸波達のサポートに回るか。」

ランサー「くははははははは！流石はアサシン！私をここまで致命傷を与えるとは！見事だ！」

ユリウス「ランサー！貴様まだ！」

ランサー「ふははははははは！無二打をまともに喰らえば私は死んでいただろう、はあ、はあ、だが、宝具を打つ前は我が槍を致命傷ではなくとも喰らっていた、完全な無二打ではなかつたと言う事だ！」

ユリウス「ちっ！」

ランサー「くはははははははは！さあ、アサシンのマスターよ、本来なら貴様は生かして置くべきだがどうやら私は貴様を殺したい、いや、なぶり殺してやろう、この怒りを晴らすためにな！」



ユリウス「くっ！」

ランサー「はははははははははは！ さあ！ 無様に死ぬがいい、くはははははははははは！」

「邪魔だ雑種。」



そしてランサー、ヴラド三世は何も言えず消えていく。

ギルガメツシユ「ふん、白野の頼みでなければ貴様ら雑種などどうでも良いのだが。」  
ユリウス「ギルガメツシユ、すまない。」

ギルガメツシユ「……………」

~~~~~

シンジ「……ん？どうしたライダー？」

ドレイク「アサシンの奴、殺られたね、ランサーも消えたみたいだ。」

シンジ「アサシンが？ランサーも消えたって、引き分けて事？」

ドレイク「いや、この魔力はギルガメツシユかね、あの男がランサーを消したみたいだね。」

シンジ「じゃあアサシンはランサーに消されたのか、その後にギルガメツシユがランサーを。」

ドレイク「そうさね、おっとシンジ、お喋りはここまでさね、やっとこさ見付けたよキヤスター。」

キヤスター「困りました、見付かりました、どうしましょう、私は死にたくありません。」

ドレイク「いやいや、あんたサーヴァントだろ？いくらなんでも怯えすぎじゃないかい。」

キヤスター「死にたくありません、ですので……、貴女が死んで下さい。」

ドレイク「なんだいこいつは？怯えすぎじゃないかい。」

シンジ「……っ！馬鹿！ライダー！其処から離れろ！」

ドレイク「大丈夫さシンジ、私の下に魔方阵が有るんだろ、．．．．．ほい。」  
キヤスター「なっ!? 私の魔方阵を消すなんて、貴女は一体何者ですか?」

ドレイク「キヤスター、サーヴァントとしてはビビりすぎだね、あんたの目を視れば何処に魔方阵が有るのか直ぐに判るさね、そんなんじや私には傷を付ける事は出来ないよ。」

キヤスター「困りました、困りました、ですから、今度は少し派手にいきます、山場です。」

ドレイク「おいおい、なんだいこいつらは?」

シンジ「キヤスターが召喚したのか?」

キヤスター「さあ、行きなさい我が下僕達、私を死なせてはいけませんよ。」

キヤスターは数十人の下僕を召喚する。

下僕達「~~~~~!」

ドレイク「ちっ!．．．．．ッ!? シンジ!」

シンジ「ちよっ! ライダー! 何!?!」

ドレイク「此処から離れるよっつと、そらそら!」

ドンッ! ドンドンッ!

下僕「きゅ~~~~」

シンジ「別にキャスターの下僕達を倒せてるし離れなくても。」

ドレイク「そうじゃないさ、おいキャスター！あんた死にたくないだろ！だったら其処から離れな！」

キャスター「??」

シンジ「ちよっ！ライダー！走れる！走れるから、僕を抱き抱えないで！」

ドレイク「そうはいかないね、あんたの走りじゃ間に合わない。」

シンジ「??」

ギルガメツシュ「……………所詮はキャスター擬きか、……………くはははははは！ さあ！ 我が剣で串刺しになるがよい！ 【王の財宝】ゲート・オブ・バビロン！」

キャスター「……………あ。」

シンジ「ギツ！ ギルガメツシュ！」

ドレイク「シンジ！ 私に掴まりな！」

シンジ「あわわ、と、飛ばされ！」

ギルガメツシユ「……………」

キヤスター「困りました、死にたくないのに、死にたくないのに、ああ、死にたくないのに。」

キヤスターは死にたくないと言葉を放ち消えていく。

ギルガメツシユ「所詮は作り物か……………」

ドレイク「ギルガメツシユ！よくも私の獲物を！」

シンジ「ラ、ライダー、流星にギルガメツシユ相手に喧嘩を売ったら不味いよ。」

ドレイク「……………はあ、仕方ないね。」

ギルガメツシユ「……………」

ドレイク「それで？ギルガメツシユ、何であんたが此処にいるんだい？」

ギルガメツシユ「なに、我の元マスター命令だ、貴様らの助太刀をしろと言われただけ、まあ、アサシンは消えたが。」

ドレイク「白野がね、それで？今白野達はどくなつてんだい？」

ギルガメツシユ「さあな。」



ドレイク「ふくん、そうかい、とりあえずやる事が無くなったし白野達の様子を観てみようかね、行くよシンジ。」

シンジ「うん。」

〵  
〵  
〵  
〵

ネロ「はぁー！ー！」

クー・フリーリン「はは、いいね、流石セイバー、たまんねえな！」

ネロ「ちっ！余の剣技を受けきるか！流石はランサー！余は楽しいぞ！」

クー・フリーリン「楽しいか？なら今度はスピードを上げるぜセイバー！喰らいな！」

ネロ「くっ！見事だランサーよ！余もまだまだこれからだ！」

ネロとクー・フリーリンが剣と槍で打ち合うこと既に数十合互いに引けを劣らずにいた。

ネロ「なかなか決着が着かぬなランサーよ、やはり只打ち合うだけでは意味がない。」

クー・フリーリン「ああ、そうだなセイバー、しかしたまんねえな！やつぱこうでなきやな！」

白野「参ったな、セイバーの助太刀をしたいけどランサーに全く隙が無い、セイバー

を相手にしながら俺の事を意識してるのか?」

??? 「……………(参りましたね、あのセイバーは隙が在りません、やはりここはマスターを先に始末するべきでしょうか?)」

白野 「あれ? ランサーの後ろに人が? ……えくと、ひよつとしてランサーのマスター?」

??? 「(ん? 気のせいかしら? セイバーのマスターが此方を視てるような?)」

白野 「(うくん、あれで隠れてるつもりなのかな?)」

??? 「(そんなはずは、私はちゃんと隠れてるはず、ですが) ……あ。」

白野 「(あ、目が合っちゃった) ……えくと、こ、今晚は。」

??? 「(え? あ、挨拶をしているような?) えつと、こ、今晚は。」

ランサー 「ん……………つて! 何やってんだマスター! 何敵のマスターに見付かってんだ!」

??? 「……………は? あつ! しまった! 向こうが挨拶をしてきたからつい。」

ネロ 「挨拶を? 奏者よ! 何をしておるのだ!」

白野 「え? いや? あの? 目が合っちゃったからつい。」

ネロ 「……………」

クー・フリーン 「……………」

白野・??? 「す、すいません。」

クー・フリーン 「はあ、なんだ、興が冷めたな。」

ネロ 「うむ、仕方あるまい、ランサーよ、勝負は次の機会だ。」

クー・フリーン 「次の機会があればの話だがな、引くぞマスター。」

??? 「は、はい、では、失礼します。」

白野 「ちよつ！え？」

??? 「あつ！忘れてました、私はバゼット、バゼット・フラガ・マクレミッツと言います、それでは。」

白野 「え、えつと、自分は……。」

バゼット 「岸波白野さん、ですよね。」

白野 「えつ？な、何で俺の名前を？」

バゼット 「ランサーから聞きましたから、特に女難の相の事とかを。」

白野 「はい？」

バゼット 「ふふ、では。」

白野 「(き、綺麗な人だな)」

ネロ 「……むっ！」

白野 「帰ったのかな？」

ネロ 「だろうな、……で？此れからどうするのだ奏者よ？」

白野 「とりあえずギルガメツシユの所に行こうか。」

ネロ 「……………」。

白野 「……………あの、セイバー、セイバー。」

ネロ 「何だ？」

白野 「あの、セイバーさん、何か怒ってませんか？」

ネロ 「ふん、余は怒っておらぬ、ああ、怒っておらぬとも。」

白野「怒ってるよな？ランサーとの戦いを邪魔したからかな？」え、えつと、その。  
ネロ「ふん。」

白野「ご、ごめんセイバー、ランサーとの戦いの邪魔をして、謝るから。」

ネロ「戦いの邪魔？……そんな事はどうでもよい。」

白野「へっ？」

ネロ「全く、他の女にデレデレしおつて、余の方が綺麗であろう！奏者は余だけを見ておるが良い！」

白野「（そう来たか——！そっちなのか——！た、確かに綺麗な人だなとは思ったけど、何故分かったんだ？）」

ネロ「はあ、奏者よ、顔に出ておるぞ、実に分かりやすい。」

白野「ご、ごめんなさい。」

ネロ「……ふん。」

白野「セイバー？セイバーさん？あのお、機嫌を治してくれたら嬉しいな、なんて。」

ネロ「……！まあ、そうだな、奏者よ、余と今度デートをするが良い、それでランサーのマスターに見とれていた事は水に流してやろう。」

白野「デ、デートをですか？」

ネロ「うむ！」

白野「……………えっと、その。」

ネロ「むっ！奏者よ、余とのデートは嫌なのか？」

白野「いや、むしろ嬉しい、けど、（もしキヤスターに知られたら）……………ま、大丈夫か。」

ネロ「そうであろう！そうであろう！奏者よ、デートの場所はそなたに任せる！なに、奏者と一緒になら余は何処でも良い！」

白野「わ、分かったよセイバー。」

ネロ「約束だ！奏者よ、余を楽しませよ！」

マルタ「何を話してるのでしょうか？あの二人は？」

ドレイク「へへへ、やるじゃないかセイバー。」

シンジ「ライダー、あの二人の会話が分かるの？」

ドレイク「読唇術さね。」

可憐「ふふ、この事が他の方々に知れたら修羅場になりそうですね。」

マルタ「何をしているのです可憐？」

可憐「白野さんとセイバーのイチヤイチャぶりの撮影を、最新のビデオデッキなので

音声も入っていますよ。」

マルタ「……………悪趣味な事を。」

可憐「音声も拾ってくれるなんて、いい買い物をしました。」

マルタ「こ、こほん、それで、マスター、ど、どのような会話を？」

可憐「気になりますか？」

マルタ「そ、そんな事は！」

ドレイク「ははは！素直じゃないねえへへ、ルーラーさんは。」



マルタ「なっ！ライダー！何を……」

可憐「さて、いい画も取れたし、先に殺生院キアラさんを連れて行きましょう。」

マルタ「えっ？あ、あの？マスター？」

ドレイク「シンジ、悪いけどあの二人に先に帰るって伝えといてくれ。」

シンジ「へっ？」

ドレイク「ヨロシク！」

シンジ  
「  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
な、  
何で僕が？」

完 第27話

## 第28話

くユリウス邸地下室く

白野「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

凜「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

ラニ「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

ユリウス「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・」。

キアラ「・・・・・・・・・・・・・・・・」。(ニコニコ)

白野「(し、静かすぎる、何?何故に?)」

凜「・・・・・・・・・・はあ、黙ってても仕方ないわね、先に進まないし、・・・・・・・・ま

さかあんだまでこの時代に要るなんて驚いたわ、殺生院キアラ。」

キアラ「うふふ、お久しぶりですね皆さん、そう言えばシンジちゃんとありすちゃん

は?」

ユリウス「貴様の近くに置くわけがないだろ。」  
キアラ「あらあら。」

ラニ「お二人は別室で寝ていますよ、勿論サーヴァント達が護衛してます、もし貴女  
が  
ありす  
達  
に  
近  
づ  
け  
ば  
始  
末  
す  
る  
よ  
う  
に  
と  
言  
っ  
て  
ま  
す  
の  
で  
馬  
鹿  
な  
事  
は  
考  
え  
な  
い  
よ  
う  
に  
。」

キアラ「まあ怖い……。」

凜「桜、ムーンセルに繋いで、私達じゃキアラから情報を聞き出せないと思うからB  
Bに頼みましょう。」

桜「分かりました。」

（ ）

BB「……… BBチャンネル始まりです、んんん、何でしょうか？あれですねんん、センパイが要るのでテンションを上げたいのですが………、貴女のせいで上がりませんねえんん。」

キアラ「まあ！BBさんですか？あらあらまあまあ！お元気そうで。」

BB「………、鬱陶しい淫乱ババアですね、本当に鬱陶しい、………、貴女の存在を今すぐに消したいのですが………、センパイに関する情報を聞き出さないといけません、さあ、答えなさいババア、何故センパイを拐おうとしているのか？」

白野「BB、俺よりもありすの事が先だ、殺生院キアラ、何故ありすを拐おうとする、答えろ。」

キアラ「………、さあ。」

白野「っ！」

凜「ストップ！白野、感情を表に出してはダメよ、キアラを喜ばすだけ、BB、あなたがキアラから情報を聞きなさい、あんたなら色々切り札とかあるでしょ。」

BB「もう既におこなってますよ、とりあえず淫乱ババアには全世界の敵さんになってもらってます、私が全世界のネットワークにアクセスして殺生院キアラは賞金首さんになってもらいました、ちなみに賞金はざつと10億円です、あらあら、大変ですね、殺生院キアラさん。」

凜「っ！じゅ？10億ですって!？」

白野「(あ、凜の目が?にー)」

ラニ「10億、BB、そのお金はどうやって?」

BB「BBちゃんをなめてもらっては困ります、そんなはした金、ムーンセルなら大した事は在りませんから、ムーンセルを一度でも手にした私からすれば朝飯前です。」  
キアラ「まあ、どうしましょう、困りました。」

BB「生死は問いません、殺生院キアラと判ればどんな形でもいいと言うわけです、困りましたか?あらあら、淫乱ババアは大変ですね。後、追加すると貴女は金輪際ムーンセルを使用できません、私がムーンセルにアクセスしそう設定しました。」

白野「ムーンセルの事は兎も角、さ、流石にやりすぎじゃ・・・。」

BB「センパイ、これはまだ序の口ですよ、今から30秒後とに賞金は増えていきま

す、後、殺生院キアラのお仲間マスター達にも一人ずつ賞金首になってもらいます、ちなみにお一人に付きぎつと一億ほどです、殺生院キアラのお仲間マスター達は始末してからじゃないと賞金はもらえません。」

キアラ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

B B「黙りですか？ 仕方ありませんね、あら？ ちょうどいいタイミングでメルトが貴女の拠点を見つけたみたいですねえ、全世界に配信しますか？・・・・・・は流石に情報が有りませんでしたから、それ以外のマスターは皆さんあの世行きですね！」

凜「B B、因みに賞金は誰から貰えるのかしら？」

B B「魔術師協会からですよ、ほんの500億ほど渡したらOKしてくれました、凜さん、目が？ ってますよ、後センパイが凄く引いてますから。」

凜「っ！じよ、冗談よ、冗談、あはは。」

ユリウス「しかし、よく魔術師協会が手を貸してくれたな。」

B B「魔術師協会にも色々事情があるみたいですね、大魔術師さんは納得しなつたんですが、少し脅せば首を縦にしてくれました。」

白野「お、脅せば？」

B B「うふふ、魔術師協会のネットワークを全て潰すと、後はご想像にお任せします

！」



白野「こゝ、怖！」

桜「(BBのあの目、本当に怒ってる、先輩をあれだけ危険な目に遭わせたから)」

BB「当然です！桜、私はセンパイを傷付ける相手は誰であろうが許さないわ、聖杯戦争が終わるまでの間ある程度は協力しようと思いましたがセンパイが命の危機にから話は別です！さあ！殺生院キアラ！答えなさい、何故センパイが必要なのかを。」

桜「(え、えっ？私の思ってる事が何で?)」

BB「桜、元は私達は同じA Iで同一型です、貴女の思ってる事は顔を見たら分かります。」

白野「いや、だからBB、先にありますの事だ、ありますが何故必要なのか、答えて貰う。」

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

キアラ「・・・・・・・・はあ、仕方ありません、所でBBさん、私が知ってる情報を全て話したら賞金首はどうなるのですか？」

BB「・・・・・・・・取り消してあげますよ、貴女のお仲間マスター達も取り消してあげます、因みに今現在の貴女の賞金は12億です、お仲間マスターは三人ほど賞金首さんですね、さあ、どうしますか？」

キアラ「・・・・・・・・分かりました、私を知る限りの事を話しましょう。」

BB「・・・・・・・・嘘はいけませんよ、洗いざらい全て話なさい、少しでも嘘だと

判ればどうなるか分かりますね、殺生院キアラ。」

凜「怖い、怖すぎるよわBB。」

ユリウス「殺生院キアラ、教えて貰おうか、何故ありすを拐おうとする？」

キアラ「器になってもらうためですよ、聖杯の器に。」

ラニ「なっ！聖杯の!?!何を考えているのですか！貴女は！」

白野「えっ？えっ？器って？……えっ！」

凜「キアラ！あんた！」

桜「ストツプです！キアラさん、ありすちゃんを器にしてどうするのですか？」

キアラ「うふふ、冬木の聖杯戦争ではイリヤスフィールちゃんでしたね、あの娘が器みたいでしたが、それでは小さすぎます、何せサーヴァントが13騎、本来なら6騎だけなのですが貴方達が参加しましたので13騎に増えてます、その点ありすちゃんは13騎のサーヴァントを受け入れるだけの器の糧と魔力が有ります。」

白野「受け入れる？」

ユリウス「貴様らのサーヴァントは？」

キアラ「うふふ、あのお方は大聖杯を持っています、私達のサーヴァントはその中に収まりますから、ですので冬木の聖杯戦争に参加したサーヴァントは大聖杯には入りません、だけどイリヤスフィールちゃんは本来は1騎を除き13騎のサーヴァントを受け

入れなければならない、イリヤスフィールちゃんは6騎が限度、ですがありすちゃんなら13騎全てのサーヴァントを飲み込む事が出来ます。」

凜「ちよつと待つて、じゃあ今まで消えていったサーヴァントは？どうなってるの？」

キアラ「さあ？私達のサーヴァントは大聖杯に飲み込まれましたが、冬木の聖杯戦争でのサーヴァントは何処に行ったのか検討もつきません、イリヤスフィールちゃんの中ではないはずですが、．．．ひよつとしたら既にありすちゃんの中に？」

白野「あ、ありすの!?ふ、ふざけるな！そんな事になってたらありすはどうなる!？」

凜「落ち着きなさい白野、大丈夫よ、ありすは聖杯の器になるための儀式を受けていない、安心なさい。」

白野「儀式を？」

ユリウス「ああ、器になるには儀式をしないとイケないからな、イリヤスフィールはその儀式を受け聖杯の器になっている。」

白野「なっ!?!器に？あれ？でもイリヤスフィールちゃんの中にサーヴァントは入ってないんだよな？じゃあいったい何処に？」

キアラ「．．．．．。」

B B「殺生院キアラ、貴女は知っていますね、さあ、答えなさい、消えたサーヴァントは何処に？」

キアラ「聖杯の中にいますよ、もつともその聖杯はレプリカですけど。」

凜「レプリカ？……は？レプリカ？」

ユリウス「そんな品物をどうやって？」

ラニ「……憶測ですが、大聖杯を使いましたね？確か凜が借りてきた本に書いてありました、大聖杯が有ればレプリカが作れると、もつともそんな聖杯は大した機能は有りませんが。」

凜「えっ？本当に？」

ラニ「私の記憶が確かなら間違いないかと。」

キアラ「流石はラニⅡⅧさん、当たりですよ、ですがそんなレプリカ聖杯はせいぜい5・6騎が限界、13騎なんてとてもとても。」

桜「だからありすちゃんか？」

キアラ「ええ、イリヤスフィールちゃんは13騎全てを飲み込めない、レプリカ聖杯でもダメ、ですがあの娘は違います、ありすちゃんなら全てのサーヴァント、いえ、13騎のサーヴァントを飲み込む事が出来る、だからこそ私にはありすちゃんが必要なのです。」

凜「一ついいかしら？キアラ、貴女はどうやってイリヤスフィールからレプリカ聖杯に取り替える事ができたのかしら？イリヤスフィールは兎も角アインツベルン家は

黙つてないはずよ。」

キアラ「簡単ですよ、アインツベルン家に交渉しただけです、イリヤスフィールちゃんでは全てを飲み込む事が出来ない、そしてありすちゃん捕らえるまではレプリカ聖杯にサーヴァントを飲み込んでおくと、もし13騎のサーヴァントでの聖杯が完成したらそれこそ素晴らしい事が出来ると、たったの6騎ではなく13騎ですから、皆が想像できないほどの力が入ると。」

凜「あ、あんた！」

ユリウス「アインツベルン家の事は大体調べたが、あの家系は聖杯を手に入れようと必死だ、まるで聖杯に取り付かれてるみたいにな。」

桜「ですが一度行った儀式を無くすことは可能でしょうか？」

ラニ「所詮儀式ですから、イリヤスフィールが器である事を取り消しレプリカ聖杯に変える事はアインツベルン家からしたら大した事は無いのでしよう。」

B B「やりたい放題ですね殺生院キアラは、ですが、ありすちゃんの事はまず大丈夫でしょう、なにせセンパイがいますから、もくもく！羨ましいありすちゃん！」

凜「ありすの事は一先ず置いて・・・。」

白野「えっ？いやいや！何言ってるんだ！ありすを守らないと！そうだな、24時間体制で何時でも俺達の誰かがありすのそばにいる事！いや、ここは兄である俺が！あり

すを！」

凜「ストップ、シスコン兄が何考えてんの、心配しなくてもありすの事は大丈夫よ、私に考えがあるから。」

白野「考え？」

凜「キアラの前じゃ話せないでしょ、さあ、次はあんたの事よ、答えなさい、何故白野が必要なのかしら？」

キアラ「……………。」

BB「……………答えなさい殺生院キアラ、センパイが何故必要なのか？」

キアラ「……………支配者だからですよ。」

白野「……………えっ？」

キアラ「白野さんは只一人の月の聖杯戦争での勝手で支配者、過去に行っていた聖杯戦争での勝利者は存在しなかった、いえ、ひよっとしたらいたのかも知れない、ですが聖杯と一つになることを拒み支配者は慣れなかった、只一人、白野さんだけが聖杯と一つになる事を望み聖杯に願いを叶えた、【私達を地上へ返し二度と月の聖杯戦争が行われないようにと】この意味が分かりますか？」

凜「……………っ！ たった一人の月の支配者？ 桜やBB、それにキアラはムーンセ

ルを使えるけどそれはほんの一部だけ、あ、キアラはもう使えないから桜とBBね、だ  
けど白野はムーンセルの全てを使う権限が、それこそBB達が知らない使うことが出来  
ない事すらも、もう二度と月の聖杯戦争は行われぬ、それはこの時代でも同じ事、白  
野が勝利するまでの過去に誰も勝利者が現れなかつたから……」。

白野「えっ？えっ？何？どうした？」

BB「も〜、鈍いですねセンパイは、いいですか、センパイは月の支配者です、セ  
ンパイは願いましたね、皆さんを地上へ返し二度と月の聖杯戦争をしないと、つまりで  
す！センパイは月のムーンセル・オートマトンの所有者です！ムーンセルがあれば何で  
もやりたい放題です！センパイの要る時代にもムーンセルが存在します、私が今いる時  
代とセンパイのいる時代のムーンセルは繋がっていますからセンパイはムーンセルに  
アクセスすれば何でも願いが叶うわけです！流星に時代をタイムトラベルするには聖  
杯が必要かも知れませんが、さらに二度と月の聖杯戦争が行われぬのでムーンセルは  
永遠にセンパイの物なのです！」

白野「はい!?えっ?えっ?ムーンセルが俺の?いやいや!要らない!そんなの使い道  
が無いし!」

BB「例えセンパイがムーンセルを放棄してもムーンセルは永遠にセンパイの物です  
よ、ムーンセルはセンパイの所有者だと、センパイ以外に所有権を認めてないみたいで

すので、ですが安心をセンパイ！センパイは普段通り生活をしていれば何の支障も在りません、只ムーンセルはセンパイの物だと、それだけです、まあ、今は聖杯戦争中ですから普段通りの生活じゃないのですが。」

白野「……………」

ユリウス「ムーンセルの所有者である岸波を捕らえて何をするきだ？殺生院キアラ。」  
白野「あれ？俺は？俺の事は？何か俺、凄い事を知ってしまったんだけど、打棄る？打棄るですか？」

桜「だ、大丈夫ですよ先輩、皆さんはちやんと先輩の事を大事に思ってますから。」

白野「何か違うような気がするけど、うう、ありがとう桜。」

ラニ「一人だけ目が？になってますけど、ほっときましょう。」

桜「あ、あはは。」

凜「(白野を自由に出来れば私はひよつとしたら永遠にお金持ち!?嘘！此処はどうにかして白野を)……………、って？へっ？あ、あれ？あ、あはは、や、やくねえ、冗談よ、冗談、あ、あはは。」

白野「……………」

ラニ「……………」

桜「……………」



凜「うっ！だ、大丈夫よ、思っただけ、思っただけ、別に白野を催眠術でどうにかしようなんて思っていないから。」

BB「何を思っているのか、センパイが引いてますよ凜さん。」

凜「ぐっ！冗談だつて言ってるでしょ！そ、其れよりもキアラよ、キアラに何故白野が必要なのか問い出さないと、ね。」

ユリウス「……はあ、そう言う事だ、殺生院キアラ、答えて貰おうか？」

キアラ「聖杯を使うためですよ、大聖杯に冬木の聖杯戦争での聖杯、2つの聖杯を使うには余りにも大きすぎる、それこそ世界が無になるほどに、ですがムーンセルを通して2つの聖杯を使えば世界が無になることはない、使い方によつてはそれも可能ですが私はそれは望んでいませんから。」

凜「だから白野が必要なのね、ま、そんな事はさせないけど。」

ラニ「ですね、殺生院キアラ、何を望むのか私には興味ありませんが、白野さんにあらず、二人は貴方に渡しません。」

桜「お二方は私達がお守りします！貴女の好きなようにはさせません！」

ユリウス「アサシンはもう居ないが俺は岸波とありすを守れるだけの力はある、殺生院キアラ、貴様を始末する事は簡単な事だ。」

白野「み、皆、ああ、そうだ、俺には大切な仲間がいる！お前の好きなようにはさせ

ない！皆が俺やありすを守ってくれるように俺も皆を守る！」

キアラ「仲間意識が強いのですね、素敵な事です、仕方ありませんね、今は諦めますか、……所でBBちゃん、私の賞金首は？」

B B「殺生院キアラのお仲間さんは取り消してますよ、ですが貴女は賞金首のままです、あ、心配しなくても貴女の懸賞金は可哀想なので1億にしてあげましたから、せいぜい賞金稼ぎ達に捕まらないように怯えながら生きなさい、ですが、覚悟してなさい殺生院キアラ、もしセンパイに危害を加えればどうなるかを。」

キアラ「うふふ、覚悟してなさい、ですか、貴殿方も気を付けなさい、あのお方は恐ろしいお方、私なんかあのお方に比べればゴミのような存在なのですから。」

凜「えっ!?リターンクリスタル!?いつの間にか？」

キアラ「では、ごきげんよう。」



白野「き、消えた？」

ユリウス「逃げたか、殺生院キアラ、まさかあの女がこの時代に居るとはな。」  
凜「ええ、さて……。」

ラニ「ええ、問題は此れからの事ですね。」

B B「はい？大丈夫ですよ、特に問題は在りません。」

白野「いやいや、問題在りすぎだよ。」

B B「大丈夫ですよセンパイ、何だかんだで今までセンパイ達は色々切り抜けてきたじゃないですが、用は聖杯が完成しなければいいのです！ありすちゃんの場合は凛さんに秘策があるから大丈夫！センパイはどんな状況でも諦めない強さがある！もし問題が有るとすれば聖杯をどうすべきかです。」

凛「第5次聖杯戦争の聖杯は壊すことには変わりないわ。」

桜「大聖杯はどうするのですか？」

ユリウス「壊すべきかそれとも……。」

ラニ「大聖杯に願いを叶える、ユリウス達が元の時代に戻る事に、第5次の聖杯戦争での聖杯は例えイリヤスフィールからレプリカ聖杯に切り替えてもアンリマユがレプリカ聖杯に入っている可能性が高いです、殺生院キアラ達に使われる前に私達が。」

B B「大聖杯を使う事は余りオススメ出来ませんね、正真正銘の本物聖杯ですから、大聖杯を手に入れてその後はどうするか決めた方が宜しいかと。」

白野「……………」

桜「……………、どうしました？先輩？」

白野「……………えっ？あ、ああ、もし、もしもの話だけど、俺達が大聖杯を手に入れてそれでもう一つレプリカ聖杯を作ったら。」

凜「ちよっ!? …… あ? そうか! レプリカ聖杯が二つ。」

白野「B Bが言ったけど、俺はムーンセルにアクセス出来る、ムーンセルの情報や桜やB Bが知らないムーンセルの中身を全て俺が知ることが出来る、だったら……。」

ラニ「例えレプリカでも聖杯は聖杯、もし白野さんがムーンセルにアクセスして大聖杯を使いレプリカ聖杯を作ったら、そして、二つのレプリカ聖杯にサーヴァントの魂、もしくは魔力が入れば。」

白野「ああ、聖杯が完成する可能性が在る、本来の第5次聖杯戦争は七人のマスターとそれに従う七騎のサーヴァント、最後のマスターにサーヴァントが生き残れば聖杯戦争は終決する、けど……。」

ユリウス「どうした?」

白野「本当にそれでいいのかな? サーヴァントを聖杯を完成させるために……、サーヴァントは聖杯を完成させるための生け贄みたいにな。」

凜「問題ないわ、元々そう言う契約みたいなもんで聖杯戦争のサーヴァントは召喚されるの、サーヴァント達はその事を知っていて聖杯戦争に参加してるんだから、例えば知らなくても召喚されるのと同時に知る事になるはずよ。」

白野「えっ? じゃ、じゃあセイバーも知ってるの?」

ラニ「そのはずですよ、サーヴァントは聖杯が欲しくて参加するのがほとんどですか

ら、まあ、セイバーやキャスターは聖杯には興味ないと思いますが。」

白野「そうなの？」

桜「キャスターはありすちやんの大切なお友だちです、キャスターに関してはありすちやんに会いたいがため召喚に応じたはずですから。」

凛「キャスターはありすに逢えたから聖杯の事はどうでもいいのよ、キャスターは聖杯よりありますが大切だからね、でも、そうね、多分だけ私達のサーヴァントは聖杯に余り興味がないんじゃないかしら。」

ユリウス「アサシンは興味がないと言っていたな、只死合がしたいと。」

ラニ「バーサーカーは、どうだったのでしょうね、今となつては分かりませんが。」

凛「ランサーは……、今は興味がないって言つてたわね。」

白野「今は？」

凛「ええ、ま、聖杯に興味があつてもどうせくだらない事でしょう、ライダーとアヴェエンジャーはどうなのかしら？」

桜「アヴェエンジャーさんに聞いてみます？」

凛「ま、気が向いたら聞いてみて、其れよりも……。」

白野「なに？どうした？」

凛「本の事よ、あれはたまたま見付けたから借りたんだけど、どうして先生が持つて

たのかしら?」

ラニ「聖杯戦争に何かしら関わっているのでしょうか? もしくは関わっていた?」

凜「本は直ぐにラニに渡したから内容はほとんど分からなかったけど、まさか大聖杯の事とか書いてるなんてね、あんな本をよく先生が貸してくれたわね。」

白野「葛木先生が……、聖杯戦争に関わっている? いや、そんなことは?」

凜「調べてみる……はあるんじゃない、もし聖杯戦争に参加してるなら敵になるんだから。」

白野「……」

B B「センパイセンパイ、大丈夫ですよ。」

白野「え? 何が?」

B B「明日になればキャスターが本格的に動くみたいですから、キャスターのマスターもその時に分かるはずですよ。」

白野「な、何で分かるの?」

B B「勘です! 大丈夫! B Bちゃんの勘は結構当たりますから!」

凜「勘です! つて、信用できるわけないでしょうが! たくつ! はあ、ユリウス、お願いできるかしら?」

ユリウス「ああ、葛木といったな、明日調べてみよう。」



白野「サーヴァントがないのに大丈夫なの？」

ユリウス「心配するな、尾行するだけだ、問題が起これば直ぐに連絡する。」

凛「ええ、それでいいわね白野、葛木先生がマスターじゃなければいいんだけど。」

〈第28話〉

完